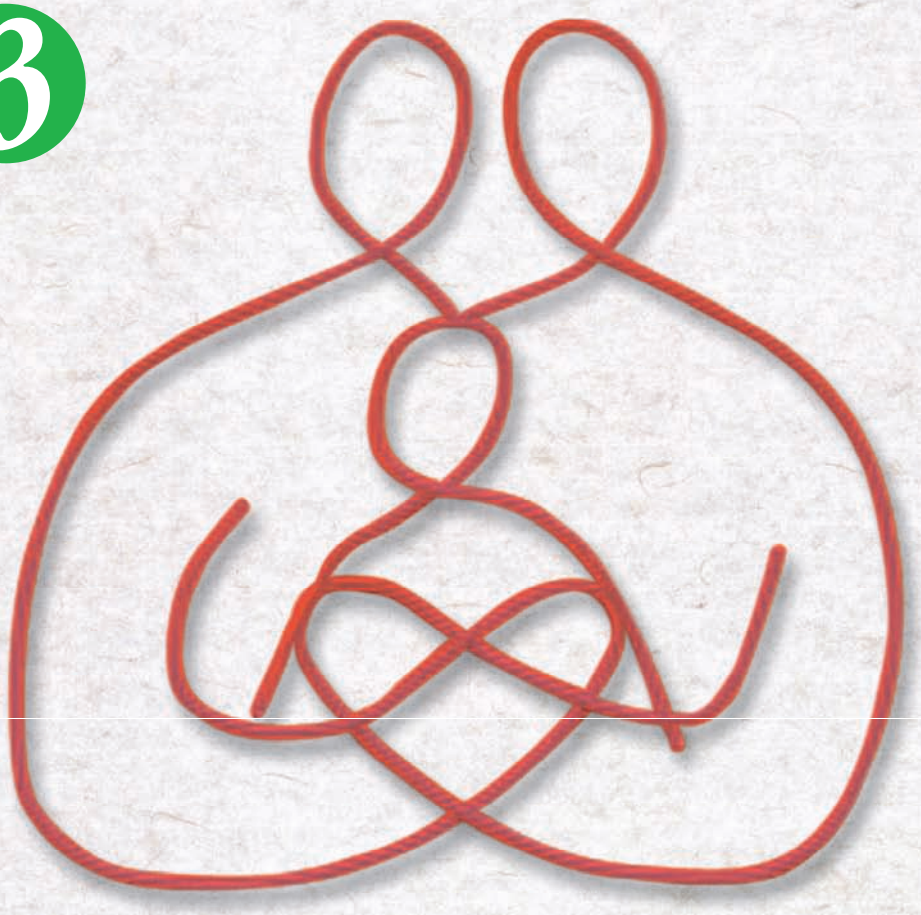
梶山人間学研究センター 年誌

梶山人間学研究
2007年度

Journal of Sugiyama
Human Research
2007

vol.3



学校法人 梶山女学園

椙山人間学研究センター年誌　2007

椙山人間学研究 第3号

Journal of Sugiyama
Human Research
Vol.3

目　次

巻頭言『設立３周年に際して』 …… 002
椙山人間学研究センター長　椙山　孝金

シンポジウム報告 …… 004
『身体と心の人間学ー自分を再発見するためにー』 …… 004
シンポジウムアンケート …… 038

プロジェクト研究報告 …… 042
「総合人間論」プロジェクト研究報告 …… 042
「女性論」プロジェクト研究報告 …… 054
「人間発達論」プロジェクト研究報告 …… 068
「ゲノム人間論」プロジェクト研究報告 …… 079
「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告 …… 092
「環境と人間」プロジェクト研究報告 …… 094

「自然人類学者、仏教思想に触れて」 …… 104
椙山人間学研究センター客員研究員　江原　昭善

「人間とは」その4 …… 114
椙山女学園理事長　椙山　正弘

人間講座報告 …… 119
『人間性の生物学的背景』西田　利貞 …… 119
『江戸時代のやきもの流通ー江戸と名古屋・大坂の比較ー』森本　伊知郎 …… 141
『子どものことばを育てる・心を育てる』石橋　尚子 …… 152
『『源氏物語』の描く人間―光源氏の憂愁を中心に―』　梅野　きみ子　166

センター活動概要 …… 178

規定 …… 181

編集後記 …… 183

執筆者紹介 …… 184

巻頭言

『設立３周年に際して』

椙山人間学研究センター長
椙山　孝金

椙山人間学研究センターの年誌『椙山人間学研究第三号』をお届けいたします。椙山女学園創立100周年記念事業として平成17年度に設立されました本センターの平成19年度の活動成果の報告ということになります。本センターは、椙山女学園の教育理念「人間になろう」をプロジェクトメンバーの先生方や客員研究員、主任研究員の先生方を始め、学園内外の様々な方々の叡智をいただきながら、様々な視点から人間学を探求し、学園の将来の教育・研究の在り方に資するだけでなく、地域の皆様や社会の皆様にもその成果をお伝えしながら、地道で継続的な活動を続けております。

今年度は、プロジェクト研究の3年度目で、6つのプロジェクトから人間に係わる研究を重ねており、複雑かつ多岐にわたる人間活動を読み解こうと努力を続けております。また、今年度も昨年度に引き続き4回の「人間講座」と1回の「シンポジウム」を開催し、多くの方々のご参加を得ることができました。ご参加いただきました皆様に心から感謝申し上げたいと思います。

今年度第1回の人間講座『人間性はどこからきたか』では、アフリカ・タンザニアなど海外でのチンパンジーに関する調査・研究でご造詣の深い西田利貞先生から、チンパンジーがいかに人間(ホモ・サピエンス・サピエンス)に近似した存在であるか、たとえば家族･社会・協力・闘争・和解などといった人間固有の行動といわれるものが、実はチンパンジーの社会にも原初的なかたちで存在していることを詳しく説明され、人間性といわれるものは進化の過程で形成されるとの示唆を受けました。また、第2回の人間講座『子どものことばを育てる・心を育てる』では、石橋尚子先生が子どものことばと共に心も育てる具体的な方法をこれまでの経験に裏付けされた説得力をもって、講演され、「美しいことばを聞かなければ、美しいことばは生まれない」という大江健三郎氏のことばを引用し、保護者・保育者自身のことば磨きの大切さを強調されました。第3回の人間講座『江戸時代のやきもの流通－江戸と名古屋・大坂－』では、奄美大島や日本全国の遺跡での出土遺物発掘調査・研究でご造詣の深い森本伊知郎先生から、江戸時代のやきものに関する様々な貴重な史料や映像を利用しながら、やきものの出土と考古学からの視点で江戸と名古屋・大坂の人間生活の特色とやきものの流通状況の原型ともなる当時の物流などを詳しく説明していただきました。出土品から江戸時代を生きた人々の生活の一端を垣間見ることができました。本年度最後となる第4回の人間講座『『源氏物語』の描く人間－光源氏を中心に－』では、永年「源氏物語」を深く研

究されている梅野きみ子先生が、光源氏の内面を「うし」「うさ」という言葉を使い壮大な源氏物語の心を見事に解き明かしていただきました。また、研究の成果というべき人物相関図は圧巻で永久保存するべき資料となります。

年に一度の大きなイベントである「シンポジウム」では、今年度は京都大学大学院教授の社会学者 大澤真幸先生と人類学者 菅原和孝先生をお招きして、『身体と心の人間学－自分を再発見するために－』と題するコラボレーション企画を実施しました。大澤真幸先生は様々なマスメディアに取り上げられる新進気鋭の社会学者で、今回のシンポジウムでも独特な視点で身体と心について説かれました。身体に傷をつけること(身体加工)は古代から行れており、生ける書き込み、死せる書き込み、身体加工の消滅という歴史上3段階を経てきている。人間は動物と区別するため生ける書き込み(刺青)を施し、キリスト教やユダヤ教等が興ると死せる書き込み(文字)が出現し、宗教や思想が下火になった時代には身体加工の意味が消滅した。現在は第4段階の入り口にあり、ピアス、刺青、整形、人工臓器等身体への人為的介入が行われている。現在の身体加工は、伝統的な身体加工とは逆方向を向いていて、現代社会に意味を見出せずに身体加工をすることで生きている痛さを実感して、自分を確かめる行為である。疲弊した人間社会をうまく表現された講義でした。菅原和孝先生は長くアフリカのブッシュマンと共に生活をして、彼らの家族関係、特に夫婦や親子の心の動きについて説かれました。三角関係に巻き込まれた夫がその妻への嫉妬心によって子どもにユニークな名前をつけるなど、人間の心の本質からくる行為について現地語を織り交ぜながら、面白おかしく解説されました。

本センターは、設立3年目にしてシンポジウムを3回、人間講座を11回実施して、地域の皆様に徐々にではありますが存在を認識されてきており、リピーターが増えてきております。本学園の教育理念であります「人間になろう」に立脚した人間に係わる教育・研究は、混迷を極める現代社会にとって、人間性を取り戻したいという欲求とその対処方法の探究心を駆り立てて、これからもその必要性を増すものと思われます。椙山人間学研究センターがそれらを紐解く存在として一端を担えればありがたいと感じております。今後も本センターを支えていただける皆様とともに、その歩みを進めて参りたいと思いますので、忌憚のないご意見やご要望をお聞かせいただきますようよろしくお願いいたします。

平成20年3月20日

「椙山人間学研究センター第三回シンポジウム」

テ ー マ:「身体と心の人間学ー自分を再発見するためにー」
日　　時:平成 19 年 11 月 10 日(土)　14：00 ～ 17：00
基調講演:大澤真幸 京都大学大学院教授　『身体の現在(身体の比較社会学)』
菅原和孝 京都大学大学院教授　『感情の人間学ー感情と行為空間ー』
場　　所:椙山女学園大学　文化情報学部棟 319 室

（総合司会）

渡邉毅主任研究員：定刻になりました。椙山人間学研究センター第三回シンポジウムをはじめたいと思います。本日の司会進行は研究センター主任研究員を務めております渡邉でございます。よろしくお願い致します。まず、最初に本学園理事長よりご挨拶を致します。

（開会挨拶）

椙山正弘理事長：みなさん、こんにちは。本日は人間学研究センター第三回シンポジウムを「身体と心の人間学」というテーマで開催し、大変大勢の皆様にお申し込みいただき、また、こうしてご出席いただきまして、大変ありがとうございます。

椙山女学園は「人間になろう」という言葉を教育理念として掲げております。以来、人間とは何かという事を古今東西、昔から問われ続けてきたこの命題について、研究するために椙山人間学研究センターを設立して今年で3年目になります。シンポジウムも今年で第三回を迎え、本年は人間の身体と心という両面から社会学、あるいは人類学の立場からそれぞれお話を頂いて、人間とは何かというその究極の命題にある答えを出して頂こうという趣旨でシンポジウムを開催します。最後までごゆっくりご清聴いただければと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

渡邉主任研究員：それでは、私から大澤先生の簡単なプロフィールをご紹介させて頂きます。既にこのチラシにかなり詳しく掲載させてもらっていますが、僕はかなり熱心な大澤読者とは言えませんが、20年くらい前でしょうか、「現代思想」にいろいろ書かれていたと記憶しております。僕が専門にしております霊長類学に初めて真正面から議論して頂き、社会学としては初めての試みだったのではないかという事で、以来、注目をしていっております。今日は身体に関しまして、タイトル

にも引用させてもらっております「身体の比較社会学」というご著書がありますが、ここで、身体、体というものを単なる体というか、全身体、生身のものから、最終的には抽象身体といったようなレベルまで細かく分けて、それぞれのレベルにおいたある種の心の病というものが非常に見事に対応するといった分析が示されておりまして、社会学とか心理学といった専門のジャンルを超えるような形で議論を展開されていらっしゃいます。社会学の大御所であり、第一線でもある彼は社会学の中でもアクチュアリティーというものを強調しながら、現実社会の問題に切り込んでいらっしゃいます。特にこの地域では、中日新聞で「論壇時評」という題目で、月に一度、雑誌の記事の紹介をされていて、非常に楽しい、あるいは興味深い論評を読ませて頂いております。今日は「身体の現在」という事で、お手元にレジュメを配っておりますが、そちらをご覧いただきながら、お話をお聞き下さい。それでは、大澤先生、お願いします。

大澤真幸 京都大学大学院教授　基調講演
「身体の現在（身体の比較社会学）」

（当日レジュメ）

0　『パッション』へのパッション

◎　メル・ギブソン監督『パッション』（2004）の興行的成功。

◎　福音主義クリスチャンまでもがこの映画に熱狂。

1　身体加工の三つの段階、そして第四の段階

◎　加工されざる「裸の身体」がノーマルなものとなったのは、近代社会（啓蒙主義の時代 17 － 18 世紀）に入ってから。「身体の零度」（三浦雅士）。風景の発見との同時性。

◎　「加工された身体」と「裸の身体」の中間としての文字（死せる書き込み）

・　「文」という文字の起源

・　死せる文字の民（ユダヤ教）の「割礼」――身体加工を否定する唯一の身体加工

◎　キリスト教――割礼の内面化

◎　したがって、身体加工の三つの段階

①　多様で義務的な身体加工（生ける書き込み）

②　身体加工を否定する身体加工（死せる書き込み）

③　身体加工の否定の否定（身体加工の消滅）→身体の零度

◎　現在は、第四の段階――２０世紀末期以降の身体加工の流行（ピアス、刺青、整形、人工臓器他の身体への人為的介入）

2　身体の排除／包摂

◎　身体（剥き出しの生）の排除によって成り立つ政治（アガンベン）――前近代の政治　⇒①②

・「人間は生きるために生まれたが、本質的には善く生きるために存在する」（アリストテレス）
・ギリシア　bios（→ポリス（政治））／　zoe（→オイコス）
・前近代の古典的政治は、「締め出す」という否定的な形式で「剥き出しの身体」に依存している。

◎　身体を包摂した政治。生かしめる権力（フーコー）――近代　⇒③

◎　身体加工は、「剥き出しの身体」を締め出し、身体に規範的な形式を与える操作

◎　身体加工（身体に図像を書き込む操作）が身体に規範的形式を付与することができるのはなぜか？

・身体に傷を書き込む操作は、それを見ている「眼」の体験と連動している。
・心の作用の二つのアスペクト――求心化作用／遠心化作用
・間身体的連鎖→第三者の審級　eg.「気」

◎　第三者の審級の諸タイプ

①　第三者の審級の「無からの生成」
②　第三者の審級の「外的な存在」
③　第三者の審級の「内的（抽象的）な存在」

◎　サディズムについて――皮膚の内側の抽象的身体へ

3　「私はここにいる」

◎　現在（第四段階）の身体加工は、伝統的な身体加工とは逆方向を向いている。

・伝統的な身体加工→規範化された「人間」になること。「産」という文字。
・現在の身体加工→社会秩序に反抗する反規範性の徴

◎　現在の身体加工は、「第三者の審級の不在」に対応している。不在を前提にして、第三者の審級を再構築。

・身体加工や自傷行為の意味　「痛みに実存」→「実存の痛み」

◎　『パッション』へ。「ほんとうの殉教とはこういうものだ！」

4　活殺自在の境地

◎　「コミットできる規範や価値の不在」と「実存の痛みへの依存」の間の悪循環。この悪循環を抜け出すことはできないか？

◎　「実存の痛み」の戦略は、身体の潜勢力の中のひとつのアスペクト（求心化作用）しか使っていない。もうひとつのアスペクトを活用できないか。

◎　最高度の主体的な自由と最高度の受動性の合致

◎　武道の達人の活殺自在の境地（内田樹）

・達人は、相手よりもほんのわずか未来を生きている。

・　座頭市は「速い」のではなくて、「早い」。座頭市の「チン」。

◎　達人の「早さ」は、他者の身体に触発された受動的な反応。それは、遠心化作用によって可能になる。

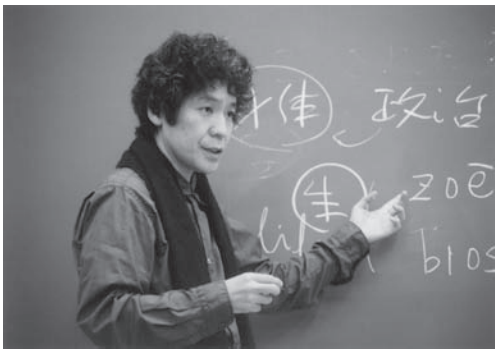
◎　統合失調症患者の「祭りの前」的な時間（木村敏）。「微分回路的認知」（中井久夫）

大澤真幸氏：みなさん、こんにちは、大澤です。今日は何だか授業をやるような雰囲気ですが、僕の後、菅原先生が楽しいお話をご用意されているので、僕は割合、込み入った話をしようかと思います。

今日は身体のあり方を、現代の今まさに起こっていることと考えると同時に、それをできるだけ大きな歴史的なパースペクティブの中で位置づけるという作業の両方をしてみたいんですね。つまり、今の状態というのは巨大大国・日本なんで、短い10年20年というものではなくて、もっと大きな人間の歴史といったパースペクティブの中で考えてみたいという事です。

○『パッション』へのパッション

まず、レジュメに沿っていきますが、最初は『パッション』という映画の話から入りたいと思います。『パッション』をご覧になった方いらっしゃいますか？この映画は日本では大ヒットしたかどうかは分かりませんけれども、メル・ギブソン監督が作ったものです。『パッション』というのはキリストの受難の事なんですね。欧米では大変な大ヒットをした2004年の映画です。これはなぜ大ヒットしたかというと、キリストの十字架の磔ですね。恐らく、人類の歴史の中で一番インパクトのあった出来事、人間の歴史において、現在に



及ぶまでの最も強い影響力を与えた事件をひとつ挙げろと言われたら、この事件でしょうね。人間の歴史に最も影響を与えたイエスが、十字架に磔になって死ぬまでのおよそ12時間、もちろん誰も見た者は生きてはいませんが、それをできるだけそれらしく、リアルに、細部に亘って生々しく、少しも怯むことなく描いたという映画です。これは本当にリアリズムで、このメル・ギブソンという監督は映画の中の登場人物には英語ではなくてラテン語を使ったり、アラブ語という当時の言葉を使って喋ったりさせてるんです。その時は英語の字幕が出ます。メル・ギブソンは字幕無しでやりたかったそうですが、それでは興業的に成り立たないという理由で字幕は付いています。とにかく、すごい迫力です。ローマ法王がその映画を見た後、「まさしくあのような感じだったに違いない」というような事を思わずつぶやいたといわれるくらい迫真性のある映画だったわけです。ですが、この映画は賛否両論となっていまして、ユダヤ人がイエスを殺したみたいではないか、ユダ

ヤ人を悪人にしているだけじゃないかなど、いろいろな問題が持ち上がりましたが、とにかく、キリストに加えられた暴力を極めてリアルに描き出して、それが大変な成功をしました。これをひとつ、話の冒頭に置いておきます。皆さんも人によって感覚が違うと思いますし、日本はキリスト教が欧米に比べて布教しているわけではないので、分かりづらいかもしれませんが、例えば、少し細かくいいますと、この映画はアメリカで大ヒットしました。アメリカでヒットした時に、今、よくブッシュの支持母体として出てくる福音主義というクリスチャンのグループの間で非常にヒットしたというのがある意味、キリスト教に詳しい人にとっては意外なんです。なぜかと言うと、福音主義というのは今でこそ頭の固いといいますか、流行遅れの古いキリスト教にこだわっている人と捉えられがちですけれども、福音主義というのは元々、プロテスタントというキリスト教の最も前衛的なラディカルな、今で言うなら原理主義というかそういう主義で、ただ、プロテスタントが出てきた時には、カトリックの人達よりもとても近代的な人達ですよね。そういう人達がアメリカに渡って、アメリカで作ったんですね。元々は前衛的な人達でしたが、その福音主義の人達があの映画に熱狂したのは、意外な事です。実は、プロテスタントというのはカトリックとは違って、キリスト教の言葉を使えば、偶像崇拝というんですけれども、つまり、キリストの磔というのは考えようによっては、官能的というかセクシャルなものがあるわけです。あのように体を生々しく描くという事を、プロテスタントは元々、嫌うんですね。皆さんも注意して見て頂ければお分かりになると思いますが、キリストが磔になっている十字架がありますよね、あれはカトリックのものです。プロテスタントはただの十字架であり抽象的な十字架しか絶対に使いません。それなのに、福音主義者たちが、メル・ギブソン自身はカトリック主義者ですが、アメリカのプロテスタントの人たちがこの映画に熱狂をしたという事はある意味、非常に不思議な事なんですね。まず、この事を頭に置きながら、次に進みます。

1．身体加工の3つの段階、そして第4の段階

今、僕はキリスト教のお話から入りましたけれども、まず、キリスト教というものをひとつの基準というか、メルクマールというか、ランドマークというか、そういうものにして、身体という事を基準にした時にひとつの大きな人間の歴史を区分して描くことが出来る、という事をまずお話します。人間の体に、人間が人為的に加工を施して痛みを加える、そのような体験というものをひとつの基準にして、ひとつの歴史をまず皆さんにお話したいと思うんです。僕らが、当たり前の事ですが、普通、人間の体というものは何も加工されていない、女の人はお化粧をしたりしますが、まず、普通は何もなくて、例えば、少し刺青などをしていると、割合特殊だなと思うかもしれません。しかし、実は、人間の歴史の中で、自然の生のままの形といいますか、何も手を加えていない身体や、体の在り方がノーマルである、というようになったのは、意外と新しいんですね。少なくともヨーロッパの歴史の中では、人間の体に手を加えないのが普通だとされたのは、研究によれば、17－18世紀以降だと言われています。17－18世紀と

いうのは、いわゆる思想の時代、啓蒙主義の時代といわれますが、啓蒙主義というのはルソーとかロックとか要するに今、皆さんが普通に信じている近代的な価値観、例えば人権であるとか自由であるとか平等であるとか、そういうような近代的なアイディアが出てきた時代で、その時代に初めて人間の体というのは何も手を加えないのが普通であると、逆に言うと、それまでの人間の身体・体というものは、普通、生きている人間というのは、傷つけたり、体に絵を描いたり、手を加えたり、加工したり、刺青を入れたりとそういう方がむしろ普通だったんですね。だけれども、人間はまず生のままの身体があるんだ、となるのはこの時代なんです。言ってみれば、よく使うことばで、「タブララサ」と言います。白紙ですね、白紙の身体が人間の本来の在り方だという感覚が生まれるのがこの時代です。文芸評論家の三浦雅士さんは、『身体の零度』で、何もされていない原点としての身体が活かされたのがこの時代だ、とおっしゃっています。ついでに言いますと、よく美術史領域で問題にされるんですけれども、風景画というものがあって、風景だけでも美しいと思いますけれども、風景画という生の自然ですね、生の自然をただ描くだけでも美術として成り立つと認識されたのもこの時代なんですね。それ以前は、ヨーロッパだけでなく、どこの国に行っても、ただ風景だけ描いてそれが絵になるということがなかったんです。風景は物の背景に描かれるか、あるいは、風景らしいものを描いている時は必ず抽象的な寓話的な意味があって描かれているのであって、ただ、自然の風景を、山を描いたり、木を描いたりしただけで、それが美しいとされたのはこの時代です。つまり、17－18世紀は、生の自然、手を加えられていない自然、それが美しいと発見された時代であると同時に、生の身体が自然であると発見された時代であるというわけです。ですから、それを考えると元々それ以前は、人間の体というものはまず、何か人為的に、典型的な例で言えば、刺青ですけれども、加工を加えられた身体というものがあるんですね。その加工された身体というものから生の身体へとなるのはある意味、近代的なものなんですね。こういう転換があったんですけれども、実は、この転換は一足飛びに変化したものではなく、中間があるんです。それを今からお話します。その中間段階の仮説として少し意外だと思われると思いますが、文字が生まれる段階と、加工された身体は次のようになると思います。つまり、身体に刺青を施すといった身体の上に直接書き込まれた状態というのは、生ける書き込みと僕は呼びたいと思っているんですけれども、文字というのは、死んだ文字と言われるぐらいですから、いわば死んだ書き込み、この段階を経た後、生の身体の段階がくるとそのように考えています。これはいくつか証拠がありますが、ひとつだけ分かりやすいヒントをご紹介します。

例えば、文字を意味する漢字の正に「文」という字はどういうところから来ているのかというと、漢字研究で有名な白川静さんによれば、見てみると少し、体に似ていると思いませんか？この「文」という字は、元の形は一部分に×のような字が付いているのが普通だったんですね。これは何かと言うと、胸に刺青を入れた状態なんですね。この刺青を入れたものから、文字を意味する「文」という

字が出来たんですね。つまり、僕が言いたいのは、文字というのは言ってみれば、元々身体に直接書き込む段階があって、次に文字として書き込まれる段階というこのような段階に入ってくると身体に直接書き込む事はなくなって、文字となって、死んだ書き込みになった。ひとつ例を出しますと、「魏志倭人伝」という有名な邪馬台国の事が著されているものですが、「魏志倭人伝」があるという事は中国にはもう既に文字があり、邪馬台国には文字がありません。邪馬台国に行くと、その住民がみんな体に文様が入っている、それを「魏志倭人伝」の作者は非常に野蛮な風習であると紹介しています。つまり、生きている人間はみんな体に書き込まれていた段階から、文字が出てくると体への書き込みがなくなるというように転換します。あるいは、もう少し細かく言いますと、死んだ文字、死んだ書き込みの代表は僕らがよく法律の事を、法律は言ってみれば死んだ文字の、法の特徴は文字でちゃんと書かれている事ですけれども、法は死んだ文字の宗教。法の宗教として一番有名なのは、イスラム教ですけれども、もうひとつはその起源となっているユダヤ教ですね。宗教用語でよく立法と使いますが、立法というと難しいようですが、要は法ですね。モーゼの十戒をはじめとする法です。ユダヤ教というのは、法の宗教ですね。ご存知の方が多いかもしれませんが、ユダヤ教徒というのは、みんなひとつの身体の加工をするんですね。ひとつだけ。それは、割礼です。割礼というのは、簡単に言うとペニスの包茎手術のようなものですね。それを産まれたら必ずするわけです。ひとつの身体加工になります。これを人類学的考察をすると、なぜユダヤ教が割礼というものをしたのかというと、ユダヤ教というのは当時、初めて生まれてきた非常に厳格な一神教です。その周りには怪しげな神々を信じている農民達がたくさん住んでいるわけです。その中にひとつだけ厳密な一神教を信じたユダヤ人のグループが出てくるわけです。周りの人々が、言ってみれば先程話に出ました「魏志倭人伝」の日本人みたいなものですね、邪馬台国の人みたいにいろいろ体に文様を付けているわけです。そのような土人、野蛮な異邦人、あるいは異教徒の風習と自分達を区別するために割礼をしたわけです。割礼をしている人はユダヤ人、ユダヤ教徒なんですね。割礼をする代わりにその異邦人たちがやっているような怪しげな体に文様を付ける事をやらなくなるんですね。という事は、割礼は、それ自体ひとつの身体加工・身体に加える加工ですけれども、他の身体加工を否定するための唯一の身体加工になります。ユダヤ人だけは割礼をする、他の人達はいろいろ刺青であったりしますが、ユダヤ人だけは見えない所に割礼だけしているわけです。なので、割礼というのは他の身体加工を否定する身体加工になります。元々一番オリジナルな段階で言えば人間の体に文様を書き込む段階、それからそれを否定する段階、文字が出来ます。そして、キリスト教というものが出てきた時にイエス・キリストは割礼なんかしなくてもいいんだ、心の中に割礼をすればいいんだとし、身体加工をしなくてもいいんだとしました。そして、キリスト教というのが増えてくるわけです。先程から言っているような近代社会というものは、大まかにお話しますと、プロテスタントが出てきた時に近代社会というものがはじまるわ

けですけれども、プロテスタントというのは、キリスト教の源流に返るという思想なんです。ですから近代の源流を辿るとするならばキリスト教の精神やキリスト教があるという事になります。

一度、整理しますと、今のところ、大きく分けると3つの段階があります。レジュメにも①②③とありますが、これは今日のお話の重要なモチーフになりますので、皆さん、見て頂きたいのですが、要は身体に様々な文様を施すような生ける書き込み、身体に直接書き込んでいたみんながやらなくてはいけなかった段階がまず大前提にあり、それから身体加工を否定する身体加工、あるいは生ける文字の死んだ書き込みの段階へと移り、そして最後に身体加工そのものを否定する段階へと、このように歴史上、近代という時代が来るプロセスの間に3つの段階があったのではないかと思います。その観点で現代という今を見てみます。我々が生きている今です。

僕はこのように3つの段階を整理すると、僕らが今、この3つの段階の次に足を踏み入れているのではないかと思います。いつ頃からか、とはっきり言うのは難しいですけれども、おそらく20世紀の末期の80年代90年代頃から新しい段階に入っているような気がします。どうしてそう思うかと言いますと、先程言ったようにその身体に何も加えないのが一番普通だと、あまり手を加えないほうがよいという段階が近代社会ですね。ところが現在は逆に、特に若い人を中心に様々な形で体に手を加える、何らかの加工を加える、何らかの形で体を改造する、そういうものが非常に流行っているというか、普通になりつつあるんですね。一番瑣末な例といえば、多くの人がやっていますが、ピアスだってそうですね。体に穴を開けますから。耳に開けるぐらいでしたら大した事はないですが、いろいろな箇所に、例えば性器ですとかそういう所にも穴を開けてピアスを付けているなんていう人もいます。あるいは刺青のようなものも何か密かなブームになっている。あるいは、整形のようなものも入れてもいいのかもしれません。また、前衛的なものであるとしたら、人工の内臓などもだんだんと受け容れられるようになってきました。あるいはこれらのような前向きなポジティブなものだけでなく、少し変な言い方かもしれませんが、ネガティブな否定的なもので言えばリストカットのようなものも、ある意味で身体への痛みを敢えて作るというそういう流れの中で先程の映画の『パッション』の流行があるんです。『パッション』のようなものが大反響を呼んで、身体を苛め抜くそういうものが何かショートして、すごく人を惹き付けるものがある、そういう段階がやって来たように思います。大体このように大まかに整理できると思います。

2．身体の排除／包摂

さて、これらを踏まえてもう少し話を進めますと、ではそもそもなぜ、体に手を加える

のか、身体加工とは一体何なのかという事について考えていきます。ここで、また少し皆さんは意外に思われるかもしれませんが、身体と公的なものとしての政治ですね。政治との関係を少しお話していきたいと思います。これはこの頃僕がとてもお気に入りのイタリアの政治哲学者でジョルショ・アガンベンという人がいるんですけれども、アガンベンの説を取り入れて説明していこうと思います。結論的な事を先に言いますとこのアガンベンという人によれば、もちろんヨーロッパの歴史を念頭に置いて言っているんですれども、近代以前の政治、特にギリシャ・ローマ以来の政治というは、基本的に言えば人間の自然の身体というものを外に締め出すことによって政治というものは成り立つのだというアイディアで、これはどういうことかと言うと、レジュメにもひとつ引用しましたけれども、アリストテレスによる政治学としての言葉があります。一見、何を言っているのか分からないような言葉です。「人間は生きるために生まれたが、本質的には善く生きるために存在する」というものです。人間は生きるために生まれたが、本質的には善く生きるとはどういうことか。これは、ギリシャ人の生きるという意味の言葉がギリシャ語には2つあったと念頭に置いて考えてもらえると分かると思います。ひとつはbios、もうひとつはzoeです。英語に訳すと両方ともlifeになってしまうんですけれども、これはどう違うかと言いますと、zoeというのは、動物園のzooが基となって、これは動物園の動物と一緒の事ですから、要するに、生物として生きている、生命として生きているという意味です。それに対して、biosというのは、ある形式だとか規範とかそういうものを持って生きるという事です。なので、日本語に訳すと英語より少し含みがあってzoeなら、どちらかと言ったら生命に近いんですね。それに対してbiosは生活ですね。英語でlifeと出てきた時にただの生命という意味で使うのか、生活という意味で使うのかといったような事です。なので、例えば、私は読書三昧の生活です、といった時にzoeを使ったらおかしいんです。この場合、biosという事になります。つまり、zoeはただ生きている、biosはある人間らしい形式をもって生きているということで、善く生きるとはbiosの事を言っているんです。政治の目的というのはbiosの方にあり、ただ生命として生きるということは政治の目的ではないという事です。ギリシャですから、政治はポリスという都市国家で行われていて、ポリスには成人した男性しか参加することができないのですが、人間が衣食住をもって生きていくことにはポリスに対してオイコスといいます。これは今のエコノミーの語源となった言葉ですが、家族という意味です。人間の政治の世界では、人間が善く生きる、善なる世界とは何かを追究するのが政治であるという事です。それに対して人間がただ衣食住を使って生きる事は家族で賄ってやってくれ、というのが政治であって、政治というのは人間が善く生きる、という方の領域であるというわけです。一方のただ生きる生の身体というのは、生命のある身体というのは、政治の領域から排除する、この考えが前近代の政治の基本的な姿であったというのがアガンベンの主張するところなんですね。

ただ、少しだけ微妙な含みのある言葉遊びのような事を言いますと、人間のただの剥き

出しの人間としての生命の身体を政治から排除するというのは政治とは関係ない、という事ではないんです、本当は。このような言い方は本来おかしいかもしれませんが、政治から追い出すという形をもって政治と関係するというか。例えば、昔、若い方はご存知ないと思いますが、中沢事件というものがあって、これは中沢新一さんという方が東京大学で助教授になりかけて失敗した時に、僕の今の大学の同僚ですけれども、浅田彰さんがコメントを求められて、中沢さんについてどう思いますか、という問いに「ノーコメント以上のノーコメントだ」と言った事があります。なぜこの話を持ち出したかというと、ノーコメントというのはコメントしない、という事もコメントになってしまうんですね。だからコメントしない事もコメントなんだというのと同じように、剥き出しの身体を追い出すという形で、追い出すという形で関係しているんです。だから、追い出すということは無関係になることではないんだという事です。これは言葉遊びのようなものなので、付け足しにしておきますが、要は基本は古典的な政治というのは、このbiosの領域にあり、剥き出しの身体を外に締め出すというそのような形で政治は成り立っていました。ところが、近代に入るとその様相は変わります。その事を特に明確に言ったのは先述のアガンベンよりも有名な思想家でフランスのミッシェル・フーコーという人です。このフーコーという人は近代社会の政治というのは、言ってみれば生きる身体を政治の世界に取り込んだところに特徴があるんだと言っています。これはどういう事かと言うと、よく権力は何かと問うと、権力というものは生殺与奪の権限の事だと、生殺与奪というのはつまり殺してしまうという事ですね。それが権力の最高の形態だと思っているかもしれませんが、このフーコーという人によれば、それは、前近代的な王様の権力みたいなものだと、王様の権力というものは、いざとなったら臣下を殺すことができ、王様が一番力を発揮するときは死刑を下す時なんですね。ところが、近代の権力というのは種類が違うと言っています。昔の権力というのは、殺す権力で、それに対して近代の権力というのは人を生かすという事であり、これが都市国家に繋がっています。政治の大きな課題はいかに人々を生かすかという所にあるんです。だから、かつての権力は殺す権力だとすれば、近代の権力は生かす権力なんだという事です。つまり、人間を生命として生かすのが政治にとって最も重要な課題になるのが近代社会で、かつての政治は人間がどのように生命として生きているかというのは政治の問題ではなかったんですね。それに対して近代的な権力は人間を生かすという事自体が権力・政治の大きな課題となった所が近代となった新しい段階なんだというのがフーコーの主張です。更に加えると、この生かす権力の事をフーコーは、別の角度で「規律訓練する権利」だという事も言っています。規律訓練というと分かりにくいと思いますが、規律訓練はみなさん知っています。どこで知っているかというと、学校でする事です。みなさんこうして僕の話を静かに聞いています。これはみなさんが学校を経験しているからです。学校というものがなかったらこんな長い間、黙って聞いているなんていう事は人間にとって耐え難いと思います。けれど、学校に行くと、こうやって自分の時間を我慢

してでも、1〜3時間くらいなら我慢して聞こうと普通にできるようになるんですね。こういう権力は近代になって学校がはいってきて、できるようになりました。このようなアイディアが至る所に出てきてそれが規律訓練になるんです。だから生かす権力というのは同時に人間を従順にするといいますか、自己規則に従う、自分で自分をコントロールしながら人の話を静かに聞くといったようにしていく事なんです。そういう時代なんですね。だから、もう一度言いますが、政治というのは、身体を排除する段階から包摂する段階へとこのように変化してきたと言うことができます。そうすると、先程、僕がお話した3つの段階がありましたね。身体の生ける書き込み、死せる書き込み、そして、書き込みの否定とこの3つの段階をお話しました。この3つの段階の関係でいうと、3つは剥き出しの体というものを政治の中に取り込んだ、これがちょうど3番目の近代的な段階です。僕は3番目は元をただせばキリスト教からはじまると言いました。フーコーも元々こういうものも確かに近代の17－18－19世紀ぐらいに出てくるんだけれども、その源流を辿ればキリスト教の中にあった生死、神様と人間との関係みたいなものを原型にしてそれを近代に生かす時に出てきたと言います。とにかく、結論的にはフーコーによれば、こういうものの一番の源流を辿ればキリスト教に当たるというわけです。ですから、3番目の段階でこれに当たり、排除するのは第一段階と第二段階に当たるわけです。

そうすると、このように対応させて何が分かるかというと、第一段階と第二段階は生ける書き込み、死せる書き込みの両方を含みますが、何らかの意味の書き込みがあったんですね。第三段階は完全に書き込みを否定されたものです。このように対応させると身体に何かを書き込むという事は、一体、何であったのか、どのような機能を持っていたのか、そのような事が分かるわけです。結論的に言えば、体に何かを書き込むという事はzoeをbiosに変えることです。つまり、体に何かを書き込む、刺青をいれる、文様を入れる、そのような操作は一体何を象徴しているかというと、体にちゃんと然るべき図柄が書き込まれているということは、その身体が人間としての器官や人間としての生活形式などを身に付けているというか、書き込まれているという事の象徴だったんですね。書き込みというのは、言ってみれば、身体・体というものを、体に規範や価値の形式を与える、そういう操作だったと言う事ができます。逆に言えば、書き込むことによって人間の体のただの生の生命としての側面を背景に退けるわけです。そして、形式をもった生活の側面だけを、法的なあるいは政治的な場面で問題にするといった構造になっていると思います。

さて、今日の話の一番分かりにくい部分だと思いますが、もう少しだけこだわってお話しておきたいのですが、体に何かを書き込む、身体に何か加工を施すという事はただ絵を書くことではなくて、身体に規範としての形式を与えることなんだとお話しました。どうして身体に書き込みをしたり、身体に加工をするというのは、規範というものをその身体に与えたり、書き込んだりすることになるんだろうかということを説明します。これは僕の本を読んだことがある人は何度も書いたことがあるので、聞いた事があるかもしれません

が、初めての方ですと少し分かりにくい所になると思います。これは、体に何かを書き込む、典型的には体に刺青をいれるという事ですが、そのためにはオペレーションというか、手術をします。それは、どこか隠れた所で密かにやるのではなくて、人前でやるんですね。人前といっても、多くの場合、文化人類学的なものですと、秘密結社みたいな所で成人儀礼のなかで行われるので、今年成人する仲間の前でやったりするんですけれども、いずれにしても書き込みというものは人が見ている目の前で体に刺青を書き込まれるわけです。そうすると、その書き込まれる刺青は痛いですね。その痛いという体の皮膚に痛みがあり、何かを体に書き込まれる感覚と、それを外から見ている人々の眼差しをセットにして考えていかないといけません。これらをセットにして考えるとなぜ、体に書き込む事が、身体に規範を入れ込むことになるのかという事が分かってきます。

今日はせっかくの土曜日をみなさん使って来て頂いたので、少し難しいことを言いますが、これは僕が自分で造語的に使っている言葉ですが、見たり、聞いたり、考えたり、悲しんだりといった人間の心の働きといったものにはすべて2つのアスペクトがあると考えています。2つのアスペクトというのは2つの側面という事ですけれども、どういうことかと言うと、どんな心の働きにも「求心化作用」と「遠心化作用」とがあって、「求心化作用」というのは、大した事を言ってはいなくて、例えば、今、僕がみなさんを見ている。見ているという時は必ず誰が見ているのか、というのが問題になります。誰の物でもない視覚というのはありえないのです。僕はこの位置からみなさんを見ている、なので視野が開けています。このようにこの私の身体や体に求心化するようになっているわけです。私の悲しみであって、私の判断であったり、この私に所属する側面の事です。これは当たり前の事なんですが、この当たり前の事にわざわざ名前を付けたのは、もうひとつの当たり前ではない側面を見ていきたかったからです。この「求心化」というものの反対の作業である「遠心化」というものが必ず伴ってきます。どういう事かと言いますと、例えば、人の顔を見る時の事を考えてみて下さい。私があなたの顔を見る、あの人の顔を見る、相手の顔を見ると何が起こるかと言いますと、あの人も私を見ている事が分かるわけです。だから顔を見るわけですね。私が見ている時、見られているあの人も私を見ている、私が見ているその時あちらにも見る働きがあると直感できるんです。これを「遠心化」と呼びます。一番遠心化の核に当たるのは触覚です。自分が触れている時、私が触れるという事は相手も私に触れられているという事なんです。触れるということは、触れられている事なんです。私が見ている時、向こうも見ている事になります。人の心に一瞬にしてタッチしてしまう感覚ですね。それを僕は「遠心化」と呼んでいます。

この2重のアスペクトがあるとのいうのが僕の仮説なんですね。なぜ、この話をしたかといいますと、つまり、他者の心を直感的にタッチする感覚ですね、ですから求心化だけだと私しか関係ないんですが、遠心化が入ると他者がにわかに関係してくるわけです。これを基にしながら、ここで先程言った体にものを書き込むという場面を想像して欲しいん

です。典型的にはかなり痛い刺青を入れる、それをみんなが見ている、それは例えば、すごく痛そうな場面が出てくる映画を見ているとこちらにも痛さが伝わってきて「痛い」と直感してしまう、それが遠心化作用です。つまり、一人の身体に何かを書き込まれている瞬間をみんなで見ていると、みんなで共にその苦痛を味わうという体験をすることになります。一緒に感じてしまう状況です。そこにみんながひとつの一緒の身体の仲間の連なりが出来てくる。こういう事を衒学的に言うと、これは菅原先生も大好きな哲学者でメルロ・ポンティという人がいますが、身体について考えた最も偉大な哲学者です。メルロ・ポンティの言葉に「間身体」というものがあります。英語で言えば、inter - bodyですね。共に同じ感覚になってしまうことを間身体的な連なりとして、inter - body chain 「間身体的連鎖」を呼んでいます。先にまず、抽象的な事から話します。このような関係は普段よく感じている事です。例えば、みんなで話し合いをしている最中に何か決定される、決まってしまう。その時は何かそのような決定する雰囲気になってしまう。そういう空気になってしまう。その時のこの空気という誰の物とも言えないみんなの感覚に繋がっているのが、間身体的連鎖になります。あるいは、この間、福田首相が「あうんの呼吸」と言いましたが、どっちとも言えないその「あうんの呼吸」、誰が言ったとも言えないけれども、どっちとも言い難い二人で決めたとした言いようがないそういう雰囲気ですね。その中でみんながひとつの繋がりになってしまう、そのような状態です。さらにそのような空気ができるとどうなるか、この場合で言うと、内心反対だったけれどもそういう雰囲気だったのでとても反対できなかった、そういう空気だったんだから仕方ないなど、つまり、空気が出来上がるとその空気で誰もが反対できないそれ自体独立の実体で運動をもっているように思える、つまり、誰もが何となく違和感があってもその空気には反対できない誰とも異なる第三者として機能しはじめている事を僕は「第三者の審級」と言っています。ピンとこないかもしれませんが、人々の体の繋がりがいつの間にか独立のエージェントのように、独立の実体のように働きはじめると、その場の空気で反対できず、それに従うしかない。そこにひとつの新しいみんなが従わなければいけない規範やルールができます。そういう構造なんですね。もう一度まとめますと、心を求心化か遠心化かの働きを念頭に置けば、体に直接何かを書き込む操作は「第三者の審級」というものを、規範の担い手というものを、生々しく時間をかけると一つの儀式のようなものになっています。だから、身体加工を施すことでひとつの規範のもとに公設された新しい体というものが生まれてくるわけです。先程、3つの段階に分けましたね。生の書き込みの段階、死せる書き込みの段階、そして、書き込みを否定する段階、この3つと「第三者の審級」との関係を説明しますと、一番最初のベーシックな段階の身体に直接何かを書き込むという操作が起きる、それはどういう段階かと言うと、無から「第三者の審級」を得て作り出す、無から何かを生成をしている段階です。なので、1番目は「第三者の審級」を生成させる事にあたります。そしてやがて「第三者の審級」というものが、一神教のユダヤ教の神様だとか、中国

の天の理念とか宗教的な形で定義されていて、その度ごとに定義しなくても常に存在している何か実体としてイメージされるような、具体的な実感として、「第三者の審級」が独立して出てきます。そうなるといちいち生成することはない。その教義を教え込むだけでよくなります。これが2番目に当たります。3番目は、これが完全に内面化されるとか、完全に抽象化されてしまう段階です。近代社会をものすごく解り易く言ってしまえば、一人ひとりの人間が主体になる段階ですね。一人の人間の中に一人ひとりがある意味で一人ずつ小さな神様のように振舞う、つまり、神が心の中に内面化されている段階と整理できます。先程、規律訓練するというのはどういう事かというと自己規律できるようになるという事であると言いました。今、我慢して聞かなくてはいけないと自分で自分をコントロールできる、自分で自分をコントロールできるという事は自分の中に言わば、小さな神様を内面化している状態なんですね。これが近代のベースになるわけです。このようにまとめることができます。

3．「私はここにいる」

さて、そうすると先程言ったように、僕はこの3つの段階が近代の段階だといいましたけれども、僕らは今、4番目の段階に来ているんじゃないかという仮説を持っています。それをどのように位置づければいいのかお話しますと、今、再びある種の身体加工が流行っているんですね。体に何かを書き込んだり、傷をつけたりすることが、これは日本だけではなく、先進資本主義国は全部そうですが、そういう事が再び流行ってきている。どのように説明するかといいますと、昔の古典的な身体への加工が返ってきたかというとそうではなく、古典的な段階は、体にものを書き込むという事は書き込むことによって人間の身体は動物的な段階から人間的な規範を持ったものになる、転換をする、人間化するという事ですね。先程の文字の語源の話に少し付け足しをしますと、漢字の「産」は、先述の白川さんによると、これは元々「額」を意味するんですね。額の文字と合算した時に産となるんですね。つまり、「額」に何か書き込むという事です。それが産まれるという事なのです。何が言いたいかというと、恐らく、この文字ができた時には忘れられているけれども、この文字の元になった段階の時代に、人間が産まれた時、産まれるやすぐに額に何か刺青のようなものを成される風習があったと思うんですね。その事によって産まれた子どもは初めてただの動物ではなく、人間として認められるとなったわけです。ですから人間として産まれるという事は、書き込みであったという段階です。かつては人間として規範を身に付けるという事と身体に書き込むという事が同じ意味だったわけです。しかし、現在流行している書き込みはどうだろうかと考えると、現在流行しているものはそれと全く逆なんですね。考えてみますと、刺青をしている人を見たり、アブノーマルな場所にピアスが付いていたりするのを見ますと、何となくどこか背徳のにおいというか、どこか社会秩序に対して斜に構えているというか、反抗しているように見受けられます。ですから、規範を身に付けた、成熟したというものとは全く逆の意味、むしろ規範に対して反抗の意味合いを持っています。ですから、古典的な

段階の意味合いとは反対になっているんですね。そうすると、今、僕らが迎えつつある4番目の段階というのは、どうなるかというと、一番目の段階は生まれる段階、2番目には外に外的な実体として存在する段階、3番目に内的な実体として存在する段階、では、4番目はどうなるかというと、「第三者の審級」がどこか消えかけている段階ではないかと僕は思います。あるいはもう少しデリケートな繊細な言い方をすれば、4番目の段階の身体加工というのは、規範の源となる知己的なるもの、神的なるものがその権威を失ってきた時に生まれるその空虚に何とか対抗しようとする苦肉の防衛策として現在の身体加工がある、というのが僕の仮説です。

この仮説にもう少し具体的なイメージを付け加えますと、例えば、今、若い人達がどんな時に体に敢えて傷を与えたり、絵を書き込んだり、刺青をしたりするのだろうか、あるいは典型的なのが、敢えてリストカットするのだろうかといえば、それは、ある種のアイデンティティ・クライシスというか、どのようにアイデンティティ・クライシスになるのかというと、何か自分が本当に頑張りたい、命を懸けたい、コミットしたい、信じたいと思っているような事、そういうものが全くない、何もかもが偽物、作りもの、虚構に見えていて、どの規範も本物に思えない、みんな偽物だ、と感じるときに、そうなるとアイデンティティ・クライシスに陥りますよね。自分は一体、何に従えばいいのか、自分が何者なのか分からない、というその時に、何とかアイデンティティを取り戻そうとする苦肉の策ですね。例えば、体に刺青をする、あるいは、極端に言えばリストカットをする、という事は究極のアイデンティティ・クライシスに対する対抗策になります。どうしてかと言うと、何もかも偽物に感じて、自分で生きている実感がしない、この世界には生きているけれど、生きている実感がしない、という時に、それでも自分は確かに生きている、ここにいるんだというのを感じる一番確実な方法とは何かというと、それは、直接体に痛みを感じることです。何もかもが空しい、生きている実感がしない、でも、確かに自分はいるんだ、生きているんだという実感が欲しい時にリストカットをしてみる。そうすると血が出る。痛い。ああ、自分は生きているんだと感じるという事です。これを僕は「痛みの実存から実存の痛みへ」と呼んでいますが、痛みが確かにここに存在するということではじめて、自分は実存しているということの感覚、実感、痛みを感じる事ができるわけです。さらに、リストカットというのは、人に見せたいんですね。見てもらいたいんです。心配してもらいたいんです。つまり、自分が確かにここにいるという事を誰かに見てもらいたい、それを認めてくれる「第三者の審級」というものを何とか呼び寄せたいというような感覚です。そのような感覚と共に、体に直接、痛みを施す、そういう事が蔓延していくわけです。

最初に話した『パッション』という映画の話に戻せば、『パッション』のような極めて暴力的にスペクタフルなものに多くの人が魅了されてしまうのも僕は、正に4番目の段階の「第三者の審級」の不在というものに対応する出来事だと思います。例えば、ひとつ言えば、身体への人為的な暴力的な介入というのは、先程リストカットなどの小規模な例を

出しましたけれども、今日においてもっとも強烈なものを挙げるならば自爆テロです。自爆テロは超大型のリストカットだと僕は思います。自爆テロというものは、純粋な事なんですね。自爆テロで殉死することで、自分が殉死するに値する神様がいるという事になります。自爆テロをすることによって自分が信じる事のできる神様を招き寄せる事ができると考えるんです。『パッション』という映画はなぜアメリカであんなに成功したのかというと、これはいろんな解釈がありますが、ある人の解釈によれば、クリスチャンの間であの映画があんなに流行ったのは、実はイスラム教徒が、自爆テロをする。自爆テロは本当に悲しい出来事として語られるけれども、クリスチャンは結構それに対して、ただ怖いというだけではなくて、負けたという感覚ですね。僕は9･11テロの時に『論座』という雑誌に、実はアメリカ人は9･11のテロリストにどこか負けたというか、負い目を感じているのではないかという事を書いたら、『論座』の編集長が激怒した事があるんですが、でもそれは、本当の事だと思います。もちろん悪い事だと思ってはいますが、それと同時にどこかに、極端な事を言えば羨ましく思っているんです、それだけの事ができるんですから。それで、『パッション』が流行ったのは自爆テロやイスラム教徒に対して、俺達はそんなものに怯まないと、自爆テロなんてなんぼのものだと、それよりももっとすごい事があったんだという感覚です。キリストは自爆テロではありませんが、最大の自己犠牲なんですね。だから自爆テロ程度の殉教で怯んでたまるか、こんなすごいものが俺たちにもあるんだぞ、というようなそういう感覚ですね。そうやって何か空しい、神の消えた時代に神を最後に呼び寄せる苦肉の策として、身体そのものに直接暴力を加えるという事がその反作用として殉死に値する神を呼び出したり、実存の感覚を生み出したりするんですね。そういう構造になっていると思います。

4．活殺自在の境地

今、どういう事になっているかと言うと、僕が思うのは流行しつつある身体加工、自爆テロも含めた身体加工というのは、ある種の現代社会のニヒリズムです。その信じるに値する大義や神がもはやいないという事に対するギリギリの対抗策として起きています。そうすると、そういう方法でニヒリズムを克服できるのかというのを考えてみます。例えばリストカットを何度も何度も繰り返す事で人生が充実するか、といえば、決してそんな事はないんです。繰り返しても、繰り返してもやっぱり空しいんですよね。論理的に説明すれば、結局、何もかもが偽物に見える時に、最後に残された本物として身体というものに回帰しようとしているわけです。そこで、身体にいろいろなものを施すわけです。しかし、それをやればやる程、考えてみれば身体に手を加えて身体を改造するわけですよね、という事は、身体を改造すればする程、身体だって改造したり手を加えたり、いくらでも変化させる事ができる作りものだという事ですね。つまり、作りものではない本物としての身体を求めているのに、その身体をいじればいじる程、身体そのものだって作りものだという事になってしまうんですね。ついに最後の拠点まで空しくなっていくわけです。そうすると、今流行の様々な身体への介入によって、

現代の日本というものが少しでも改善されるかというと、いささかもそんな事はないわけです。

それならば、どうしたらいいのだろうかという事を最後にお話します。言ってみれば、本物をどうやって解決していくのか、本物というものと感じられる人生の意味ある行為というものはどうやって解決するのかというと、そのためにはまず、少しだけ前の話を思い出して欲しいんです。例えば、リストカット。痛みの実感によって自分の存在を作り出すという方法は実は、僕が先程言った身体には人間の持っている心の作用には2つの側面があると言いましたね。求心化作用と遠心化作用です。けれど、痛みの実存を感じる作戦というのは実はこの2つのアスペクトのうち、求心化作用だけを使っているんですね。自分が体が痛い、ここに私がいるんだ、というのを実感する。自分の体を痛める事で自分がここにいるんだという事を実感する。だから、私がここにいるという事を実感するという事を、体に痛みを与えることで実感するんですが、2つの身体のアスペクトのうち、求心化作用だけを主に使っています。けれども本当はもうひとつ遠心化作用のアスペクトがあります。遠心化作用を活用しながら、本当の本物を取り返す方法があります。まず、本物というものを感じる行為というものにどんなものがあるかと言いますと、自分は本当に生きている実感がする、「これが本当だ」と思う事はどういう感じかと言うと、例えば、本当に好きな人ができてしまった時の事を考えますと、自分は好きな人を選んで好きになっているわけですから、自分が選んだ事に間違いないわけです。誰かに強制されたりだとか、無理矢理に結婚しなさいとか、恋人になりなさいだとか言われたわけではなく、他ならぬ自分が選んだに違いありません。しかし、同時にすごく好きになってしまった場合、何かこれはそうなるべくしてそうなった気がする、運命によって決められていた気がする、という気分がする。つまり、一方では明らかに自分が自由に選んだに違いないけれども、他方でこれは初めから自分はその運命に従っただけだ、という気分になる。一方で自由であるけれど、他方で完全にそうなるべくしてなった受動的なという感じです。恋愛でなくてもいいんです。人生の中で本当に大事な事を決めるときってどういう感じかというと、意味のある事をやっている最中に決断が求められた時、えい、とやる。しかし、他方で自分はそうするしかないんだと、そうすべきなんだという気持ちもするんです。自分で選んでいるけれども、そうするしかない、自分はこういうように決められている、こういう運命なんだという気分もする、だから「本当の行為」というのは、どういう感じかというと、完全に主体的で自由だという感覚と、完全にそうなる他ないという、自分は決められているという完全な受動性と能動性がどっちとも決められない、全く自分で決めている事なのに、そうなる他ない、そうなるべきだと決めている部分と、決められている部分とが表裏一体となってしまう、そういう感覚ですね。それをまず、頭に置いておいて下さい。そういう意味での本物の行為というものをどうやったら人が取り返すことができるのかというのを言っておきます。

ここで意外なヒントを差し上げようと思いますが、かなり有名な哲学者で内田樹さんと

いう方がいらっしゃいます。この方はいろいろな所で文章を書いていますから目にされた事もおありかもしれません。内田さんは哲学者の部分を少し離れて、自分の体験について語る所で面白い事をおっしゃるんです。彼はレヴィナスというフランスの哲学者の研究者ですが、内田さんの独自のお考えが大変、啓発的で面白いんですね。その中で、内田さんが武道とか合気道のようなものを一生懸命やられていて、彼自身はもちろん達人と呼ばれる人と接し、嗜んでいるうちに、哲学者としていろいろ触発される事があるそうで、面白いことをおっしゃいます。内田さんは合気道の達人は所謂、活殺自在、生かすも殺すも自在の境地に達するととても強くなるその時の感覚というのは、実に不思議だという事を言ってみえます。武道の達人は活殺自在、相手を生かすも殺すも全く自在な強さの域に達するんですね。でも、よく考えてみれば、一種のスポーツですから、いくら武道の達人と言えども年を取れば、体力も衰えてきます。フィジカルには明らかに衰えが出ます。それでも、合気道の達人は活殺自在で、内田さんの言葉を使えば、構造的に勝つ、必然的に勝つという感じがする。どうして勝ってしまうんだろうか。どんなに体力が衰えても構造的に必ず勝つ、そういう境地に立つ。どうしてそうなるんだろうかといいますと、それは、達人は、敵と戦うけれども、敵はどんなに頑張っても達人に対して一歩遅れを取ってしまう、遅れてしまう。言ってみれば逆に達人は常に相手よりも先にいて、違う時間の流れを動いているように思える。常に相手は達人の待ち構えているところにやって来るという感じになってしまっている。なので、達人がどんなに年を取っても、タイムマシーンで1秒先に行っているような感じですから、相手は必ず負けてしまうんですね。それが、活殺自在の境地というものです。どうしてそうなるのか、達人だっていちいち考えながら動いているはずはありません。いちいち考えていたら間に合いませんから。でも、体が自然に反応して、見ていると常に達人が一歩早い。そしてその相手が一歩遅れるという構造になるわけです。これは、面白いところなんですが、先程のリストカットの作戦では自分が今、ここにいるんだという事を実感する作戦なんですね。自分の体が痛い、今、自分は何とかここにいるんだという実感。つまり、現在に実存の根拠を置こうとします。それに対して活殺自在の術というのは、一瞬だけ未来を生きるという作戦です。内田さんは面白い例えをしていて、彼は『座頭市』の映画がとても好きで、『座頭市』は達人で、何人ものやくざに囲まれると、必ず次々と斬るわけですね。そして、斬った後、刀を「チン」と納めると同時に斬られたやくざ達がバタバタと倒れるわけです。その時に「チン」と音が入る直前のほんの数秒間、映画では必ず全く音の聞こえない時間がある。どうしてか。これは、『座頭市』は、戦いの時、やくざ達よりも一瞬前の時間を生きているという事です。戦い終わって、時間を元に戻さないといけない、周りよりも先に行っているからです、待たなくてはいけません。その一瞬待たなくてはいけない時間がその数秒なんですね。その時間だけ一瞬沈黙の時間があって、その後、相手がバタバタと倒れて現実に戻るわけです。そういう感じですね。未来に生きるという感じです。これだけだと、一種の文学的例えに過ぎない

んですが、これが、映画だから出てくるような、また、刺激的な話をしているだけではなくて、実はそういう事をある意味では、実際に論理的に考えても充分あり得る事なんだという事を言っておきたいと思います。

活殺自在の境地というのは、合理的に説明できることです。なぜ、達人は相手よりも一瞬、先回りできるのかと言うと、先回りしているので相手は達人が待っている所に、飛んで火に入る夏の虫のようになってしまうんですね。どうしてそうなるかと言うと、達人は自由自在に振舞っているようでいて実は、達人の方こそ相手に反応して、相手の動きにフィットして、相手の動きを一瞬のうちに察知して相手よりも早く相手を捕ってしまうというわけなんですね。相手の体の微妙な動きや変化に瞬時のうちに反応して、それに触発されて相手よりも先に、相手が来るはずの場所に行っているという構造です。だから、達人の自由自在な動きは、実は達人の相手の動きに反応した結果、起きた事なんです。勝手に動いているわけではない。むしろ相手に規定されて、相手に縛られて、相手の動きに触発されて動いている。これこそ、先程、僕が言った遠心化という働きです。他者の感覚を一瞬のうちに察知して、それに対応してしまうそういう能力です。だから相手に反応していれば、相手以上の相手になってしまうというわけです。僕はこの内田さんの論文を読んだときに思い出した話があってそれは昔、若い頃に読んだ日本の非常に偉大な精神医学者である木村敏さんや中井久夫さんが、お二人は共に著名な哲学者であると同時に精神医学者でもあるんですが、彼らが、当時は分裂病といいましたけれ

ども、現在の統合失調症について、ある面白い事を言っています。統合失調症の患者というのは、未来を一瞬先取りするみたいな、未来を生きているみたいな部分があります。未来を一瞬先走って生きているようなそのような感じ。それを木村さんは「祭りの前」と言い、鬱病と対比して鬱病の人というのは、何もかもが祭りの後の沈んだ感じになる。それに対して前夜祭の感覚で生きているのが統合失調症の人だと言っています。中井さんはもう少し別の表現を使って「微分回路的な認知」だと言っています。微分回路とはどういう事かというと、微分というのは、関数があった時に関数の変化率を見ることですよね。変化の状態を先取りする、それが微分という事です。変化しているものを一瞬のうちに察知する能力の事を言っているんですけれども、それが、統合失調症の特徴だと言っています。なぜこんな話をしているのかと言うと、統合失調症の中の妄想というのは、ほとんど全部他者についての妄想なんですね。自分の中に他者が入ってくる。誰とも特定できない他者が入ってくるという感覚が統合失調症の一番の特徴です。これは僕の言葉を使うと、統合失調症というのは、極端な「遠心化作用」で、極端に敏感になってしまっている状態なんですね。だから確かにあまりにも反応し過ぎる

と他者と自分との間の区別が曖昧になってくるそういう他者感覚と、先程言った時間間隔との間には、実は深いつながりがあるんだと思います。なぜ、統合失調症の人達が未来を生きた感じになるかというと、ちょっとした世界の変化、ちょっとした他者の変化に極端に敏感に反応して、一瞬先を行ったみたいになるわけです。

結論的な事を言えば、ある本物の行為、ある種のニヒリズムの時代に、僕らにある種の本物というものを感じさせるような生き生きとした行為というものが可能だとすれば、例えば、今のような活殺自在の境地というのは、まさに、自分が全く自由自在であるという事と他人にすべて規定されているという事、全くの主体性と全くの受動性というものがひとつに統合されていくそういう感覚です。人間のこういう能力の可能性というものが、そういうものの中に現代のニヒリズムの時代を乗り越えるための何かヒントがあるのではないかとはっきり申し上げておきます。

渡邉主任研究員：大澤先生、どうもありがとうございました。では、このまま続けて菅原先生のお話に移ろうかと思います。

菅原先生を簡単にご紹介しておきます。チラシに詳しく書かれておりますが、僕は、菅原先生、普段は菅原さんと言っておりますので菅原さん、と言う方が口に出やすいんですが、彼が大学4年生の時に初めて会いました。彼が、大学院をどうするか、という事で友達5人だったか、6人だったかが霊長類研究所に訪ねてきて、一晩お相手をして飲み明かした、それが初めての出会いでした。それ以来、サルの研究に取り掛かりながら、彼はある時から人類、サルから人間へとターゲットを変えていきました。今日までカラハリ砂漠をボツワナ共和国においてのブッシュマンの研究に勤しんでおられます。彼自身、従来、研究材料としてはかなり放置されていた環境という問題をクローズアップさせ、先程の大澤先生のお話では、「第三者の審級」という難解な側面から研究されていらっしゃいますが、菅原さんの場合には進化というものがひとつのキーワードになっているのではないかと思っております。彼は、著書などにもよく触れていますが、デカルトの身心二元論、デカルトの呪縛をどう乗り越えるかを実際の研究としても取組んでいます。今日は感情の中の特に嫉妬について人類学からの視点でお話していただこうと思います。では、よろしくお願いします。

菅原和孝 京都大学大学院教授　基調講演
「感情の人間学 ― 感情と行為空間 ―」

菅原和孝氏：こんにちは、菅原です。今、ご紹介にあずかりましたように渡邉先生、ふだんは毅さん、と呼ばせていただいておりますが、毅さんには昔から大変お世話になっておりまして、私が京都大学霊長類研究所で大学院生の分際でありながら結婚をしてしまったときも、毅さんに相談をしたりして、大変励まされて、今までやって参りました。

私は、今から25年くらい前から南部アフリカの狩猟採集民であるブッシュマンという通称で知られている狩猟採集民の研究を続けていまして、それが研究のメインなんですが、今日は思いきって、サルの話しと人間の話を両方してみたいと思います。みなさんも同じ人間として、人間の話のほうがとっつきやすいでしょうから、最初にブッシュマンのお話をして、その後にサルの話をしていきたいと思います。まず、一般的に私たちは、他人の感情を簡単にわかるという能力を持っていると思われますが、それはどうしてなのかということから、この話の背景となっています「身体化された心」という考えかたをご紹介します。2番目に、感情と言ってもじつに多彩ですので、短い時間で感情のすべてを駆け足で考えるのは不可能ですから、今日はサルの話と一番呼応しやすい嫉妬や妬みの感情を、いわゆるブッシュマンの人たちの社会で考えていきます。3番目に人間からサルのほうに逆に戻って、私が若いころ調査してきたヒヒの社会に焦点を当てます。とくに、マントヒヒにおいてオスがメスを所有しているという社会のあり方があるにもかかわらず、オスどうしが宥和と呼べるような関わりをとり続けていることが、私が考えるところの嫉妬という感情を理解する一番の手がかりではないか、といった話をしていきたいと思います。

私の主張はかなり突拍子もないというか、非常識なものなんですね。それは、感情というものは、私たち人間の心のなかに存在する実体ではなくて、むしろ社会のなかに感情があって ― 私は社会を「行為空間」という言葉で呼びますが ― 「行為空間」特有の構造のなかに感情があると考えています。おそらく皆さんには、なかなか受けいれてもらえないような主張かと思います。今日の講演と大変に似た内容の講演を記号学会というところでやりまして、私の尊敬するつい最近まで大阪大学の哲学の教授をしていらした菅野盾樹さんという方が座長をなさっていて、その菅野さんが「どうも菅原くんの考え方は極端すぎる」と言われたときに、私はつい、「じつは、私自身は自分の心のなかの感情をいじくりまわすすごく困った癖のある人間なので、そういう自分に対するうんざり感というのが動機となってこういうことを考えているんです」と言ったら、菅野さんが「そうでしょう、そうでしょう」とニコニコされたのがとても印象的でした。極端な主張をする裏側にはそういう事情があるのをお知りおきください。今日の講演もそうですが、私はパワーポイントを使い始めてから、漫画で発表するようになって、ドイツ人の私の友人の研究者からは、スガワラは漫画人類学を開拓する気か、と言われておりますが、今日もたくさんの下手くそな漫画をお見せします。

まず、冒頭でお見せしたのは、映画をご覧になった方も小説をお読みになったことのある方もいらっしゃるかもしれませんが、私は中学生のころからＳＦファンでたくさんのＳＦを読みました。そのなかでポーランドのＳ

Ｆ作家で先ごろ亡くなられたスタニスワフ・レムの『ソラリスの陽のもとに』というＳＦ小説に多大なる感銘を受けました。このソラリスという惑星はアメーバーのような原形質の海に覆われていて、そこへ探査に入った人類がいくらソラリスとコミュニケーションしようとしても最終的には失敗してしまいます。ところが、ソラリスの海のほうは途方もないものを人間に見せます。例えば、ビルディングの高さほどある赤ん坊とか、あるいは主人公の自殺してしまった妻などです。余談ですが、この漫画にはこの話を考えていた頃、私が片思いしていた女性の面影があります。つまり、ソラリスの海がやっていることは人間の一番激しい感情をかき立てるようなそういう存在を見せながら、ソラリス自身の感情はまったくわからない、これこそ、他者とコミュニケートしようとするときの一番絶望的な状況、つまりコミュニケーションの不可能性ということをものすごいインパクトによって描ききった作品だと思います。普通はこういうことはありえないわけで、私たち人間は、じつはものすごくたやすく他者の感情を読みとることができます。

私がまだ霊長類学研究者の駆けだしのころに、宮崎県の幸島に行き、霊長類学のパイオニアであり、かつ一番著名な方である河合雅雄先生から個体識別の指導を受けました。そこで河合さんは、当時、幸島のリーダーだったオスザルの手を「見てごらん。指に斑紋があるだろ」とおっしゃって、不用意にボールペンを突きつけたら、そのオスザルに吠えつかれて、慌てて「そんなに怒るなよぉ」とおっしゃったんですね。私はしつこい性格なのか、何十年間、そのことが不思議だったんですね。なぜ、あのとき、河合さんは「怒るなよ」と言い、私はそれを自然に理解できたの

かと。これを進化論的に考えれば、ある心理学者によると人間の脳神経系には情緒プログラムという機構が遺伝的に組みこまれていて、ある種の刺激を受けるとその情緒プログラムが、すごい速さで自律神経系を活性化し、そして、顔面の表情筋を収縮させ、それによって大体６種類の万国共通の顔つきというのができるのだそうです。喜び、悲しみ、恐怖、驚き、怒り、嫌悪です。これを基本情動と名づけます。この情緒プログラムというのは、系統発生にしたがって霊長類から人間への進化の過程で具わってきたものなので、人間に近い霊長類ほど、この情緒プログラムは共通しています。ですから、ニホンザルに比べたら、チンパンジーのほうがずっと表情豊かで、しかも人間にもわかりやすいということになります。つまり、遺伝的コードが共有されていると考えられるというわけです。私は基本的にこのような考え方を受けいれる立場から出発したいと思っています。

私が四半世紀にわたる、いわゆるブッシュマンと呼ばれる人たちのフィールドワークのなかで、表情についてもっともも深い印象をうけた事例をご紹介します。1994年から年長者の語りの収録をしており、その翌々年の

1996年に録音した語りのなかからこんなエピソードを抽出しました。じつは、このブッシュマンと呼ばれる人たちには、多数の言語集団がありまして、私が調査している人たちは、グイ（|Gui）という名前です。このグイという人びとは19世紀の終わりあたりからバントゥ系 ― バントゥというのは、西アフリカを起源として南部アフリカまで進出した巨大な言語集団ですが ― そのバントゥ系のカラハリ族という人たちと一応は共生的関係をもち友好的に暮らしてきました。しかしながら、このカラハリ族という人びとは、はっきりとブッシュマンのことを見くだして自分たちの家来として位置づけています。ある時、アフリカオオノガンという大きい鳥を罠でしとめて、その鳥の肉をみんなで鍋で煮ているときに、その肉の所有者が、落ちたひとつの肉をその場にいる一番年長のグイの男にあげました。そうしたら、カラハリ族の男が「エラい僕がここにいるのに、なんでブッシュマンに先に与えるのだ」と文句をつけました。ところが、そのおじさんはしっかりした人で「そういうことを言うな、この前も危険な狩りに一緒に行った仲じゃないか」と嗜(たしな)めたんですね。その後、肉が煮えて、その肉を差し出しても、そのカラハリ族の男はキオして、― キオというのはグイ語の自動詞なんですが ― キオして食べようとしなかった。このカラハリ族の男は、顔をつぶされたことを恨んで後で呪いをかけて彼を嗜めた男を殺してしまったという話です。こういう状況に人類学者はフィールドでしばしば遭遇します。つまり、「彼はキオした」と言われても、私にはキオとはなんのことだかわかりません。一般的に、新しい言葉を採集して、その意味を確定することには途方もない困難があります。なかでも私が一番苦労したのは、「約束する」という言葉でした。これは最初は全然わかりませんでした。なぜかというと、彼らが「約束する」という言葉を説明しようとするときに挙げる実例がすべて「約束を破る」ことだったからです。「スガワラが『明日、おまえに煙草をやる』と言ったのにくれなかった」というのが、ある動詞の意味だ、と言われてもわかるわけがないですよね。それと同じように「キオした」と言われてもなんのことかわからない。ただ、このような感情を表わす語については、とても便利なことがあります。それを調査助手に実演させればいいんです。わが調査助手に、「キオってなんだ？」と訊いたら、突然、ぷぅーと口をふくらませてふくれっ面(つら)をしてくれました。つまり、「キオする」というのは、「ふてくされる」「むくれる」という意味だったんですね。じつは私は、このあと、ひとりこっそりとふくれっ面をつくってみました。そうすると奇妙な感覚が甦ってきて、これは、子どものころ母親に叱られて、もうお母さんと口なんかきくものかと一日じゅう拗ねていた、そんな感覚でした。このように、顔面表情こそがまさに私の感情を深く規定していて、しかもこうした顔面表情は、日本からはるか離れたカラハリ砂漠にいる人たちとも共有されている。それだけではなく、昔、私が訳した『ヒトの行動の起源』という本のなかにこんな写真がありました。当時アメリカの大統領であったニクソンが演説している写真の横に、誇示行動（ディスプレイ）をするオスのチンパンジーの写真が並べてあって、その2つの写真が見事にこの口を膨らます表情をしており、人

間にもチンパンジーにも共通する感情を表しているように思えます。このような例に直面すると、やはり全人類だけでなく霊長類にまで共通した感覚があることがわかります。

ここまでの話はいわゆる進化論的見解に立った話ですが、ただ、これだけでは、ある意味で、偏った議論になってしまいます。なぜなら、遺伝的コードを共有していなくたって、私たちは他者と感情を通じあわせることが頻繁にあるからです。私には12年間にわたって溺愛していた黒いラブラドール・レトリバーがいて、残念ながら去年、私がアフリカに行っている最中に死んでしまって、とてもショックでした。犬を飼う最大の楽しみは、「犬の心はシッポと直結している」という実感のなかにあると思います。あのパタパタ振られるシッポによって犬の喜びを人間は理解できます。それに、私が厳しく叱りつけると怖がってブルブル震えます。そのブルブル震えているのを見て、「この犬は、はしゃいでるな」とは絶対に思いません。直感でわかります。つまり、ここで何が起こっているのかというと、もちろん、人為淘汰という過程が、人類において延々とくり返されてきて、犬という信じられないほどの気のいい動物ができあがっていますが、その犬と私とが和やかに暮らしていけるというのは、犬の親愛の表現を私がそれなりに受けとめて、それにふさわしいことをするからです。たとえば、私の飼っていたその犬は、私が出張後、玄関先に帰ってくると一本一本の指を丁寧に舐めてくれました。あたかも大事な人が怪我をしていないか確かめるように舐めます。そうすると私も嬉しくなって、彼女の耳の後ろを掻いてやるといった親愛表現を返します。このような形で適切な応答を発しあっているわけです。この適切な応答を発しあう行為ややりとりの空間を「社会」と呼びます。これは私のアイディアではなくて、いろいろな研究者も言っていることです。そういう意味では、私と愛犬はとても小さな社会をつくって共に暮らしてきたということになります。

ところで、私の『感情の猿＝人』という本は、とてもわかりにくいと言われる方もいらっしゃるんですね。弘文堂の編集者の方がじつに鷹揚な方で、私が心配して「ちょっと難しすぎやしませんか」と尋ねたときに、「全然そんなことないですよ」とおっしゃってまったく訂正を要求されなかったので、そのまま出版となり、一部の方がたには難しいと捉えられる事があります。その難しさのひとつの原因は、私が「進化」ということについて考えながら、進化というプロセスが本当にあったという信念を前面に押しだすことを避けている点にあると思います。苦しまぎれに私が使った言いまわしは、「進化というのは、目が覚めてからもすごく気がかりで、一日じゅうそれについて考えている夢のようなものだ」というものでした。つまり、私は進化という過程が実在したと断言することはできないけれど、それは気になって仕方がない夢のように私の思考にまとわりつく。「進化を夢見る」ことが人間を理解するうえでとても重要なことではないかと思います。このような考えかたのわかりにくさですね。これは困ったことですが、私が大学生のころから深い影響を受けてきた、先ほど大澤さんの話にも出てきたフランスの哲学者メルロ=ポンティという人のものの考えかたが本来的に帯びているわかりにくさでもあります。つまり、私た

ち人間が生物学的存在であるというのは直観的に明らかですが、そのことを額面どおりに信じこむのはよそうと、むしろそれを信じこむことを周到に禁欲しようという、その姿勢のわかりにくさです。そのわかりにくさを一言で「内在的な意味」という用語で捉えることができると思います。私たち人間のきちんとしたものの考えかたというのは、つねに内在的でなければならないという主張です。自分が生きる世界の内側から意味を把握するべきであるということです。自分が生きる世界の内側からの了解ではなくて、たとえば権威者が言ったこととか、マルクスが書いていることとか、あるいは、心理学者や哲学者が人間は「こういうものだ」と定式化する説明など — それらを鵜呑みにすることを私は「天くだりの思考」と呼んでいて、「天くだりの思考」によってものを考えることは、根本的に虚しいことであるというのが私の学問的立場です。

では、「内在的な意味」とは何か、と言ったら、それは内在的な意味がなかったら私たちは、たとえば霊長類学という学問さえ行なうことができないというかなり極端な主張に行きつきます。ここでひとつの思考実験をご紹介します。コンピューターの画面のなかであるビジュアルな仮想生命体を動かし — これは私の友人のコンピューター学者がつくったメダマジャクシというものですが — メダマジャクシ黄色がメダマジャクシ赤に近づいたとき、赤が去っていきました。これは誰が見たってメダマジャクシ黄色がメダマジャクシ赤をどかしたということが分かります。「どかす」というのは物理的事実ですから。この「どかす」というのが、じつは、私たちが攻撃だとか、競争だとか呼ぶ現象の中心的な意味にあたります。どかすというもっとも原初的な相互行為（やりとり）に注目することからいわゆる、競争によってものを考える生物学、つまり社会生物学が生まれました。現代の霊長類学を支配している社会生物学という巨大な体系は、「どかす」ことに注目した学問だと言えます。しかしながら、私たちはこのメダマジャクシが仲良くする、ということを果たして認識できるかという問題が浮上します。サルの毛づくろいを参考にメダマジャクシが「仲良くする」ことを表わすと、赤いメダマジャクシが静止している所を黄色のメダマジャクシがくり返しつっつくという動作で近似できます。しかし、ここで困ったことが起きます。この映像だけを見ると、黄色と赤のそれぞれのメダマジャクシが仲良くしているのか、黄色が赤をいじめているのか、じつはわかりません。本当に黄色と赤が仲良くしていると認識するためには、私たちは、子どもだましのようですが、笑顔のような表情を書き加えてやらないと、仲良くしているのかどうかはわからないのです。これが、私が一番のキーワードにしている「内在的な意味」の絵解きです。この絵解きをやや抽象的なことばで言いかえると、私たちはサルの観察者としてサルのある行動を「親和的」と呼びますが、そう呼ぶためには、観察者がつねに仲良くすることの意味を自分が生きている世界の内側から把握していないかぎり、私たちは動物の行動を親和的と呼ぶ根拠はないということです。このような考えかたはえてして「擬人主義」と言われますが、私は「擬人主義」というような混乱したものの考えかたではなくて、人間が動物を観察するときに

乗り超えることのできない条件だと思います。つまり、もっと言ってみれば、私たちは動物が敵対することとか攻撃することというのは、客観的に理解できます。なぜなら、結局のところ、物理的に「どかす」という所に帰着するからです。しかしながら、動物が親和的であるということを客観的に記述することはできません。これが話の前提となっています。

ここから感情の話になってきますが、ここで私が大きく依拠しているのは、「認知科学」と呼ばれる学問領域です。「認知科学」における「身体化された心」理論の全貌を今日、お話しすることはできません。本当にお聞きになりたい方は京都大学の大学院に来て私の講義を受けてください。そのなかでもとても有名な話をまずご紹介します。英語圏の言語分析から出てきた話ですが、「怒りのシナリオ」と名づけられるようなある種の台本によって、英語でものを考える人たちが怒りの経験を捉えているという理論です。その根底にあるのは、ひとつのくっきりしたイメージで、専門的には「隠喩」「メタファー」と言いますが、そのメタファーとは、「怒りとは、ある容器のなかでグツグツと熱せられた液体だ」というイメージです。これが英語文化圏の人たちが怒りを考えるときの基本的イメージです。そこからひとつのシナリオのような論理構造が導かれます。誰かが私に悪いことをして私のなかで怒りが生まれて、圧力がどんどん高まって限界点を越えて噴射する。この限界点を越えることは、現代の日本語では、「キレる」だとか、「逆ギレ」といったような言葉で表わされます。これは悪いことをした人に対して、噴きだすもののはずですが、別の対象に向かって噴きだされることもあります。これを日本語では「八つあたり」といいます。それが終わると圧力が低下して、怒りは少しづつ収まっていきます。これは英語文化圏から抽出されたシナリオですが、経験的にわれわれ日本人にもあてはまると思います。

この考えかたを参考にして私たちには嫉妬のシナリオがあるのかどうか検証したいと思います。つぎに挙げるのはわたしの思いつき的な分析ですが、みなさんもよくご存知のシェークスピアの「オセロ」のような状況が私たちの周りにもあるのではないかと思います。ある人Ｐがある人qを所有している。そこで、Ｐはqがが自分以外の別の人Ｒと性交していることを知る、またはそう推測したとき、そこで嫉妬の感情がＰに生まれます。これを「Ｐは嫉妬に捕えられる」あるいは「嫉妬に襲われる」といった言いかたで表現します。すると、ＰはqまたはＲ、あるいはqとＲの双方

であってもいいのですが、かれらへの攻撃に駆り立てられる。このシナリオのポイントは、嫉妬というのは非随意的な私の意志ではどうしようもできない力が襲いかかってきて、先ほど大澤さんがお話しされたまさにパッションですね。受難であると同時に情熱であり、そういった力が襲いかかってきます。けれども、このようなシナリオをいつも曖昧にしている原因は2つあり、ひとつはＰはqを所有していると言うけれど、人間が人間を所有するということは具体的にどういうことなのかがまずわかりません。それから、もう一つわからないのはライバルどうしであるＰとＲは具体的にどのような関係なのかということです。ですから、これらの2点を明らかにするためにはわが国や欧米とは、かなり違った形で嫉妬に取り組んでいる社会のことを明らかにする必要があるように思います。

まず、人間についてお話すると、私が対象としている人たちはグイ（|Gui）とガナ（‖Gana）という2つの言語集団に属しますが、おもにグイの人たちを研究していますので、これからのお話のなかではグイという言葉を使います。ボツワナという国の中央アフリカ動物保護区という所に住んでコイサン諸語、昔はコイサン語族と呼ばれていましたが、コイサン諸語の方言を話します。コイサン諸語というのは、ブッシュマンと言われる人たちとホッテントットと呼ばれる人たちの両方の言語を含みます。この名称はどちらも差別語なので、私がブッシュマンという言葉を使うときはそれなりの理由があって使いますが、今日はそのあたりの事情は省きます。「ホッテントット」というのは明らかな差別語で、現在ではほとんど使われておりません。正確にはコイコイといい、もともと牛牧畜民でした。これに対して、ブッシュマンは非常に平等主義的な社会に住んでいて、乾燥サバンナに適応した狩猟採集生活を送っています。中央カラハリ動物保護区という九州と四国を合わせてもまだお釣りがくるぐらいの広大な土地のなかで定住地のカデという所に1979年から定住化させられていましたが、1997年に政府からなかば強制的に立ち退きを命じられて、そこから70キロほど離れたニューカデ、または彼らの言葉で「コエンシャケネ（Kx'oensakene）」という所に現在まで住んでいます。男女が分業をして、この写真は男が毒矢を作り、女が植物性の食物を搗いている場面です。また、摂取カロリーの80%くらいは植物性の食物で、おもに女性が採集します。私の身体に関わる研究は、女性がよくするシラミ取りの分析から出発しました。今日の本題である結婚と性ですが、結婚というのは「取りあう」という言葉で表わされます。結婚式というのは、「血を混ぜあわせる」という言葉で呼ばれます。これは文字どおり、血を混ぜあわせることをします。新郎新婦の体に剃刀で傷をつけてそこから滲みだす血液をお互いの傷口に擦りこんで血を混ぜあわせます。彼らの性や生殖システムの一番大きな特徴は、この結婚という制度と持ちつ持たれつというような形でザークという婚外の性関係が、非常に広範囲なネットワークを張りめぐらせているということです。私の長年の調査では、生涯のなかで一度もザークをしたことのない人というのはきわめて稀です。みなさんのなかには、自由恋愛の素敵な社会だなと憧れる方もおられるかもしれませんが、そう甘いものでもないのが現実です。

これは、人類学で用いる家系図ですが、男は三角で女は丸で表します。人類学というのは意外と即物的な学問で男の三角というのはペニスの形で、女の丸は子宮の形を象徴しています。このザークのはっきりした傾向は、もちろんザークというのは必ずと言っていいほど三角関係を呼びよせますが、この三角関係というのは、はっきりと争いの源になります。後でお見せしますが、典型的には妻が他の男と関係ができて、その男とのあいだに子どもができたときには嫉妬を籠めた名づけを行います。三角関係の危険を乗り越えるものとして、彼らグイの人達がとても憧れるのが「ザークそのもの」と言われる2組の夫婦がスワッピングすることです。スワッピングといっても、性交だけではなくて、頻繁に贈り物を交換しあって経済的な相互扶助の絆を打ち立てます。そういった絆を10年以上にわたって続けていくというのが一つの理想になっています。ところが、もう一方でザークというのはある種の汚れを生じさせてそれに関与した男女の男または幼児を病気にして、ひどいときには死なせてしまうという恐れと結びついています。たとえば2組の夫婦が「真のザーク」を追求しようとしているときに、子どもとか一方の夫とかが病気になったときには、その汚れを解除する儀礼を行なわなくてはいけません。その儀礼というのは、全員の尿を混ぜあわせてサウナのようにその尿から上がった湯気を身に浴びて、盛大にみんなで汗をかいて最後に爪の粉を嗅ぎ煙草のように鼻に詰めてくしゃみをする、という内容です。これはつまり、先ほどの血を混ぜあわせることによって結婚が成立するのと同じように、いったん身体から分離した物質を混合することによって、大澤さんの言葉をお借りすれば間身体性に罅がはいり傷ついたけれども、身体から分離した物質を混ぜあわせることによって「間身体連鎖」に生じた危機を克服するというきわめて即物的で、しかもつじつまが合った考えかたです。先ほど言いました名づけですが、私は167例の名づけのエピソードを調べあげた結果、ある種の争いにまつわる名づけが特に多いことを発見しました。特にザークにまつわる名づけが圧倒的に多いです。コイサン語というのはクリックと呼ばれる舌打ち音を使いますが、その舌打ちには4種類あるので、発音を聞き分けてみてください。これが私の親しい人達ですが、「ピリ」つまり山羊という意味の名前のおじさんが結婚している「ホエガエ」（!nhoe‖gae）という女性に注目してください。この名前は「罠の呪薬」という意味です。彼女はグイ語で「コーハ」（kx'ooxa）と形容されるような女性です。この語は「性悪（しょうわる）」とでも訳せます。彼女はたくさんの愛人を抱えていたので周囲の人たちから「コーハである」と呼ばれていました。注目してほしいのは彼女の長男です。この長男は私の調査助手で、「キレマカオホ」（cherema!kaoxo）という名前ですが、これは「ナイフを研いでやる」という意味で、「山羊」おじさんが家に帰ってきたら妻の愛人が家を訪問していたので、これみよがしに石の上でナイフをゴシゴシ研ぎながら、「早く帰らないとお前のお腹を裂いちゃうぞ」と脅したという故事にちなみます。それから3番目の愛人から生まれた女の子は「隠して取る」という名前がついており、これは「殴り襲う」という名前のついた人の妻が彼につめよって、「あんたはなぜあの女を取っ

たことを隠していたのよ」と言ったその名言が夫の耳にも伝わって、「隠して取る」という意味の名前がつきました。このような例が書ききれないくらいありふれているわけです。家系図の下に写真をお見せするのは、婚外性関係のベッドシーンなんて写せないのであまり期待しないでほしいんですが、右側が男性の活動の写真で、左側が女性の活動の写真です。グイ語において「男」という言葉と「右」という言葉は同じです。これと同様に「女」と「左」も同じです。1982年から1987年に私がつぶさに見聞していた事例は、これはある種典型だと思いますが、人妻が同じキャンプに住んでいる青年を誘惑して、それに対して夫は非常に優柔不断な態度をとり続けていたために、実質的に一夫多妻ならぬ一妻多夫婚となるような状態が5－6年にわたって続いたという事例であります。この家系図にあるように夫と妻のあいだにはどんどん子どもが生まれてきましたが、その間隙を縫うようにして恋人とのあいだにも子どもができます。もちろん、ＤＮＡ鑑定などしていませんから人々の言う容貌の類似性と妻本人の証言、耳の付きかたや歩きかた、頭の形といった類似性を総合して真の父親がどちらかを判別します。つぎの家系図も私の親しい方の一家で、ものすごく愛妻家ですが、そんな愛妻家でも一度ザークをしているんですね。夫唱婦随の理想的なカップルにみえて、子宝にも恵まれているんですが、そんな夫でさえザークをしています。いっぽう1976年生まれの男の子は妻のザークの関係によって生まれ、その子は私の目から見ても妻の相手のキェーマさんとそっくりです。この夫は、それを知ったとき、怒りで喉が詰まりそうになったので、「怒って自殺する」「クリャツォンシ」（kurya|qx'onsi）という名前をその息子につけました。私がとても好きだった最近になって亡くなられた「シエクエ」というおじさんがいますが、彼の奥さんは「ホアコ」（|nhoako）という男と関係をもって子どもができます。1968年生まれのこの子には「襲って出す」「カオトアホ」（!kao≠qx'oaho）という名前をつけましたが、この息子ははっきり、自身の胤（たね）で生まれたということは容貌の類似性で明らかなんですが、その10年後に生まれた男の子は、私が見ても笑ってしまうほど、ホアコさんとそっくりでありました。ですから、シエクエおじさんは、「おれは10年間だまされていた、あいつらの仲はとっくに終わっていたと思っていたのに続いていたのか」と言って、子どもにこれは外来語ですが、「パキーカ」つまり「だます」という意味の名前をつけました。こういった事例を重ねあわせていくことが、なぜ私をかくも驚かせたかというと、初期の調査のころに私はこのような話をまったく知らないままに、「なんてグイの父親というのは子どもをかわいがるのか」と感心していたからです。当時、私も子育てをしていましたから余計に感銘を受けました。ですが、後からわかったことですが、あんなにも猫かわいがりしていたあの「隠して取る」ちゃんというのは、じつはピリおじさんの本当の子どもではないということをピリおじさん自身も知りながら、かわいがっていたことを知ったとき、とても驚きました。また「だます」くんは8歳になろうというころになっても親父の背中にベタベタとくっついていて、遠慮会釈のない調査助手が前にしゃがみこんでその父と息子を指さしな

がら、いま私が語ったような、「だます」という名前がついたいきさつを私に話して聞かせました。「シエクエ」おじさんは苦笑したまま横たわり、背中には「だます」くんがベタベタまとわりついていました。このように子どもに対するあまりにも慈しみぶかい態度と、私たちの常識にあるような、男にとってじつの子どもじゃないとかわいくない、あるいはもっとひどい場合には自分の子どもではないと疑った瞬間に殺してしまいたくなるなどの、私たちの社会的通念と、彼らグイの父親たちのふるまいとのあいだのギャップに、私はとても驚かされました。このような語りを煮つめていくと、ある種の三段論法のようなものが透けて見えます。第一段階は「私は妻を持っている」、第二段階は「妻はその子を生んだ」、第三段階は「ゆえに私はその子を所有している」というような論理です。そういうロジックがいろいろな彼らの婚外性関係の語りによって透けて見えるんですね。またこれは昔の事例ですが、四角関係というのがはっきりと共同的な規範のような側面をも持ちあわせていることが、ギナシエという年長男性の語りから再構成されました。ギナシエは、当時まだ初潮にも達していないツェーハという少女の所へしょっちゅう訪問していました。その時、ギナシエはもう結婚していました。このツェーハには、ツァークアという婚約者がいました。ツァークアはギナシエがしげしげと彼のフィアンセのもとを訪れるのはけしからんと腹を立てましたが、このツェーハが初潮を迎えて初潮儀礼をしてからはますますギナシエと深い仲になってしまいました。ツァークアが文句ばかり言っていると年長者達が、嗜めて言いました。「彼がもし妻を持っていなければ問題だが、彼には妻がいるんだからまったく問題ないだろう」と。「だからおまえたちはたがいに乞いあいなさい」と言ったそうです。ここでは、「三角関係は危険だけれど、四角関係ならおおいに結構ではないか」というような規範めいたものまで透けて見えます。ここからがポイントですが、だからと言ってそんなことを人間は唯々諾々と受け容れられるわけがありません。ツァークアにしてみればすでに心のなかに嫉妬が渦巻いていたことは明らかであります。その点では、私たちとなんら変わりがないのではないかと思います。ここでザークが一筋縄ではいかないもう一つの理由をお話します。これも私がつぶさに見聞してきた1987年から1998年まで12年続いた事例ですが、私がツォーテベ（|khoo≠kebe)おじさんにインタビューして、「なんでまたせっかくあんないい関係だったのにザークをやめたのか」と聞くと、ツォーテベおじさんの述懐というのが大変私を驚かせました。「彼はおれを殺しはしなかったが、けれども怒っていた。彼はおれを殺しかねなかった。彼を怖れたからおれは生きている。でもついにおれを諦めさせた」。次の文では内心の言葉が直接話法で再現されていますが、「おまえ」というのは自分自身のことです。「おまえはいつも彼を苦しめている、だから彼の妻と別れる」。彼の喩えを借りれば、彼ら2人の男は喧嘩しているカモシカのように角を突きあわせていたというんですね。だったら、そもそもなぜそんなややこしい関係を始めたのかが不思議になってきます。結論を言えば、それは彼らにとってそうした矛盾をずっと持ちこたえることが、直観的な言い方をすれば、ある種の生き

がいではないかと思います。矛盾に満ちて生きることが、彼らの感情生活を、ややセンチメンタルに言えば、豊かにしているというようなことを感じました。先ほどの話に戻りますが、婚約者をめぐって嫉妬に狂っていた男は、じつは自分のほうからライバルのギナシエを、長い棹でトビウサギを捕まえる猟に誘って一日じゅう狩りをしていたんですね。そこで10匹ぐらいのトビウサギを捕まえて日が落ちてからキャンプに帰って、その婚約者のいる小屋に3人で寝たんですね。翌日、婚約者のほうの男は立ちあがって、トビウサギがぎゅうぎゅう詰めになっている狩猟袋を抱えて、「これからこの贈り物を持っておまえのキャンプを訪問する」と言ったので、ギナシエさんは「それは結構なことだ」と言って、ここでやっと合意が成立したというわけなんですね。これが私が「身体化された心」という考えかたで理解したいと思っていることのポイントです。つまり、いくら「四角関係は素敵だ」という規範がその社会のなかに蔓延していたとしても、人間は唯々諾々とそんな規範に従って生きられるものではなくて、このトビウサギ猟のようなアナログ的なプロセスを経てだんだんとそういった生きかたに身を投じる事ができるようになるということです。言語的なロジックや言語的な命令に還元できないような身体の関わりのプロセスが重要です。端的に言うと、トビウサギ猟というのは、一方が引っ掛けて他方が深い穴を掘ってトビウサギを捕まえます。まさに2人の協力というのが身体の配置それ自体に凝縮されているんですね。そのような猟を通過することによって初めて一体化のようなものに同意できたそのプロセスが私はとても重要だと思います。

つぎに駆け足でヒヒの話しをいたします。ヒヒ類というのは、基本的にはニホンザルと同じように群れをつくりますが、マントヒヒは特別な種で、いわゆるハーレムを作ってオスがメスを所有して暮らしています。このオスがメスを所有するということは非常に興味ぶかいメガニズムによって支えられていると言われています。これはひとつの実験ですが、ガラス窓越しにオスとメスが一緒にいるシーンをライバルに見せつけます。その後、同じ部屋に入れても、さっきまでオスとメスのペアが一緒にいたのを認識していたライバルであるオスは、明らかにあっちの方向を向いたり、体をボリボリ掻いたりして絶対にその2頭に介入しようとしないんですね。ですからこのペアが一緒にいるということを一つの形状 ― ゲシュタルトとして、目で見るということが、ある種の心理的抑制を与えるというメカニズムがあるので、みんながハーレムをつくっているのに血みどろの喧嘩にはならないのではないかという仮説 ― ペアゲシュタルト抑制という仮説です。またこの話のもう一つの面白い点は、いわゆるマジックミラーで、一方のライバルオスからしか見えない状況と、両側から見える素通しのガラスとを比べると、この所有者のオスがライバルの存在を認識しているときのほうが所有者のオスは頻繁にメスを毛づくろいをします。ということは、これはじつはフランスの有名な思想家であるルネ・ジラールの「欲望の三角形」という話ととてもよく似ています。つまり、主体の欲望は直接的に対象に向かうのではなくて、第三者の欲望を媒介にして対象に向かうということです。つまり、ライバルがいるこ

とによって自分の欲望がかき立てられるという典型例であります。もうひとつマントヒヒ社会で興味ぶかい報告があります。オスどうしのあいだにとても不思議なやりとりがあり、それは、かなり遠い距離にいたオスが別のオスの所までつかつかやって来て、近づいてきたと思ったらくるっとターンをして戻るんですね。これを一番最初に観察したハンス・クマーというスイスの偉大な霊長類学者はこの行動を「告知行動」と名づけて、じつはすわっているオスのほうが年長者で、ターンをしたオスのほうが若く、年長のオスがこの自分たちの遊動する地域の環境を知り尽くしているから、これから遊動に出かける前に未経験なオスは年長者にお伺いを立てて、そこで年長者が承諾しないと諦めて、また別の方向を提案します。承諾を得ると、よしよし、とばかりに一緒に遊動に出かけます。このようなもっともらしい考えかたを提起しました。じつは私は、純粋のマントヒヒではなくて、アヌビスヒヒというニホンザルと同じような群れをつくっている黒っぽいヒヒとマントヒヒのその2種のヒヒが、雑種をつくっている地域というのを研究対象にして、その雑種ヒヒの社会構造と社会行動というかなりマニアックな論文で理学博士号を頂きました。形態的にマントヒヒにとても近いオスが所有しているハーレムですが、これはとてもマントヒヒに近い構造になっています。この雑種化というのは、マントヒヒのオスが違う種類の群れのなかに侵入してそこのオスたちの隙をついてメスと交尾することによって進行したと思われます。これと同じようにアヌビスヒヒもマントヒヒの社会のなかに侵入して胤(たね)づけをしました。そのような経緯で雑種化が進行しました。この雑種の程度はマントヒヒに近いものからアヌビスヒヒに近いものまでさまざまです。この写真でお見せするのが、雑種ヒヒ社会のなかで観察した、クマーの告知行動（notifying behavior）と同じ形のものです。私は、notifyつまり「告知」という言葉は最初からある種の偏向を含んでいるので、ニュートラルにターン行動と呼ぶことにしました。つかつかと近づいて、さらにグッと近づいて、何もせずに戻っていく。この写真であぐらをかいてすわっているのは純粋なアヌビスヒヒです。私の行動分析からわかったことは、このターン行動は休息場面では遊動方向を提案しているわけではなくて、自らの所有を誇示し、ライバルを牽制しているという行動だということです。なぜなら、行動の分析によれば、ターンを行なった後、必ず自分が所有しているメスの傍らにぴったりとくっつくという行動が見られるからです。とても面白いことに、私とまったく別の研究をしていた先ほどのハンス・クマーの弟子の霊長類学者が師匠の見解に異議を唱え、私と同じ結論に達しました。つまり、マントヒヒはそこで遊動方向の提案などしていないと主張しました。ですが、この弟子のアベグレンという学者は若くして自殺をしてしまったんですが、この人の驚くべき研究成果は、彼がマントヒヒの遊動について歩いたことからもたらされました。そこでなんと、遊動している最中は、はっきりと方向の提案をしていることを発見しました。つまり、ひとつの行動が、あるひとつの機能に特化しているわけではなくて、あるときは遊動方向の提案に使われ、別のときには、つまり、持てる者と持たざる者とが同一の空間にいるときに牽制を行なうときに

も、同じパターンの行動を使うことがわかりました。ここから、動物行動がいわゆる本能に閉ざされたものではなく、とても可塑性を帯びたものだという議論が出てきます。雑種ヒヒのなかで私はターン以外のさまざまなオスどうしの挨拶のような行動も観察しましたが、今日は時間がありませんので割愛します。純粋なアヌビスヒヒでも、じつに不完全なターンのような行動をたまにします。遺伝的にこのような行動パターンをプログラムされていないオスでも、嫉妬の身構えのようなものを不完全な形で追及していると考えられます。もう一つのポイントは、ハーレムを持つというオスどうしの緊張がとても強まる社会のほうがじつはオスどうしがいつも空間的に近接していて、頻繁に挨拶行動を発しているという事実です。これらを総合して、私は先ほどの嫉妬のシナリオを脚色して、嫉妬の行為空間モデルというものを提案します。Ｐのqに対する所有の実質は身体接触と近接だと考えることができます。そのＰとqの近接関係をＲが傍らから見守っている。ＰはＲにこの所有を見せびらかします。しかしながら、ＰとＲはけっして敵というわけではなくて、Ｒが存在することによってＰの欲望はかき立てられているし、ＰとＲは共在を続けることによってお互いを支えあっています。このような行為空間を観察したときに、その対象が人間であれ動物であれ、Ｒは嫉妬していると記述するのは、まったく正当であり、そうとしか言いようがないと思います。なぜなら、私たちの身体化された心がつねに嫉妬するという経験に行為空間の内側から触れており、行為空間のなかでそれがつねに起きていると知っているからこそ、嫉妬するという言葉を使うからです。このような行為空間があるからこそ、それが人間であれ動物であれ、嫉妬という「意味」があるということです。

これは私の思考実験です。ある飲み屋で、私の友人Ａが私の女友達とイチャイチャしていた。私はそれを見て「みっともない」と友人Ｂにボソッと言ったら友人Ｂはすかさず、「それはおまえのヤキモチだ」と言って、私は愕然とした。そういうとき、私は自分の心のなかを覗きこみます。どう考えても嫉妬なんて感情は僕の心にはない、端的にいえば私はその女友達に性欲を感じたことなどないし、などといろいろ自己弁護をします。そのときに私が正しいのか、友人Ｂが正しいのかと言うと、今日の話から察するにもちろん友人Ｂの意見が圧倒的に正しくなります。いくら「僕の心」を覗きこんで、嫉妬の感情があるとかないとか、性欲があるとかないとか言ってもそんなことは関係なく、私の感情というものは私が把握するものではなくて、行為空間に身を置いている他者が私の感情を把握するということになります。フランス語の「サンス」つまり「意味」という言葉には、「意味」と「感覚」と「方向づけ」という3つの語義があります。ですから、私が「みっともない」と言ったということは、少なくとも不快に感じていたことを意味するし、私はその友人Ａと女友達がイチャついているほうに注意を向けていたという方向づけを持っていました。その時に私の行為の内在的な意味というのはまさに嫉妬である、ということがわかります。

みなさんがなかなか受けいれてくださらないであろうこの結論を補強するために、わが国のもっとも偉大な近代小説の作家である夏

目漱石の『彼岸過迄』という小説について話します。これは自分の従妹と曖昧なつきあいかたをしていた語り手が、最近その従妹が妙に別の男と仲良くしはじめたのでとても不機嫌になっているという状況です。そのときのその従妹の女性との問答ですね。

＜「ただ、なぜ愛してもいず、細君にしようと思っていないあたしに対して･･･」彼女はここへきて急に口ごもった。不敏な僕はその後へ何が出てくるのか、まだ覚れなかった。「お前に対して」と半ば彼女を促すように問いをかけた。彼女は突然、ものを突き破ったふうに「なぜ嫉妬なさるんです。」と言いきって、前よりも劇しく泣きだした。僕はさっと血が顔にのぼるときの熱りを両方の頬に感じた。＞（仮名と漢字の使い方は、読みやすいように大幅に修正した。）

やっぱり漱石はすごいよな、と思わせるような人間把握だと思いますが、私の理屈でいうと、この語り手の男は彼女にこう言われるまで自分がしていたことがまさに嫉妬だということに全然気づいていなかったのではないかということです。まさに彼女という他者によって自分の感情を把握され、そのときにはもう彼には弁解のしようもないからこそ、血が顔にのぼるという身体反応が追いかけてくるんです。という漱石先生のフレーズを持ちだすと、私が今日お話した若干、荒唐無稽なお話もそれほどヒドくはないだろうか、と思います。

それでは時間がまいりましたので、このあたりで終わります。

渡邉主任研究員：大澤先生、菅原先生両先生ともに、本日は長時間に亘りありがとうございました。

椙山孝金センター長：本日はご多忙の中、御参集頂きまして誠にありがとうございました。社会学、人類学から心と身体についてアプローチして下さり、私自身、大変勉強になりました。椙山人間学研究センターではシンポジウムだけでなく、人間講座と題して、年4〜5回ほどの講演会を催しております。人間というものを深く探るべく研究活動等を日々積み重ねていく所存でおりますので、これを機会に今後ともご参加くだいますよう重ねてお願い致します。

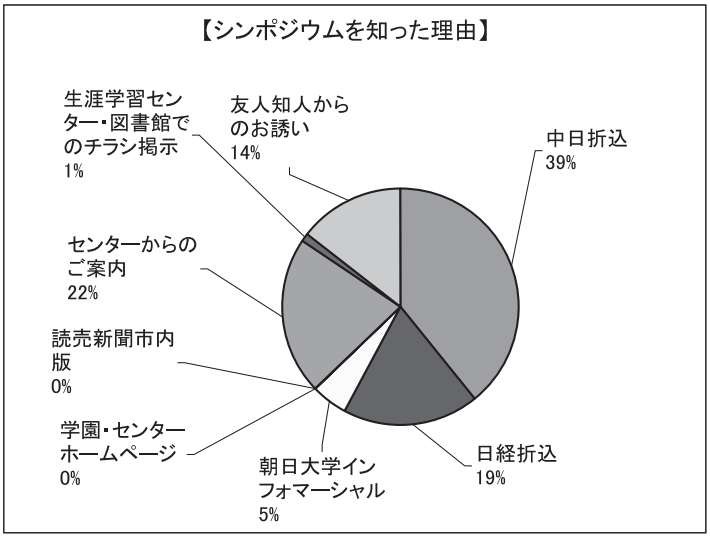
＊テープ起こし文責　大浦
＊大澤先生・菅原先生にはご校正と本年誌への掲載をご了承いただきました。心より感謝申し上げます。

椙山人間学研究センター第三回シンポジウム　アンケート集計結果

＊受講者数：151名　アンケート回答者数：97名（回答率64.6%）
＊事前申込：281名／当日申込：2名／受講者：151名（参加率53.3%）

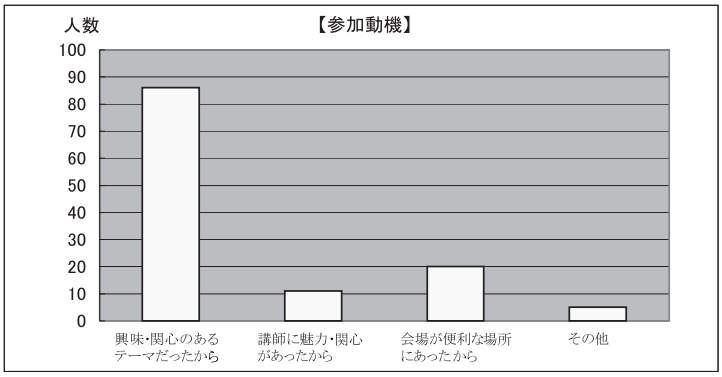
Q1. 今回のシンポジウムは何でお知りになりましたか?

1. 中日新聞の折込チラシ	38名	39%
2. 日本経済新聞の折込チラシ	18名	19%
3. 新聞広告（朝日・大学インフォマーシャル）	5名	5%
4. 新聞広告（読売・市内版）	0名	0%
5. 学園・センターのホームページ	0名	0%
6. 椙山人間学研究センターからのご案内	21名	22%
7. 生涯学習センター・図書館の掲示	1名	1%
8. 友人知人からのお誘い	14名	14%
9. その他	0名	0%



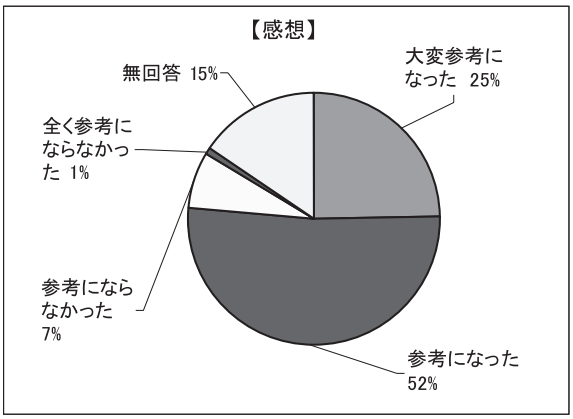
Q2. 今回のシンポジウムへの参加動機は何ですか?（複数回答可）

1. 興味・関心のあるテーマだったから	86名
2. 講師に魅力・関心があったから	11名
3. 会場が便利な場所にあったから	20名
4. その他	5名

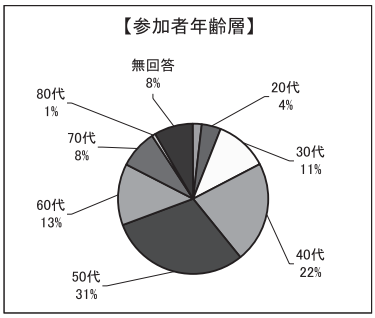


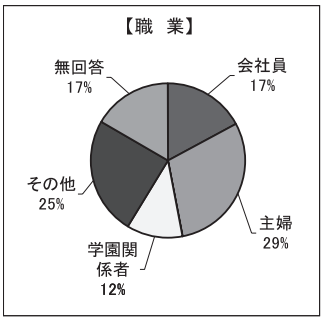
Q3. 今回のシンポジウムは参考になりましたか?

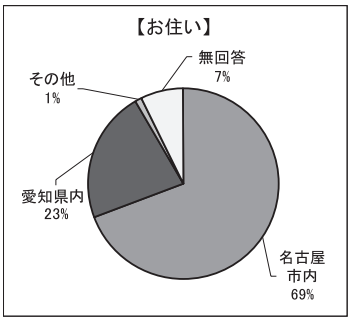
1. 大変参考になった	24名	25%
2. 参考になった	50名	52%
3. 参考にならなかった	7名	7%
4. 全く参考にならなかった	1名	1%
5. 無回答	15名	15%



【その他参考データ】







NO.	職業	年齢	性別	ご意見・ご要望
1	教員	50	男	大変興味深く面白く聞くことができました。
2	主婦	50	女	基調講演をおひとりずつ時間をかけてじっくりと聴かせて頂ければ良かったなと思います。両先生とも時間を気にされてお話していたのがとてももったいないと思いました。
3	主婦	50	女	一日だけ女子大生に戻り、講義を聴く機会が持ててありがたく思いました。
4	主婦	50	女	人間理解に関連する分野の講演はどれも興味があり、有意義な一日が過ごせました。
5	主婦	50	女	日頃の生活では考えもつかなった観点を示して頂き、とてもワクワクしました。
6	主婦	40	女	プロジェクターの音が大きくて講演内容が聞き取りにくかったです。
7	会社員	40	男	現実生活に役立つような認知心理学・行動心理学についての講座開講を希望します。
8	主婦	30	女	初めてこのようなシンポジウムに参加しましたが、とても身になり、楽しめました。心理学にとても興味があります。
9	主婦	40	女	不安と迷いの毎日の人生に前向きな大きなヒントをいただきました。
10	会社員	30	男	私が以前読んだ本に、人間のDNAにはサルの時代の経験や過去の出来事が記録されており、今、私たちがこうどうしているのは、そのDNAと自分の経験、そして今、今見ている現象のマッチングであるそうです。それを前提に、いかに「生きるか」を今後もこのような会を活用しつつ考えていきたいと思います。
11	無職	70	男	質疑応答の時間をもっと長くしてほしい。
12	会社員	30	男	大事な事は生きるという事と生かされているという事だと実感しました。
13	主婦	50	女	最初は話が難しく感じましたが、一番生活に密接した内容だったように感じ、参考になりました。
14	会社員	40	男	講義内容が難解で分かりづらかったが、質疑応答を経て少し理解できたように思う。
15	会社員	40	男	講義終了ごとに質疑応答の時間を設けて欲しかった。2つの基調講演について一緒に語るのは専門家でなければ難しいと思う。
16	会社員	40	男	心理学的アプローチをしたテーマのシンポジウムを開いて欲しい。
17	会社員	60	男	両先生とも大変興味ある講義で勉強になりました。
18	会社員	50	男	大学関係者以外で人間関係に携わる仕事をしている人の話も聞いてみたいと思いました。

NO.	職業	年齢	性別	ご意見・ご要望
19	主婦	40	女	時間的な制限があり、とても残念です。おひとりの先生でテーマを深く設定するほうがいいのかなと思いました。
20	会社員	50	男	日常生活ではあまり感じないテーマなので、もっと身近なテーマでの講義を開催して欲しい。
21	主婦	40	女	個人的に関心があるのはうつ病についてです。「うつ病患者を支える家族をどう支えるか」に興味あります。患者ではなく、その家族をどうのように周りは救う事ができるのか、お話を聞いてみたいです。
22	主婦	60	女	難しい話でしたが、考え方に幅ができたように思います。
23	主婦	40	女	言葉が難しくて理解するのが大変でした。一般の人間にも分かるような言葉で噛み砕いてお話いただけたら、さらに理解が深まったように感じます。
24	主婦	40	女	ファミリー・バイオレンス（虐待連鎖）に大変興味があります。
25	主婦	40	女	両先生も情熱を込めて講演して下さり、身体と心の連鎖について考えを示して下さった事で日常生活に忙殺されがちな私の思考回路を立て直す事ができたと思います。
26	主婦	40	女	この内容でしたら1時間半から2時間は時間を頂きたいと思いました。
27	学園関係者	20	女	教育と人間に関するテーマを希望します。
28	主婦	50	女	「安心できる食品」「安心して暮らせる環境」など実生活に即、関連するテーマを希望します。
29	教員	50	女	それぞれの先生のお話をゆっくり2時間くらいで聴きたかったです。面白く聴かせて頂きました。
30	会社員	50	男	新しい視点を得たような新鮮な気分になりました。
31	会社員	50	男	おふたりの先生共に、独自の視点の切り口での研究がとても新鮮でした。現象学・言語論・記号論などのテーマでのシンポジウムを期待します。
32	無職	70	男	難解な部分もありましたが、興味深く聞くことができました。
33	主婦	70	女	迎えつつある超高齢化社会にむけて認知症など含めた老年心理学についてのお話を聞いてみたいです。
34	主婦	30	女	両先生の講演はそれぞれ分かりやすく説明して下さり、興味をもった点があったので今後の勉強に繋げていきたいです。
35	主婦	30	女	講演自体はとても難しいものでしたが、このような空間の中で学べた事がとても貴重に感じました。

進化総合説（ネオ・ダーウィニズム）への疑問Ⅰ
―人間の形質はどう決まるのか―

椙山人間学研究センター主任研究員
椙山女学園大学人間関係学部
渡邉　毅
Tsuyoshi Watanabe

はじめに

古い話になるが、大学入試において理科2科目を物理学と化学で受験したわたしは、生物学を高校1年生で履習しただけで理学部の学生となったのだ。

本格的に生物学の勉強に取り組んだのは、動物学科に分属した3回生からだった。学部時代の専門科目で好奇心をそそられたのは、以下の科目・担当者だった。人類学（今西錦司）、霊長類学（伊谷純一郎）、形質人類学（池田次郎）、進化学（徳田御稔）、動物発生学（市川衛）など。人類学や霊長類学は、大学院以来今日までのわたしの専門領域となった学問だが、今西以外については本小論ではふれないでおく。

徳田御稔助教授は、駒井卓、中村健児と受け継がれた動物学科第Ⅰ講座（系統・形態・生理）の所属だった。ちなみに、第Ⅱ講座は生態学で川村多実二を継いだ宮地伝三郎教授のもと、多くの院生をかかえていた。第Ⅲ講座は発生学で、市川衛教授と岡田節人助教授の体制だった。1960年代の理系拡大の国策のなかで、放射線生物学講座と自然人類学講座が増設され、5講座学生定員10名の学科が動物学科だった。

徳田が開講していた「進化学」は、当時全国の大学カリキュラムのなかで唯一の科目だった。今日でも「進化学」という科目はさほど一般的ではないと思うが、京大の動物学科には人類進化論講座が増設されているし、進化生物学・行動進化学・進化心理学などが興隆してきている。1960年代までの時代背景として、理系の学問は自然科学的でなければ評価されないという雰囲気が濃厚だった。数学的表現を使うのが、もっとも高尚な学問とみなされていた。進化学は、自然科学から排除されていたのだ。

徳田は、生態学で議論されていた＜生活形＞という概念を重要視し、ダーウィンが「自然の経済」（エコノミーからエコロジーへ）に言及していることを高く評価していた。そして、ダーウィンの「自然の経済」という思想をもっとも忠実に受け継ぎ、実践に結びつけているのがルイセンコ、ミチューリンに指導されたソ連生物学だと判断していた。『二つの遺伝学』のなかで、ルイセンコ、ミチューリンへの賛歌をかなでたことが、ルイセンコ失脚の後での厳しい徳田批判となり、学科内でも苦しい立場に追い込まれ、定年まで助教授のままであった。現在からふりかえれば、徳田は＜発生システム論的見解＞に立って議論しようとしていた、とも理解できなくもないが、1960年代に激流となりつつあったセントラル・ドグマの渦に呑み込まれてしまった。

わたしは、徳田の集団遺伝学（ネオ･ダーウィニズム）批判に馴染み、ワイズマン（ネオ･ダーウィニズムの命名者）の実験の無意味さと＜生殖質連続説＞の立論の根拠のなさを知った。ここにネオ･ダーウィニズム（後に進化総合説：正統派進化論と位置づけられた）に対する、わたしの違和感の出発点がある。

今西錦司

今西が動物学科の教授（人文研との兼任）であった期間は、実質1963～1964年度の2年間であった。わたしの3～4回生次に相当する。大学院への進学が内定した4回生後期からは、自然人類学講座ゼミ（今西ゼミ）に参加させてもらった。わたしが最年少の学生だった。したがって、わたしは今西錦司最後の弟子だと自称している。

1964年の秋だったと記憶しているが、今西はゼミ参加者全員に論文別刷を配布した。『人文学報』20巻（1964）の巻頭論文、「進化の理論について―正統的進化論に対する疑義」だった。赤線を引きながら読んだ後の第一印象は違和感だった。そこで展開されていた＜多発突然変異＞という概念に違和感をもったのだ。今西は先輩の木原均や弟子の中尾佐助の影響を強く受けていた。遺伝学で確信的に主張されていた、表現形（フェノタイプ）の変化は因子形（ゲノタイプ）の変化に起因する、との原則を認めていたのだ。これは、ゲノタイプの変化を突然変異と呼び、突然変異の結果としての表現形の変化が自然選択にかかれば進化が起きる、とする正統派の原則に立っているものだ。

わたしの違和感は、突然変異を原則としいてた点にあった。それ以外を認めないのであれば、ラマルクの用不用説や獲得形質の遺伝も認めないことになる。徳田の影響下にあった4回生のわたしには、用不用説が魅力的であり、説得力をもっていた。

今西が上記論文で攻撃目標としたのは、（1）突然変異はランダムに生起する、（2）自然選択は個体レベルで作用する、との2点に対してであった。これらについてはまったく異論はなかった。表現形に変化をもたらすような突然変異がランダムに生起しているはずがない。学生時代から、これはわたしの直観的信念となっている。

自然選択が個体レベルで作用する場合は皆無ではない。変りものとして集団から排除されるような場合だ。自然選択は集団の均質性を保つために作用する。したがって進化とは無関係な概念となる。「誰かが生き延び、誰かが食われて死ぬかは、まったくの運・不運の結果だ」、というのが今西の口ぐせであった。種個体は均質である、という今西の信念は、誤解され易い。とくに人間の場合、「自分は自分、自分は他人と違う」との確信のもとで生きている。他者との違いが人間の自尊心をもたらしているのだ。

京都弁で「同じやないけ」と「ちゃうやないけ」をわたしたちはよく使う。どちらに重心を置いているかは、個人のくせが作用している（大雑把な性格と几帳面な性格）のと同時に、モノの見方、対象のレベルも関係している。今西はよく、大縮尺で見るか小縮尺で見るかを例に、対象のレベルで同じだったり違っていたりを説明していた。種（種社会）というレベルで見れば、人間個人は皆同じと断言できる（ただし、ここには性の問題が議

論の余地を残している）。

今西が「種は変わるべくして変わる」「種個体は甲乙なく、変わるときは一斉に変わる」と表現するとき、必ずしもある時間断面で存在する種全体が変化することを想定しているわけではない。＜すみ分けの密度化＞という概念は、ワーグナーの隔離説を援用し、時間軸と空間軸に沿って種の一部が別種に進化するというものだ。ただし、この場合もけっして個体レベルでの変異と自然選択の作用で進化が生起するわけではない。

上記2点を批判した上で、今西は＜多発突然変異説＞を提起したのだった。種レベルで変化が生ずるのであれば、ダーウィンの考えもラマルクの考えも妥結点が見出せるはずだと論文は結ばれている。

晩年の今西は、遺伝学（突然変異説）からも解放され、『主体性の進化論』や『わたしの進化論』を発表した。今西は、西田幾多郎を愛読し、影響を受けていた。強情な今西は、他人の影響を認めず、あくまで自説はオリジナルであることを強調したが、ある研究会の席上、上山春平（哲学者、元京大教授）からテキスト分析による類似をつきつけられ、にが笑いで、「昔のことは憶えていまへんなぁー」と応じた時の顔を忘れることができない。しかし、今西は西田哲学を紹介したのではない。＜主体の環境化＞＜環境の主体化＞という概念は今西生物学の血肉となっているのだ。

追記

ゲノム人間論研究会で発表した内容を書き残そうと取り組んだところ、本格的な考察をしなければならないと感じ、今回の小論を発端に、次号に続きをまわすことにした。著者の怠惰と我儘をお許し願いたい。

人間とはどういう存在か
― 身体の内に書くこと ―

椙山女学園大学人間関係学部
三井　悦子
Etsuko　Mii

まぐろとジャガイモのトマトスープが格別に美味しいところ、ワインはもちろん言うまでもなし、皆、水のごとくにいただく。突然の暴風雨で、たちまちねずみ色になる長閑かな村、そして小一時間の嵐のあと群青の空に姿を表すチンドキー山、そこには守り神が住むという。ふもとのクラブハウスで友人が腕をふるってくれたしし唐の緑の鮮やかだったこと、ライスミルクの白さとほの甘さ。別れのハグの力強さはどうもありがとうと絶対にまた会おうねのしるし。あれこれがからだいっぱいによみがえってくる。

そこはバスク・ラスカオ村。フランスとスペインの国境、ピレネーのふもとに住むヨーロッパ最古の民族と言われるバスク人の住む地域である。スペイン領バスク州３県（アラバ、ビスカヤ、ギプスコア）とナバラ州、そしてフランス領バスク州をあわせて「バスク」と呼ばれる。一方「バスク人」の定義は、地域や血筋や言語等による客観的定義というよりも、個人の意識等による主観的定義によるものであるらしい。もし私がその地を愛し、かたことのバスク語をつなぎ合わせてそこに暮らせば、「日本出身のバスク人」としてバスク社会に受け入れられるという。「バスク人」とはもともと「バスク語を話す人たち」と同義であった。しかしフランコ独裁政権の弾圧によって、バスク語の使用は禁止され、その定義は意味を成さなくなった。当時はカーニバルやダンスなどバスクの伝統文化がことごとく禁じられた。以来、フランコ政権下、長い苦渋の時代を歩むことを余儀なくされたバスクの人たち。しかし、「日本出身のバスク人」を受け入れるゆるやかな社会、しっかりとした共同体、ひらかれた人間関係が、今でもたしかにここにはある。たった10日間の滞在であったが、それを実感する場面に何度も遭遇した。

昨秋、バスク・アラバ県ビトリア市で開催された第1回日本・バスク国際セミナー（メインテーマ：「聖と俗」東洋と西洋の儀礼、遊び、スポーツ）に参加した。またこのほかにサン・セバスティアン（ギプスコア県都）、ビルバオ（ビスカヤ県都）、ゲルニカ（ビスカヤ県）、アライオス（ナバラ県）などを訪問し、バスク各地のスポーツ文化に接した。

ナバラ県はドイツ・シュバルツバルトに次ぐヨーロッパ第2の森林地帯、ブナと樫の深い森がある。森の生活と深い関係を持つ「丸太切り」をはじめ、バスクの人たちはペロタ、レガッタ、ダンス、石かつぎ、4ピンボーリングなど独特のスポーツを楽しんでいる。バスクに固有のこれらのスポーツ、いわゆる

「民族スポーツ」を知ること、そしてそれらを享受する人間、その身体は、21世紀日本を生きるわれわれのそれと、どこが同じでどこが違うのか、そんなことを考えるのがセミナーに次ぐ、あるいはそれにまさる大きな目当てであった。

というわけで、セミナーの前後、バスクのスポーツを追いかけてスペイン・バスクを西へ東へと移動した。途中、ゲルニカに寄る。ドレスデーン・広島・長崎と続く悲劇の幕開け、スペイン内乱における爆撃（1937.4）によって全滅した町。今は、市役所前の広場で子どもたちがキックボードを漕いでいる。バスケットボールのシュートを競う親子、その横でおしゃべりに花を咲かせる人たち。

そんなゲルニカを過ぎてまもなくの港町ベルメオ。今日はここの祭りの人気イベントのひとつ、ペロタ・マノを見る。大勢がビール瓶を片手に会場に集まってきている。胴元（？）が階段状の観客席前を行ったり来たりしながら、低い声で「ないか、ないか（そういう意味に違いない！）」と賭けに誘っている。タバコの煙がすごい。30年近く前の北京を思い出した。京劇を見に劇場に入ったときのロビーがこうだった。気晴らし。昼間の労働から解き放たれた開放感、ひとときの身近な娯楽。人々の熱気。このペロタ場も北京の劇場も、そこにはまさにスポーツの原義 deportare (carry away) がある。さて、いよいよペロタのゲームがはじまりそうだ。

今日のゲームは、マノといわれるペロタの一種のダブルス戦で21点先取のゲーム。マノとは手のひらを意味する。ラケットを使わず、手のひらで直接、硬いボールを打つ。ネットをはさまないスカッシュのような競技で、正面の壁に硬いボールを打ち付けてワンバウンド以内でボールを打ち返すゲーム。テニスの原型と考えられている。コートの広さはバスケットボールのコートと同じくらい。正面の壁と直角に接するサイドの壁の角を狙って打ったり、ボールを打ち付ける角度を鋭角にして、相手が打ちにくくするテクニックも見所だが、なにより、硬いボールを素手で打つ荒々しさや勇敢さがこのゲームの魅力である。観客はこれをよく知っていて、後衛のプレイヤーが20メートルもあろうかという距離を、気合もろとも腕を振り切ってボールを打ち飛ばすと、やんやの喝采が会場にこだまするのである。

その夜のゲームは白熱していた。どちらのチームにもランキングトップクラスのプレイヤーがいるベストマッチで、息をのむラリーの応酬、それもギリギリの全力の攻防が続く。しかも21対21にまでもつれ込むほどのシーソーゲーム、興奮は頂点に達していく。一球一球に観客がどよめく。わたしも気づかぬうちに「うっわぁー」「すっごーい」と、お尻を浮かせて叫んでいた。これまで、マノのことを文字で知っていたり映像で見たことはあったが、目の前でじかに見るのは今回がはじめて。石の壁にボールが当たる音、飛び散る汗、プレイヤーがウッと息を詰めて打ち返す緊迫感、壁に手をあてて痛みに耐えている横顔、息づかい、身体から上がる湯気、観客の歓声、どよめき、賭けの呼び声、タバコの煙。これらみんながそろってバスクのペロタ・マノなのだ。これまで私が知っていたのはマノについての「説明」にすぎなかった。それを知識として知っていただけで、今回ここでこうして実際に「ペロタ」を見、その音を聞き、

じかに接してみてはじめて「ペロタ」を感じたと言うべきか。また実際に自分の手のひらでボールを打ってみて、このペロタ・マノというスポーツのすごさを実感した。「記述すること、描写すること、外に書くこと、すなわちディスクライブ（de-scribe）することが、これまでアカデミズムの対象であり方法だったのだが、そうではなく、刻みつけること、内に書くこと、すなわちインスクライブ（in-scribe）こそが重要なのである」とは、今福龍太氏があるシンポジウムで参与観察を批判的に説明するときに提示したことがらである。（…だから、数日間の滞在でこうした文を書くこと自体、氏の批判の対象そのものである。が、その批判を覚悟で言うならば…）ペロタ・マノを、バスクスポーツを、いや、すべて何かを知ることとは、インスクライブされることをいうのではないか。自分の身体の内に刻まれるものなしに「知る」ことなど意味がない。厳密な意味では、自分の身体のうちに刻まれることなしに「知る」ことはあり得ない。そして、「じか」な体験を通してはじめて、そのインスクライブはなされるのである。

それにしてもこのゲームはすごい、面白い、ドキドキする。こんなにシンプルで、こんなに激しいスポーツはほかに見当たらない。わたしの後ろでは大勢の小学生がさかんに声援を送っていた。マノの選手はバスクの子どもたちの憧れ。彼らは子どもたちのヒーローである。

ところで、ナバラ県の小高い丘の上にザビエルの母の家が建っている。いうまでもないが、このザビエルとは、あのイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier）である。バスク語ではシャビエルと呼ばれる。1506年、ナバラ王国のシャビエル城に生れたフランシスコ・シャビエルは、19才でパリ・ソルボンヌ大学に学び、そこでイグナティウス・デ・ロヨラと出会う。ロヨラもまたバスク人であった。1540年、彼らと共にイエズス会を創設。シャビエルは、1549年、日本にキリスト教伝道、その後、中国への布教を目指して移動の途中、病死した。そして彼の遺言により、その右手だけが、ローマのジェズ教会に送り届けられたのである。シャビエルの右手は現在もなお、教会内に安置され、一般に公開されてもいる。何年か前、ジェズ教会を訪問した際、なぜ右手だけ届けられたのか、とそこの修道士に質問してみた。全身では大きすぎて持って帰れなかったから、ではなぜ左手ではないのか、頭部ではないのか、いやわからない、とのやり取りをしたことがあった。この件に関しては、彼はペロタの名手であった、ペロタ・マノで鍛えたザビエルの肉体、特にその右手は彼のバスク人としての誇りがこめられている、だから、そのバスク人の誇りをイエズス会の総本部に送り届けたのだ、という稲垣正浩氏の論考（聖フランシスコ・ザビエルの「右手」、『スポーツの後近代』三省堂1995所収）がある。マノの白熱したゲームをじかに見れば、その仮説が非常に説得力のあるものとなる。マノの選手たちのあの右の手のひらは尋常ではない。

さて、今回、日本・バスク国際セミナーでのプレゼンテーションとワークショップを通して、私は「じか」ということをキーワードにした。そして、ヘーゲルの「絶対知」に対して、バタイユが提示したものが「非‐知」

であったように、意識によって制御可能な身体とは別の、科学的な知を越えて存在する「もうひとつの身体」をテーマにし、個と関係性の問題について取り上げた。それは人間や社会の成熟や豊かさにとって、「独立した自己」をどこまでも追及することが重要なのか、それとも「つながる」ことが重要なのか、という問いかけでもある。ワークショップでは、バスクの人たちとともに「からだの流れを感じる」セッションを行った。人体解剖から始まる西洋近代医学は、身体を区分しうるもの、「分ける」からこそ「分かる」もの、とした。その伝統の中に住むヨーロッパの人々にとって、身体は固体ではない、身体内部はつながり、流れている、ということはどのように理解され、実感され得るのか。身体は部分の集合体である、とか、身体は意識によって動かしうる、と信じてやまない彼らにとって、身体の動きにまかせ、からだで起っていることやからだそのものを味わう、という体験はセンセーショナルな出来事であったようである。しかしワークショップが進むうちに、安らいだ顔ですやすやと眠りについてしまった参加者がいたことだけはここに記しておこう。

人間とはこうした身体的存在である。そのことをどこまで理解しあえるだろうか。人間という存在について彼らはどのように考えているのだろうか。異文化理解、その言葉は美しいが実際には不可能に近いくらい難しいことだと思う。だが、「文化の違いという壁を越える」などというのではなく、「違っている」（すなわち「他」と「自」）がつながり合い通じ合えるという関係性が人間にはあると思う。いまここで検証のしようはないけれど、実感として、つまりインスクライブされたものから、そう確信するのである。

それにしても、記憶を形成するものとは、なぜこんなに五感に基づくものばかりなのだろう。私が、バスク、という言葉を聞いて、今思い出すのは、真っ先にリオハのワインや群青の空にそびえるチンドキー山、そしてそれらを私に味わわせてくれた友人のあたたかさ。記憶が感覚によって形成されることは、何も取り上げていうまでもない当然すぎることである。しかし、この感覚器のもつ力というものを、われわれはふだん気づかないでいる。理性や分析や判断の以前に、人間を動かす力はそこにあるはずなのに。

じかにふれた感覚を通して身体の内に書かれたものこそが、人間にとってかけがえのないものである。

腰の作法：武家礼法は腰をどのように扱ってきたか

椙山女学園大学人間関係学部
山根　一郎
Ichiro　Yamane

1. 腰の重要性

腰（腰椎）は、身体の重心部に位置し、直立二足歩行をする人間にとっては、上半身と下半身の接点となる力学的に重要なポイントである。とりわけ日本では、「臍下丹田に力を入れる」など腰は力や動きの中心点として、伝統的格闘技ばかりか西洋から輸入したスポーツにおいても、その重要性が強調されてきた。伝統的舞踊でも足を軽やかに上げるような動作はせず、腰を低くしてすり足気味で舞う（バリ島などの舞踊と共通）。ならば、日常動作においても腰の扱いは重要なはずである。日本人は腰をどのように扱ってきたのか。

2. 礼法所作の概観

そこで、弓馬の武術を起源とし、平時のあらゆる動作の理想を追求した武家礼法では腰をどのように扱っているのかを、現代に伝わっている小笠原流礼法を参考に探ることにする。

2.1. 立位

和式立位は、完全な直立位ではなく、股関節と膝を軽く曲げて（というより意識的な伸展をしない）やや腰を落した姿勢となる。上体についても、洋式の立位（軍隊的気をつけ姿勢）のような腰椎の前弯を強めて胸を反らす姿勢にはならない。

股関節と膝関節が伸展しないこの立位姿勢は、ホモ・サピエンス的な直立姿勢からは進化的に逆行した姿であるが、下半身のラインが出ない和服においては自然な直立に見えるため、審美的には問題ない。むしろ、腰椎の過度の前弯がない分、腰から上の上体はこちらの方が真の直立に近く（上体のバランスが最適）、その分、腰椎・背筋の負荷が少ない楽な姿勢となる。さらに関節を伸ばしきっていないため、（和式）歩行運動への移行がスムースとなる（歩き出し直前の姿勢となっている）。このように和式立位は、腰の緊張を解いた、腰に負荷のかからない姿勢である。

2.2. 移行動作

立位と坐位の間を移行する動作で、坐位が正坐（端坐）である場合、移行動作には必ず「跪坐」が経由される。跪坐とは、正坐から両足を尻の下に立てて両膝が地についた蹲踞姿勢で、股関節から下の膝・足首・中足骨の関節を屈曲させた

図1　跪坐姿勢

しゃがみ姿勢である（図１）。立位-跪坐間・坐位-跪坐間のいずれも、上体は「胴造り」という和式（≠軍隊式）の“気をつけ”姿勢のまま固定しており、股関節より下のみを動かす。すなわちここにおいても腰はまったく使われない。

跪坐から立位になるには、まず片足を前に出す。それによって接地点間を結ぶ基底面を拡大させて、重心の前後の動揺に備える（重心からの垂線が基底面内に留まることが倒れない条件である）。片膝が接地して他の膝が浮いているこの姿勢を「片膝」と名づけておく。そしてこの片膝姿勢から、そのまま下肢の各関節を同時に伸展させ（意識では「体を浮かせる」）て立位に達する。

立位から跪坐になる場合は、はやり片足を半歩ほど後方に出してまず基底面を拡大し、下肢の各関節を同時に屈曲させて（意識では「体を沈める」）片膝姿勢になり、もう片方の浮いた膝も地に着けることで跪坐に達する（跪坐から、尻の下に立てた足を片方ずつ寝かして正坐にする）。したがって移行動作中のいずれにおいても腰はまったく使われない。

2.3. 歩行

歩行動作は、前稿（山根、2007）で解説したように、（武家礼法以外の歩行を含む）和式歩行では、洋式歩行と異なり、骨盤の旋回をせず（よって腕も振られず）、股関節から下のみを使ういわば省エネルギーの下半身運動である。腰を含む股関節から上（上肢も）は進行面に正対して固定されている。

2.4. 方向転換

坐位での方向転換で、正坐のままでの方法には日常化しているものが幾通りもあるが、礼法としてあえて教育されるのは「廻り膝」という、片膝状態での廻転動作である（360度未満の円弧運動を「廻転」とする）。この動作のポイントは、左右の浮いた膝と接地した膝とを入れ替えるという膝の上下動のみが意識され、「廻る」という動作が意識されない点である。逆に腰を捻って廻転させる意識を伴うと、遠心力が生じて上体のバランスがくずれ、廻転に失敗する（この廻り膝で180度回転もできる）。

図2　ひらく所作

立位での90度の方向転換も、体軸を中心とした廻転動作になるが、武家礼法では、廻り膝と異なり、接地面を軸にした摩擦的廻転は一切使わず、股関節の外旋を使った「ひらく」という１動作の足捌（さば）き（踏み替え）で成し遂げる（図２）。このひらく動作は、武術的に言えば、正対から半身になる体捌きであり、武術の基本所作と共通している（歩幅が異なる）。すなわち武士にとっては方向転換動作そのものが体捌きであり、方向転換した時、必ず身構えているのである。この動作の習得で、腰を捻って上半身だけを振り返るような無防備な動作は駆逐される。

歩行中での旋回（右折、左折）には、股関節の内旋を使った「かける」という動作を用いる。かける動作は、所作の禁忌ともいえる内股姿勢を一瞬実現するため、静止してはならない（静止してよい外股姿勢の「ひらく」とこの点で異なる）。また歩行中のUターンにおいても、「かける」と「ひらく」を連続させて90度＋90度の180度廻転を、足の摩擦

廻転も腰のひねりもまったく使わずに成し遂げる。

このひらく足捌きを用いれば、剣術で上段に構えて、振り降ろす時に真横や真後ろの相手に一瞬で向き直って打つ事ができる。

2.5. 拝礼

拝礼（狭義の礼、お辞儀）という所作の意味を確認してみる。拝礼という所作の目的は、相手よりも頭を下げる（相手にあえて頭部を差し出して無防備をさらす）ことにある。このような恭順を意味する低頭の所作は、日本だけでなく人類に普遍的に行なわれている。

もちろん武家礼法でも同じ意味をもっている。ただし頭部直下の頚椎のみを使って頭部を下げると、頚椎の可動域内に制限されるため、動作が小さくなり、礼が浅いままとなり、恭順・表敬を表現しにくい（頚椎のみを動かす「首礼」は上位者の答礼動作である）。

頭を下げる距離（角度）を大きくするには、前傾軸できるだけ身体下部にもっていけばよい。軸から頭までの長さを伸ばすことで、同じ角度でも、鉛直状態から始まる廻転弧を大きくすることができる。すると軸は胸椎、腰椎と下がり、股関節に達する。武家（＋公家）礼法では拝礼は股関節を軸にする。そして、頭を下げる所作は、股関節の前傾軸のみが動いて、それより上部はただ受動的に前傾されるだけで実現する（図３）。この動作を「屈体」という（ラマ教などで行なわれる礼拝の所作である「五体投地」は、この理屈で言えば、身体最下部の接地面が回転軸となる最長・最深の屈体を意味する）。

図3　坐礼（拓手礼）の所作

すなわち、拝礼においては、股関節以外の関節は、腰椎も頚椎も動かない。そうすることによって、上半身が美しく伸びたまま頭を下げる姿勢を実現することができる。

拝礼の屈体において、腰ではなく股関節を使うことは、西洋においても美しいと評価された。たとえば16世紀に作法書を書いたエラスムスは、いわゆる「コーテシー」という形の拝礼について、次のように評価している。「女性のお辞儀と同様に身体を真直ぐにしたままで、最初に右の膝を曲げ、それからすぐに左の膝を曲げてお辞儀をする人々がおります。これはイギリス人の若者の間で評価の高いお辞儀です」。

2.6. 他の動作

以上の基本動作が他の日常動作に応用される。たとえば床上にある物を手で拾う動作は、まず手を伸ばし、次いで腰椎を軸に上体を屈する（てこの原理で腰に負荷が集中する）のではなく、上体を立てたまま、片膝姿勢になってから手を下に伸ばして拾う。荷を抱え持つ場合も、片膝姿勢にして、上体を立てたままで腕を荷に回して抱え、下肢の力だけで持ち上げる。手前下方に触れるなど、上体だけを前傾する場合でも、腰椎ではなく股関節を軸にする（その際、重心のバランスをとるため、片足をやや前に出して基底面を拡げる）。

2.7. 腰板

袴（股がついている馬乗り袴）とは、武家が対人場面で身につけるもので、刀とともに武士であることの記号となっている。袴は着物（長着）に比して股関節の運動（回転）域

を広げる効果がある（ただし袴の裾が足捌きの邪魔になるので、戦時には股立を上げる）。その袴には背面に「腰板」がついている。腰板は、腰椎を後方へ押しやる動きへの抵抗・防御装置として存在している。それによって、上体全体が後弯することが防がれ、「胴造り」を維持できる。この意味でも、袴は武家礼法を実現するのに必要な服装なのである。

3. 不動点としての腰

以上、通覧してきたように、武家礼法ではいかなる所作においても腰（腰椎）をまったく動かさないことが示された。それは偶然の結果ではなく、意識的に腰を使わない所作を追求してきたためである。

小笠原分家の赤沢家に伝わる『体用論』には、「中は腰也。腰は中央にして不動の地也。」とあり、腰は動いてはいけないのである。解説の小笠原清信氏によればそれは腰の重要性と脆弱性によるという。

確かに、激しい動作能力を求められた武士においては、腰の脆弱性は、自身の弱点そのものである。平時に戦場の緊張感を反映させると同時に、平時においては「安全の原則」を作法の第一義においた（戦場で死ぬべき武士は、平時に不注意で体を損傷してはならない）武家礼法であるからこそ、身体の中心にありながら脆弱な腰を完全に保護することにしたのであろう。

注意したのは腰だけではない。武家礼法の所作は、儀礼を除いて、関節を伸ばしきるということを避けている。手足の関節を弛めておくことは、次の動作へ移る準備姿勢であり、武術の「構え」に相当する。関節を伸ばしきるのは、身体を限界まで使った時であり、それは武士にとっては戦時での攻撃動作を意味する。その動作は自己の力を出しきった空間的な限界であり、同時に隙が生じている瞬間である。戦時には自己の力を出し切るためにそういう瞬間を招くことも止むを得ないが、平時においては自己の限界を出す必要がないゆえにこそ、隙（すき）を出して、粗相（歩行での躓き・滑り、不慮の事故、犯罪被害）を招いてはならない。そのような心得を動作として実現するのが武家礼法である。

平時の武芸（小笠原家では「糾法」という）としての武家礼法の本質は、「構え」という待機姿勢の常なる維持であり、これは戦時に対する平時の在り方そのものを意味している。

このような平時の非戦闘的武芸である武家礼法なら、戦時を目的としない現代人にもそのまま適用して問題ないはずである。

腰を保護することは、そこへの力学的負荷を他の部位とりわけ股関節を中心とした下肢が受け持つことになり、下肢の筋力と柔軟性が要求される。ただし、それらの部位は腰椎と違って鍛えることができる。といっても数百キロの街道を徒歩で旅した昔の人にとっては、特別な鍛練など必要なかったであろうが。逆にみれば、下肢の鍛練が不足気味の現代人は、腰を必要以上に使ってしまう可能性があり、腰の脆弱性が露わになりやすいのかもしれない。

註：本稿で紹介した動作は、本学人間関係学部および文化情報学部の授業用テキストである『小笠原流日常動作法』（山根、2003）で具体的に説明されている。

4. 文献

エラスムス（中城進訳）1994『エラスムス
教育論』　二瓶社
小笠原清信編1975『小笠原家弓法書』
講談社
山根一郎　2003『小笠原流日常動作法』
三恵社
山根一郎　2007「日本人の歩き方」椙山人
間学研究2　47-51

「女性論」プロジェクト研究報告

A Report of the Women's Studies Project

学校段階別にみたライフスタイルの将来展望
―女子学園の実態調査をもとに―

椙山女学園大学現代マネジメント学部教授
東　珠実
Tamami Azuma
椙山女学園中学校・高等学校教頭
太田　ふみ子
Fumiko Ohta
椙山女学園大学国際コミュニケーション学部准教授
影山　穂波
Honami Kageyama
椙山女学園大学現代マネジメント学部准教授
塚田　文子
Fumiko Tsukada
椙山女学園大学人間関係学部准教授
藤原　直子
Naoko Fujiwara

1．緒　言

近年、女性のライフスタイルは大きく変わりつつある。とりわけ、結婚・子育てと就業をめぐる価値観や意思決定のありように関する変化は大きいといえる。

世界的には、1975 年の国際婦人年とその後の国連婦人の 10 年を契機に、女性の人権に対する関心が高まった。我が国も 1985 年には女子差別撤廃条約に批准し、同年、男女雇用機会均等法が、1991 年には育児休業法が制定され、以後、同法が改正を重ねるなかで女性の就業を後押しする社会的制度が整備されてきた。また、1999 年には男女共同参画社会基本法が制定され、その第 2 条において「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」[1]が形成されることが意図された。

このような背景のなかで、1975 年に 49.7％であった我が国の女性労働力率は 2004 年には 60.2％となり[2]、30 年間で 10 ポイント以上の上昇をみた。しかしながら、この間、我が国の女性の「年齢別労働力率」については、出産・子育て期にその値が低下する、いわゆる「M字型カーブ」を描くことが指摘されてきた。『平成 19 年版 男女共同参画社会白書』においても、25 ～ 29 歳層で 75.4％を示す女性の労働力率が 30 ～ 34 歳層では 63.2％に低下している現状が確認され、我が国の女性の労働力率は全体として上昇傾向にあるものの依然として子育て期に就業を中断する者が多いこと、また子育て期に就業継続を希望する女性が多いが、実際は就業できていない状況であることなどが問題視されてきた[3]。

一方、上記の問題や若者の職業観・勤労観の問題などに関わって、若い世代の未婚化・

晩婚化の傾向が指摘されて久しい。1975年に男性27.0歳、女性24.7歳であった平均初婚年齢は、2006年には男性30.0歳、女性28.2歳となり、晩婚化傾向は女性でより顕著である[4]。第一生命経済研究所『2006－07　ライフデザイン白書』の特集「シングル・ライフ」によれば、「独身でいることのメリット」について、男子学生は「収入を自由に使えること」(90.5%)、「異性と自由に交際できる」(40.5%)と回答した者の割合が他の調査対象群(男性:シングル、既婚者、女性:学生、シングル、既婚者)に比べて高いのに対し、女子学生は「自分の仕事を続けられること」(41.5%)、「親戚づきあいにわずらわされない」(30.2%)と答えた者の割合が高い。さらに「独身できることのデメリット」について、男子学生は「生活が不規則になる」(42.9%)、「家事の負担が大きい」(16.7%)と回答する者の割合が高いのに対し、女子学生は「老後が不安である」(62.3%)、「病気やけがの時に不安である」(52.8%)、「子どもをつくれない」(41.5%)とする回答割合が高い[5]。このように、女子学生にとっては、将来の生活の安定と子どもを生み育てるために結婚は重要であるが、仕事を続けるためには妨げになるという考えが相対的に強い。しかしながら、その一方で、女子学生の結婚意向はきわめて高いという調査結果も得られている。同特集によれば、女子学生については、「なるべく早く結婚したい」(18.9%)、「いずれは結婚したい」(64.2%)をあわせて83.1%が明確な結婚意向をもっており、男子学生(「なるべく早く結婚したい」(7.1%)、「いずれは結婚したい」(59.5%))や女性シングル(学生以外、「なるべく早く結婚したい」(14.8%)、「いずれは結婚したい」(59.8%))に比べ、早期の結婚意向・結婚願望が顕著である[6]。

晩婚化や少子化が指摘されている昨今ではあるが、上にみたように女子学生にとって結婚は、仕事の継続において困難を伴うものであると認識されながらも、子どもを生み育て、生涯にわたって不安のない生活を送るためになくてはならないものとして、強く志向されているようである。そこで、本研究では、女子学園である本学園に通う生徒・学生が、結婚・子育てならびに家庭生活(家事分担、家計管理)と就業選択に関して、どのような将来展望をもっているかについて明らかにすることを目的とした。また、中学校、高等学校、大学という学校段階別にライフスタイルの展望にどのような違いがみられるのかを把握するとともに、その意識や志向の形成プロセスを明確にし、女子の発達段階に応じた教育・学習のあり方を考えるための一助としたいと考えた。

2.研究方法

本研究では、椙山女学園中学校・高等学校および椙山女学園大学に通う生徒・学生に対し、理想のライフスタイルに関するアンケート調査を実施し、その結果に基づいて、彼女たちの結婚・子育て、家庭生活、就業選択に関する意識を把握することにした。今回実施したアンケートの調査対象者の内訳ならびに調査方法・内容は、以下のとおりである。

(1)調査対象者

調査対象者は、表1に示したとおり、中学生(3年)68人、高校生(1～3年)229人、大学生(1・2年、6学部:723人、3・4年、5学部:168人)891人の合計1,188人である。調査の内容に鑑み、ライフスタイルに関する将来展望が明確になってくる大学生を調査対象の中

心としたが、学校段階によるライフスタイル意識の違いやその形成プロセスについても比較検討するため、高校生および中学生についても一定数を調査対象とした。

表1　調査対象者の構成

学校段階	学年	学　部	N(人)	構成比(%)		
中学校	3年	—	68	5.7	5.7	
高等学校	1年	—	76	6.4	19.3	
	2年	—	75	6.3		
	3年	—	78	6.6		
大学	1・2年	生活科学部	59	5.0	60.9	75.0
		国際コミュニケーション学部	78	6.6		
		人間関係学部	98	8.2		
		文化情報学部	120	10.1		
		現代マネジメント学部	283	23.8		
		教育学部	85	7.2		
	3・4年	生活科学部	39	3.3	14.1	
		国際コミュニケーション学部	22	1.9		
		人間関係学部	39	3.3		
		文化情報学部	26	2.2		
		現代マネジメント学部	42	3.5		
合　計			1,188	100.0		

(2)調査方法および内容

本研究におけるアンケート調査は、2007年7月～11月に、本学園中学校、高等学校および大学の授業時間の一部を用いて実施し、上記のとおり、1,188人から回答を得た。

調査内容は、中・高校生にも回答しやすい質問であることを重視し、国分康孝監修・片野智治他編『エンカウンターで学級が変わる－高等学校編』[7]に掲載のライフコースの選択に関する質問事項を用いた。主な調査内容は、①結婚に対する展望(結婚の意向、結婚年齢、パートナーの年齢、パートナーに望む条件)、②働き方に対する展望(結婚・出産・子育て終了後の就業意向)、③子育てに対する展望(子どもは欲しいか、子どもをもつ時期、子どもの養育担当者)、④家庭生活に対する展望(家事労働の担当者、家計管理の担当者)についてで、いずれも選択肢による回答を求めた。これらのほか「将来の私」に対する理想のイメージや、「人生の中で特に大切にしたいこと」などに関する自由記述の回答も得たが、この分析については、機会を改めたい。

3.結果および考察

本調査の結果を、中学校、高等学校、大学(1・2年、3・4年)の学校段階別に整理すると、表2のようである。χ 2乗検定の結果から明らかなとおり、将来の働き方や結婚年齢、子どもが欲しいかどうかなどを中心に、ライフスタイルの展望に関する多くの項目において学校

表2　学校段階別にみたライフスタイルの将来展望＜調査結果一覧＞

質問	回答（選択肢）	中学校	高等学校	大学1・2年	大学3・4年	χ2乗検定	全体（合計）
将来結婚する？しない？	結婚する	61	208	690	160	P=0.0436 *	1,119
	一生独身のまま	4	14	19	4		41
	籍は入れないが一緒に暮らす	3	5	9	2		19
結婚する年齢は？	10代のうちに	0	1	1	0	P=0.0003 ***	2
	20～24歳	26	65	223	24		338
	25～29歳	33	123	421	123		700
	30～34歳	0	4	33	7		44
	35歳以上	0	2	1	0		3
	何歳でも	7	12	27	10		56
	今すぐ	0	1	0	0		1
パートナーの年齢は？	同年代	38	84	278	63	P=0.0317 *	463
	年上	23	104	355	86		568
	年下	1	4	4	0		9
	その他	3	12	36	15		66
パートナーに望む条件は？	経済力（金持ち）	40	155	495	119	P=0.0036 **	809
	性格	46	164	524	113		847
	容姿（ハンサム）	38	111	215	44		408
	家事能力	15	55	190	38		298
	自分の親と同居ができる	4	17	30	12		63
	共通の趣味	23	76	269	62		430
	家庭を大事にする	49	166	556	138		909
	職業	8	28	84	13		133
	相手の親との別居	25	54	149	31		259
	学歴	13	42	106	22		183
	健康	30	122	372	74		598
	子ども好き	33	102	370	75		580
	その他	1	10	49	16		76
働き方は？	結婚退職後ずっと専業主婦	13	31	67	8	P=0.0000 ***	119
	出産退職後ずっと専業主婦	12	29	55	10		106
	結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く	4	20	102	15		141
	出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く	9	36	191	42		278
	結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く	3	14	24	5		46
	出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く	7	29	114	37		187
	結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く	8	35	124	34		201
	結婚後はパートタイムで働く	1	1	10	1		13
	結婚せずフルタイムで働き続ける	3	11	11	3		28
	結婚後、子どもはつくらずフルタイムで働く	3	7	6	2		18
	その他	4	5	9	5		23
子どもは？	欲しい	57	203	683	160	P=0.0004 ***	1,103
	いらない	10	21	32	7		70
子どもはいつごろ？	結婚してすぐ	15	42	149	23	P=0.0614	229
	結婚後2～3年	40	148	513	128		829
	結婚して10年ぐらいして	0	1	4	0		5
	その他	7	16	28	6		57
子どもの養育は？	おもに自分	9	21	55	6	P=0.0086 **	91
	おもにパートナー	0	7	28	11		46
	二人で	51	182	601	142		976
	自分たちの親	0	0	6	2		8
	その他	3	2	5	1		11
家事は？	自分がすべてする	4	18	37	3	P=0.4106	62
	パートナーがすべてする	0	2	2	1		5
	おもに自分	32	108	362	80		582
	おもにパートナー	0	1	1	1		3
	2人で平等に	31	86	302	76		495
	自分たちの親がする	0	0	0	0		0
	すべて社会化を利用（お手伝いや外食などを利用する）	0	2	1	0		3
	その他	1	5	8	3		17
家計管理は？	2人それぞれ別会計。生活費のみ折半で出し合う	13	52	126	26	P=0.0132 *	217
	自分が管理	38	136	502	117		793
	パートナーが管理	11	20	38	11		80
	その他	5	12	48	10		75

注1．χ2乗検定の判定符号は、＊：5%、＊＊：1%、＊＊＊：0.1%を表す。
　2．網掛けの回答は選択されなかったため、当該質問に関するχ2乗検定では、この選択肢は除外した。

段階との間に関連が認められる。

以下では、個別の項目ごとに、結果の詳細について分析する

（1）結婚に対する展望

a. 結婚

「将来結婚する？ しない？」という質問に対する回答は、図1のとおりである。また、「結婚する年齢は？」という質問については、図2のような回答が得られている。

将来の結婚への意向については、全体の94.9%が「結婚する」と回答している。「一生独身のまま」（3.5%）、「籍は入れないが一緒に暮らす」（1.6%）と較べて、圧倒的な数字を示して、自分の将来像を描いている。これを学年別に見ていくと、中学（89.7%）、高校（91.6%）、大学1･2年（96.1%）、大学3･4年（96.4%）と学年があがるに従って、自分が結婚することへの考えは強くなっている。

また、結婚する年齢については、全体の90.9%が20代のうちに結婚することを考えている。この割合は中学（89.4%）、高校

図1　将来結婚する？しない？

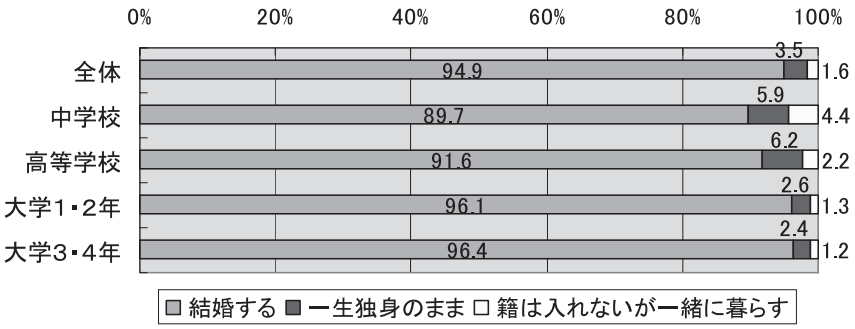
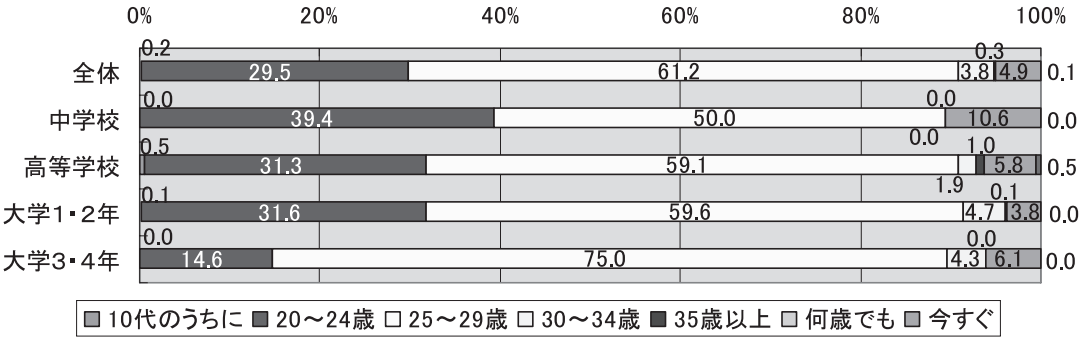


図2　結婚する年齢は？



（90.9%）、大学1･2年（91.3%）、大学3･4年（89.6%）とどの学校段階についても同程度である。その内訳をみてみると、10代で結婚することを考えている中学生はみられず、高校生でもわずか0.5%である。20代前半（20～24歳）で結婚すると考える者は、中学39.4%、高校31.3%、大学1･2年31.6%、大学3･4年14.6%となっている。大学3･4年になると、20代前半における自分の将来像が具体的になり、結婚することについてはその時点で想定しづらくなっているように思われる。また、20代後半（25 ～29歳）に結婚するという回答は、すべての学校段階において最も高い割合を占めているが、中学50.0%、高校59.1%、大学1･2年59.6%、大学3･4年75.0%と学校段階が進むにつれて、その割合が高くなっている。

b. パートナー

理想のパートナーのイメージについては、次のような結果が得られた。「パートナーの年齢は？」という質問に対しては図３、「パートナーに望む条件は？」（複数回答）という質問に対しては図４のとおりである。

パートナーの年齢については、全体として、年上と回答した者が最も多く（51.4%）、続いて、同年代（41.9%）となっている。年下と回答した者はわずか0.8%である。また、年齢差については、パートナーが1、2歳年上と答える者が最も多い。学年別にみた場合、中学では年上と同年代が逆転し、同年代との結婚を望んでいる者が58.5%と最も高い割合を示し、年上をパートナーとして望む者

図３　パートナーの年齢は？

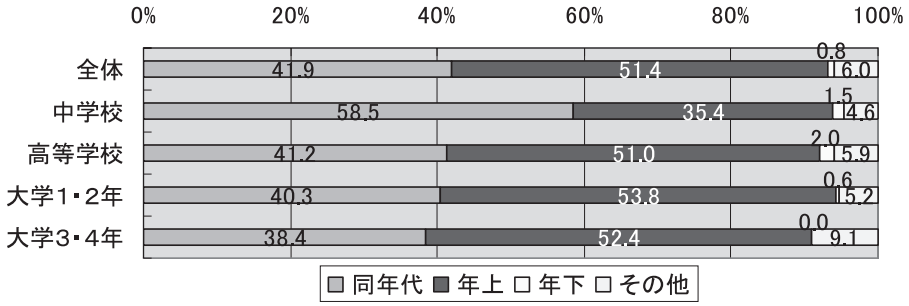
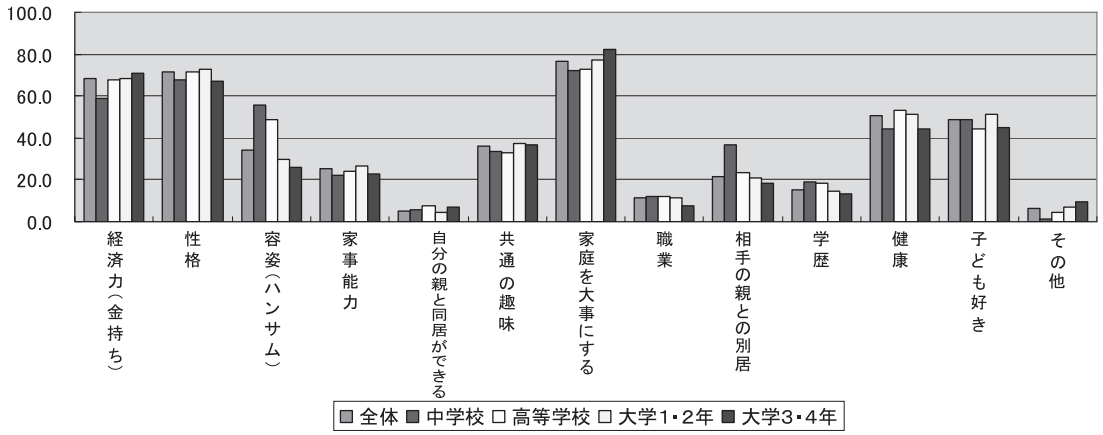


図４　パートナーに望む条件は？



は35.4%に留まる。このような傾向は、他の学校段階に共通にみられる「同年代より年上のパートナーを望む」傾向とは異なる結果となっている。理由については特定できないが、中学生においては、他の学年よりも、より「友だち感覚」をパートナーに求める傾向が強いのかもしれない。

次に、パートナーに望む条件をみると、全体に重視されている条件は、「家庭を大事にする」「性格」「経済力（金持ち）」である。中でも、「家庭を大事にする」は76.5%という高い割合を示しており、学年を問わず、家族や家庭の幸せに高い価値を置いている椙山女学園の生徒・学生の姿が浮き彫りにされている。そして、この傾向はわずかずつであるが、学年が進むにつれて大きくなっている。「経済力（金持ち）」についても、全体で68.1%の者がパートナーに望む条件として重視しており、この傾向も、学年が進むにつれて強まっている。

これらに続いて、中高大とも共通に比較的、高い割合を示しているのが、「健康」「子ども好き」という条件である。全体の約50%の生徒・学生が、それぞれ

の条件を重視している。

「共通の趣味」は意外に数値を伸ばさず、40%に満たない値となっている。学年別にみても、その傾向は共通している。

「家事能力」をパートナーに望む者も、中高大ともに30%に満たない結果となっている。後述される「（4）家庭生活に対する展望」において、家事は「2人で平等に（行う）」という回答が全体の4割強に達しているわりには、本回答（パートナーに家事能力を望む）の割合は低い。これは、本学園の生徒・学生にとって、具体的な家事分担とパートナーに望む家事能力との関係性が、未だ、確固としたイメージで捉えられていないためではないかと思われる。

「学歴」「職業」については、上記の諸条件に較べ、更に、パートナーに望む条件としては考えられておらず、共に20%に満たない結果となっている。

「親との同居」については、パートナーに「自分の親との同居」を望む者は10%に満たない。一方、「相手の親との別居」を望む者は21.8%であるが、注目すべきは、中学生において、相手の親との別居希望が他の学年よりも著しく高い点である。理由については特定できず想像の域を出ないが、この年代では、家庭での、母親等による祖父母の介護などをみる機会が増え、同居についてあまり肯定的な考えを持てないためではないだろうか。学年が進むにつれて、わずかではあるが、相手の親との別居を望む数値は減少している。

「容姿」については、全体の34.3 %がパートナーに望む条件に挙げている。しかし、これを学年別に見ると中学では55.9%、高校では48.5%であるものが、大学1･2年では29.7%、大学3･4年では26.2%となり、徐々に低下していくことがわかる。このようにパートナーに見た目の良さを求める傾向は、年齢とともに弱まっていく。

（2）働き方に対する展望

結婚・出産・子育てとの関係で「働き方」をどうするかについて尋ねた結果は、図5のとおりである。

全体としては「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦､その後パートで働く」を選択する者が24.0%で回答者の4分の1を占めている。これに対し「結婚退職後子育てが落ち着

くまで専業主婦、その後パートで働く」ことを希望する者は 12.2%で、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」のおよそ 2 分の 1 である。一方、子育て後フルタイムで働くことを希望する者についてみると、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」が 16.1%で、「結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」(4.0%) のおよそ 4 倍となっている。このように子育て後の就業形態(パートかフルタイムか)に拘らず、最初の退職については、結婚よりも出産を契機としていることがわかる。また、就業志向が高い「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」を選択する者は 17.3%を占めている。これに対し、専業主婦志向の者もかなりみられ、「結婚退職後、ずっと専業主婦」(10.3%)、「出産退職後、ずっと専業主婦」(9.1%) を合わせると、全体の約 2 割に達している。

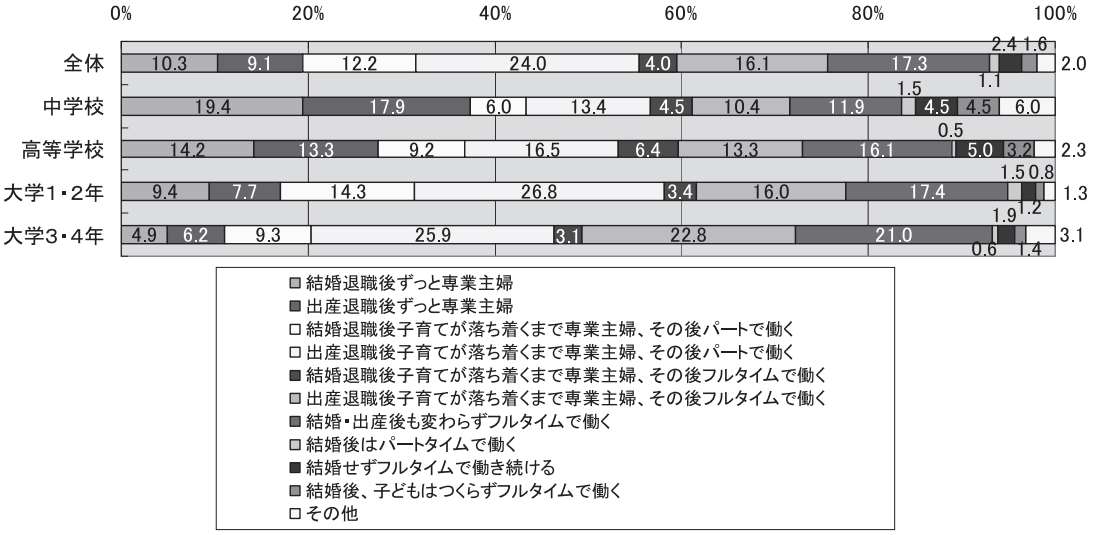
次に、これらの将来の働き方に関する考えは、学校段階により明確に差が見られるため、それぞれについて検討する。

退職後専業主婦に従事するという選択は、学校段階が上がるごとに着実に減少している。「結婚退職後ずっと専業主婦」を選択する者は中学 19.4%から大学 3・4 年 4.9%まで 4 分の 1 に減り、「出産退職後ずっと専業主婦」を選択する者は、同じく 17.9%から 6.2%へと 3 分の 1 になる。学校段階が上がるに従って、専業主婦であり続けることが現実的な状況ではないと考えるに至るようである。

「結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」という回答は中学では 6.0%だが、もっとも高い大学 1・2 年生では 14.3%となる。また、どの学校段階でも「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」という選択をする者は多い。子育てのために一旦退職するが、そのまま専業主婦になるのではなく、家計を助ける程度、あるいは自分のこづかい程度の賃金は稼ぐことを想定しているのである。現実感のある選択なのであろう。

「結婚退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」という選択はどの学校段階でも低くなっており、子育て後フルタイムで働く気持ちのある者は「結婚退職」

図 5　働き方は？



ではなく「出産退職」を選択するようである。「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く」とする者の割合は大学３・４年でもっとも高く、22.8%を示している。フルタイム志向が高まっているのかもしれないが、日本の状況において、退職後にブランクがあってフルタイムで就業することが困難である現実は認識していないのであろうか。

「結婚・出産後もフルタイムで働く」を選択する割合も学校段階が上がるに伴い上昇し、大学３・４年では21.0%に達する。実際に就職活動に直面する中で、生涯フルタイムで働く志向が見られるようになっているのであろう。一方「結婚せずフルタイムで働き続ける」という選択は、中学・高校では5%程度見られるが、大学では2%に満たない。

以上のように、本学園の生徒・学生の「働き方」の前提として、結婚をしないという選択は想定されていない傾向がみられた。また就業に関しては、中学校では専業主婦志向が強いが、学校段階があがるに従って就業志向が高まり、フルタイムで働き続けようと考える割合も高くなっていく状況が明らかとなった。

(３)子育てに対する展望

a. 子どもをもつこと

次に、子育てに対する意向について分析する。「子どもは(欲しいか)？」、「子どもはいつごろ（欲しいか）？」という質問に対する回答は、それぞれ図６、図７のとおりである。

「(１)結婚に対する展望」でみたように、調査対象者の94.9%が将来結婚をしたいと考えているが、そのうえで、図６にみられるように、全体の94.0%の生徒・学生が子どもをもちたいと回答している。さらに、欲しい子どもの数を聞いたところ、全体の約７割が２人、約３割が３人と回答している。

結婚に対する意向と併せて子どもをもつことへの希望を学校段階別にみると、中学においては、89.7%の生徒が結婚したいと考え、そのうちの85.1%が子どもをもちたいと回答している。同様に、高校においては91.6%のうち90.6%、大学１・２年においては96.1%のう

図６　子どもは？

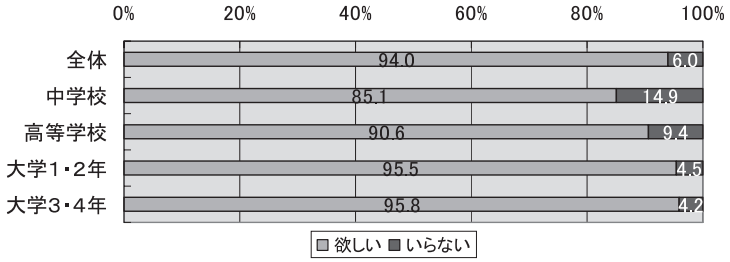
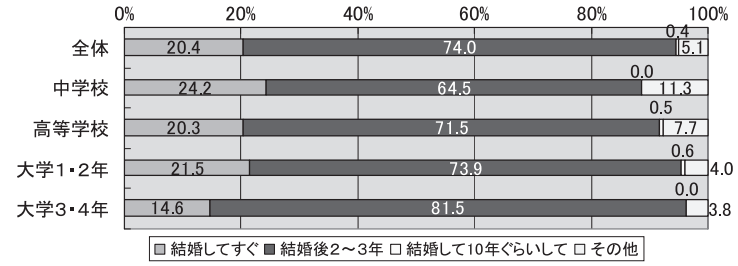


図７　子どもはいつごろ？



ち 95.5%、大学 3・4 年においては 96.4%のうち 95.8%が子どもをもちたいと回答している。各学校段階の母集団数が一定ではないにしろ、学校段階が上がるにつれ、結婚したら子どもをもちたいと考える割合が高くなっていることがわかる。

また、子どもをもつ時期に関しては、「結婚してすぐ」と回答した者が全体の 20.4%、「結婚後 2 ～ 3 年」と回答した者が全体の 74.0%である。「結婚後 2 ～ 3 年」と答えた者は、大学 3・4 年では 81.5%と割合が高くなっている。

以上の回答傾向から考えると、中高大の学校段階にかかわりなく、「結婚したい＝子どもができる、子どもが欲しい」という願望あるいはそのようなイメージを強くもっていることがうかがわれる。未婚・シングル・マザーが「市民権」を得てきているとはいえ、そのような回答はごく少数であるし、「子どもを持つこと＝結婚すること」という図式が明確である。つまり、中学生・高校生・大学生と成長する過程においても変わらず、女性のライフサイクルとして「結婚し、2 ～ 3 年で出産し、2、3 人の子どもをもつ」という一つのパターンが強固なものとして存在しているということである。

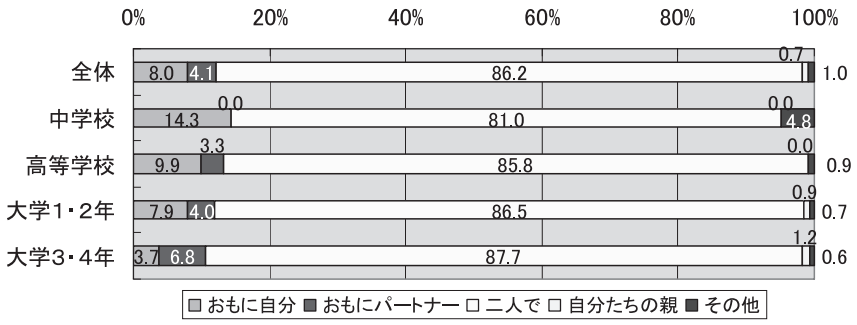
この点について踏み込んで考えると、「結婚したら子どもができるもの」という意識が高いことによって、将来そうならない場合、すなわち、子どもがほしいのにできない、結婚しているのに子どもができないと言われてしまうなど、子どもがもてない事態にどう対処できるのかが懸念される。ただし、今回のアンケートでは子どもがほしいかどうかという点のみを尋ねたので、子どもができない場合にどうするかといった意識については不明である。この点については、今後明らかにしたい課題である。また、将来のライフスタイルの一つとして、画一的なパターンだけでなく、多様なライフスタイルについて考える機会をより多く提供すべきだと思われる。

b. 子どもの養育

次に「子どもの養育は（誰がすべきか）？」という質問に対する回答をみると、図 8 のとおりである。

全体の約 86.2%は、子どもの養育を「二人で」行うと回答している。中学から大学になるにつれて、「おもに自分で」の回答割合が低くなり、「二人で」の割合が高くなっている。この質問項目では、子どもの養育について各自がイメージした内容が不明であり、衣・食・住に関することや教育費など、子育て全般としてとらえたか、経済的側面ととらえたか特定はできない。大学 3・4 年では「おもにパートナー」と回答する割合が相対的に高いことか

図 8　子どもの養育は？



らも、養育の経済的側面を想定した場合にはパートナーに依存したいという意向がうかがわれる。とはいえ、全体の回答傾向として、子どもの養育は二人で協力して行うという意識をもつ者が大半を占めることがわかる。

（4）家庭生活に対する展望

a. 家事分担

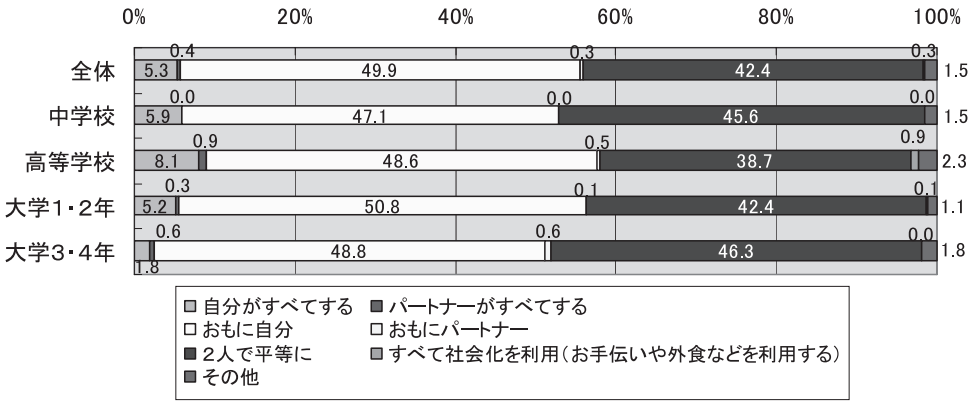
最後に、将来の家庭生活におけるパートナーとの役割分担についてみることにする。まず、「家事は（誰がするか）？」という質問に対する回答は、図9のとおりである。

前項までにみたとおり、結婚は生徒・学生にとって、いまだにひとつの「憧れ」ではあるが、家事や家計管理など、その実生活像は極めてあいまいなようである。実際には結婚するか否か、子どもをもつかもたないか、どのような働き方をするかに関わらず、現代の日本社会で生活していくためには、一定の収入を得て、それをもとに基本的な衣食住の生活を営まなければならないのは自明のことである。そして、また自身とつながる家族の衣食住についての様々な手配、つまり家事をしなければならないのもまた同様のことである。しかしながら、家庭生活の具体的な場面・内容については、生徒・学生の実感がもっとも乏しいところである。以下では、そのことを前提にここでの結果について考えてみる。

家事については「おもに自分」が行うと答える者が全体の49.9%で最も多く、「自分がすべてする」という回答も5.3%みられる。平成19年8月に実施された「男女共同参画社会に関する世論調査」によれば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」とするいわゆる性役割に賛成する女性は全体の39.9%、20代の女性の41.4%であるが[8]、これに対し、本学園の生徒・学生は、女性である自らが家事を行うとする者が半数以上を占めており、性役割を肯定する傾向が強いといえる。

また、「おもに自分」に次いで多い回答は「二人で平等に」で、全体の42.4%を占めている。前項で「子どもの養育」を「二人で」と答えた者が86.2%いたことを併せて考えると、少なくとも4割強の生徒・学生は、家事・育児を男女で分かち合うという意味で男女共同参画社会の理念を受け止めているかに見える。しかし先の「（2）働き方に対する展望」の結果では「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」と答えた者は17.3%しかなく、専業主婦あるいはM字型就労を想定している者がほとん

図9　家事は？



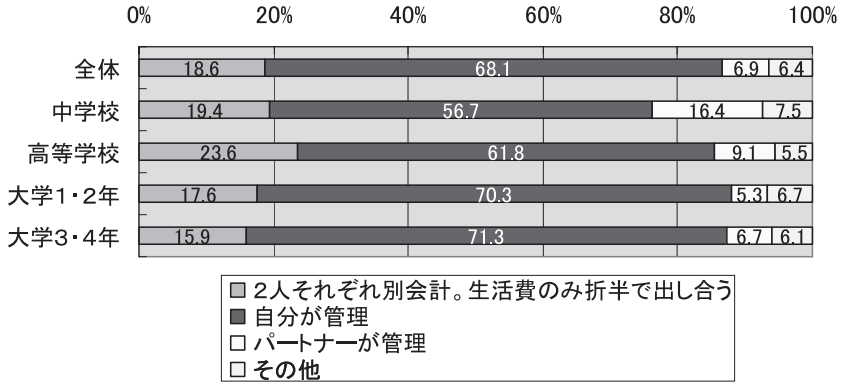
ど（合わせて 76.7%）である。ここで生徒・学生が考えるように、パートナーに主たる収入を依存し、なおかつ家事・育児を二人で平等に分担すると言うのは、家庭内での妻と夫の労働量のバランスが悪く、「不平等」であろう。しかも、現代の日本社会で夫の収入だけで生活を維持できるような収入を得るためには、相当量の労働時間が必要であり、とても家事・育児に時間を割くことは出来ないというのが実状ではないだろうか。

学校段階別にみても結果に大差はない。家事について、半数以上が自分がする（「おもに自分」または「自分がすべてする」）と答えていることは自分の生育歴から考える将来像ではあろうが、一人の収入で生活が営める男性と結婚し、なおかつ夫が家事・育児も分担してくれるという理想は、現在の若い世代の就労状況を考えると極めて甘い夢を思い描いているに過ぎないと思われる。大学3・4年で「自分がすべてする」が1.8%にまで減少し、「二人で平等に」が46.3%となっているのはやや現実が見えてきていることの表れかもしれない。

b. 家計管理

次に、「家計管理は（誰がするか）？」という問いに対する回答は、図 10 のとおりである。

図 10　家計管理は？



全体についてみると、生徒・学生の約 7 割は、家計を「自分が管理」すると考えていることがわかる。この結果は、これまでの問いに対する回答同様、旧来の家庭像にそったものであると思われる。「（2）働き方に対する展望」で「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」とする者が 21.0%を占めていた大学 3・4 年においても、家計管理に関しては 71.3%が、「自分が管理」と答えていることから、現実的に「財布の紐を握る」のは女性という日本の主婦の慣行をそのまま自身のものにしていることがうかがわれる。

今日の学校教育では、家庭科で家庭経済についてある一定の知識は与えられてはいるが一般に「お金」に関する教育は不足している。現実の家庭生活においては、日々の衣食のみではなく、子どもの教育や住宅の取得、老後の生活資金など長期にわたっての計画的な家計の運営が求められ、かなりの知識と管理能力、時間などが必要となる。この問いでは「家計管理」の詳細は明らかにしていないので、回答者がどこまでを「家計」と考えているかは不明であるが、いずれにしても「家計管理は妻」とする旧来の考え方が、本学園の生徒・学生には

根強く残っていることが明らかである。

一方、ここで注目すべき点として、中学では19.4%、高校では23.6%の生徒が「二人それぞれ別会計。生活費のみ折半で出し合う」と回答し、新しい「家庭」のあり方をイメージしていることを挙げることができる。しかし、他方で中学生の16.4%は、家計は「パートナーが管理」と答えていることから、現実的な生活観の不足したお小遣いレベルの「割り勘」感覚なのか、双方がフルタイムで働き、生活費を折半するという、共同生活のような型の家計運営を考えているのかは不明である。

4．結　語

以上を整理すると、本学園において、相対的に多くの生徒・学生がイメージする将来のライフスタイルは、次のようである。

①20代後半で、1、2歳年上の、家庭を大事にし、性格がよく経済力のあるパートナーと結婚する。
②結婚後2〜3年たったら子どもを2人産む。
③出産後は仕事をやめ、子育てに専念する。
④子育てが一段落したら、パートで再就職する。
⑤結婚生活においては、家事は主に自分が行い、子育ては二人で協力し合う。
⑥家計は自分が管理する。

本学園の生徒・学生が描くこのようなライフスタイルは、すでに述べてきたとおり、我が国の旧来型の女性の生き方に通じる部分が大きいように思われる。「男女共同参画社会に関する世論調査」の結果によれば、女性の働き方については、平成14年調査以降、「子どもができてもずっと職業を続ける方がよい」とする回答が「子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」とする割合を上回っており、平成19年8月調査の20代女性の回答では、前者が44.7%、後者が29.5%とその差がますます広がっている[9)]。これに対し、本学園で「結婚後、出産後も変わらずフルタイムで働く」と答えた者はわずか17.3%にすぎず、結婚、出産に伴う退職を想定している者が多い。このような傾向については、彼女たちの母親世代が一つのロールモデルになっているためではないかと思われる。比較的経済的に恵まれた環境の中で、子育てに専念し、家事を一手に引き受け、一家の財布を握ってきた母親の姿は、本学園の生徒・学生にとっては、プラスのイメージで受け入れられているようである。このことは、「家庭を大事にする」パートナーを選びたいとする者が多いことからも明白である。一方、こういった考え方は、学校段階の進行とともに変化している。中学では約4割が「結婚・出産後はずっと専業主婦」であることを望んでいるが、大学3・4年ではその割合は1割強にまで低下し、自らの就職活動に当面するなかで、結婚後の将来像についてもフルタイムでの就業意向が高まるのである。

上に見た結婚－出産退職－子育て－再就職という家庭生活を重視するライフスタイルは、人として、また少子化時代を生きる世代にとって大切なものであるが、他方で、当面する男女共同参画社会においては男女の性別にとらわれない自由な生き方が可能となる。したがって、本学園の生徒・学生たちには、低年齢から多様なライフスタイルがあることを認識させ、各々のライフステージで直面するさまざまな人生の選択に柔軟かつ適切に対応できる力を身に付けさせたいところである。また、結婚という人生の選択について、より具体的か

つ現実的なイメージがもてるようにし、それを選択をした場合にも、パートナーに過度に依存することなく、互いに自立しながら支え合い、それぞれの個性を能力として高めながら真に豊かな家庭生活を創りだすことのできる力を育みたいものである。

注

[1] 内閣府『男女共同参画白書（平成18年版）』国立印刷局（2006）、p.193

[2] 同前書、p.6

[3] 内閣府『男女共同参画白書（平成19年版）』国立印刷局（2007）、p.18

[4] 内閣府『少子化社会白書（平成19年版）』ぎょうせい（2007）、p.8

[5] 加藤寛監修『ライフデザイン白書2006-07』第一生命経済研究所（2005）、pp.20〜21

[6] 同前書、p.22

[7] 国分康孝監修・片野智治他編『エンカウンターで学級が変わる－高等学校編』図書文化社（1999）、P.195

[8] 内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査（平成19年8月）」、http://www8.cao.go.jp/survey/h19/h19-danjo/2-3.html

[9] 内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査（平成19年8月）」、http://www8.cao.go.jp/survey/h19/h19-danjo/2-2.html

「人間発達論」プロジェクト研究報告

Project and Research Subjects for the Development of Human Nature

椙山女学園大学教育学部教授
石橋　尚子
Naoko　Ishibashi
椙山女学園大学人間関係学部准教授
山口　雅史
Masashi　Yamaguchi
椙山女学園附属幼稚園
椙山　美恵子
Mieko　Sugiyama
椙山女学園附属小学校長
中村　太貴生
Takio　Nakamura
椙山女学園高・中学校図書館長
佐久間　治子
Haruko　Sakuma

1．平成19年度の研究体制並びに研究方針

(1) 平成 19 年度「人間発達論」プロジェクト研究体制について

椙山人間学研究センター長より、平成18年度に引き続き、上記5名が研究員就任委嘱を受け、本研究プロジェクトを構成した。リーダー：石橋尚子。

(2) 平成 19 年度「人間発達論」プロジェクト研究方針について

平成19年度「人間発達論」プロジェクト研究方針について、平成18年度の研究スタイル（長期休暇を除き月１回程度の研究会を持ち回りで開催し、相互理解と研究の進展に努力する）と、研究成果を継続発展させる方向で、以下の2つを研究の柱として取り組むこととした。

①全国的な「中高一貫教育校」整備の流れの中で、附属幼稚園から大学に至る全学園的視野で、どのような連携･一貫教育を目指していくのか、その方向性について検討・提案する。

②平成20年度学園児童生徒対象一斉質問紙調査に向けて準備を進める。

・質問紙の作成

・予備調査の実施

・本調査実施のための条件整備など

2．平成19年度研究会活動報告

本年度は、前述の研究方針に従い、4回の研究会と一貫教育に関する資料収集のための国内出張（２回）並びに韓国出張（3月実施予定）を行うとともに、韓国の教育事情に関する学習会、学園内の附属幼稚園･附属小学校･中学校･高等学校の教員を対象とした意識調査を行った。その概要は以下の通りである。

尚、これらが可能となったのは、学園研究費補助金（A）の交付に依るところが大きい。ここに謝意を表したい。

◎学園研究費補助金（A）交付決定　平成19年6月5日（火）

研究課題：「理想自己に関する全学園的実態調査に向けて」

助成金額：1300千円

○第１回研究会　平成19年7月5日（木）於附

属幼稚園：平成19年度の研究体制と方針について

○第２回研究会　平成19年9月7日（金）
於附属小学校：2回の国内出張報告

○第３回研究会　平成19年10月12日（金）
於中学校：学園内附属幼稚園･附属小学校･中学校･高等学校の教員を対象とした意識調査について

○第４回研究会　平成19年12月14日（金）
於ルブラ王山：学園内教員対象調査の中間報告と平成19年度の研究総括

○韓国の教育事情に関する学習会　平成19年7月13日（金）於附属幼稚園
講演者：全香仙氏（附属幼稚園保護者・元ECC外語学院講師）

○「2007一貫教育セミナーatTamagawa」への参加　出張者：椙山美恵子・佐久間治子

○「小中一貫教育シンポ全国大会in京都」への参加出張者：椙山美恵子・石橋尚子

○附属幼稚園、小学校、中･高学校の教員を対象とした意識調査の実施（11月~12月）

３．一貫教育に関する資料収集状況について

(1)国内資料の収集状況

ここ数年公立で小中一貫の取り組みが始まっている。いかなる目的のいかなる内容の教育であるか、私立で一貫校を標榜する椙山女学園にとって、その実際を知っておくことは必要なことである。全国集会への参加を通して、椙山にとって参考にすべきことがあれば活かしていきたい考えている。収集した資料･内容については、2回の出張報告を持ってかえたい。

①「2007 年一貫教育セミナー at Tamagawa」に参加して

2007年7月25日一貫教育の先進校である玉川学園において「一貫教育の現状と今後の展望」というテーマで全国規模のセミナーが開催された。今や私立だけでなく公立も、小中または中高などの一貫教育に関心を持ち始めている中で、全国から数千人の参加があり、先進校の発表に熱い関心が寄せられていた。

「人間発達論プロジェクト」研究では、「人間になろう」の教育理念のもとで幼稚園から大学まで一貫した教育方針・内容のもとで教育がなされてこそよりよい人間発達が期待できるとの観点から、一貫教育の実際に目を向けてきているところである。今回まず全国の一貫教育の状況を知る必要があるとの考えから本セミナーに２名（椙山・佐久間）が参加した。以下はセミナーの報告である。

〈基調講演〉品川区の教育改革と小中一貫教育品川区教育委員会教育長　若月秀夫氏

改革は、学校選択制・外部評価制度・学力定着度調査を経て、18年度から小中一貫教育へと連続している。5年生から子どもが変わるという現実の上に9年間を4－3－2のまとまりで行うことにより学力向上を図っている。

〈シンポジウム〉「一貫教育に求められる教員の資質・能力」

・シンポジスト　小林福太郎氏
（品川区立小中一貫校伊藤学園校長）

施設一体型でこの4月からスタートした。運動会は１年生が9年生と一緒に入場し、１年生から9年生まで一緒にリレーをした。通知表は年2回のみで、長期休業の前には子どもと面接しきちんとした診断を行って学力を向上させる。改革すること自体が目的ではなく子どもの成長を見極めて方法を編み出すことが必要である。

・シンポジスト那須野泰氏

（開智学園総合部（小学校）校長）

創造型・発信型の本物のリーダーを育成することを目標に4－4－4制の一貫校を2004年よりスタートした。一日の流れは、読書――教科（英語はallEnglish）――表現（一年生から四年生は一緒）――パーソナル（一人ひとり異なったテーマを持って学ぶ）――体育（小さな部活をする）――集会（チームごとに集まり他のチームに課題を出し合う）――学年（子どもが企画して行うフィールドワークなど）。放課後も含めて基礎力の徹底と総合力・発信力に力を入れる。

・シンポジスト川崎昭治氏

（立命館宇治中高前校長）

小中高大16年をどうコーデイネイトするかで必要なのは、教職協働である。また情勢を認識できる教職員でなくてはならない。偏差値でしか教育が測れないのではダメである。何が必要か、どんな学校を創るのかについて教育論を共有することが必要である。

・コーデイネーター長野正氏

（玉川大学学術研究所　K－16教育研究施設主任・教授）

玉川は創立以来、幼稚園から大学までが別々の文化を持ってよかれと思ってやってきたが総花的、分断的な成果主義であった。今は「K（幼稚園）――１２」の一貫教育を行っている。一貫した理念で長い期間で文化教養を身につけることが大切である。

・シンポジウムを聞いて

一貫教育は、形以上に中身の問題であり、教職員が「教育論を共有」しあって何をどう一貫させていくのかの共通認識を構築することが必要であることを再認識した。なによりも、子どもたちにとって教育とはそもそも一貫であるべきものである、という認識に立って椙山での改善点を見出していくことが必要だと感じた。

〈分科会３〉「一条校におけるＩＢ教育への挑戦」

この分科会は玉川が19年度から新しく始めた取り組みで、一部の教科を除くすべての教科を英語で実施し、学習指導要領に基づきながら国際バカロレア教育の基準も満たして国際的に活躍できる力をつけることをめざした教育の発表である。このような教育がどのようにして可能になったか、興味深いものがあった。

IB(International Baccalaureate)国際バカロレア教育

発表者　バーナード恭子（玉川大学学術研究所准教授）
マイケルストーン（玉川学園国際学級ＭＹコーデイネ―ター）

＊スイスに本部をおく国際的に認められた教育で、その修了によって世界の大学への進学を可能にするもの
＊総合的でバランスのとれたカリキュラム・全人的教育（下記参照）
＊126カ国で2060校の認定校がある（2007年5月現在）
＊3つのプログラムがある。PYP・MYP・DP（下記参照）
＊日本では、PYP認定校7校・MYP認定校3校・DP認定校10校
＊世界の認定校の多くはDPだけを導入。しかし幼から高のIB一貫教育の学校が世界で99校あり日本にも2校ある。

一条校(学校教育法第一条に定めたた小中高)における取り組み　玉川の場合

＊平成17年より準備。19年度は7年生25名。20年度からは2学年50名。平成24年度には第一期生がDP修了予定。
＊学習指導要領に準拠した教科・内容とＩＢ教育の一体化

・個人の興味に基づいた問題や課題に、生徒自身が答えを導き出すことを重視
・高いレベルの学習に耐えうるスキル、知識、態度、語学力育成

＊18年度より玉川学園の教育改革として実施している「K-12一貫教育」（Kindergarten to 12th grade）の1つとして、‘世界に通用する人づくり‘の目標のもと新しい取り組みとして行われている。

〈分科会 4〉「一貫教育実践校における取り組み－カリキュラムの「接続」を中心に－」

この分科会は「一貫教育に求められる教員の資質・能力をテーマにしたシンポジウム」での議論を踏まえ、実際に運用するカリキュラムについて、同じくシンポジウム形式で行われた。一貫教育のカリキュラムは、一般的に4－3－2、4－4－4、3－3、2－2－2といった学年のまとまりで設定されている。各学校の代表者が、そのカリキュラム区分に至った理由と学年のカリキュラム編成や接続を紹介し、実践における主な成果と今後の課題・展望について述べる形の発表会となった。

立命館宇治中学校・高等学校

前校長　川崎昭治氏

受験偏差値にとらわれず、「ゆとり」一辺倒でもない教育を目指す。中学では「語学・文章・読書・数学・情報活用」のスキル獲得に向け時間数を確保し、語学力強化や自然科学への関心を深める。高校では、学年や教科・科目の枠にとらわれないフレキシブルなカリキュラムを設定。中・高・大の10年間、さらに大学院や社会での活躍も見据え、「人間力」と「知力」を育む。

①入学前教育（春休み）=授業開始に備え、主要教科の導入内容を学ぶ。
②入門期（中1）=家庭学習や反復学習など「学ぶ姿勢」を習慣づける。
③展開期・前期（中2～3）=基礎学力を固め、中学の内容を終了。
④展開期・後期（中3～高2）=基礎から高度な学びへ、論文やディベート手法も習得。
⑤高大連携期（高3）=大学初級レベルの授業を受け、資格取得の勉強や海外留学。

開智学園総合部（小学校）

校長　那須野泰氏

小・中・高の12年一貫教育。発達段階を活かした「4・4・4制」、組織を学びリーダーを育てる「異学年齢学級」、一人ひとりの学力を最大に伸ばす「習熟度グループ授業」、自ら学ぶ力を育成する「パーソナルの時間」等により、教科学習、教科外活動を、総合的、有機的にプロデュースする。

①プライマリー（1～4年）=「生活型・能力開発型学習」
各学年10名の異学年齢児童40名編成の学級、2名担任制。
②セカンダリー（5～8年）=「知識習得型・総合型学習」
各学年10名の異学年齢児童・生徒40名編成の学級、2名担任制。
③ターシャリー（9～12年）=「専門型・大学進学型学習」
11年までに高校の内容終了。12年は大学進学準備、難関大学進学へ。

品川区教育委員会小中一貫教育

担当課長　藤森克彦氏

品川区は平成15年に「構造改革特別区域研究開発学校設置事業」（教育課程の弾力化）の認定を受けて、品川区小中一環教育要領を策定。平成18年には施設一体型の小中一貫校第1号の日野学園、19年に「小中一貫校伊藤学園」が恵まれた施設とともに誕生した。伊

藤学園は全学年で市民科を実施し、5領域の学習を通して「生きる力」を培う。

①「1年～4年」＝系統的英語学習。アップタイムの実施。標準服の着用が原則。

②「5年～7年」＝教科担任制の採用。ステップアップ学習の実施。

③「8年・9年」＝ステップアップ学習の実施。

玉川学園 高学年教育部長　久保登美夫氏

玉川大学 学術研究所助教　小原一仁氏

教育理念は「全人教育」。平成19年度より、建学の精神に基づく「K－12一貫教育」のカリキュラムを開始した。これは幼稚園から高校までを一つの学校として構想しており、組織・運営・授業時数・指導・成績評価・定員・校舎にまで及ぶ大改革である。カリキュラムも校舎も、K－4－4－4に分節した。

①First Division（低学年＝1～4年）「学習の手引き」による個人学習。独自テキスト。

②Middle Division（中学年＝5～8年）教科の到達目標の設定。

④Upper Division（高学年＝9～12年）

各教科の全教員が参加するK－12教科部会で、玉川独自のカリキュラム開発を日々継続中。支援体制として、学園マルチメディアリソースセンター・学園国際交流センター・学園生活センターがある。

玉川学園は、東京都町田市の山を切り開いた緑あふれるキャンパスに、幼稚園から大学院までが存在している。木造りの低学年校舎、昨年度新築された高学年校舎とも、理念を具現化した建物であり、高学年校舎にある学園マルチメディアリソースセンターは、視聴覚教育施設と図書館が一体化したものであった。このような環境の中で学ぶことは、人間形成への教育効果も期待できると感じさせられた。

各一貫校のカリキュラムづくりの取り組みは、それぞれに特徴のあるものであったが、具体的実施内容を詳しく見ていくと、その多くは、椙山女学園においてすでに実施している事柄と重なるものも多かった。他の一貫校のカリキュラム作りの視点や特徴を学ぶ一方で、椙山女学園が持っている、実践している教育的な財産を大切にしながら、今後の一貫教育作りを考えていきたい。

②「小中一貫教育全国サミット2007in京都」に参加して

平成19年8月1日国立京都国際会館

〈シンポジウム〉

・シンポジスト山谷えりこ氏（教育再生会議担当事務局長）

＊社会総がかりの教育改革、多様性と地域の独自性、地域間格差を無くすことを意図

＊これまでの経過（第一次報告書・・・ゆとり教育の見直し・教育3法を成立・教職員免許法の改正、第二次報告書・・・道徳教育の充実・大学大学院の質の保証：土曜日の活用・めりはりのある給与・骨太方針・教育再生・・・・・）

＊43年振りの学力調査、9月に結果がでる。困難校に援助。

＊現在98の特区の取り組みがある。多様性・柔軟性・地域の独自性を大切に。

・シンポジスト　貝ノ瀬滋氏（東京都三鷹市教育長）

＊17万5千の人口、小学校15中学校7、住宅街

＊小中連携型で9年間のカリキュラムを一貫させる。条例で連携を規定している。

＊コミュニテイースクールで既存のリソースを活用。教師の専門性と地域の良識が連携。地域が教育の当事者として関わる。

＊実施結果は学力も向上、楽しく行ける学校、

教員の意識変化。今後全市に広める。
＊課題は教員意識の温度差
＊教育はサービス業ではなく地域・保護者はクレームをつける存在でもないはず。教育は市場経済ではない。
・シンポジスト　門川大作氏（京都市教育長）
＊一人ひとりを大切、能力発揮、子どもを変える、差別を無くす、障害者教育を重視
＊現場で小中の連携が自然に生まれた。平成9年から小学校英語導入し平成16年から小中連携、授業観察、カリキュラム統一
＊「読解教育」重視（フインランドの実践をとりいれたもの）
＊地域ごとに独自に作ってきた小学校を統廃合、小中一体型、子どもに何が必要かを軸に直接民主主義的に地域を主体にコンセンサス作り
＊小中の先生の文化の違いが大きい。このため不登校が生ずる。
＊京都は58校を14校に統合。通学区域は守る。財政効率を上げながら教育成果を上げる。部活動も小中連携するとやりやすい。
・シンポジスト　布村幸彦氏（文部科学省大臣官房審議官・初等中等教育局担当）
＊昨年12月教育基本法改正（公の意識、6・3制は弾力的、幼児教育は家庭教育が原点、地域の中の学校）
＊３法の改正（小中義務教育9年としての目標に変更、教育委員会制度の見直し、免許法の改正、更新制10毎で平成21年から実施）
＊学びの連続性、学校ごとの繋がり、異年齢集団の交わり、体験、節目の取り組みが大切
＊PLAN・DO・CHECK・ACTION
＊平成17年のデータでは、6・3制から5・4制への変更賛成は13・2%、中高一貫賛成は30・6%、小学校の教科担任制賛成は41・2%
・シンポジスト　川勝平太氏（静岡文化芸術大学学長・国際日本文化研究センタ客員教授）
＊地域の大人達が教育に責任を持つ体制作りが必要、中長期的には文科省はなくてよい。明治の初めまで文部省はなかった。4万5千の寺子屋があり世界一の文字の力があった。今制度は疲弊している。地域の多様性を生かした地域分権型にすべき。
＊京都には京都独自の「京都検定」がある。得意なものを作れば子どもは伸びる。「国際まんがミュージアム」では漫画から世界へ。楽しみながら夢中になって学ぶ。
＊いろいろな力を評価することが大切。出口で頓挫しないように大学の再編・改革が必要。

〈分科会〉

分科会では以下の学校の新しい発表を聴いた。共に新教科を立ち上げ総合的な力を付けていこうという取り組みである。柔軟な発想で既成の概念にとらわれることなく取り組もうという姿勢には学ぶところが多いと感じた。その一部を概略紹介する。

小中一貫校において人間教育をめざす新教科
市民科

品川区立源氏前小学校による発表
＊道徳・特別活動・総合的な学習の時間を「市民科」として統合
＊1年生から9年生までの一貫カリキュラム
・自ら見つけ、自ら考え、学んだことを実社会や実生活に生かす力の育成

―新教科「読解」を通して―　京都市立御所南小学校・京都御池中学校による発表
＊課題設定力・情報活用力・コミュニケーシ

ョン力・表現力を養うための新教科
＊核教科や道徳・総合的な学習と関連させて進める

《韓国資料の収集》

（2）韓国―収集

韓国の教育事情については、まず全香仙（ちょんひゃんそん）さんを招いて学習会を開催した。また、韓国における幼児教育･学校教育に関する実態調査を3月に予定している。それぞれに学習会記録と訪韓調査計画書を掲載する。

（1）韓国の教育事情に関する学習会記録

日本の一貫教育を考えるとき、外国との比較によって見る場合気がつくことも多い。今回最も近い国であり、日本が歴史的にも多大な影響をうけている韓国との比較研究をしていくことを前提に、まず身近なところで韓国の教育事情を、全香仙（ちょんひゃんそん）（元ＥCC外語学院講師）さんから伺うことにした。

平成19年7月13日於幼稚園

幼稚園から大学まである女子の学校は？

梨花女子大

・王朝時代の最後の婦人が1886年に創設
・女子としてはトップ（全体としては6～7番目）。在学中に結婚したら退学処分になる大学だったが2002年から2003年ごろ結婚した人も受け入れるようになった。
・大切にしていることは人間教育。国際的に活躍する女性の育成。韓国を支えている女性が多く卒業している。
・大学内に併設の語学学校がある。幼稚園は大学の援助を受けている。
・他に誠心女子大がある。（日本の聖心女子大と提携校）アメリカの宣教師が創立。

韓国の教育事情・大切にしていることはなにか？

・教育熱心。お稽古事に1ヶ月に10万～15万円の投資。
・幼・保の制度は日本より劣る。設置の規則なしでビルの4～5階にあったり教会にあったりする。幼では文字は教えないが家庭で教えるので年中で字が書けない子はいない。

2～3才から英才教育あり。上位3%の秀才だけを対象とする英才教育の塾がありその塾へ入るための勉強をする。日本の「くもん」を導入、2歳から始めることができる。子どもは忙しいので先生に家に来てもらって教えてもらう（ハングル語や算数や中国語などのプログラムあり）。幼で小学校の教科書を使っている。有名幼稚園ではバイオリン一人1台ずつあり音大の先生が来て教える。幼でもEQ・IQのテストで潜在能力を専門機関で判断してもらう。

・小学校は競争率5倍。3月から2月が学校の年度。小学校で文字は習わない。塾に週2～3回通う。小学校から英語があり私立ではすべての科目を英語で教える学校もある。ピアノは必須。バイオリンは週3回。スイミングスクールに週3回。漢字検定や英語検定が流行。
・公立は男女別がほとんど。中高とも外国語の第一言語は英語、第2言語は日本語、中国語、独語、仏語・・・（勉強の出来る子は中国語を取る。日本語は易しいので内申書のために取る）中高にはプールなし（水泳はスイミングスクール）。公立と私立でレベルは変わらない。月謝も同じ。外国語高校、科学高校はレベルが高い（ソウル大学、高麗大学、延世大学、へ行くレベル）

これを目指してお受験する。医学部を目指す子も多い。

・エリート神話が崩れていない。政府が作った施設で英才教育を行う（科学学校）。EQ・IQの上位3%が6ヶ月に1回の試験によって普通の学校に通いながら行くことが出来る。

良い大学へいけない子は人生の負け組み。大学院卒は親族の自慢。

・大学の授業は英語。英語が出来なければだめ。高卒の80%が大学進学。実力よりも学歴社会。大学をでても就職できない場合もある。

社会の諸事情

・貧富の差が激しい。良い地域に住みたがる。住んでいる地域を大事にする。尊敬語や謙譲語を日本以上に大切にするが、今は変わってきている。

・道徳授業がある。体罰はあるが親は容認している。ほとんどが宗教を持っている。プロテスタントが70%、カソリック、仏教など。週1回は教会へ行く。儒教は行事などしきたりとして存在する。

・子どもの姓は、来年の6月から3つの中で選択できるようになる。

・結婚は先祖が同じ場合は結婚できないのが基本。今も8親等まで出来ない。

・徴兵制。3年が2年2ヶ月になった。外国の永住権があれば徴兵を逃れることができたが、今は、2重国籍としても逃れられない。前線に行きたくない、家から通える場所にしたいので英語が出来る子は米軍基地へ行きたがる。病気の場合は免れるので自分で指を切り落とす例もある。

お話を伺って

韓国は隣の国であるのに教育事情についても知らないことも多く大変参考になった。日本よりも教育に対する親の熱意が高く受験競争も激しいと思われる。一方徴兵制が若者やその家族に大きな影響を及ぼしており、貧富の差やその他の社会状況なども含めて今日の教育の過熱ぶりの事情をより深く知っていくことが必要であると感じさせられた。

(2)：ソウル訪問調査計画

①訪問調査期間･･･平成20年3月11日（火）～3月14日（金）

②訪問調査内容･･･ソウル神学大学校玄正煥副教授のご協力のもと、以下３項目の調査を予定している。

A．中学校，高等学校への訪問調査

・中学校、高等学校の施設見学と授業観察：観察にあたっては、通訳を介したメモとビデオ録画を併用。

・中学校、高等学校での教師との懇談：「理想の子ども像・人間像」「教育の中で大事にしていること」などについて懇談予定。

・中学校、高等学校での文献収集：学校要覧、教科書、通知表、カリキュラム、指導案など入手予定。

B．ソウル神学大学への訪問調査

・ソウル神学大学での教員養成の現状と課題についてのインタビュー調査。

・韓国における教育や教員養成の現状と課題についてのインタビュー調査。

・ソウル神学大学学生との交流。授業に参加し、日韓の教育について懇談。

C．文献収集

・書籍（童話･絵本･児童書や家庭教育･学校教育関係の書籍）の購入。

4．学園一斉質問紙調査に向けて

本年度は、幼稚園から大学までの子ども達の発達の様子をとらえる前提として、教育にあたる教員の意識を明らかにする。子ども達の日々の成長発達に多大な影響力を持つ教員が、どのような人間像を理想として教育活動を展開しているのか、を問うことで、子ども達の人間形成における教員の直接的･間接的影響力について検討する。

また、本調査の回答をもとに、子ども向け調査用紙を作成し、実施の準備を進めていきたい。

（1）問題と目的

子供たちが将来、どのような人間に『なろう』と思うかは、それぞれの子供が持つ目標としての人間像（理想の自己像）によって決まると考えられる。したがって、「人間になろう」という教育理念を実践するためには、子供たちが自ら成長・発達していく上での理想とする人間像（理想自己）を、教師が適切に援助しつつ、育てていくことが必要である。

そこで、そのような教育実践の基礎となる資料を収集することを目指し、子供たち一人一人がどういう「人間になろう」と思っているのかの実態を把握するため、子供たちの持つ理想自己に関する調査を行うことを計画している。

従来の研究で取り上げられる理想自己は、その測定項目を吟味してみると、「豊かな感性を持つ」「人より仕事ができる」「頭がよい」など、個人内の能力や特性の高さに視点が集中しており、公共性などの向社会的な視点が不足しているように思われる。

この点に関しては、項目を選定する研究者側の問題だけではない。2005年に筆者らが実施した大学生を対象とした予備調査でも、「どんな人になりたいか」という質問に対する自由記述の中で、向社会的な特性に関する回答（「常識やマナーを守れる人」「人のために生きることができる人」）は非常に少なかった。このことは、現代の青少年の抱く理想自己あるいは目標とする人間像の中に“向社会性（あるいは公共心）”といった側面が欠落している可能性を示唆している。

近年、社会規範を遵守しようとする意識の低下が注目されているが、もし仮に現実自己のみならず、発達の原動力ともなるべき理想自己の中にも向社会性という側面が含まれていないとするならば、学校教育さらには家庭教育の見直しを早急に進める必要があるのではないだろうか。望ましい人間性教育（あるいは青少年の健全育成）を行う上では、子供たちの成長発達のゴールであるべき理想の人間像が、何よりも健全であることが必要である。

そこで、小学生から大学生までを対象として、向社会的な側面を考慮した理想自己を調査し、「人間になろう」を実践する“人間性教育”すなわち理想の人間像を目指して育つ子供を効果的に援助する教育のあり方を検討するための基礎資料の収集を行うことを考えている。

（2）2007 年度の結果報告

今年度は、子供を対象とした調査を行うための予備的なデータの収集を目的として、椙山女学園の各学校の教員を対象とした調査を行った。現在のところデータを分析中のため、概要のみ報告したい。

目的：子供の描く理想自己は、当然ながら自然発生的に成立してくるというよりも、周囲からの多大な影響を受けつつ形成されてい

くと考えられる。そこで、子供が志向する理想自己像に強い影響を与えると考えられる教員の描く「理想の大人像」といったものを明らかにし、子供達に対して実施する予定の質問紙調査の予備的なデータとしようと考えたのである。また、このことは同一学園内における一貫教育のあり方を考える上でも貴重な資料になるのではないだろうか。

データの収集：椙山女学園の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教員を対象に、以下の３つの質問からなる質問紙調査を実施した。調査は全て無記名の自由記述式。

①望ましい人間像について

教え子に対して、『こういう人間になってほしい』とあなたが考える姿について、自由に記述して下さい。また、その理由についても教えて下さい。

②望ましくない人間像について

教え子に対して、『こういう人間にはなってほしくない』とあなたが考える姿について、自由に記述して下さい。また、その理由についても教えて下さい。

③教育上大切にしていること

上記の理念を実現するために、日々の教育のなかで、あなたが『大切にしていること』を教えて下さい。

分析の経過報告：椙山女学園の教員が望ましいと考える人間像、および望ましくないと考える人間像について記述された内容を、ＫＪ法を用いて分析を行っている。まだ分析途中（全体の25%程度）ではあるが、結果の一部を紹介すると以下のようである。

なお、回答は自由に記述する形式でなされたため、記述の中に含まれる意味内容によって回答を分類し、分析のデータとした。したがって、１つの文章であっても複数の内容が含まれている場合には、複数の記述に分割して分類を行った。

①望ましい人間像

もっとも多く記述されているのは〈優しさ、思いやりのある人〉というカテゴリーである。例えば、「思いやりがある人」、「周りの人に対して配慮（思いやり）のできる人」、「まわりの人への気づかい、思いやりの心を忘れない人」などである。

この他には、「さまざまな人間に柔軟に対応できる人」、「他者の多様な在り方を認められる人」、「他人との協調性」などの〈協調性のある人〉というカテゴリーや、「マナーを守れ、礼儀を知っている」、「モラル、徳の高さ、精神性を失わない人」、「基本的な生活習慣、マナーが身についている人」などの〈適切な倫理観をもっている人〉というカテゴリーも比較的多くの記述が分類された。

以上の３つのカテゴリーは、社会の中で円滑な人間関係を営む上で大切であろうと考えられるような特性であり、こういった点が教員により重視されている可能性が示唆されているようである。しかし、これらとは異なる視点からの指摘も多くなされている。

例えば、「それぞれの個性がある」、「人間らしさが十分発揮できるような人」、「生きる目標を明確に持っている人」のような〈個性を大切にしている人〉というカテゴリーに分類される記述も多かった。

これと関連するカテゴリーとしては、「自立する」、「自分のことは自分でできる」、「自立（社会的、精神的）し、自律（自己コントロールができる）する人」などの記述を分類した〈自立できている人〉

というカテゴリーや、「自分の役割を考え、社会の中で意欲的に頑張る」、「社会状況、認識を深めて、行動できる人」、「社会への関心やかかわりを持った生活ができる人」などの〈社会と対峙できる人〉というカテゴリーなど、『個人』として生きていくための力を重視する記述も多くあげられていた。

②望ましくない人間像

一方、望ましくない人間像では、「人の話が聞けない人」、「自分勝手な人」、「自分勝手な自己主義の人」、「自己中心的な人」などの〈利己的な人〉というカテゴリーがもっとも多かった。次いで、「周りの人に対して配慮（思いやり）のできない人」、「心が狭い人」、「他人を思いやれない人」、「人の気持ちが分からない人」などの〈思いやりに欠ける人〉というカテゴリーや、「マナーを守れない人」、「ルールを守らない人」、「心が貧しい人」などの〈倫理観に乏しい人〉というカテゴリーに分類される記述が多かった。

これらの記述は、上に記した『望ましい人間像』とは大局的な姿であるととらえることができる。また、個人として生きていく力を重視する意見も見られるが、「無責任な人」、「付和雷同する人」、「幼児性の強い人」、「人を殺める人」、「時代を逆行させることに加担するような人」など、望ましい人間像に比べ、若干意見が多様化しており、今後の詳細な分析を待つ必要がありそうである。

今後の展望：次年度は、今回の分析を受けて、子供達を対象とした質問紙を作成し、実施したいと考えている。まず大学生をテストケースとしながら、順次各学校の幼児・児童・生徒へと調査の範囲を広げ、最終的には発達過程を視野に入れつつ、理想自己の育ちの過程を概観することを計画している。

5．おわりに

平成19年度は、平成20年度の「学園一斉質問紙調査」に向けて、その準備期間として充分に位置づけられる一年であった。特に、学園研究費補助金(A)の交付を受け、国内外の出張や教員対象の意識調査が実現できたことは、次年度以降の本研究の方向性を大きく決定付けるものとなった。次年度以降も、尚一層の協力体制のもと、研究を進めて行きたい。

椙山人間学センターの皆様をはじめ、学園皆様のご高配に厚くお礼申し上げますとともに、益々のご指導・ご協力の程、忠心よりお願い申し上げます。

「ゲノム人間論」プロジェクト研究報告

2007 Annual Report
on the Genome and Human Research Project

椙山人間学研究センター客員研究員
杉浦　昌弘
Masahiro　Sugiura

Ⅰ．１９年度のプロジェクト・メンバー（五十音順）

音喜多　信博　（人間関係学部 准教授）
杉浦　　昌弘　（人間学研究センター 客員研究員、リーダー）
渡邉　　毅　（人間学研究センター 主任研究員）

Ⅱ．第１回研究会

１．日　時　　平成19年10月15日（月）
　　午後5時～6時
２．場　所　　人間学研究センター
３．出席者　　全員
４．　内　容

渡邊主任研究員から「進化総合説への疑問―人間の形質はどう決まるか―」と題して話題提供が行われた。内容は次の各項目でそれぞれ解説された。

1)　疑問の由来
　①ラマルクへの親近感（生物の主体性）
　②大学で徳田御稔に学ぶ
　　ダーウィン評価、ワイズマン批判
　③大学・大学院で今西錦司に学ぶ
　　ダーウィン（ネオ・ダーウィニズム）批判、競争と共存
　④セントラル・ドグマへの違和感
　⑤分子生物学と発生学

<参考文献>

D.S.ムーア（2003）「The Dependent Gene － The Fallacy of “Nature vs. Nurture”」（「遺伝子神話の崩壊」）
福岡伸一（2007）「生物と無生物のあいだ」講談社現代新書
田原総一郎・中村義一（2006）「RNAルネッサンス」医薬経済社

2)　形質の原因に関する考察
　①アリストテレス「動物発生論」以来
　　後成説vs.前成説（後成説に立つが証明不能）
　②前成説の隆盛と分裂
　　精子論者vs.卵子論者
　③カール・エルンスト・フォン・ベアー
　　「動物の発生について」（1827）
　　メス哺乳類に卵を確認
　　ひよこ胚の発生観察より後成説を主張
　④アウグスト・ワイズマン
　　「生殖質説」（1883）決定基の存在（前成説の復活）
　⑤ハンス・ドリーシュ（1891-）
　　ワイズマン批判、ウィルヘルム・ルーの発生機構学、受精２分割卵の切断
　⑥エルンスト・ヘッケル
　　「系統発生（進化）は個体発生の機械的原因である」（1866、1874）発生の目的論にルーが反発

3) 遺伝学の登場

①グレゴール・メンデル

混合遺伝説（パンジェネシス）への疑問

赤花と白花の交配実験：f1は混合

桃色同士の交配：f2で先祖返り

「形態形成要素（粒子）」を想定

②1900年 ド・フリースらによるメンデルの再発見

メンデルの粒子はワイズマンの「決定基」に酷似

③遺伝学の登場は前成説の復活となった

④1909年 ウィルヘルム・ヨハンセン gene（遺伝子）命名

メンデルが仮定した「遺伝的要素」を指す包括的用語

⑤トーマス・ハンス・モーガン

研究動機：メンデルの要素は染色体に存在しないことの証明。大型染色体を持つ実験動物、キイロショウジョウバエ

結論：遺伝子は染色体に関連した化学的構造

⑥DNAの研究

オズワルド・エイブリー：DNAが形態決定

ロザリンド・フランクリン：X線解析からのDNA構造分析

ジェームズ・ワトソン「二重らせん」、フランシス・クリック「熱き研究の日々」、モーリス・ウィルキンズ「第三の男」Dark Ladyロージィの陰蔽：ウォーレスの陰蔽に似るDNAの遺伝情報がすべて（セントラル・ドグマ）成立

4) 発生学

ハンス・シュペーマン（1935）「誘導」を報告、場の影響

DNA研究の発展と免疫学によって後退

5) 今こそ発生学「発生システム論的見解」が必要

この話題提供について、生命倫理学やゲノム学分野からの討論が行われた（詳細は本誌の同主任研究員の論文参照）。

Ⅲ．第２回研究会

１．日　時　　平成20年1月16日（水）
　　午後5時～6時30分

２．場　所　　人間学研究センター

３．出席者　　全員

４．内　容

１）昨年度に引き続き、音喜多研究員から、「遺伝子医療がはらむ論理的問題（2）－遺伝子治療－」と題して以下の項目について話題提供が行われた。

（1）遺伝子治療

臨床研究のインフォームド・コンセント（自己決定が保障されているか）アメリカでは、「遺伝子治療（gene therapy）」ではなく「ヒト遺伝子導入の研究（human gene transfer research）」と呼ばれる。

アメリカでは、単一遺伝子病の遺伝子治療よりも、がんなどの遺伝子治療が優先されている。（正義原理に抵触する？）

現在では体細胞への遺伝子治療に限定されている（安全性の観点から）。

将来は生殖細胞系列の遺伝子治療も認められるか？

ヒトゲノムそのものに不可侵の価値があるとする議論（「人間本性」を変えてはいけない、ヒト遺伝子の多様性を保護しなくてはならない、等々）とそれへの反対論

(2) 優生学をめぐる問題

優生学の歴史―フランシス・ゴールトン（1822-1911、英）が創始

第二次世界大戦前後における各国の優生政策

「逆淘汰」「負の淘汰」という考え方

人類の「自己進化」という考え方

(3) 遺伝子改良

「治療」を越えて「改良」（能力の強化：enhancement）へ？

消極的優生から積極的優生へ？

今日の優生学は、個人の自己決定にまかせられているという意味において、「リベラル優生学」などと呼ばれる。

治療は認めても、能力の強化は認められないという議論について

→治療、予防、強化の明確な区別は困難である。

アメリカ型のリベラリズム：

安全性さえ確立されれば、遺伝的強化を禁止する根拠に乏しい。

生殖技術の発展が市場にまかせられているというアメリカの現実（社会的合意の困難さゆえ？）

ヨーロッパ型の「公序」を重んじる考え方：

ヒトゲノムは、（象徴的な意味において）人類の遺産である（ユネスコ「ヒトゲノムと人権に関する世界宣言」1997年）

人体の尊重、人体の不可侵性、ヒトの種の完全性の保護（フランス「生命倫理法」1994年）

最近のリベラリズム内部での議論

遺伝子操作の結果が、子どもの「自律」「自己決定」を妨げるものであってはならない。

遺伝子操作は「汎用の善」の実現に限定されるべきではないか。（免疫力強化などの予防的措置、適度の知能の増強、寿命の延長など。）

(4) 問われている問題

自由主義社会では一般に、特定の社会や個々人が抱いている「価値」については言及せず、合意へ向けての手続きの公正さのみを問題とする。しかし、遺伝子操作の問題をめぐっては、それだけでは済まない。

自己決定権の限界はどこにあるのか。

自己決定権を凌駕するような原理・価値がありうるのか。あるとすれば、どのようなものか。

「人間本性（human nature）」とは何か、人間の「尊厳」とは何か？

社会のなかで共有されている「価値」に基づいて、人間の「自然」をデザインする必要性がある。

（例）人間のもつ「弱さ」が社会

的連帯、相互扶助の基盤となっている。

（この話題提供の詳細は本誌の同研究員の論文参照）

2）次いで杉浦研究員から、ヒトゲノムについて追加の話題提供がなされた。

下の表から明らかなように、ヒトゲノムは完全に解読されたと言われているが、実際は現在の技術で解読可能な領域のほぼすべてを解析したものである。さらに、“解読”という言葉から内容がわかった感じを得るが、ゲノムの化学構造（塩基配列）を決めたもので、どのような遺伝情報が入っているかを明らかにしたものではない。2～2.5万の遺伝子があると“推定”しているが、真に遺伝子として機能がわかっているのはその十分の一しかない。

これらの話題を合わせて、色々な角度からの討論が行われた。

ヒトゲノム計画

1990年　発足

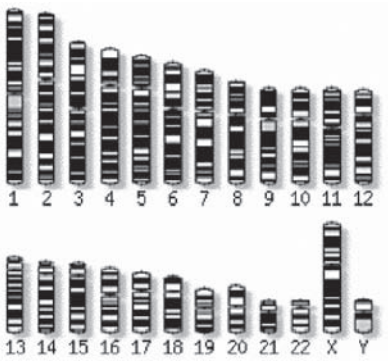
- 国際チーム（15年計画、公開）、セレラ・ジェノミクス社（特許化）
- ゲノム分析技術の進歩：塩基配列解析とコンピューター関連技術

2001年　概要配列（ドラフトシーケンス）

- ゲノムの全体像
- 3～4万遺伝子と推定

2003年　完全解読完了宣言

- ゲノム科学研究の基礎データ
- 28.5億、2.5万遺伝子と推定



ヒトの各染色体の解析成果の論文発表

年月	染色体番号	サイズ(Mb)[1]	領域(%)[2]	タンパク質遺伝子[3]
1999.12	22	34	70	545
2000. 5	21	34	75	225
2001. 2	概要(I)[4]	2,693	84	31,780
	概要(C)	2,654	83	39,114
2001.12	20	59	94	727
2003. 2	14	87	—	1,050
2003. 6	Y	13	20	78
2003. 5	7[5]	158	—	1,455
2003. 7	7	153	—	1,150
2003.10	6	167	—	1,557
2004. 4	13	96	—	633
	19	56	87	1,461
2004. 5	9	109	—	1,149
2004. 5	10	132	—	816
2004. 9	5	178	98	923
2004.10	ユークロマチン完成[6]	2,850	93	2~25,000
2004.12	16	79	79	880
2005. 3	X	150	—	1,098
2005. 5	2	237	—	1,346
2005. 5	4	186	—	796
2005. 9	18	76	—	337
2006. 1	8	146	—	793
2006. 3	11	135	—	1,524
2006. 3	12	131	98	1,431
2006. 3	15	82	—	695
2006. 4	3	195	98	1,436
2006. 4	17	79	—	1,266
2006. 5	1	224	—	3,141

注）1:塩基配列を決定した数(Mb=100万塩基)。 2:全長のうち決定した領域の概数。3:コンピュータによる単なる推定数。 4:全染色体を大まかに決定、(I)は国際チーム・(C)は民間会社による決定、推定遺伝子数が20%も違っている。 5:2グループが決定、推定遺伝子数が25%も違っている。6:全染色体で遺伝子が存在している部分(ユークロマチン)のほぼ全体を決定し、ほぼ全体像を発表、遺伝子が存在しないかあるいは少ないと考えられる領域(ヘテロクロマチン)は技術的に決定が難しいので未決定。

遺伝子医療がはらむ倫理的問題（２）
―遺伝子治療―[1)]

椙山女学園大学人間関係学部
音喜多　信博
Nobuhiro　Otokita

前回の論文「遺伝子医療がはらむ倫理的問題（１）― 遺伝子診断 ― 」[2)]においては、遺伝子診断のはらむ倫理的問題について概観した。そこでは主として、診断の利用者の「自己決定」が認められる範囲いかん、という観点から考察をおこなった。

今回は「遺伝子治療」について論ずる。「遺伝子治療」とは、一般に、ヒトの遺伝子を操作することによって病気を治療することである。

Ⅰ　遺伝子治療の方法、効果、安全性

遺伝子治療は、1970年代に始まった遺伝子組み換え技術によって可能となった。遺伝子組み換え技術は、当初は微生物や植物、動物を対象としたものであった。たとえば、微生物や動物の遺伝子を改変して、ヒトに有用な物質を作らせる等のことができる。また、植物の遺伝子を改変することによって、ある種の気候条件に適している、あるいは害虫に強いなどといった特性をもった作物を作り出すといったことも実用化している。

このような遺伝子操作の技術を、ヒトを対象とした医療に応用しようというわけである。ただし、以下に詳しく見るように、現段階での遺伝子治療は、直接的にヒトの遺伝子を組み換えているわけではないことに注意すべきである。

世界ではじめての遺伝子治療は、1990年にアメリカでADA欠損症という免疫疾患を対象に実施された。アメリカでは、2003年までに4000人以上の遺伝子治療実施計画が登録されているという（ポスト 2007）。日本で最初の遺伝子治療は、1995年に北海道大学で実施された。2001年8月までの日本の実施対象患者は、27人である（樫島 2001）。このように日本では実施数はわずかであり、現在のところ実験（臨床研究）の段階（第一相か第二相）にあるにすぎない。日本で治療対象となっている病気は、ADA欠損症、各種のがん、エイズ、動脈硬化症などである。

遺伝子治療においては、およそ60兆個ある患者の細胞のひとつひとつに操作を加えるわけにはいかない。そこで、ヒトに有用な遺伝子を無害化したウィルスに組み込む（導入する）操作をしたのちに、そのウィルスをヒトの体内に送り込むという手法をとる。ヒトの細胞がそのウィルスに感染することによって、ウィルスに組み込まれた遺伝子がヒトの細胞に組み込まれるというわけである。この場合のウィルスのような遺伝子の運び手を「ベクター」と呼ぶ。

遺伝子治療の方法には、「ex vivo」と「in vivo」とがある。「ex vivo」とは、患者のリンパ球などを体外に取り出し、体外で

ウィルスに感染させて、それを再び体内にもどすという手法である。また、「in vivo」とは、ウィルスを直接患者の患部などに投入するやり方である。

いずれにせよ、現段階では、患者のもっている遺伝子の欠陥部分を正常な遺伝子に置きかえているわけではない。そうではなく、異常な遺伝をそのままにしておいて、患者に欠けている遺伝子や、患者のなかで働きを高めたい遺伝子の「付加」によって治療をおこなっている（青野 2000、貝谷 2001、森 2001）。遺伝子の組み換えを直接おこなっているのはベクターに対してであって、患者の細胞に対してではない。ベクターがうまく患者の細胞の染色体に遺伝子を組み込んでくれればよいのであるが、必ずしもうまくいくとは限らない。

効果についてであるが、日本での第一例目のADA欠損症の遺伝子治療は効果があったと言われている。しかし、他の実施例においては、効果ははかばかしいものではないようである。そもそも、遺伝子治療は、他の既存の治療法と並行しておこなっているため、どこまでが遺伝子治療の効果なのか判然としないということもある。

安全性に関する主たる問題としては、つぎのようなものがある。たとえば、導入された遺伝子が被験者のゲノムの間違った場所に統合されてがんを引き起こすとか、ベクターであるウィルス自体が患者における細胞障害や免疫反応を誘発する、などといった危険性がある。そのほかにも、導入された遺伝子が意図せぬかたちで生殖細胞に引き継がれたり、遺伝子を担ったウィルスが野生化して有害なものとなったりする危険性も指摘されている。

具体的な事故としては、1999年にアメリカで、ベクターとして用いられたアデノウィルスが被験者に致死の免疫反応を引き起こし、被験者が死亡した（ゲルシンガー事件）。この際、研究実施施設がさまざまなガイドライン違反を犯したり、有害事象の報告義務を怠ったりしていたことが明らかになり、国による監視体制の強化につながった。また、2002年にはアメリカで、B型血友病の遺伝子治療研究において、ベクターが原因と見られる肝機能障害の徴候が見られたので実験が中止された。2003年にはフランスで遺伝子治療が原因と考えられる白血病が発生した（ポスト 2007）。しかしながら、日本では遺伝子治療によって患者に甚大な健康被害があたえられたという報告はない。

このように、遺伝子治療は開始当初は「究極の治療」という期待をもたれていたが、現実にはまだ初歩的段階にある。基礎研究が十分になされないままに、臨床応用を急ぎすぎているという意見もある（柳澤 2002）。

新たな遺伝子導入法として、ベクターとしてウィルスを使わない方法も考案されている。たとえば、裸のDNAを細胞組織のなかに直接注入する、人工染色体を開発して組織に注入する、などである。これによってベクターに由来する問題は解消されるであろうが、また新たな安全性に関する問題が指摘されている。

Ⅱ　遺伝子治療にともなう倫理的問題

1）臨床研究の指針とインフォームド・コンセント

遺伝子治療にともなう倫理的な問題としては、つぎのようなことが言われている。

遺伝子治療を希望する患者は、他に決定的

な治療手段もなく、藁にもすがりたい思いであろう。そのような患者を臨床研究に参加させるにあたっては、遺伝子治療に過度の期待を抱かせて参加を促すことのないようにしなければならない。

そもそも、「遺伝子治療」ということば自体が誤解を招くものである。これまでのところ、この臨床研究によって効果があったとする報告はごくわずかである。臨床研究としては、効果云々よりも、安全性を確認している段階にすぎない。アメリカでは、「遺伝子治療（gene therapy）」という言い方を改め、「ヒト遺伝子導入の研究（human gene transfer research）」という言い方をしているようである（ポスト 2007）。

また、この臨床研究に参加する患者（被験者）を選ぶ基準はどのようなものであろうか。この研究から何らかの臨床的な利益が期待できるとして、誰がそれにアクセスできるかということが問題である。

遺伝子治療と言えば、われわれはすぐに単一遺伝子病の治療を思い浮かべるが、アメリカにおいて、2002年時点で認可を受けたヒト遺伝子導入実施計画のうち、単一遺伝子病に関連するものは、わずか10%であるという（ポスト 2007）。つまり、ADA欠損症など初期の治療例のあと、すぐさま研究の中心はがんなどの非メンデル系疾患に移行していったのである。ほとんどの単一遺伝子病はきわめてまれなものであり、最終的な治療市場は小さいので、より大きな治療市場が期待できるがんなどの研究を研究者たちが選択していると言われている。このことの背景には、私企業がヒト遺伝子導入研究のスポンサーとなっており、その商業的利益を考慮せざるをえないという現実があると見られる。

これは、研究においてスポンサー企業への財政的な依存が大きいアメリカで顕著に見られる傾向であろうが、日本でも研究の自由が確保されるような仕組みが必要であろう。これから遺伝子治療が一般的になっていくものと仮定して、限られた医療資源の公平な分配という観点から見た場合、特定の疾患の患者たちが見捨てられていくということがあってはなるまい。

さて、遺伝子治療はいまだ実験段階にあり、技術の安全性が確立された医療ではないので、通常の医療よりも徹底したインフォームド・コンセントが必要である。期待される治療の効果や副作用の危険性、臨床研究への参加はいつでも取り消すことができること、などをきちんと説明する必要がある。

日本の場合、遺伝子治療については、法令に基づかない行政指導指針という形で規制されている。それは、「遺伝子治療臨床研究に関する指針」（平成14年3月27日、文部科学省、厚生労働省告示第1号）である。それによれば、遺伝子治療の対象は、つぎの三つの要件すべてに該当するものに限られる（第１章第３）。

1　重篤な遺伝性疾患、がん、後天性免疫不全症候群その他の生命を脅かす疾患又は身体の機能を著しく損なう疾患であること。
2　遺伝子治療臨床研究による治療効果が、現在可能な他の方法と比較して優れていることが十分に予測されるものであること。
3　被験者にとって遺伝子治療臨床研究により得られる利益が、不利益を上回ることが十分予測されるものであること。

さらに、遺伝子治療の実施前には、実施施

設は実施計画を立て、施設の「審査委員会」においてその計画の医療上の有用性と倫理性を総合的に審査しなければならない。その結果を踏まえて、実施施設は実施計画を厚生労働大臣に届け出て認可を得る必要がある。厚生労働大臣は、必要に応じて「厚生科学審議会」の意見を求めることがある。以上のような申請と認可のプロセスを経て、遺伝子治療の臨床研究はおこなわれる。(実施施設が大学である場合は、文部科学省への届け出も必要である。)

2)体細胞への治療と生殖細胞系列への治療

さて、現在までにおこなわれてきた遺伝子治療はすべて体細胞への治療である。体細胞への介入の結果は、治療を受けた患者一代だけの問題であり、子孫に受け継がれることはない。これに対して、生殖細胞系列への介入の結果は、子孫へと伝えられる。したがって、単一遺伝子病の患者に対して生殖細胞系列の遺伝子治療を施し、一度それが成功するならば、その患者の子孫代々まで病気の苦しみから解放されるということになる。

動物実験における生殖細胞系列への遺伝子操作は、すでに1980年代前半から、いくつかの成功例がでている。ウィルスをベクターとして受精卵に外来の遺伝子を組み込む方法のほかに、より効率のよい方法として、直径数ミクロンのピペットでDNAを直接受精卵に注入する顕微注入法(マイクロ・インジェクション)も開発された。この技術を用いた動物実験の有名な例として、成長ホルモンを産出する遺伝子をマウスの受精卵に余分に入れるという操作をしたところ、生まれたマウスは通常の二倍の大きさに育ったというものがある(米本 1985)。このような技術は、原理的にはヒトにも応用可能である。

重篤な遺伝病、たとえば常染色体優性の遺伝病であるハンチントン病の発症者がいる家系の人々には、日々発症の可能性におびえながら暮らしている。親が発症すれば、その子が発症する確率は2分の1である。この病気は、9割が20歳から60歳の間に発症し、40歳までに発症する人は半数ほどだという。したがって、自分が原因遺伝子をもっているかどうか知らずに子をもうけてしまうこともある。逆に、自分の原因遺伝子が子に遺伝することを恐れて、子をもたない選択をする人もいる。現在では遺伝子診断ができるので、自分が原因遺伝子をもっているかどうかは確かめることができる。

こういった遺伝病の原因遺伝子をもっている人たちが健常な子をもつためには、とりあえず受精卵診断(着床前診断)や出生前診断で胚や胎児を選択するという手段がある。しかし、このような手段の利用には、胚や胎児の道徳的地位の問題や障害者差別といった多くの倫理的問題がともなうということは、すでに前稿において確認した。これに対して、生殖細胞系列への遺伝子治療には、さしあたりこのような倫理的問題はともなわないのである[3)]。

しかしながら、逆に、遺伝子改変の結果、何らかの問題が引き起こされれば、その問題も子孫代々へと引き継がれることになる。そのため、遺伝子操作の技術が初歩的なものにとどまっている現時点では、「安全性」という観点から、ヒトの生殖細胞系列への介入は世界的に禁止されている。日本でも、先述の「遺伝子治療臨床研究に関する指針」において、生殖細胞系列への遺伝子治療は禁止されている(第1章第6)。

すでに述べたとおり、外部から注入された遺伝子が受精卵の染色体の間違った部分に組み込まれれば、予期せぬ結果が生じることがある。たとえば、先述のマウスの実験においては、遺伝子を注入されたあるマウスの子孫は通常の40倍の発ガンを示したという（森岡1995）。また、こういった実験の成功に到るまでには、多くの受精卵が使用され、多くの失敗例が生み出されたことであろう。倫理的に考えて、現段階の技術水準では、生殖細胞系列の遺伝子治療をヒトに応用することは許されない。

しかしながら、ここでは仮定としての話をしてみたいのだが、将来、生殖細胞系列へ外部から遺伝子を導入する技術がかなりの確率で成功するようになり、がん化などの危険性も克服された場合はどうするのであろうか。その場合、安全性以外に生殖細胞系列への介入を禁止すべき理由があるかどうか、以下で考えてみたい[9]。

a)「不自然」だからおこなうべきではないという議論

そもそも遺伝子治療は「不自然」だからおこなうべきでないという意見がある。あるいは、遺伝子治療の批判者によってよく使われる常套句として、遺伝子治療は「神を演ずる」ようなものである、というものがある。（これは、生殖細胞系列への治療のみならず、体細胞への治療についても当てはまりうる批判であろう。）

この場合、何をもって「不自然」と言うかが不明確である。そもそも、これまでの医療の発達において、新しい技術が臨床に使われるようになったときは、すべて「不自然」であると言われてきた。種痘しかり、体外受精しかりである。しかし、そういった技術の有用性が明らかになるにしたがって、人々の抵抗感は薄れていった。その意味では、遺伝子治療だけが特別であるわけではない。単に「自然ではない」というだけでは、いまや抑止力にはならず、もっと遺伝子治療の特殊性を見据えた検討が必要である。

「自然性」に基づく議論をもう少し詳細に見てみよう。

これに関連して、遺伝子自体のもつ「内在的価値」に訴える議論がある。それによれば、種としてのヒトの遺伝子プールそのものが、ひとつの絶対的「価値」をもつ。現在のヒトの遺伝子プールはおよそ38億年という生物進化のプロセスの結果であり、長い自然淘汰の過程を経て、人類は地球環境に適応するように進化してきた。現在のヒトの遺伝子プールは、このようにして形成されてきた「人間本性」を規定しているのである。したがってヒト遺伝子は現在の人間が変更を加えてよい性格のものではないのであり、ヒトの生殖細胞系列への介入は禁止されるべきである。

このような議論に対しては、以下のような反論がある。現在のヒト遺伝子プールそのものに絶対的な価値があるというのは誤りであって、それは人間の種の維持や繁栄に有益である限りにおいて価値があると言うべきである。DNAの塩基配列自体は、長い進化の過程において変化を被っているのであり、不変なのではない。したがって、いわゆる「人間本性」も永遠不変のものではなく、変化するものである。そのような目で見れば、（さまざまな遺伝病の存在が示しているとおり）ヒト遺伝子プールの現在の状態が人類にとってもっとも望ましい状態であるとは限らないし、真の「人間本性」を規定していると言うこともできない。どの段階での遺伝子プールの状

態が人類にとって最善なのか、あるいは真の「人間本性」を定義することになるのか、ということは必ずしも明らかではないのである。

さらに、かなり極端な想定に基づく、つぎのような反論もある。もし、特効薬のない疫病（HIVや新型インフルエンザのような）が全世界的に蔓延したとして、遺伝子操作によって人類の免疫力を高めるしか人類が生き残っていく手段がないとする。この場合にも、生殖細胞系列への遺伝子操作は許されないのであろうか。この場合、人類の生存を図るという目的は、現在のヒト遺伝子そのものがもつという内在的価値によって凌駕されるのだろうか。この場合は、やはりリスクと利益との比較考量をして、生殖細胞系列の遺伝子操作をおこなうということがより倫理的な決断なのではないか。

以上のような議論を見ると、現在のヒト遺伝子の状態に絶対的な価値を認めて、その変更を一切認めないという議論は擁護できないように思われる。

b）ヒト遺伝子の「多様性」を保持すべきだという議論

つぎに、生殖細胞系列の遺伝子治療をおこなえば、種の存続のために必要なヒト遺伝子の「多様性」が失われてしまうので、この技術は禁止すべきであるという議論がある。

この場合、よく例にあげられるのは、鎌状赤血球症である。鎌状赤血球症は、アフリカ系の黒人に多い単一遺伝子病であり、赤血球が鎌状であるために重い貧血になり、効果的な治療法もなく、重症の場合は若くして死亡することもある。そのため、アメリカでは1970年代にスクリーニングの対象となり、それがまた黒人に対する社会的差別と結びついたという歴史がある。しかしながら、この鎌状赤血球症の原因遺伝子の保因者は、マラリアに対する耐性をもっていることが明らかになっている。この遺伝子がアフリカ系黒人のあいだに多いということは、ある適応的な意味をもつのである。この例からも分かるように、現時点での人間の限られた科学的知識のみをもってヒトの遺伝子プールに変更を加えることは、ヒト遺伝子の多様性を失わせ、ひいては将来の地球環境の変化などに対応して種としてのヒトが生き延びていく可能性を制限してしまうことになるかもしれない。

しかし、このような見解に対しては、つぎのような反論がある。

①個々人が病気の遺伝子を除く処置をした程度で、遺伝子プールの「多様性」が失われることはないという、科学者からの反論がある。

②現に鎌状赤血球症などの重篤な疾病に苦しんでいる患者や、保因者のいる家系の人に対して、遺伝子治療という選択肢をあたえないということは、医療アクセス権の侵害である。

以上のようなことを根拠にして、生殖細胞系列への遺伝子治療を認めようという立場の論者たちは、生殖細胞系列へ介入することによってもたらされる可能性のある害（リスク）と利益とを比較考量して判断することを要求する。私自身も、生殖細胞系列への遺伝子治療は、それを未来永劫、絶対的に禁止する根拠に乏しいと考えており、この「比較考量」の考え方に賛成である。

Ⅲ　遺伝子治療の将来的問題

しかしながら、念のため強調しておきたいが、私は生殖細胞系列への安易な介入を認め

ようというわけではない。そもそも、安全性が確立されるとは、何を基準に考えるのか。たとえば、一代目の子どもに問題が起こらなかったとしても、数代のちにその影響がでることもありうる。また、最近では、同一の単一遺伝子病とされてきたものでさえ、病因遺伝子内の塩基配列は多様であることが明らかになったり、また、発症にはDNA以外にも周囲のタンパク質などの存在が関与しているということが疑われたりしている。とすれば、生殖細胞系列への遺伝子治療をおこなったところで、リスクを払うほどの効果が得られるのかどうかについても、慎重な検討が求められよう。

さらに、生殖細胞系列への遺伝的操作の技術は、「治療」を越えて遺伝子の「改良」、「増強」（enhancement）へと使用される可能性もある。つまり、これまでの遺伝子治療が、「望ましくない」遺伝の除去をめざすものであったのに対して、将来的にはこの技術は「望ましい」遺伝の増強という目的のために用いられる可能性があるのである。「望ましい」遺伝の増強とは、たとえば知能や記憶力の強化、体格の改良、審美的属性（瞳や髪の毛の色など）の改良、寿命の延長、免疫力の強化、性格（温厚で協調性の高い性格など）の改良、などといったものがあげられる。もちろん、このような属性に対応する遺伝子は現在のところほとんど発見されていない。さらに、こういった属性が単一の遺伝子で決定されているとは考えにくく、また、その発現には遺伝的要因だけではなく環境的要因が大きく作用していることは言うまでもない。しかしながら、すでに現代の遺伝学者や倫理学者は、将来の遺伝子技術の発展を見越して、その是非を検討しはじめている。

ヒトを対象とした遺伝子操作の技術は、いわゆる「内なる自然」の改変を可能とするものであり、しかも現在のみならず将来世代にわたっての改変をもたらすものである。つまり、人間性そのものの改変をも可能とする技術である。もちろん、これまでの医療も「内なる自然」に手を加えてきたが、それは表現型の変更にとどまるのに対して、この技術は直接的に遺伝子型の改変をめざす。しかも、第二次世界大戦前後に世界を席巻した優生学的な施策、つまり配偶者選択や断種（不妊手術）によって望ましい遺伝のみを残すといった施策とは、比べものにならないスピードで展開していくことが予想される。一度間違った方向に進めば、取り返しのつかないことになる恐れもある。やはり人間の英知の限界に思いを致すべきだと言うしかない。

ヒトに対する遺伝子操作がどこまで認められるべきかという問題を考えるうえでは、単に「自律（自己決定）」の原理のみに基づいて判断することはできない。それに加えて、そもそも「人間」とは何か、犯すことのできない人間の「尊厳」とは何か、といった人間学的・文明論的なテーマについて、ねばり強い議論を重ねていく必要があるのである。

【注】

1）本稿は、平成20年1月16日に開催された「ゲノム人間論」プロジェクト第2回研究会の発表原稿の一部に加筆・修正を施したものである。

2）『椙山人間学研究』第2号、椙山人間学研究センター、2007年、87－95頁。

3）実際には、受精卵への遺伝子の組み込みがうまくいくまでの間に、失敗作として複数の受精卵が廃棄されたり、組み込みがうま

くいったことを確認するために胎児診断をして、場合によっては中絶が選択されたりすることもあると思われる。だが、以下で述べるように、ここではあくまで技術の安全性が相当程度まで確立されたものと仮定して議論を進める。

4）以下の議論を展開するにあたっては、池田・金森 2001、金森 2005、桜井 2007、シルヴァー 1998、ライス・ストローハン 1999、Warren 2002 などを参照した。

【参考文献】

青野由利（2000）『遺伝子問題とは何か：ヒトゲノム計画から人間を問い直す』新曜社

池田清彦・金森修（2001）『遺伝子改造社会 あなたはどうする』洋泉社新書 y

貝谷久宣・日本筋ジストロフィー協会 編（2001）『遺伝子医療と生命倫理』日本評論社

金森修（2005）『遺伝子改造』勁草書房

桜井徹（2007）『リベラル優生主義と正義』ナカニシヤ出版

シルヴァー , リー・M（1998）『複製されるヒト』（東江一紀・真喜志順子・渡会圭子 訳）翔泳社

橳島次郎（2001）『先端医療のルール：人体利用はどこまで許されるのか』講談社現代新書

ポスト , スティーヴン・G 編（2007）『生命倫理百科事典』（生命倫理百科事典翻訳刊行委員会 編）丸善

森健（2001）『人体改造の世紀：ヒトゲノムが切り開く遺伝子技術の功罪』講談社ブルーバックス

森岡正博（1995）「生殖系列細胞の遺伝子治療をめぐる倫理問題」、京都大学大学院文学研究科倫理学研究室ホームページ「ヒトゲノム計画に関する倫理的問題」http://www.ethics.bun.kyoto-u.ac.jp/genome/genome95/31morioka.html、2008 年 1 月 15 日取得

柳澤桂子（2002）『遺伝子医療への警鐘』岩波現代文庫

米本昌平（1985）『バイオエシックス』講談社現代新書

ライス , マイケル、ストローハン , ロジャー（1999）『生物改造時代がくる：遺伝子組換え食品・クローン動物とどう向きあうか』（白楽ロックビル 訳）共立出版

Warren, Mary Anne（2002）“ The Moral Status of the Gene”, in: Burley,J. & Harris,J.(ed.), *A Companion to Genethics*, Blackwell, pp.147－157.

「遺伝子治療臨床研究に関する指針」（平成14年3月27日、文部科学省、厚生労働省告示第1号）、『資料集 生命倫理と法』（資料集 生命倫理と法編集委員会 編）、太陽出版、2003年、216－222頁

「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告

2007 Annual Report
Japan and the Asia culture, and a human being Research Project

椙山女学園大学文化情報学部
荻野　恭茂
Yasushige Ogino

Ⅰ．平成19年度のプロジェクト・メンバー

飯塚　恵理人	文化情報学部准教授
梅野　きみ子	文化情報学部教授
大浦　誠士	国際コミュニケーション学部准教授
荻野　恭茂	文化情報学部教授
加藤　益幹	国際コミュニケーション学部教授
季　増民	文化情報学部教授
武山　隆昭	教育学部教授
鄭　麗芸	文化情報学部准教授
冨田　和子	現代マネジメント学部助手
二宮　俊博	文化情報学部教授
樋口　謙一郎	文化情報学部講師
森本　伊知郎	文化情報学部准教授

Ⅱ．研究発表

平成19年度4月23日（月）17:00～18:00 椙山人間学研究センターにて、各メンバーの出席のもと、まずそれぞれの自己紹介と専攻分野の説明を行い、その結成を確認した。さらに今後の活動方針としては、それぞれの研究領域の成果を椙山人間学研究センターの人間講座の場を借りて、逐次、数年に亘り継続的に発表していくことをメインとすることとした。第1回目として平成19年9月25日（月）17:00～18:30椙山人間学研究センターにて森本伊知郎文化情報学部准教授による「江戸時代のやきもの流通－江戸と名古屋・大坂の比較－」の講演を行った。また、第2回目として平成19年12月10日（月）17:00～18:30　椙山人間学研究センターにて梅野きみ子文化情報学部教授による「『源氏物語』の描く人々－光源氏を中心に－」の講演を行った。

Ⅲ．研究活動

上記の人間講座と並行して本プロジェクトメンバーの梅野きみ子教授を中心とする日本文化研究の活動に以下のものが見られた。

・をかしの会（同好会）
毎週水曜日昼休みに同好会「をかしの会」（梅野きみ子教授顧問）の学生が、本学卒業生（2名）と一般市民（1名）とともに、椙山人間学研究センター研究室において、『蜻蛉日記』を読んできた。

・名古屋国文研究会
梅野きみ子教授の主催する名古屋国文研究会のメンバー（名古屋・京都近隣から女性研究者20名程）が、平成19年4月7日（土）、6月9日（土）、7月7日（土）、8月4日（土）、8月24日（金）、9月8日（土）、11月10日（土）、12月1日（土）、平成20年1月12日（土）、2月13日（水）、2月23日

（土）、3月1日（土）にそれぞれ午後2時から6時まで椙山人間学研究センターＧ階会議室において、『風葉和歌集』の研究をし、その成果を会報5号・6号として発刊した。

「環境と人間」平成19年度（2007年度）活動報告

Research report of the Project-*Environmental Education* in 2007

椙山女学園大学教育学部
野崎　健太郎
Kentaro　Nozaki
椙山女学園高等学校
原　暁子
Akiko　Hara
椙山女学園中学校
村上　聡
Satoru　Murakami
椙山女学園人間学研究センター
「環境と人間」プロジェクト研究員
小田　奈緒美
Naomi　Oda

研究の立ち上げ

本研究プロジェクトは、平成19年度より始まった。4月23日に第1回の会議を、野崎健太郎、原暁子、村上聡の参加で行い、研究方針を「環境教育」に定めた。その後、5月には、椙山女学園大学大学院博士後期課程を修了し、本学第2号の博士となった小田奈緒美が研究員として加わった。本研究プロジェクトの研究員は、勤務地が星ヶ丘と山添に別れており、さらに、原、村上両研究員は、高等学校、中学校の教諭で時間の制約があるため、当初は議論を発展させることが困難であった。そこで、文書を交換することで計画案を練り、2つの研究課題を行うこととした。以下、2つの研究課題の結果の概要について個別に報告する。

研究課題1. 水を材料とした環境教育の教材開発とその実践（野崎・原・村上）

目　的

人間の体は60 % 以上が水であり、乳幼児期にはその比率が80 % にも達する。この命を支える水は、世界では農業用水の使用量の増加に伴って量の不足、特に乾燥地域における地下水の枯渇が心配され、一方日本では、水源の汚染が改善せず、質の低下が進行している。20世紀は石油・石炭が世界を動かす資源であったが、21世紀には、水が石油にとってかわるとさえ言われている。そこで、本研究プロジェクトでは、水が直面している環境問題を、体験型で学べる教材の作成を目指した。教材が“体験型”である理由は、環境問題の解決に向けて実践する意識を高めるためには、環境教育における体験が欠かせないことを先行研究が示しているためである。

内　容

（1）　「利き水」の教材化と実践

「利き水」は、被験者が、中身を知らされない複数の水を飲み、おいしいと感じる水を選ぶ試験である。先入観なしに水の味を比較できるため、水道水のおいしさ、安全性を広めたい水道局の催し物で良く行われている。さらに、ペットボトルに詰めて販売されるミネラルウオーターの拡大による、ごみの増加

を訴える環境教育の教材としても行われている。

このように広く行われている「利き水」であるが、その実施方法、結果についてまとめた研究報告は、我々が探した限り、存在しないようである。そこで本研究では、環境教育の教材としての「利き水」を確立し、それを中学校の総合学習の時間「環境」および、大学の「環境教育」の授業で実践することを試みた。

各研究員の役割は次の通りである。野崎は、教材化全体の手順確立と大学での実践、原は、高等学校のオープンキャンパスで「利き水」を行っていることから技術的な支援、村上は中学校の総合学習の時間で「環境」を担当しており、中学校での実践をそれぞれ担当した。

5月21日には、山添学舎において、研究員全員で野崎が計画した手順で「利き水」を体験した。飲み比べた水は、水道水（星が丘学舎）、水道水（豊田市）、市販のボトル水（国産：軟水）、市販のボトル水（輸入：硬水）である。水の温度は15度程度に設定し、匂いのない陶器の茶碗を用いて「利き水」を行った。その後、パックテストを用いて硬度の測定を行い、最後に結果と改善点について議論した。

村上は6月に中学校で、野崎は10月に大学の授業「人間環境論Ⅱ（人間関係学部）」で、それぞれ「利き水」を実践した。中学校の結果では、中学生は味覚が鋭敏で、当初、考えていたような結果を得られなかったことが報告された。大学での結果は次の（2）で紹介する。今回の結果から、「利き水」を実施する際には、飲み比べる水、特に水道水の準備が大切であることがわかった。これは水道水は、建物によって貯水槽や配管の状態が異なり、それが味（臭い）に大きな影響を及ぼすからである。野崎は、7月10日に甚目寺町で婦人会対象の生涯学習企画「水道水はまずいのか」を担当した。そこでは、中学校での実践結果を踏まえて改良を加えた「利き水」を行い、これは大成功に終わった。

（2） 人文社会学系の大学における講義への実験の導入とその効果

野崎は、2002年に人間関係学部へ環境学関係の教科担当として赴任して以来、授業の中に“体験”を取り入れる授業形態を模索してきた。2007年度は、「環境と人間」プロジェクトの担当になったことで、これまでの集大成的な授業を試みた。対象としたのは人間関係学部人間関係学科で後期に開講されている「人間環境論Ⅱ」である。この授業の目的は、人間の体外で起きている自然環境の変化を学ぶことである。そこで、「水」をキーワードにし、体験型の授業展開を計画・実践した。この授業の実質的な受講生数は29名であった。

授業の中で以下の4つの実験を行った。まず1つ目は、（1）で確立した「利き水」である。結果は、半数以上の学生が水道水（日進もしくは豊田）を最もおいしく感じるという結果で、残りは国産のボトル水（軟水）をおいしいと答えた。つまり、水道水が意外にもおいしいことが受講生諸君に実感されたようであった。2つ目は、“水のきれいさ”を考えてもらう実験を行った。4種類の白い粉末を入れたビーカーそれぞれに水を加えると1つだけが白濁し、残りの3つは透明になる。この後、視覚、嗅覚、電気伝導度、パックテストのCOD（化学的酸素要求量）という指標を用いて“水のきれいさ”が視覚のみで捉えることが出来ないことを実感してもらった。3つ目は、家庭排水が自然の水域に及ぼす影

響をBOD（生物化学的酸素要求量）実験で確かめてもらった。具体的には、日進学舎の近隣にある弁天池の水に、みそ汁とコーラを添加し、水中の酸素が減少する傾向を調べてもらった。その結果、わずかな量（0.2 %）のみそ汁とコーラが、自然水域の酸素を減らすことが明確に表れており、受講生諸君は驚いていた。4つ目は、土壌の水の吸収速度の比較を野外で行った。これは、水資源を安定的に確保するには、森林が必要であることを理解させることが目的である。実際に森林土壌は水の吸収速度が速く、荒地では全く水を吸収しないことがわかった。

この授業では、講義と実験の割合が1:2である。この効果を、授業アンケートの結果を用いて検討するのが残された課題である。昨年、行った予備的な調査では、講義に実験を導入すると受講生の満足度が高まる傾向が出ていた。

（3） 人文社会学系の大学生への河川実習

野崎は、2003年以来、実際の自然環境を身体で感じ取ってもらうために、人間関係学部で開講されている「ケースメソッドⅠ」で合宿形式の河川実習を行っている。この企画も1年ごとに改良を加え、2007年の授業で完成型となった。合宿は、長野県木曽町福島町にある京都大学理学部付属木曽生物学研究所を利用して3泊4日で実施する。1日目は講義と沢登り、2日目は中規模河川の調査、3日目は大規模河川の調査と科学実験、4日目はレポート作成である。最初は水生生物を「キモい」と言っていた受講生が、最後には「けっこうカワイイ」などと発言するのを聞くと、実習の効果があると感じられる。この合宿に参加した3年生が、2008年度には卒論学生として野崎の指導を希望しており、この合宿の教育効果を探る研究を行う予定である。

学会発表

野崎健太郎（2007）人文社会学系の大学における体験型の陸水環境教育－講義への実験の導入とその効果－. 日本陸水学会第72回大会, 茨城大学, 2007年9月10日～13日, 水戸.

野崎健太郎（2007）流域圏の自然共生と環境教育－人文社会学系の大学生への河川実習－（招待講演）. 応用生態工学会第11回大会「伊勢湾流域圏ミニシンポジウム～自然共生に向けて」, 名古屋大学, 2007年9月15日, 名古屋.

一般向けの発表

野崎健太郎（2007）水道水はまずいのか. 平成19年度前期中央公民館生涯学習講座, 甚目寺町教育委員会, 生涯学習社会教育係（甚目寺町中央公民館内）, 2007年7月10日.

野崎健太郎（2007）食料危機は水の危機～水を浪費する農業～. 第19回愛知サマーセミナー, 名古屋経済大学高蔵高等学校・中学校, 2007年7月21日.

研究課題 2. 高等学校家庭科における環境教育の可能性（小田・野崎）

環境教育の理論では、高等学校は、環境問題の知識を得ることから、その解決に向けて、行動に移すことが求められる時期とされている。ところが、現在、高等学校で環境教育的な内容を扱う「理科」「社会」は大学受験科目であるため、環境教育に多くの時間を割くことは、現実的に不可能である。環境教育を扱える時間として期待されていた「総合学習の時間」も現状では有効に機能しているとは

言えない。そこで、我々は、「家庭科」という科目に着目した。それは生活の科学である家庭科では、身近な話題で環境問題を理解させられる可能性が高いと感じるからである。例えば、地球温暖化の抑制に向けて個人が実践できるエネルギー節約、消費行動の改善は家庭科で教えられることである。

本研究は、実際に高等学校の教壇に立つ小田を中心に進めた。内容は以下の2点である。1つ目は、教材研究で、現在、高等学校で用いられている教科書の中で環境問題分野はどれほどあるかを調査した。その結果10～15%のページ数が割かれており、家庭科で環境問題を扱うことは十分可能であると判断された（小田・野崎　投稿中）。2つ目は、実際に授業を担当する教師の意識調査である。これは聞き取りとアンケート郵送による調査を、現在、行っているところである。なお、聞き取り調査の一部は、平成19年度「椙山人間学研究」に発表した。

成果発表

小田奈緒美・野崎健太郎　平成19年に出版された日本の高等学校家庭科教科書における環境教育分野の解析（投稿中）.

小田奈緒美・野崎健太郎（2008）　高等学校家庭科における環境教育の現状－2人の教師への聞き取り調査－. 椙山人間学研究P98～103

今　後

以上の研究を行い、一応、1年間で当初の目的をほぼ達成できたと考えている。今後、この研究プロジェクトを進めていくには、現在の各研究員の立場では、特に時間的制約が大きい。そこで、2007年度をもって、現在の研究員体制を解散する予定である。

高等学校の家庭科における環境教育の現状 ―2人の教師への聞き取り調査―

Present status of the Environmental Education in Home Economics of Japanese Senior High School: Interview with 2 Teachers

椙山女学園人間学研究センター
「環境と人間」プロジェクト研究員
小田　奈緒美
Oda　Naomi
椙山女学園大学教育学部
野崎　健太郎
Nozaki　Kentaro

要　　旨

愛知県の高等学校で家庭科を教えている教師歴2年目の23歳女性非常勤教諭Aと、教師歴7年目の29歳女性教諭Bの2名に、環境教育の立場から聞き取り（インタビュー）を行い、授業の実態と本人の意識を探ることにした。2人の教師は、いずれも家庭科で環境教育を行う意義を認めており、機会があれば取り組んでみたいと思っていた。しかしながら、1) 今の授業体制では時間的余裕がない。2) 適当な教材がなく、教材研究に使える時間も少ない。教科書はあまり参考にならない。3) 自分自身が環境問題の知識が少ない。という理由から、本格的な実践には踏み込めていなかった。常に変化する生活の中にいる生徒らに求められる生活自立能力は、従来の「いかに上手くできるかの教育」ではなく、「いかに適応できるかの教育」が必要になっていくと考えられる。そのためには、家庭科で学ぶ全ての領域において少しずつ環境問題に関連する話題を取り込むことや、生徒たちの少ない生活体験を補う体験型の授業を増やすカリキュラム作りが求められる。

キーワード：家庭科、環境教育、聞き取り、高等学校、授業内容

研究の背景

文部省（現在は文部科学省）が1991年に発表した「環境教育指導資料（中学校・高等学校編）」では、高等学校で環境教育を教える教科として「地理歴史科」「公民科」「理科」「保健体育」そして「家庭科」を挙げている（文部省, 1991）。近年では「総合的な学習の時間」が加わり、それぞれの教科の特性を生かした取り組みが期待されている（藤岡, 2002）。しかしながら、社会科や理科の教員は、地球温暖化、水質・大気汚染、オゾン層破壊などの現状と、それらが発生する基礎的な仕組みを解説することが多く、個々の現象としては深刻であるが、生徒の日常感覚とは掛け離れたものになりがちである。さらに、社会科、理科は受験科目であり、現状では「環境問題」を単元として取り上げるには時間的な制約が大きい。そこで、我々は日常生活に関する身近な問題を取り上げやすい家

庭科に着目し、環境教育の可能性について検討している。

教育課程の改訂で、現在の家庭科は、「家庭総合」「家庭基礎」「生活技術」の3つから1つを選択することとなったが、2単位の「家庭基礎」を履修する学校が殆どである。「家庭基礎」は時間の制約もあって調理実習や被服実習など時間のかかるものが大幅に削減され、主要7領域である消費行動、住居、食生活、衣生活、家族、子ども、高齢者での“座学”に重点を置いた内容構成になっている。しかし、実際に高等学校で家庭科を教えている著者の小田は、生徒たちは“実習形式”の授業には意欲的に取り組むが、“座学形式”の授業では意欲が薄れる傾向にあると感じている。「家庭基礎」を学ぶ生徒たちが多い現在、限られた授業時間の中で、環境問題を日常生活レベルで生徒たちに実感させる工夫が求められる。そのためには、まず現場の教師の声を聞き、その現実を出発点とし、新しい考えを組み立てていく必要がある。松葉口（2000）、小田・野崎（投稿中）による高等学校の家庭科教科書の検討結果から、多くの教科書には環境問題を記述したページが10〜15 %含まれていることが明らかになっている。次に求められるのは、実際に教えている教師が持つ環境教育への意識の向上である。そこで、本研究では高等学校で家庭科を教える2人の教師に環境教育の立場から聞き取り（インタビュー）を行い、授業の実態と本人の意識を探ることにした。

調査方法

2007年10月と12月に、愛知県の高等学校で家庭科を教えている教師歴2年目の23歳女性非常勤教諭Aと、教師歴7年目の29歳女性教諭Bの2名に、個別面接法による聞き取り調査を行った。聞き取り項目は次の13項目である。

①環境問題を教えた時間数
②環境問題を教えた経験の有無
③家庭科で環境問題を教える意義の有無
④現在のカリキュラム下で環境問題を教える余地の有無
⑤家庭科の授業中で教えたい環境問題
⑥家庭科で環境問題を教える時の難しさ
⑦家庭科の授業で教えたい環境問題の内容
⑧環境問題を教える領域
⑨環境問題に関する自分の知識
⑩環境問題を教える時の教科書の使いやすさ
⑪家庭科で環境問題を教える時の工夫
⑫環境問題を教えた時の生徒の反応
⑬環境問題を教えることで、生徒らの実践行動に結びつくと思うか

結　果

①環境問題を教えた時間数

2人とも今年度は0時間であった。その理由は、衣・食・住という家庭科本来の領域を優先するため、A：二の次になってしまう。

B：近年、家庭科の単位数が少なくなり、環境問題に触れる時間が足りないという答えであった。

②環境問題を教えた経験の有無

A：教えたいと思うが、まだ実践したことはない。具体的には、ごみ問題を台所事情と絡めて教えたいと思う。現在教えている高校の1つは進学校なので、そこでは興味を持つ生徒は多いと考えている。新聞な

どを用いた「調べ学習」を行い、プリントにまとめさせたい。

B：昨年、勤務した高校では、リバーシブルのエコバッグを作った。生徒からは、お母さんが買い物に持っていってくれて嬉しい、あるいは自分が学校に行くときに使うという声が多かった。調理実習の際には、調理ごみや残した食品の処理で水が汚れる話、そして、フランスではパンを皿についたソースにつけて食べることで、せっけんや水をあまり使わないという話をした。

授業を進める中で、Bはさりげなく環境問題に絡めた内容の話を入れており、教師としての経験年数の違いが現れていると考えられる。

③ 家庭科で環境問題を教える意義の有無

2人とも教える意義はあると答えた。

A：実生活に結びついた内容を扱うので、生徒が環境問題について関心を持つ、もしくは考え行動するきっかけになりやすい。

B：人が生活をする上で、水の使用、ごみの排出、ガス・電気の使用が必須であることを家庭科は扱い、日常生活とつながりが深い環境問題に直接関わる。

④ 現在のカリキュラム下で環境問題を教える余地の有無

A：1時間ほど。期末試験後の時間で実践できるのではないか。

B：0時間。今のカリキュラムでは時間が足りない。

⑤ 家庭科の授業中で教えたい環境問題

A：ごみ問題における分別する意義、省エネルギーなどエコ生活について教えたい。

B：衣服の洗濯について教えるときには、排水、洗剤と水の汚染の関係について。衣服のリメイクやリサイクル、食物調理の食器用洗剤の排水やエコクッキング。

⑥ 家庭科で環境問題を教える時の難しさ

環境問題は複数の教科で教えられている。他教科との兼ね合いなどの問題について質問した。

A：総合の時間を教える先生から環境問題の教材をいただいたことがある。実際に教える場合、導入は教えやすいと思うが、まとめるのが大変そうと感じる。ついつい生徒には、「これは社会の授業で詳しく学ぶと思うよ」と話し、逃げてしまった。生徒たちが、「環境問題で学ぶ内容はすごいんだ」、と感じたら食いついてくれるかもしれないが、テストなど強制力がないと現状では難しいかもしれない。ただし、例えば、クールビズなど話題になったものならば大丈夫ではないか。名古屋のごみ分別は、生徒に話を振りやすいので難しくはないと思う。

B：教えること自体は難しいとは思わない。しかし、他教科との話し合いを事前にしておかないと内容が重複するので難しい。環境問題を家庭科で教えるのは時間的に難しいが、各領域で、少しずつ話のついでに取り入れていくことは可能だと思う。理科のように深く教えることは出来ないけれど、生徒が身近な環境問題に興味を持つきっかけ作りに成るだろう。簡単な内容であれば、毎回組み入れることもできる領域もある。

⑦ 家庭科の授業で教えたい環境問題の内容

A：大学で食品領域を専攻したので、食品問題から入りたい。具体的には、エコクッキングやごみ処理問題である。しかし、大々的に取り上げるのは難しく、それぞれの領域の最後に話をすることができたらいいと思う。

B：大学の卒業論文で水質問題を扱ったので、水処理問題なら詳しく話ができる。他には、リサイクルや古着、おしゃれなエコバッグの話をしてみたい。

⑧ 環境問題を教える領域

A：どの領域でも少しずつ取り上げ、ここでもやったけど復習を、という感じで全体的に教えたい。

B：消費生活、衣、食、住、保育など全体で教えていきたいと思う。

⑨ 環境問題に関する自分の知識

A：高校生レベルかも。特に学んだ記憶がないし、うっすら、ごみ問題くらいやったかもというくらい。

B：まだ全然ないと思う。浅い部分しか知らない。最後、どこに繋げていくと家庭科的にいいのかなどが、あいまいなので。

⑩ 環境問題を教える時の教科書の使いやすさ

A：環境問題を取り上げようと思ったときは、とりあえず教科書以外の教材を探した。教科書が、環境問題を扱う時に使いやすいと思ったことはない。ただ、巻頭のカラーページで環境問題を扱っているものは、生徒が勝手に見ているかもしれない。

B：どの教科書でも他の資料が必要。書店で、生徒が興味を持ちやすいものを探したり、新聞記事の速報などを使ったりし、教科書にはあまり頼っていない。教科書の内容だけでは、なぜ環境問題が大事なのか、なぜ問題になっているのか、という核の部分が載っていないので、教えにくい。

⑪ 家庭科で環境問題を教える時の工夫

A：教科書だけでは内容が浅いので教えられない。しかし、新たに教材研究をする時間もない。もし教えるとしたら、生徒たちが環境問題を解決する行動に結びつくような題材にしたいので、議論したり、体験する教材が出来たら良いと思う。

B：特に自分はやっていないが、自分の前任の先生は、廃油を使ったせっけん作りを行っていて、固形せっけんと液体せっけんの両方を1時間で作り、実際に自分の家で使わせて感想を書かせていた。生徒たちの感想は、「すごくきれいに汚れが落ちてびっくりした」、「お母さんが喜んで使ってくれて嬉しかった」、という意見が多かったので、時間があればそういうものを実践できると良いと思う。

⑫ 環境問題を教えた時の生徒の反応

A：あまり環境問題に重点をおいて授業をしたことはないけれど、めちゃめちゃいい反応であったという印象はない。生徒たちにしてみたら、今日の授業は楽できそうかな、と思っていそう。

B：自分が教えた内容は浅かったが、生徒たちの“うなづき”や“気づき”はあったようだ。エコバッグを製作した時は、「自分は使わないが、お母さんにあげたら喜んでいた」と話してくれ、全く関心がないというわけではないと感じた。生徒たちは基本的に素直なので、自分がどこまで教えていけるかが重要だと思った。

⑬ 環境問題を教えることで、生徒らの実践行動に結びつくと思うか

A：調理実習などをしてみると、キッチンに立たない子の方が多い。被服を体験したことがなく、料理するために包丁も持たないのに、家で環境のためにいろいろやれと言ってもやれないのではないか。環境問題が実生活に結び付きにくいのではないかと思う。深い印象を受けたものであれば、

生徒たちも実践行動に移すかもしれないが、例えば、食料自給率の話をしても、自分たちが毎日、食事に不自由なく、自分で食事を作る機会もなければ、授業では知識を学ぶだけで、「食材を捨てないようにしよう」という意識にはならないと思う。現状では、多くの生徒たちは、もったいないとすら思っていないかもしれない。クールビズなどが取り上げられるようになり、以前より環境問題にとっつきやすくなった。身近なことでいいので、自分の出来ることをして欲しいとは思う。漫画とかで、環境問題をわかりやすく描いてあるといいかもしれない。

B：実践行動に結びつくとは思う。身近な問題で、あまりに大きすぎるテーマを与えず、生徒に近い問題を考えさせるのが一番かもしれない。例えば、教室のごみ分別から、リサイクルの話にもっていったり、調理実習で水を使うことから、水が汚れると、浄化するのにお金がかかり、税金が増えるとか危機感を与えたりするといいかも。

考　察

2人の教師は、いずれも家庭科で環境教育を行う意義を認めており、機会があれば取り組んでみたいと思っていた。しかしながら、1) 今の授業体制では時間的余裕がない。2) 適当な教材がなく、教材研究に使える時間も少ない。教科書はあまり参考にならない。3) 自分自身が環境問題の知識が少ない。という理由から、本格的な実践には踏み込めていなかった。

教師にとって授業をどのように構成していくかは重要な課題である。高等学校家庭科においては、単位数減少から、衣・食・住の基本的な内容を教授することが中心となり、実習や実験を取り入れる時間、ましてや、環境問題を授業で扱う時間は非常に限られているといえる。しかし、やり方次第では、どの領域であっても環境問題について取り上げることができるのではないかと考えられる。具体的には、毎回の授業に少しずつ組み込んで話をする方法が、教師自身にとっても、生徒の興味の観点からも、理想的であると考えられる。つまり、環境問題だけを取り出して授業を行うよりも、日常生活の技術を学ぶ家庭科の領域全てに渡って環境問題を扱ったほうが、生徒たちの実感を高め効果的であろう。例えば、ごみ問題は消費生活、食生活、衣生活、地球温暖化を促進するとされるエネルギー消費の問題は、住生活や衣生活のそれぞれに深く関わっている。

2人の教師は、環境問題を扱う場合、いずれも教科書の内容だけでは授業をできないので、詳しく知っている内容、具体的には大学で学んだ専門領域を用いるだろうと答えているのが印象的であった。この結果から、環境問題に焦点をあてた授業を行うのであれば、大学時代の卒業論文で扱った内容を用いることが、環境問題の知識に対する教師の不安を少なくするために有効であろう。

教師は、通常、生徒たちの反応を見て次の授業改善に生かしているが、その多くは教師個人の感覚に頼っている。従って、どのような授業をするかは教師の力量によるところが多いので、なるべく教材研究に費やす時間の確保と、教科書や補助教材などの教材面の強化が望まれるところである。

生徒たちは常に変化する生活の中で暮らしている。このような中で求められる生活自立能力は、従来の「いかに上手くできるかの教

育」ではなく、次々に発生する生活の変化に対して「いかに適応できるかの教育」が必要になっていくと考えられる。環境問題に対しても同様である。ただし、この力を育むためには実体験が欠かせないと考えられる。ところが、教師Aは、生徒たちには生活体験が少ないことを挙げており、そのような状況では、環境教育も根付かないと感じている。我々は、まずは体験型の授業などを増やすようなカリキュラム作りが求められると結論する。

引用文献

藤岡達也（2002）第8章-3 高等学校における環境教育の実践と課題. 川嶋宗継・市川智史・今村光章（編著）環境教育への招待, p.219-227, ミネルヴァ書房, 京都

松葉口玲子（2000）家庭科の教科書における環境教育および消費者教育に関する内容の検討. 日本家庭科教育学会誌, 43 (3), 175-183

文部省（1991）環境教育指導資料（中学校・高等学校編）

小田奈緒美・野崎健太郎　平成19年に出版された日本の高等学校家庭科教科書における環境教育分野の解析（投稿中）.

「自然人類学者、仏教思想に触れて」

A Physical Anthropologist reconsiders
from the Viewpoint of Buddhistic Thought.

椙山女学園大学名誉教授　京都大学名誉教授
日本福祉大学コミュニティ・スクール校長
椙山人間学研究センター客員研究員
江原　昭善
Akiyoshi　Ehara

Ⅰ稜線に立つ現代人

1．現代人が置かれた深刻な現状

筆者が自然人類学者として「人間研究」の道に進んだのが、1951年の春。その頃の人間を取り巻く第二次世界大戦後のめまぐるしい時代的・思想的変化は史上初めてといってもよいほどの激しいものだった。やがて日本も高度産業成長期の入り口にさしかかっていた。そして正の面にばかり目が移り、気がついてみたら、負の産物として廃棄物の山や地球レベルの環境汚染、地球温暖化、核問題、食糧や資源やエネルギーの枯渇、社会的な貧困、それらそれぞれが循環的に因となり果となる応報関係、その他･･･。一方ではこのような物的な時代的流れのなかで、人間が生理的･心理的・精神的にどこまで適応できるのか、元はといえば人間みずからが作り出しておきながら、みずからの力ではもはや制御できなくなった深刻な諸問題などについては、『稜線に立つホモ・サピエンス～自然人類学を超えて』『ホモ・サピエンスの稜線の彼方で』の両著において簡単に触れておいた。

このような人類を進化史的にみると、生物としての人類が文化（道具類や技術などの物質文化）を獲得し、さらに愛や正義や喜怒哀楽、真や善や美、信仰や宗教などの心や精神の拠り所（精神文化）を持った人間へと向上進化（アナジェネシス）してきた。そしてついには進化の壁にぶつかり、そこから先は飛躍か転落かの状況しかあり得ない変わり目に立つ人間の姿が見えてきた。生き延びるためには高度化したメタ精神文化次元（異質次元）へと飛躍するしかない。それを比喩的に「稜線に立つ･･･」と表現したわけだ。

生物という土台の上に異質な文化や精神の世界を築き上げ、その結果、宿命的ともいえる矛盾（自己矛盾）を肥大化させて、人類はまるで稜線上でバランスを失いかけた「弥次郎兵衛」のようだ。その深刻な「人類的」苦悩は、上記２著で強調したように、科学や技術レベルでは解決できず、より上位の精神的レベルにおいて解決の道を模索せざるを得なくなったということだ。

だからといって危機を指摘・扇動するだけでは、自他ともに問題解決にはならない。そこで本論では東洋思想とくに仏教思想に触れてみることにした。それはこれまで自然科学や技術論や社会科学では無視もしくは切り捨てられてきた思想だが、そのなかに重大なヒントが見出せることを知ったからだ。まずそのことから見ていこう。

2．自然人類学の立場から

i）理性主義の行き詰まり

この問題をもう少し明確にする意味で、かなり乱暴な纏め方かも知れないが、自然人類学を欧米流の文化史的な流れのなかに置いてみようと思う。

ギリシャ時代のソクラテスやプラトンは歴史上初めて、人間だけに備わった理性を人間の説明原理[1]にした。彼らによれば、理性は究極の時空を超えた不変で絶対的な真理を求めようとする。後述のように、カントが批判したスコラ的形而上学がこれである。

このような理性主義の線上で、音楽でいえばそれが主題となって、さまざまな変奏曲、たとえばキリスト教文化のなかでの人間観、啓蒙思想やデカルト･ベイコン的二元論、唯物史観や現代の科学主義（ガリレオ、ニュートン、マクスウェル）などの系譜が見えてくる。まるでプラトン的理性主義はその姿をさまざまに変え、キリスト教文化や科学思想の基底を脈々と流れ、そこに現れる思想はいずれもまるでプラトン的魔法をかけられたかのようだ。

他方ではそれに対抗する音楽上の主題ともいえる流れもあった。つまり「人間は万物の尺度である」で有名なプロタゴラス（Protagolas、前485頃～前410頃）[2]に端を発する人間に主軸を据えた人間観だ。ドイツ・ロマン主義、スコラ的形而上学の批判以降のカント（彼はこれをコペルニクス的転回と呼んだ）、ニーチェ[3]、フロイトやユンクの無意識世界の発見、フッサールの現象学[4]、ハイゼンベルクの不確定性原理[5]や量子力学の世界、実存主義、構造主義などの各変奏曲が見られる。

これらの各思想や学派や主義は、時代とともも複雑に絡み合い、1本の縄のようになっていて、すっきりと分けられるものではない。それはちょうど複雑に飾り立てられたデコレーション･ケーキのように、メスの入れ方・入れ場所によっては、クルミやピーチやイチゴなどが、どちら側に入るかでイチゴ・ケーキになったり、クルミ・ケーキになったり、ピーチ･ケーキになったりするようなものだ。

ii）「生きた人間」を見る

西欧近代において、プラトン的流れを汲む啓蒙主義と、プロタゴラス的な人間中心主義の流れを汲むロマン主義の対立を、興味があるのでゲーテの言をそのまま借りて述べておこう。ゲーテによると、「啓蒙主義的な普遍的もしくは抽象的な人間など、どこを探しても存在しない。あるとすれば概念として人間の頭のなかにあるだけだ。それはまるでオーケストラを、たった1挺のバイオリンで代表して語るようなものだ」という。「人間は単なる人間一般ではありえず、きわめて具体的に有色人種か白色人種か、男か女か、子供か大人かというかたちでしか存在しない。このような特殊具体的なあり方によって始めて人間という概念は現実化する。そして、このようなすべての人間が集まってこそ、われわれは人間的なものを生きているのであって、真の人間とは全人類の他にない」という。考えさせられる指摘だと思う。

プラトン流の理性主義や科学主義は、そのオーソドックスな方法としては近･現代科学のなかでは「対象をいよいよ細分化して、その要素の因果関係を究明し観察する」という要素還元主義に受け継がれるようになった。そしてプラトン流の魔術から解き放されて疑義と反省が加えられるようになるまで（そして今もまだ見られる）尾を曳きずってきた。このような手法は、「人間」を考えるには限界があることに気がつかれ始めた。これでは「人間そのもの」、「生きた人間」を見ることは、ほとんど不可能であるか、あるいは真のすがたは掻き消されたままだったからだ。そのことは何よりもフロイト派の民族学者ゲザ･ローハイムRoheim,Geza1891～1953

の「人類学者は人類を見ず、人間をも見ようとしない」という皮肉に満ちた辛らつな批判に如実に表れている。

G.ベイトソンも皮肉たっぷりに、『精神と自然～生きた世界の認識論』（佐藤良明訳）の名著のなかの第1章「学校の生徒もみんな知っておる」のなかで、プラトン的・科学主義的思考法は、きわめて自然で基本的な考え方を歪め、あるいは教育面でもすっぽり無視している事実を、豊富な実例を挙げて指摘する。筆者は、このベイトソンの指摘にも大きく触発されたものだ（後述）。

精神病理学から実存哲学に移行したヤスパースKarl Jaspers1883～1969によると、現代に通用しうる古典時代の思想家として、ブッダ、中観派[6]のナーガールジュナ（Nagarjuna,漢訳名は龍樹150～250、大乗仏教を体系化した）、孔子（前551～前479．春秋時代の儒教の祖）、老子（中国、春秋戦国時代の道教の祖）の４名をあげる。

しかしヤスパースよりもはるかに古く、797年にすでに空海が自伝的物語『三教指帰』[7]のなかで、儒教、道教、仏教のうち、仏教がもっとも優れているとした。筆者も科学という視点から近づきやすい仏教を取り上げ、日本の天才的な思想家として空海が指摘するところに従って、まず仏教中心に考察を進めることにした。

iii）人間観の第２ルネッサンス

20世紀後半になると、人間思考の傾向がグローバルに入り乱れ複雑になってきた。第二次世界大戦中には病的なまでに抑圧されていた人間の精神の自由と平等が、まずマルキシズムの唯物史観で息を吹き返し、そのなかで埋没しそうになったところを、今度は実存主義が救出してきた。このようにして個人の実存が強調されるようになった。しかしその人間も気がついてみると、社会の構造の中で無意識のうちに巻き込まれてしまっており、むしろ構造主義的に理解することの方が重要だと言われ始めた。

文化人類学のクロード･レヴィ=ストロース（1908～1992）は、未開社会の婚姻と神話の研究から、社会は人間の意志的な決断によって構築される以前に、フロイト的に無意識的構造によって構成されていることを明らかにした。

ここに至るまで、多くの学者や哲学者や思想家が甲論乙駁帰するところを知らない有様だが、仏教の唯識派はこれらの思想のほとんどすべてを、何の抵抗もなく受け入れ収めることができる論理的な寛容性をすでに持っていたからおどろきだ（後述）。

３．グローバルに見た２０世紀中頃からの知的・思想的大変動

現代のいろんな思想の複雑な絡まりのなかで、もう少し輪を縮めて人類学的に関係の深い人間論に関係するものを整理してみよう。

i）欧米とアジアの両思想圏の接近と収斂

何が直接的なきっかけだったか、その動因をはっきりさせることは難しいが、20世紀の終わり頃から人間の知的世界には大きな地殻変動のうねりが生じていた。これまではこのような問題提起をすると、いつも欧米の思想圏が主役、というよりもむしろその思想圏に限定されていた。無理からぬことで、欧米以外に人類学の育ってきた土壌は少なかったからだといえよう。比較の地域を少し広げて、欧米とインドや中国を含めて人間論の知的土台（両思想のエピステーメー）を対比すると、西欧の論理性・実証性・機械論的な因果関係

の法則の方が現実的で近づき易く、理解もし易かったからだろう。

しかしその論理性や実証性や因果関係の法則も、20世紀に入ってからは行き詰まりが見えてきた。たとえば電磁波の性質や量子力学の世界などでは、古典的物理学や機械論では解釈できない論理が働いていることが判明してきたからだ。

自然科学はそのオーソドックスな手法として、複雑な対象を単純化し、あるいは諸要素に解体し、その状態でモデルを設定して解明し、因果関係を求めるという方法を採ってきた。しかし、このような還元された要素をいくら掻き集めても、必ずしも元の全体の性格を表現することにはならないことが知られるようになった。

また、機械論的な因果関係にも鵜呑みにすると危険だということが指摘され始めた。それは主として心理学の分野から問題を生じた。刺激Aは必ず反応Bを示すものと信じられていた。だが同じ刺激が、いつも同じ反応を示すとは限らないのだ。つまり同じ刺激が異なる反応を示したり、逆に異なる刺激がいずれも同じ反応を示すことがよくある。この事実から生物は個々の要素的刺激に反応するのでなく、個々の要素的刺激が形づくる刺激のパターンに反応していることが判明したのだ。このパターンをゲシュタルトという。しかしこのような現象は、すでに大乗仏教の唯識学派により知られていた（三性説、後述）。このようなことから欧米の科学者や思想家にも、西欧的思想と東洋的・アジア的思想（とくに仏教思想）を突き合わせ、客観的に比較考察する傾向が見え始めた。

ii）全体は部分の総和以上の意味を持つ

要素論は、対象の複雑な特徴や性質をまずバラバラにし、考察の対象を最小の構成単位にまで分解したり還元したりすることにより、それらの構成要素の持つ性質を解明する。それらを今度は逆方向に総合することにより、元の対象全体の本質を構成的に理解するという手法である。自然科学は総じて要素論の立場に立っており、心理学の分野でも、一斉を風靡したドイツのヴント（W.M.Wundt,1832～1920）らによって、意識現象を単純な心的要素に分解して,それらの結合法則を説明しようとする要素主義心理学が唱えられた。しかし、この立場は前述のゲシュタルト心理学により批判されたのだ。総じて1960年代後半以降は、近代科学の方法論的基盤である要素論に対する懐疑や批判が強まった時代だった。

自然現象を素粒子レベルで観察する量子力学や原子物理学、生物学を細胞や遺伝子（DNA）のレベルで考する場合も、それらを直ちに全体論に拡大して論ずることはできないことが次第に明らかになってきた。部分とその部分からなる総体との間には、質的に異なる明白な差異があることも明らかになってきたのである。

iii）東洋思想への接近

1960年代以降、カリフォルニア･ムーヴメント（和製英語でニュー･サイエンス）が起こり、最初は現代文明に反抗するヒッピーらにより、出現。しかし1970年以降は、もっと真剣な立場で多くの原子物理学その他の最先端の自然科学者らが、これまでの理性主義･科学主義に反して、道教の流れを汲むタオイズムに共鳴した。後ほど詳述するが、唯識派では三性説において、初めから遍計所執性（いわば要素レベル）から依他起性（個々の要素の関係性つまり縁起）への思考の転化を強調しているが、あらためて興味あることだ。

日本にもニュー・サイエンスの運動が伝えられたが、その波紋が届いても反論や無視はあったが、正面から受け止めるような反響は少なかったようだ。たしかに科学や技術上の知見をイデオロギーの補強に利用したり、東洋哲学と西欧哲学を安易に取り上げて比較する軽薄な比較論に陥ることなどには、注意する必要がある。たとえば分子進化や遺伝子レベルから優生学的な結論や道徳論・倫理論を導いたり、動物行動学から聖書を批判したり、現代の原子物理学と東洋思想の類比を取り上げたり、散逸構造[8]と同様な出発点から社会理論を論じたりという試みも多く見られる。さらにフリッチョフ·カプラの著作は科学上のものと見るか、文明批評と見るかで評価は変わってくることだろう。ケストラーのホロン概念は科学上の知見か、科学評論か、イデオロギーか、哲学か、意見の分かれるところであろう。しかし科学が哲学を無視し、哲学が科学を無視してはなるまい。かつてカントが何処かで、「思弁なき実証は空虚であり、実証なき思弁は盲目である」といっていたことを思い出す。

iv）ベイトソンの思想

ベイトソン（既出）自身は、最晩年にカリフォルニア州のサンフランシスコにて名著『精神と自然』1979を著し、その翌年に息を引き取った。恐らく、時代的にも地域的にも上述のニュー・サイエンスの喧騒のさなかにあって、その思索には濃厚な影響が読み取れるし、逆にニュー·サイエンス運動には大きな影響を与えたことは想像に難くはない。というのも、彼の思想や著作の中軸には、東洋思想（とくに老子や荘子の道教タオイズム）や仏教的な縁起の思想が強く流れていると思えるからだ。

このようなことは広く文化史を眺めると、相互に反応し合ったからか、まったく関係なく独立に発生した結果なのか、原因は不明なまま類似の現象を生ずることがよくある。ベイトソンとタオイズムや仏教思想との関係もそれに似ている。かつてメンデレーフによる元素の周期率が発見され、それによって未知の元素の存在が予言できたように、ヘッケルも生物の系統樹の中でミッシング·リンクに位置する化石生物の存在を予言できたのもその例だろう。このような、いわば「思想の飛び火」は文化史的に至る所で見られるものだ。

ベイトソンの思想には唯識思想との関係も無視はできないが、ナーガールジュナの「縁起」の思想をさらに深く突っ込んで、具体的に学習理論や行動論のなかで、実例を挙げて各事象の関連性やその詳細な考察を行っている点では、中観派や唯識派を大きく補完しているといえよう。むしろ唯識派や仏教思想は、「空」「縁起」の体系化がなされたことにより仏教の大乗化が大きく進んだのに対し、ベイトソンはもっぱら人文学的な思想を掘り下げ、生物学や民族学、精神分析学の領域をさらに超えて、新領域を開拓した。それは彼の最後の著作となった『精神と自然～生きた世界の認識論』の題名にも明確に反映している。筆者も仏教思想について学びつつ、仏教が持つ宗教性と思想性の分岐点に立っている自分に気がつき始めていた。

Ⅱ仏教思想に触れる

1．世界宗教としての仏教の特徴

一般に特定の地域や民族や歴史などを超えた性格を持つ宗教として、キリスト教やイスラム教や仏教などは世界宗教として認められている。そのなかでキリスト教やイスラム教は唯一絶対神を信仰し、そのエピステーメー

（特定の時代の思想や文化全体の基底にある「知」のあり方）は、仏教とは大きく異なる。

仏教はキリスト教やイスラム教のような唯一絶対的で人間を超越した神を持たず、人間は仏（如来）に成り得るし、その意味では連続的である。つまり大乗仏教では、すべての人間はもともと「仏性、ブッダになる素質」があり、修行によりその境地に達しうると説く（如来蔵思想）[9]。

それ故、絶対神を持つキリスト教やイスラム教は「信」の宗教、仏教は「覚」の宗教と呼ばれる所以である。キリスト教やイスラム教は「絶対」を求めるが、仏教はあくまで「相対」を求める[10]。

「信」の宗教では、人間を超越した絶対的存在としての神をひたすら信じ、その神からの啓示への帰依に基づく特定の教理を立て、それを信仰するという姿勢を中心とする。一方、「覚」の宗教である仏教では、超越的な人格神というような教理は立てず、ひたすら内省的な自覚･目覚めを通して仏を求める。前者では人間は無限に神に近づき得ても神には達し得ず、後者では人間はみな仏性を持ち、その仏性を育めば誰でも悟りに達して成仏できるという。

一神教ではみずからの神が唯一絶対なるが故に、他民族の神や異なる価値観の存在は許容せず、度重なる十字軍の遠征や現在も続行中の湾岸戦争、まるで地に水が染み渡るように世界各地に広がるテロ活動などの例を見るまでもなく、今も流血の惨事が絶えない。

2. 仏教思想との習合

ここで大乗仏教が体系化され、仏教界の大革命ともいえる「空」と「縁起」の思想を明確にしたナーガールジュナ（龍樹）について、もう少し立ち入って述べておきたい。すでに簡単には述べたが、この見解は思想的にも宗教的にもその後の仏教や東洋哲学にとって大きな影響を及ぼしたからだ。

鳩摩羅什（くまらじゅう）[11]の「龍樹菩薩伝」によると、龍樹は天才の誉れ高く、若くしてヴェーダ第1～4聖典[12]、地理学、天文学、医学、占星術などをすべて暗記してしまった。中観派（ちゅうがんは）のナーガールジュナNagarjuna（ca.150～250）による「因縁生起」（縁起）は初めて大乗仏教の体系化を試み、その思想は般若経の「空」の思想とともに、アサンガ（Asanga,ca.395～470,漢名は無着）、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu,ca.400～480,漢名は世親）兄弟に受け継がれ、唯識派（世親ヴァスバンドゥの成唯識論じょうゆいしきろんを中心とする）として誕生した。龍樹の「一切の存在は縁起、つまり互いの関係性によって成立し、絶対的な実体はない」と「空」の思想を説く。唯識派は龍樹の「すべては実体がない空である」つまり無自性（むじしょう）の上に認識論を構築した。認識は人間の意識があって初めて可能であり、さらに認識があって、そこから縁起=関係性＝依他起性（３．ii．参照）は始まるという。ここで唯識の根本思想について触れておきたい。文末にこれらの関係を図にしておいたので、それを参照しながら本論を読み進めていただければ便利かと思う。

3. 三性説（さんしょうせつ）

精神の深層構造や無意識の世界は、フロイトやユンクによって発見されたことになっている。だが大乗仏教の中観派や唯識派では瑜伽行（ゆがぎょう、ヨーガ）を実践して、禅定（ぜんじょう）[13]により心の奥底に横たわる清浄な真理（つまり如来）に触れようとする。その結果、人間の心の深層には末那識と

阿頼耶識があることを発見。だからフロイトの無意識世界の発見は、学問的には「再発見」ということになる。紀元3世紀の中観派のナーガールジュナ（龍樹）とその弟子デーヴァDeva（提婆）の「空」思想を土台にして、アサンガAsanga（無着）・ヴァスバンドゥVasubandhu（世親）により受け継がれ、唯識派の認識論として体系化され、その教典が7世紀前半に西遊記で有名な玄奘により唐に持ち帰り漢訳された。その無意識のレベルで、次の３性が区別される。

ｉ）遍計所執性（へんげしょしゅうしょう）：人間の心は末那識（まなしき。深層に働く自我執着心のこと）に影響され、経験した自称に任意な意味づけをして実体化して見てしまう。何度も述べたように、科学では一般に複雑な対象をバラバラに分解して、そのいわば要素について遍計所執的に解明を試み、その知見を総合化して元の対象の説明を試みるという手法。これを自然科学では要素還元主義といい、要素的なものの集合が元の全体性を説明できると考える。しかし部分の総合は必ずしも全体を説明できるとは限らない。例として、すでに述べた20世紀前半に唱えられ出したゲシュタルト論（要素のまとまり、つまりパターンとして認識する）がある。それがすでに３～４世紀に、唯識派で発見されていたから驚きだ。

ii）依他起性（えたきしょう）：あらゆる存在は実体なるが故に存在しているのでなく、他の存在と関係し合うことによって存在している（相依相関性）。因縁生起つまりすべてが縁起的に存在しているということだ。ジェームズ・ラヴロックは『地球生命圏～ガイアの科学』1979のなかで、「地球はそれ自体が大きな生命体で、すべての生命、空気、水、土などが有機的に繋がって生きている」。これを「ガイア理論」というが、まさに縁起そのもの。たとえば花は、種子という直接の原因がなければ芽を出すことはない。しかも種子だけでは芽を出さない。太陽の光や熱、水やその他の肥料がなければならない。種子は花が育つための「因」であり、太陽や光や熱、水やその他の肥料などは「縁」ということになる。いわば「因」はタテの関係であり、「縁」は条件、もしくはヨコの関係といえようか。

それ故すべての存在は実体があることによって存在しているのでなく、他に依存した相依相関性においてのみ存在するのだ。それ故存在はすべて「空」ということになる。

さらに驚くべきことは、原子物理学の最新の発見が、「縁起」だということがわかる。ある事象を観察していると、観察者の意向に対象が影響されて形態が変わるという現象も知られている。AとBの関係を観察するとき、観察者つまり人間の意向が介入することで、気がつかぬまま、AとBとの関係が変化していることがあるから注意を要する。たとえば光は観察者の意向を反映して粒子的になったり波動的になったりする。

iii）円成実性（えんじょうじつしょう）：依他起的に見たものが、究極的に「空」の思想である全体性・真実性として見られる。

円成実性の興味ある実例として、G．ベイトソンの引用を借用しよう。もっとも彼は円成実性の説明のために引用したものではないのだが･･･。ベイトソンはシステム論も熱心に勉強したとあるが、恐らくそのようなことから彼自身が引用しているのだが、モリエールの喜劇『架空の病』に出てくる「睡眠素」

の話がある。

> この芝居は、中世の医学博士号取得のシーンで、試験官が「アヘンに睡眠を促す効果があるのはなぜか？」と尋ねると、受験者は「それはアヘンには睡眠素が含有されているからです」と答えた。

この引用ばなしのなかで、ベイトソンはアヘンと睡眠素の関係、アヘンとそれを摂取した人間、それらすべてを含めた縁起的関係をシステム的に（依他起的に）探ることの重要性を指摘する。アヘンという物質の中をいくら探しても睡眠素なる物質は見当たらない。睡眠性はアヘンと人間の関係性のなかに潜んでいるものだからだ。

くり返しになるが、現代科学の基本的な手法として、

・複雑な現象は可能な限り単純な要素に還元し、その要素の特質の解明を行う。
・機械論的に要素間の因果関係を吟味する。

ことが常道だ。しかし、要素の集合は必ずしも全体の性格と一致しない。またアヘンと人間の関係を無視して、もっぱらアヘンのなかに睡眠素を探しても、ベイトソンもいうようにそのような物質は永久に見つかるまい。

ベイトソンは『自然と精神』のなかで、生物界の現象も文化次元の現象も、頻繁に「結び合わせるパターン」という表現を用いて全体性を強調し、現象を部分もしくは要素に解体したまま、それらをバラバラに見てはならないと主張する（仏教では遍計所執性から依他起性へ）。とくに客観的･科学的な観察や考察に際しては、実験対象の他に観察者も含めた関係性の中で見ることが重要だという。これは仏教でいう「依他起性」「縁起」、そして「円成実性」そのものだ。

だから産業革命以降はとくに、円成実性つまり全体性を見逃して遍計所執性的な偏った見方が嵩じてきて、科学や技術のみが重要視され、他は軽視もしくは切り捨てられることが多くなった。そして、かつては「そのような見解は神への冒瀆だ！」といって口封じできたのが、今ではその神の位置に科学や技術が居座り、往々にして「そのような見解は科学的でない!」とまでいって抹殺されるようになった。

4.実体論から関係論へ

複雑な現代を理解するのに、実存主義一本槍で果たして解決できるかという疑問が起きて当然のこと。

とくに第二次世界大戦後の思想的変遷はめまぐるしく、それらの思想を纏めてひとつのパラダイムとして把握することは困難だ。むしろ各思想や各パラダイムなどの基底をなす「知」（フーコーFoucault,M.,1926～1984）として理解する方が適当かもしれない。

こう理解すると、ギリシャ時代のプラトン的な理性主義は、キリスト教文化や科学思想にまで、その基底を脈々と流れ、まるで魔法でもかけられたかのようだ。現在ではそのような理性至上の視野から離れ、「実体論から関係論へ」というヨコ方向の視座の転換と、フロイトやユングらが（再）発見した無意識の復権に基づく意識の表層から深層に移る垂直的な視点の動きが主張されるようになった。この2大ヴェクトルこそ、実は4～5世紀以前に大乗仏教の中観派ナーガールジュナの「空」観とアサンガ･ヴスバンドゥの2兄弟の唯識派哲学にもすでに見られるものだ。また、デカルトが人間の精神と身体を2つの異なる実体と理解したために、人間を二元論的に理解せざるを得なかった。しかし唯識派では精神も身体も、いずれも実体として扱わないこ

とから、人間を身体と精神に分裂させず、たとえばある地域の土地とそれを図化した地図の関係にも似て、円成実性に向かうものとしてとして理解する。

このように見てくると、今世紀は欧米とアジアのエピステーメーの習合[14]が、改めて重要になってくることに気がつく。

5. なぜ仏教思想に「環境」の概念が欠落しているか

仏教思想の世界では「環境」という概念が見当たらない。あえていえば器世間。しかしこれは具舎論（くしゃろん）[14]によると、三千大千世界のことで、須弥山を中心にした宇宙構造。サンスクリット語でも「容器たる世界」を意味し、生物や人間が生きるために必要な機能的空間・生態学的空間というよりは、広がりを持った空間の意味合いが強い。それ故、環境という概念は仏教の中軸思想である「縁起」「依他起性」などの概念があることから、それを使って内容についての考察を行えばよいことになるので、あえて必要のない概念だということになるのだろうか。

これは今後の問題として保留しておこう。

III. 参考にした文献類

阿満利麿：『宗教の深層』ちくま学芸文庫。平成13年。

池上良正他：『宗教史の可能性』岩波書店。平成１６年。

泉美治：『科学者の説く仏教とその哲学』学会出版センター。平成10年。

泉美治：『仏教の唯識に学ぶ』学会出版センター。平成16年。

江原昭善：『稜線に立つホモ・サピエンス～自然人類学を超えて』京都大学学術出版会。平成15年。

江原昭善：「ホモ・サピエンスの稜線の彼方で」椙山女学園。平成18年。

岡野守也：『唯識のすすめ』NHKライブラリー。平成17年。

菅谷章：『宗教を問う』原書房。平成18年。

山折哲雄監修、田中治郎：『日本の宗教』日本文藝社。平成17年。

岸本英夫編『世界の宗教』平成17年。原書房。

グレゴリー･ベイトソン著/佐藤良明訳：『精神と自然』思索社。昭和61年。

横山紘一：『やさしい唯識』NHKライブラリー。平成14年。

高尾利数：『イエスとは誰か』NHKブックス。平成11年。

高尾利数：『ブッダとは誰か』柏書房。平成12年。

高取正男・橋本峰雄：『宗教以前』NHKブックス。平成16年。

竹田青嗣・西研：『初めての哲学史』有斐閣アルマ。平成10年。

モリス･バーマン著/柴田元幸訳：『デカルトからベイトソンへ』国文社。昭和64年。

岩波『仏教辞典』第2版。

[1] 自然人類学では、多くの教科書で示されるように、人間だけが持つ理性で「人間自身を知る」動物であることを指摘したソクラテスの言を引用して、その定義とする。端的には「ヒトの自然誌（natural history of man.）」。

[2] ソフィスト学派の代表者。理性主義者らからは詭弁学派として謗られた。

[3] 「事実など存在しない。あるのは解釈だけだ」。

[4] 現象学的還元として、主観の外に客観的な事物や世界が存在しているかどうか、またそれがいかに在るかについては一切考えない、つまり判断中止（エポケー）する。一切の対象及び世界の確信は主観という体験のなかに「還元」する。

[5] 「客観的事実など存在しない。あるのは実験装置を通して見た事実だけだ」。

[6] インド大乗仏教の2大学派の1つ。ナーガールジュナの「中論」に基づき、空の思想や中道の実践を強調する。

[7] 『三教指帰（さんごうしいき）』：空海２４歳（797）のときの著作で、3巻よりなる。儒教･道教･仏教を代表する人物を順に登場させ、それぞれの優劣を論じさせる戯曲形式の文学的作品。空海はその比較を通じて、仏教をもっともすぐれた思想と結論した。

[8] ベルギーの物理学者プリゴジンの用語。分子のカオス状態が散逸していく過程で現れる、ある種の秩序的な分子運動をする系の構造。混沌から秩序が生ずる点で、生命の自己組織化を解明する手がかりになるかも知れないとして注目されている。

[9] ここでもプラトン的理性観とプロタゴラス的人間観の対立に似た関係が見出される。

[10] イエズス会の司祭 Pierre Teilhar de Chardin は、近い将来人間は、神と合一する(オメガ点)と述べたばかりに、教会からは破門され、大学からは放逐され、多くの出版物は差し押さえられた。

[11] 鳩摩羅什:350～409頃。西域の亀茲国の王族に生まれ、7歳で出家。5世紀に中国に渡り、サンスクリット経典を漢訳。前秦から招聘されるが、前秦は滅び、羅什は拉致され甘粛省涼州に15年間留まる。58歳で長安に入り本格的な訳経始まる。とくに「妙法蓮華経」は名訳。羅什訳の経典は日本でも多く使われている。

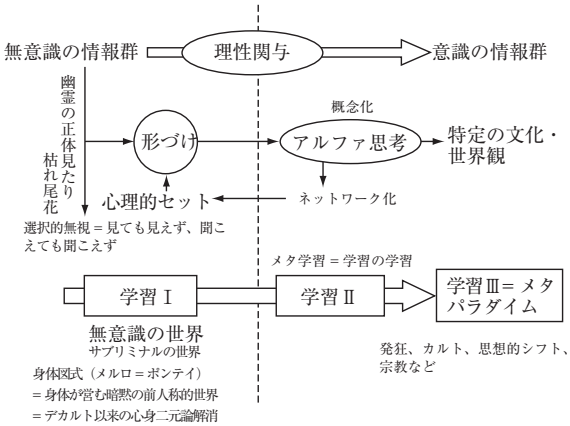
[12] ヴェーダは「知識」という意味。インドの哲学や宗教の元になった賛歌や叙事詩の巨大な思想体系。その起源は紀元前1500年頃で約1000年かけて整備され、紀元前500年頃確立された。とくに第四ヴェーダはウパニシャッドと呼ばれ、インドの文化全般に大きな影響を与えた。

[13] 心を静め、一つの対象に集中することで精神統一をはかる方法。

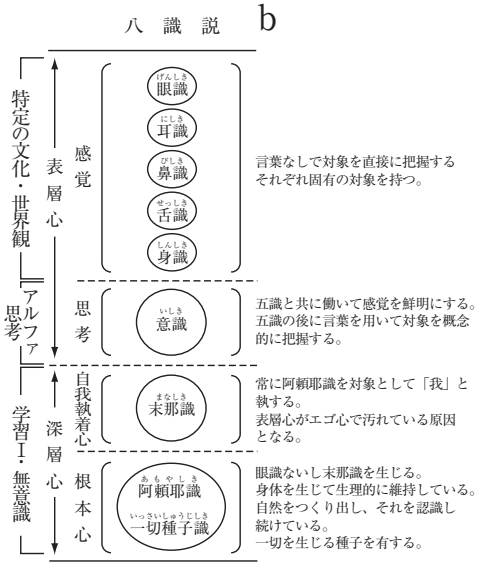
[14] たとえば神仏折衷などのように、異なる教義や思想や価値観などを取捨選択すること。

無意識の世界から意識の世界へ『稜線に立つホモ・サピエンス』より

a



b



a は現代の諸学説を参考にして製作した図(『稜線に立つホモ・サピエンス』より)。
b は唯識論に基づく図(横山 2003 を改変)。
a､b を比較するとき､唯識論の先進性に驚く。

「人間とは」その4

―人間と文化―

椙山女学園理事長
椙山　正弘

道具の使用

人間が作った道具は、それがいかに幼稚にみえるものであっても、人間の意志によって意図的に作られたものである。例えば、石器時代、一人の人間が獲物を捕えるために、石を砕いて槍を作ろうとするとき、獲物がそこにいなくても、そこに獲物がいることを頭のなかで想定し、自分がその槍を使って獲物といかに効果的に闘えるかを考えて作ったであろう。

人間の道具作りは、まず脳のはたらきが手の労働に先行し、手の労働が脳のはたらきをうながす。考えては作り、作っては考える、この繰り返しによって人間として進歩してきたのである。人類学者江原昭善は、『夢をかたちに』(1)のなかで次のように語る。「石器をつくる。その石器を石で作った粗雑な道具とみてはいけない。手間がかかっても、いつか役立つことを予測しながら作業した結果が石器なのである。その有用性は仲間に伝播し、子どもに伝承される。この未来への予測性・見通しは精神活動の反映であるし、伝播・伝承は文化そのものである。コトバが芽生えたのもこのときである」。

アフリカのアウストラロピテクスがヒトであるかどうかという問題についてみると、人類学者の間での大論争の結果、解剖学的に直立二本足歩行の可能な生態的条件が整っていたというだけでなく、道具の製作使用、それによる物資の生産、さらに精神活動や文化の存在などがヒトであることの決め手となったのである。このようにして、精神や文化の存在をつくりだした、人間と道具の関係は、人間の脳の働きをさらに進化発展させるとともに、人と人との関係を社会化させ、今日の人類社会の基礎となったのである。

社会の成立

人間と道具の関係は、親子雌雄などの個体間関係や順位制度といった動物的な群れの状態から、協業と分業、分配・供給・運搬などの仕組みが集団につけ加わり、いわば人間の社会といえる状態へと変化させることとなった。

道具は、その製作使用方法と人間の行動様式を継承させる教育的なはたらきをし、人間関係に変化を生じさせ、知的な認識方法をも発達させた。このことについて、小原秀雄は『人（ヒト）に成る』(2)のなかで次のように述べる。

「新しい道具の改良には、必ず思考が伴った。道具の製作は少なくとも初歩的労働と、技術（技能）との素朴なありかたが関係して生じ、さらに芸術的な創造でもあって、おそらく喜びが伴っていたと思われる。また思考においては、科学の初歩的な機能である法則的認識が加わり、それらの伝達もなされたと思われる。獲物を追う狩猟では、知能的な方

法をとるにつれて、自然（動物）への認識の力は発達していく。罠の使用や火による獲物の追い落とし、さらにイヌをもちいた追跡などでは、とくに動物に対する法則的認識は発達したであろう」。

こうして人間は自然の法則にしたがって自然に働きかけ、道具を使ってものを生産する。自然を労働の対象とし、社会的な営みをすることによって、人間は自然をもとり込んで社会化したのである。つまり、後に詳しく述べるが、自然に存在するものをまさに「採って食べる」採集や狩猟の段階から、「作って食べる」農耕と牧畜の段階に発展させた人間は、自然の存在に手を加え、加工し、そのことによって生産力を飛躍的に発展させたのである。この時期になると物物交換も始まり、流通経済を伴った社会が形成されるのである。

直立二本足歩行と並ぶヒトの特徴は脳の大型化であるが、脳の進化は形態上、容積が増加し、球形に近くなっていった。そして脳細胞が増加し、大脳皮質が増加し、神経線が複雑化した。大脳の進化に伴って、前に述べた手と脳をむすぶ回路を発展させて、言語の使用、思考などを通じ人類文化の創造と継承などを可能にした。また逆に、労働、学習、思考などは、大脳の大型化を必要とし、身体の側がそれに対応するように進化してきたという関係にあるのである。

顔面および歯の退化については、人類の火の使用に関係が深い。人類がいつ頃から火の使用をしてきたかははっきりしないが、火を使って調理した料理は、動物性食物にしても植物性食物にしても、その繊維をやわらかくし、栄養をとりやすい状態にした。生のまま繊維をかみ切るりっぱな歯やあごは必要でなくなり、歯やあごが次第に退化していったものと考えられている。火の使用による効果は、調理することのほか、暖をとること、灯りとすること、動物から身を守ること、通信手段とすることなど、人間の生活圏の飛躍的拡大をはかるのに役立っている。

文化とは

「文化」という語は「自然」という言葉と対比して使われることがある。自然は人間の作為の届かない没理想的な事象であるのに対し、文化は人間の理想に基づく作為的な事象であるというわけである。文化は人間が創造し、観賞する、人間だけの所産物である。

もともと「文化」（Culture）という言葉はラテン語のcultura（耕す）という語を語源としている。たしかに、文化は農耕から芽生え発展した。農耕は、人間に定住生活をうながし、地域ごとの集団生活を意義づけし、地方ごとに異なった傾向も出始めることとなる。温かい気候に恵まれた土地と寒冷な土地では作物も異なるし、そこから生まれる文化も違ってくる。その土地の違いによって、食習慣、地酒、祭り、宗教、方言など生活様式全般にいたるまで、その他独特の「地方文化」が出発点となっている。

農業の始まりは飛躍的に生産力を高め、今述べたような文化をそれぞれ地方ごとに画期的に開花させた。こうして地方文化から始まった文化は、地域間交流、さらには国際交流へと進み、普遍的に理想的価値が追求されるようになり、科学、道徳、芸術、宗教などの文化の発展をみたのである。そして文化は社会発展の原動力の一つの尺度とされ、同時に地方での社会発展の原動力ともなり得たのである。

ところで人間は、生産方法や、社会のなかで生まれてきたルールなどを遺伝による本能によって、生物的に継承することはできない。

人間は文化の創造と継承というものを意識的行為によって可能なものにしたが、その意識的行為は、進化の過程で、本能の弱体化をもたらしたのである。この本能の弱体化こそは、人類を、より人間化したことを意味するのである。そして文化は、人間にとってその人間的な欲求を高度に満足させるための手段として機能しているのである。だから人類は、それまで築きあげてきている文化遺産を発展的に継承させるために教育というものを重要視するようになってきた。

さて、文化は精神的なものと物質的なものとの二つの方向に発展し、前者は文化（狭義）と、後者は文明と、それぞれ呼ばれている。人間は、歴史的にみると、前にも述べたように、文化を獲得する程度に応じて生物的本能を失ってきた。しかし、その反面、文化というものは、人間にとって、その人間的な欲求を高度に満足させるための手段として機能してきたといえよう。

デュルケイム（Durkheim.E. 1858~1927）は、人間において価値のあるもの、いわば文化的なものすべては社会生活の結果であると考えてきた。そして文化は社会的所産であるから、社会的秩序を維持したり、それらを継承・発展させたりする機能を持っている。文化は経済、社会の土台の上に構築される上部構造なのである。だから、社会体制によっては、社会改革や革命のために寄与することにもなるのである。

いずれにしても、文化は、社会発展の一つの尺度とされると同時に、他方では文化は社会発展の一つの原動力ともなりうるのである。社会事象を「人間と人間の関係」という視点からみようとすれば、そこに「社会」があるが、同じ社会事象を、人間の「行動様式」や「表現様式」という視点からみれば、そこに文化という事柄が浮かびあがってくるのである。日本の現代の文化についてみれば、そこには過去から今日にいたるまでの歴史と、未来を展望する縦の系列（文化の発展）と、東洋文化、西洋文化の影響、受容という横の系列（文化の交流）のなかにあり、さらに悲観的、楽観的説など、さまざまな主観的要素なども入りまじって複雑な様相を呈している。

文明の発達

著名な歴史家トインビーは、文明というものは容易な条件のもとではなく、むしろ困難な条件のもとで発生した、という仮説を立て、この仮設の正しさを明らかにするために、過去に文明が栄え、その後衰退した地点の例を次のようにあげている。

「かつてマヤ文明の活躍舞台であった地方は、いまふたたび熱帯性森林地帯になっている。セイロン島のインド文明はセイロン島の雨の降らない地域で栄えた。この地域はいま、インド文明の灌漑施設の廃墟がかつてここに栄えた文明の証拠として残っているが、全く不毛の地になってしまっている。ペトラとパルミラの廃墟は、アラビア砂漠の小オアシスの上に立っている。太平洋のもっとも辺都な地点の一つであるイースター島はその石像群によって、かつてポリネシア文明の中心であったことが立証されている。北アメリカの歴史において、もっとも重要な役割を演じたヨーロッパ人植民地開拓者が入植したニュー・イングランド地方は、あの大陸のもっとも荒涼とした、またもっとも不毛な地方の一つである。最近まで瘴気(しょうき)に満ちた荒野だった。ローマのカンバーニャ地方のラテン諸都市が、ローマの興隆に大きな貢献をした。これに反して、好適な条件に恵まれた、カプア地方は、一向に振るわなかった。さらに、

ヘロドトス、オデッセイア、およびエジプト記から例を挙げる。生活の容易なニヤサランドの原住民は、遠く離れた、気候の厳しいヨーロッパから侵略者がやってくるまで、未開の野蛮人の状態にとどまっていた」。(3)このようにトインビーは、文明というものは、容易な環境のもとではなく、逆境との戦いのなかから生まれたとするのである。

さてここで話題を現代文明に変えよう。日本は、戦後復興から４０年あまりの間に、まさに「ハングリー」な環境の中で、きわめて急速な経済成長をとげ、時計、カメラなど精密機器から、さらに自動車や家電からITなどのハイテクノロジーにいたるまでの分野で、世界のトップレベルにのし上がってきている。住宅問題などの実感の伴わない面もあるが、それでも経済成長によって、国民の生活は飛躍的に向上したといえる。しかし日本経済は、公害問題や、前に述べた自然環境破壊問題、貿易摩擦、生産の空洞化、人手不足、バブルの崩壊、格差の拡大などの困難な試練と課題をかかえている。

文化摩擦

経済成長によってなりあがった「強い日本」は、いま世界から袋叩きにされようとしているが、その原因は実は経済だけではない。国際社会のなかで生きようとしている日本は、集中豪雨的輸出が問題とされ、牛肉、オレンジ、米の輸入制限から、資本輸出問題、原油の高騰、外国企業やヘッジファンドの参入、サブプライムローンの問題などにいたるまで、経済摩擦に直面している。ところがこのように純粋に経済的な問題も、実は日本的な商習慣の問題である場合も少なくなく、したがって構造協議の対象とされ、その源は文化摩擦であるという側面がみられる。

前に、文化は地方文化から出発したと述べたが、それが国際間の問題になると挨拶の仕方、身振りなど、言葉はもちろん生活様式にしても、風俗、習慣にしてもまったく異なる場合だって少なくない。だから国際化とは、文明を理解吸収するだけでなく、他国の文化との差を知ることでないといけない。私たちは案外、地方の文化、日本固有の文化を世界に説明できるほど、日本の文化を理解していない場合が多い。それ以上に他国の文化を理解することは決して容易ではない。しかし、他国の文化を理解しないで私たちは国際社会で生きていくことができない。それほどまでに、経済摩擦の根源ともいえる文化摩擦の問題は大きいのである。

文化遺産

教育は、人間の社会生活に本来備わっている機能である。教育という機能のなかで、人間が次の世代に継承・発展させようと意図してきたのは、社会生活のルールなどのほかに、人びとが額に汗して働いた結果築きあげた成果、つまり文化遺産を主要な内容としていた。人間は前の世代までに築きあげた文化遺産を本能によって受け継ぐことができず、教育と学習によって受け継ぐ。そして受け継いだ世代の人間は、この文化をさらに発展させ、それを遺産としてさらに次の世代に受け継ぐ。これが人間の社会の発展でもある。

科学・技術と人間

ここでは、文化遺産のもっとも典型的な科学・技術の教育について触れる。

今日われわれは、「科学・技術革新」の時代といわれるほど、急速な科学・技術が進歩するなかで、その恩恵を受けて生活している。科学・技術の急速な進歩は、社会における生

産力を高め、それを通して、生活を豊かにし、人間に物質的な幸福をもたらすことができる。しかし反面、科学・技術の進歩が社会のなかで特定の目的に利用されることがあり、テロや核戦争の脅威、環境破壊などによって、「科学」のために人間の生命がおびやかされたり、人間に不幸をもたらしたりする。

今日のこうした科学・技術の進歩と、それの社会的利用の状況のなかで、科学・技術の進歩の成果を人間の幸福に役立てるために、研究者や技術者として働こうとする人びとばかりでなく、すべての人びと、とりわけ、教育が対象とする若い世代の人びとにとって、科学・技術そのものと、それをとりまく情勢とに関心を持たざるを得ない状況になってきている。だから、科学・技術が急速に進歩し、それらの影響の大きい今日、科学・技術の教育は、単に科学・技術そのものだけでなく、それらをとりまく周囲の状況を正しく把握する課題がとりわけ大きくなっているといえよう。それだけに今日の若者の「理科離れ」「応用力の不足」の状況は深刻であるといわざるを得ない。

注

梱山正弘著『人間教育の本質』1993年福村出版11～35ページ参照

（1）江原昭善『夢をかたちに』1991年富士通経営研修所217ページ

（2）小原秀雄『人（ヒト）に成る』1985年大月書店134ページ

（3）トインビー『歴史の研究3』社会思想社、1975年、390～391ページ

『人間性の生物学的背景』*

The biological background for the human nature

財団法人日本モンキーセンター所長
京都大学名誉教授
西田　利貞
Toshisada　Nishida

椙山正弘理事長：こんにちは。皆様お忙しい中、「人間講座」にお集まり頂きまして誠にありがとうございます。椙山女学園は「人間になろう」という言葉を教育理念として掲げております。そしてこの教育理念を大学・大学院から幼稚園に至るまで、各学校ごとにそれぞれ「人間性をどのように培っていくか」ということを考えながら教育を致しております。今日は「人間性はどこから来たか」というタイトルで、まさに私たち学園職員全員が捜し求めている人間性というものについてお聞かせいただけるということで、楽しみにしております。どうかご静聴をお願い申し上げます。

渡邉主任研究員：どうもありがとうございました。それでは本日司会をさせて頂きます人間学センターの研究員の渡邉でございます。まず西田先生のご紹介をさせていただきます。

西田先生、僕たちは普段は「西田さん、西田さん」と呼んでいます。大学時代から僕の２学年先輩にあたりまして、ちょうど、僕が1963年に学部で専門の３回生になった時に西田さんは大学院に入られました。1963年という年は京都大学理学部の中に自然人類学講座という今西錦司先生の講座が出来て、西田さんたちお三人が大学院第一期生として来られました。

三人のお仲間すべてがサルの研究というのを目指しました。そのいきさつについては、西田さんがどこかで卒論指導を今西さんに頼みに行ったところ、伊谷という男が来るのでその伊谷に卒論指導をお願いしろ、という形で伊谷先生と西田さんとの繋がりというのが始まったように聞いております。

卒論から大学院修士課程はニホンザルの研究を手がけられました。千葉県の高宕山という所でのニホンザルの研究ではいわゆる、ヒトリザルあるいはハナレザルというオスが群れから出ていく、それがまだ充分に解明されていなかった時期に、高宕山で詳細な研究をされてニホンザルの群れからオスが群れから外に出て行くという、今日では定説化されておりますが、それを修士論文として纏められました。1965年にはアフリカの地を目指してチンパンジー研究をスタートされました。僕は後方支援ですね、荷物を送り出したりだとか、下働きをしておりました。

西田さんは1966年、目指したチンパンジーの「餌付け」に成功されました。以来40年以上に渡ってアフリカのマハレと現在呼んでおりますが、そこで、途切れることなく、チンパンジーの研究を続けてこられました。その日本のリーダーが西田さんです。

まあ残念ながらというか、1964年よりもちょっと前にゴンベという所で、イギリス人の

ジェーン・グドールさんという女性が最初の「餌付け」に成功しました。グドールさんのところでチンパンジーについての様々な新しい行動とかそういう論文が発表される。それをやや遅れて追いかけるという形で、日本人はスタートしましたが、特に西田さんたちは社会行動の面ではグドールのチームがやらなかった、今日非常に大きな問題を提起して、チンパンジーが「父系型社会」を持っていること、その後、ボノボという類人猿もやはり父系型の構造を持つというという事が明らかになって、そこらを巡っても人間社会との継続性がどうなのか、いろいろ議論をよんでおります。

西田さんはその後、アフリカから一旦帰られてから、東京大学の理学部の方に就職をされました。東京大学で、講師、助教授を務められて、伊谷先生がアフリカ地域研究センターへ移られた後、その跡を受け継ぐ形で、京都大学の理学研究科の教授をされ、定年後は現在まで、モンキーセンター、犬山にございます、そこの所長を務めておられます。

まだ現役で活動中ということで、今日はチンパンジーの研究から、人間性というものはチンパンジーに様々に見られる行動様式ですとか文化といったような側面も含めて、西田さんは人間性の起源というのは非常に古い所まで遡れるのではないか、そこらのお話の一端を本日は紹介して頂くという事でお招きしております。それでは、西田さん、よろしくお願いします。

西田利貞先生：渡邉さん、どうもご紹介ありがとうございました。今日は椙山女学園大学の人間講座の講師にお呼びいただきまして大変光栄に思っております。理事長さん、それから学園長さんにもおいで頂き、大変恐縮でございます。

私は、「人間性はどこから来たか」という本を書いたんですが、今日のタイトルは「人間性の生物学的背景」となっています。意味は同じです。「人間性」というのは英語でヒューマンネイチャーといいます。人間が共通に持っている性質ということを言っています。「人間性」というものは、通常は人間が生まれてから親によって、あるいは社会によって作られるものである、社会が持っているものを受け継ぐ、そういったものであると一般に考えられています。つまり、文化であると考えられています。もちろんそれが間違いという訳ではありませんが、かなり多くのものは生後学習したというよりは、遺伝的に既に人間のゲノムの中にある、というようなことをチンパンジーの研究からお話ししたいとおもいます。

人間性（*Human Nature*）とは

人間が「白紙で生まれてくる」
というのは、誤った考えである
人間は、一定の行動傾向－遺伝的
な素質－をもって生まれてくる
「人間性」とは、長い進化の歴史の
中で培われてきた行動傾向で、
ヒトという種に共通に見られる

１．人間性（Human Nature）とそれを追求する学問

人間は「白紙で生まれてくる」、と言われます。赤ん坊がうまれたときは人間の脳の中

は真っさら、といいますか、なにも書かれていない石板である。そこにお母さん、お父さん、あるいは兄貴とかお姉さんとかおじさん、おばさん、おじいさん、おばあさん等がいろいろ教える。あるいは一般社会の人もいろいろ教え込む、そうやって、人間ができてくるんだ、とそういう風にいわれています。これは今でもやはり社会科学、人文科学の方では非常に大きな影響力を持つ考えです。

この考えはまったくの間違いというわけでありません。たとえば、人間には「子ども時代」という発達段階があります。ある程度独立して歩くこともできるし、話もできるのですが、自分で食べることはできない、そういう子ども時代という時代があります。動物にはそういう時代がないんですね。チンパンジーは4-〜5歳で離乳してから性的に成熟するまでの9歳くらいまでは、お母さんの後をついて行って果物を自分で取ります。ついて行きますが、お母さんが食べさせるというようなことは全然ありません。お母さんが食べさせることはなく、自分で探すことができます。人間の場合は、親に食べさせてもらうという時代がありますよね。そういう子ども時代があるのは、この時代に他の動物以上に、ヒトは多くのことを学ばなければならないことを意味しています。

しかし、人間が一定の行動傾向を生まれつき持っている、遺伝的な素質を持って生まれてきている、ということは間違いありません。それは長い進化の歴史の中で培われてきたものなんですね。

生物人類学とは

「人間性」の研究は、「生物人類学」、あるいは「自然人類学」、といわれている学問で扱われています。

「生物人類学」には異なる方法をもついくつかの学問があります。「古生態学」は花粉や動植物の化石から古い環境、人間が生まれてきた、あるいは進化してきた、古い環境を復元する研究です。「考古学」は遺跡を調べヒトの道具や遺物、とくに石器を調べて、ヒトの活動を復元する研究です。「古人類学」は古い人類化石を発掘し、姿勢・ロコモーション・食物など基本的な適応や進化の方向を調べます。一卵性双生児と二卵性双生児の発達を比較して、遺伝子の影響力を調べる研究もあります。「分子系統学」は、DNAの塩基配列を調べて動物や人種の系統関係を明らかにします。「霊長類学」は、ヒトと最も系統の近い霊長類の行動を調べ、ヒトのそれと比較することによって、ヒトのユニークといわれてきた行動を検証する学問です。詳細はのちほどお話します。最近の流行の学問、「進化心理学」はヒトのいろんな心理を狩猟採集社会における適応として捕らえ、解釈します。

それによく似た学問として、「進化医学」と名乗る学問もあります。悪阻（つわり）という現象がありますね。妊娠２〜３カ月くらいに女性はいろんなもの、たとえば、コーヒーが好きな人がコーヒーが嫌いになったり、飲めなくなったりします。どうして悪阻なんてものがあるのか長い間まったくわかりませんでした。しかし、進化医学の観点からすると、ちょうど2〜３カ月頃の胎児というのは非常に早く成長する、いろんな組織が分化してくる時期でして、その時期は一番胎児が、毒物の影響を受けやすいんですね。ですから

お母さんの身体が毒に対して敏感になる、つまりそれは、数万年～数十万年前のヒトが進化してきた環境に適応して成り立ったものですね。そういうように説明するのが「進化医学」です。

どうして肥満するのかといったこともやはり、「進化医学」から説明できます。今、私たちが食べたいものを食べていたら、糖尿病になったり高血圧症になったりするわけですね。20～600万年前の環境では食べたい物がすぐ手に入ることはめったになかった。アメを舐めたいと思ってもアメはない。肉や魚が食べたいと思っても冷蔵庫がないのですぐ食べられるわけではなかった。

そういう時代では、たとえば、ゾウが殺されて、2-3日ゾウの肉ばっかり食べ、食べ過ぎることもあったかもしれません。しかし、それは数ヶ月に1回きりで、その後は肉が全然食べられない。一カ月も肉が食べられないというのがふつうだったわけで、結局、食べすぎということはありえなかったわけです。ですから、豊富な食べ物がある時期には、それを脂肪として貯蔵するように身体ができている。「倹約遺伝子」というものをもっている。今の文明社会のように、好きなものを好きなだけ食べられるようなことは人間のかつての環境ではなかったわけですね。そういったことから人間の身体は大食いに対してうまく反応できるような状態にはなっていない、つまり肥満になるわけです。ですから、意識的に食べ過ぎにならないようにしないといけないということですね。

”人間性”の研究方法として文化人類学

「文化人類学」は、アフリカや、東南アジ

“人間性”の研究方法

1. **生物人類学（人類進化の研究）：**
   古環境、石器、化石、霊長類の行動、
   双子研究、分子系統学、
   進化心理学、進化医学
2. **文化人類学　（文化変異の研究）：**
   ヒューマン・ユニバーサル

アやインドや南米に行って、いろんな民族を調べます。この学問は、現在細分化していますが、1930年代まではヒトの行動の共通性にも興味をもっていました。世界のどこへいっても、行動や心理、制度・習慣に共通点があることがわかりました。そういった共通点は、「ヒューマン・ユニバーサル」といいます。多くの共通点は、ヒトである以上遺伝的に共通点が多いためです。たとえば、言葉を喋る、ことですね。言葉を喋りだす年齢が１歳頃だとか、共通の文法構造をもつとか、話題は他人の噂話が第一だとか、非常に多くの共通点がある。そいう意味では言語は「ヒューマン・ユニバーサル」の1つです。

自然における人間の位置

私は霊長類の行動、ヒトに一番近い哺乳類の仲間である霊長類を調べることによって「人間性」を調べるという、一つの分野、つまり霊長類学を研究しています。そのうちの大型類人猿、とくにチンパンジーを研究しています。

それでは、「人間性」を考えるにあたって、なぜ霊長類の行動が示唆を与えるのかについてお話します。まず、どうしてチンパンジーの研究をするのかということです。オランウ

ータン二種、ゴリラ二種、ヒト、チンパンジー、ピグミー・チンパンジー（ボノボ）各一種の計七種を大型類人猿と言います。類人猿（エイプ）とは尻尾のないサルで、腕で木の枝にぶらさがります。ぶら下がることと関係して、腕が長くて、肩が回転します。一方、尾があり、木の上を走ったりとんだりするのが、ふつうのサル、モンキーです。サルは木の枝にぶら下がって回転するということはできません。種類によっては単にぶら下がるくらいはしますが、肩の回転はできません。そこに大きな違いがあります。

皆さんは、ヒトは大型類人猿の仲間というけれど、ヒトだけは飛び離れて遠い関係にあるだろうとお考えだとおもいます。専門家もつい最近までそう考えていました。ところが、ほぼ半世紀前ゴリラやチンパンジーは、オランウータンよりヒトに近いことがわかりました。そして２０年前には、チンパンジーとボノボはゴリラよりヒトに近いことがわかったのです。分子系統学の成果です。

人間性を知るためには、チンパンジーやピグミー・チンパンジーが一番重要な研究対象だと思います。次はゴリラであり、オランウータン。もちろん他のサルたちの研究も重要です。南米のサルは旧大陸のサルよりもっとヒトから遠いですが、「平行進化」といいまして、環境によってどのようないろんな形やら社会ができるかということを調べるためには必須の研究対象です。

共通祖先の行動

みなさん、ヒコーキというものを自分のお子さんに対してなさったことがあると思いますが、チンパンジーが、同じことをします。初めて見たときはビックリしましたね。まさに僕が自分の小さないとこにやったことと同じことですね。実はゴリラもボノボも同じようにやります。しかも、足でこうやって上下させるのも同じなんですね。ゴリラとヒト、チンパンジーの共通の祖先もヒコーキをしていたと考えられます。この共通祖先は900万年くらい前になる訳ですから、少なくとも900万年以上前から人類はヒコーキをしていたといえるのです。

(ヒトは900万年以上前から赤ん坊を「ヒコーキ」して遊んできた)

２．ヒトの定義は揺らいでいる

「人間はユニークな動物である」と言われています。ユニークな動物であることに間違いはないんですが、そのうちのいくつかは、やはり他の動物、チンパンジーやボノボにも見られるということが分かってきました。

遊びにルールを持ち込むのはヒトだけ？

たとえば遊びにルールを持ち込むということ。サンディエゴ動物園はボノボをたくさん飼っているので有名です。そこでは高い台がありましてそこで5-6歳から10歳くらいのボ

ノボの子どもが遊びます。そうすると彼らはわざわざ手で目隠しし見えないようにして、棒の上を移動していくんですね。うまくいけばそれでいいわけですが、途中で平均を失って目隠しをやめてしまいますと、それで負けということになります。ただし、5-6歳以下の小さいボノボには手で目を隠しながら実際は、目を開けて下を見ているのがいるらしい。こういろ遊びは実は野生のチンパンジーでは見られていません。

（遊びにルールを持ち込むのはヒトだけ？）

対面交尾

性と愛を組み合わせたのはヒトだけ、とよく言われています。それはどうしてかというと対面でセックスをするのは人間だけと考えられていたからです。実際は、オランウータンもゴリラも対面で交尾することが多いそうです。ボノボも交尾の30%は対面ということです。とくにボノボは興味深いです。お互いに顔を見合わせながらセックスをします。ときどき、体位を変えて今度は後ろからやったりとそういうような、見ていて人間がやってるんじゃないかと思われるような行動を示すんですね。表情も豊かです。「動物のセックスが欲情だけで、ヒトのセックスは愛」というのは勝手な作りごとです。少なくともボノボは違うようです。それにヒトの性も、「ときに愛と結合させることもある」というほうが正しいのではないか。ところで、不思議なことに、チンパンジーはほとんど背位ばかりです。

（ボノボの対面交尾）

「取引」あるいは「互酬性」

それからチンパンジーの行動研究からいろんなことが分かっています。たとえば、チンパンジーは「政治」をする。「人間は政治をする動物である」とアリストテレスが言いました。これは確かに間違いじゃない、人間が一番政治をする動物ではありますが、チンパンジーにもそれに似た行動があります。1対１で負けるときは連合してライバルにあたる、第一位雄はライバルが他の雄と毛づくろいしているのを見ると妨害してライバルの連合形成を妨害する、など。

それから「取引」です。私自身は取引・互酬性がホモ・サピエンスの一番大きな特徴でないかと思います。共通の敵に対して協力して追い払うといった利他行動は、進化しやすいんです。というのは、どちらにとってもすぐに利益のある行動ですから。

しかし、「君、１万円貸してくれ」、「はい、１万円貸してあげます、でも半月以内に返してくださいよ」、という取引はどうでしょうか。実はこの１万円は貸しても返ってくるかどうか保証がないんですね。その人は詐欺師かもしれない。その人は返すつもりがあっても、お金が稼げないかもしれない。返すつもりがあっても交通事故で明日、死んでしまうかもしれない。それゆえ、このように片方が一方的に利益を得る可能性がある利他行動は進化しにくいのです。「死ぬ確率は非常に小さいであろう」とか、「あの人の性質からいって返すであろう」とかですね、いろいろと一瞬のうちに決断をして貸してあげる。その代わり向こうは１万円返してくれて、お礼になにかご馳走するとか、利子をつけて返すとかそんなことがあります。そういうのは取引、互酬性なんですね。お互いに報いるということ。

銀行とか、信用、保険とかいったことは互酬的利他行動の発展です。政府という制度なんかも考えてみれば、みんなからお金を取り上げる、というか税金をとってその代わりに道路を作るとか、学校を建てるとか、必ずお返しが来るわけでして、そうするとやはり、税金は、強制的に払わされている感がありますけれども、基本は、将来のお返しを考えた利他行動にあります。人間の社会構造の非常に広大な部分が、取引や互酬性から成立しているのです。チンパンジーが肉の分配をしますが、そこに互酬性の芽生えがないかどうか、今、懸命にデータを集めているところです。

道徳の起源

それから「道徳」。動物には道徳がない、といわれていますけれども、実際には道徳らしいものがあります。まず、インセストの回避です。父親と娘、母親と息子というのはセックスをしない、あるいは叔父と姪とかですね。そういうのはニホンザルでさえ、三親等以内のセックスはない、ということが分かっています。挨拶をしない若い雄や発情雌を独占した第一位雄を集団から追い出して復帰を許さない「村八分」に似た現象も見られています。大人の雌同士が喧嘩していると、必ず第一位の雄や有力な雄が駆けつけて引き分けます。どちらをえこひいきするということがないのです。人間の道徳は言葉で表されていて明示的であるとは言えますが、道徳は人間だけだとはなかなか言えないという証拠が挙がってきました。

大人の遊び

「大人になっても遊ぶのはヒトだけである」といわれてきました。それで、ヒトは「ホモ・ルーデンス」（遊ぶヒト）と呼ばれています。子どもであれば、どんな猫の子どもだろうが、犬の子どもだろうが、遊ぶのは

（遊ぶ大人のメス2頭）

ご存知だと思いますが、「大人が遊ぶのはヒトだけ」でしょうか。大人のメスのチンパンジーはレスリングをしますし、大人の雄同

士、大人の雄と雌が地面に寝転がって「くすぐりあい」やハンド・レスリングをします。大人が遊ぶのはヒトやチンパンジーだけでなく、最近、鳥でもカラスなんかは、大人でも遊んでいるらしいということが分かってきています。

死体の扱い方

チンパンジーに「死」というものの認識があるかどうかよく分からないんですが、おもしろい事実があります。ニホンザルの母親は、赤ん坊が死んだ場合、一週間以内に死体を捨ててしまいます。チンパンジーが自分の赤ん坊を死なせた場合はちょっと態度が違います。30歳以上の母親が赤ん坊の死体を3カ月以上運んだのを私は観察しました。3カ月というのは、一週間とは桁が違います。チンパンジーの母親は子どもに対して非常に強い愛着心がある。死を認識しているとまでは言いませんが、死んで冷たくなっても、強い愛着心を持ち続けるという意味ではヒトとよく似ています。それから、ミイラになる前、ハエがたくさん来ますが、その時には毎日ハエを追い払っていました。これもニホンザルでは私は見たことがありません。

専制君主的に振るまった第一位雄が、村八分にあった。群れに戻ったとき、集団リンチによって殺された

深い恨みをもつのはヒトだけ？

「リンチ」というものがあるんですね、これは暗い面といっていいかも知れませんが、ントロギという名の雄は13年間、第一位のオスでした。非常に好き放題していたんですね。たとえば、チンパンジーは狩りをします。葉食者のコロブスザルを捕まえて食べます。肉も内臓も脳も骨髄も食べます。ントロギは、肉を取り上げてしまったり、あるいは大人のメスをいじめたり、若者のオスに噛みついたり、というような暴君なんですね。このオスは13年間、第一位のオスをやって、一旦、追い出されたんですね。2頭のオスの連合軍に追い払われてしまいました。そしてまた、戻ってきまして、それからまた3年間第一位のオスだったんですね。しかし、それでまた追い払われてしまって、その時は40歳くらいになっていました。まだチンパンジーとしては、老衰で死ぬような年齢ではなかったんですが、その時、集団攻撃を受けまして、体中傷だらけになり、息絶え絶えで籔の中に倒れていました。集団の縄張りの真ん中でやられていましたので、この集団の仲間ですね、仲間というか、その当時の第一位のオス、第二位のオス、そういった者が、連合して、殺したんじ

ゃないかと思います。この個体を担架に乗せてキャンプまで連れて帰ったんですが、結局、二度と目を開く事はなく死んでしまいました。このように専制君主を集団攻撃して殺すというのは人間にも見られることです。

３．「人間性」という背景の上に文化がある

ヒトのニッチを示すキーワード

ヒトは白紙で生まれるのではありませんが、非常に多くのことを生後に他の個体、お母さん、お父さん、それから社会一般から学ぶことも確かです。そのように広く認識されています。ですから政治学では「制度」、文化人類学では「文化」、「言語」、「社会」、行動学では「伝統」、「ミーム」、心理学では「学習」、「知能」、「認知」、生物人類学では「道具」、「スキル」、「二次環境」、「大脳化」

ヒトのニッチを示すキーワード

政治学：　制度

文化人類学：文化、言語、社会

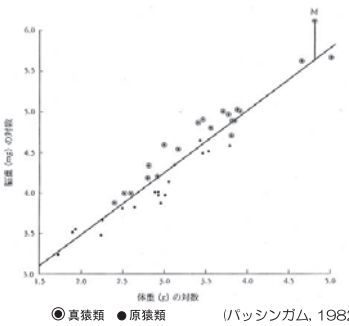
動物行動学：　伝統、ミーム

動物心理学：　学習、知能、認知

生物人類学：　道具、二次環境、大脳化

といった言葉がキーワードとなっています。これらの用語はすべて、結局は文化ということと学習ということに関係しています。つまり、多くの学問が共通してそのようにヒトを位置づけているということです。

この特徴と脳の大きさというものが関係していることは昔から指摘されています。体重の対数と脳重の対数を比較します。（霊長類は小さいのは200ｇ、大きいゴリラは300キロもあります、だから普通の尺度ではこれらを載せきれませんので、対数で比較します）。霊長類全体でそれを並べてみますとこういう直線状になります。ところが、ヒトだけは回帰直線から外れていて飛び抜けて高い。だから、体重の割りには人間の脳は大きいといえます。



（バッシンガム, 1982）

38種の霊長類とヒト（M）の脳重と体重

文化

文化（Culture）をどのように定義をすればいいのでしょうか。「生後、社会の多くの成員に社会的に伝達されて獲得される情報（Information）で、世代から世代へと伝えられていくもの」というのが、私たちが使っている文化の定義です。「社会的に伝達」というのは同種の他の個体から、たとえば親や伯父伯母や兄弟、友人など他の個体から学

文化（*Culture*）とは
次のような条件を満たす
情報（*Information*）である

a) 社会的に伝播される
transmitted socially
b) 集団の多くのメンバーに共有される
shared by many members

文化（*Culture*）とは次のような条件を満たす情報（*Information*）である

c) 世代を終えて受けつがれる
persistent over generations
d) 単に地方的な環境条件に対する適応ではない
not simply result of adaptation to local conditions

ぶということです。それから、集団の多くのメンバーに共有されるということ。それから、世代を終えても越えても受けつがれるということですね。

世代を超えて受けつがれないものは「流行」といいますが、何年もたってからおなじものが再流行することもありますので、「世代を超える」というのは絶対的な条件ではありません。それからもうひとつ。局地的な環境条件に対する適応ではないということに注意を払ってください。ある場所では、ある行動が有効であるが他の場所では有効でないということがあります。動物は、いろんな能力を持っていますから、ある条件の所ではある行動や反応を示すが他の条件では示さないということがあります。そういった違いは単に環境条件に対する適応ですので、そういうものは文化的な違いにはふくまれません。

ヒトだけが自然を改変し、動物は環境に受動的に反応するだけなのか？

それからもうひとつ。文化とか制度とかに関係して、「ヒトだけが、自然を改変する」とよくいわれます。一方、動物は環境に自動的に反応するだけだ、と言われます。こういったことは本当に基本的な相違なのでしょうか。たとえば、狩猟採集民を見ますとそんなに改変なんかしないんですね。一方、チンパンジーを見ますと、チンパンジーも少しは道具を使用したり、自然を改変する。ベッドを作るとき、枝を折り曲げます。あるいは、自己治療といって、病気で、どうも体の具合が悪そうだなというチンパンジーが苦い葉っぱを呑みこみます。ですから、それは非常に小規模ではありますけれども、少しは環境を改変しているといえます。

ヒトだけが自然を改変し、動物は環境に受動的に反応するだけなのか？

チンパンジーも自然を改変するが、それは共生の枠内にある
1．道具使用
2．ベッド作り
3．自己治療

（アフリカ・ブッシュマン）

アフリカのブッシュマンが環境を改変する程度を見てみましょう。キャンプを作ってこうやって小屋を作るわけですね。これは2－3時間で作ってしまいます。小屋を使うのは寝るときだけ、ほとんど外で過ごすわけですね。

火も外で起こします。小屋の周囲の草は全部刈ってしまいます。これは、ヘビとかサソリとか毒虫が見つかるとすぐ殺すことが出来るようにしているのですね。一週間や10日もいればまた移動してしまいます。すると、小屋は朽ち果て、自然に戻ってしまうわけですね。ですから人間が自然を改変すると言いましても、この程度なのです。狩猟採集民というのは、人間の歴史の９５％を占めているんですね。農耕をはじめてから1万年しか経っていません。1万年しか経っていませんから人間の歴史というのはほとんどが狩猟採集民の時代であったわけです。私たちのいろんな行動はこの狩猟採集民の時代において培われてきたわけであります。

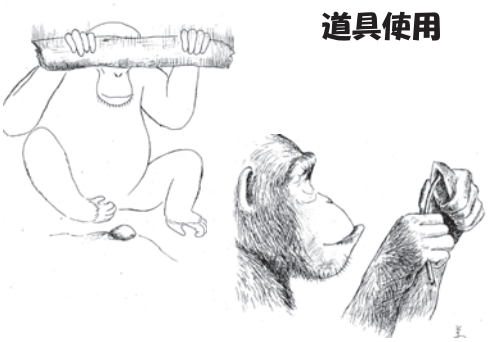
自然を改変するといっても本当に私たちの長い歴史からいっても、槍や弓矢を発明した後であり、とくに農耕を開始した1万年前以降です。都市ができて、古代文明は環境を破壊しました。石油を使い始めてからの自然の改変というか破壊はすさまじいですね。石油を使い始めてからまだ本当に2－300年しか経っていません。しかも大規模に使い始めたのはほんの数十年ですよね。それをやってから大きな改変をはじめたのですから、本当は人間の潜在的な能力としてはあったかもしれませんけれども、ヒトとチンパンジーの一方的な違いといえるかどうかということは分からないということです。

４．野生チンパンジーの行動から

道具使用

西アフリカのチンパンジーは、いろんな堅い実を棍棒や石で割ります。また、実を割ったあと、短く細い枝で中の胚乳をつつき出して食べます。

東アフリカのチンパンジーは、オオアリを釣って食べます。オオアリは指とか手が入らないような穴に住んでいます。枝あるいは樹皮の紐のようなものを突っ込みますと、兵隊アリが怒って咬みつきます。その兵隊アリが咬みつくという本能を利用してチンパンジーはアリ釣りをするわけですね。最初に発明したチンパンジーは、チンパンジーは非常に好奇心が強くて、モノに穴があったら何か入れようとしますね、そうした時に偶然アリが付いていたんではないか、それを学習したんじゃないかと思うんですね。



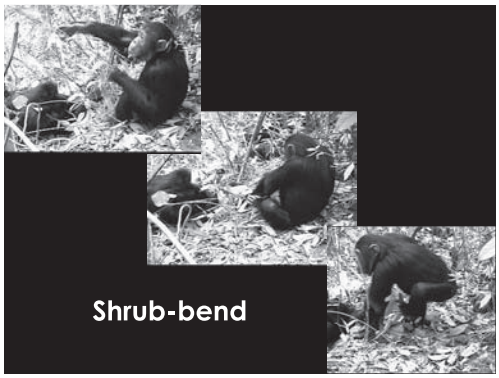
薬の利用？

チンパンジーは蛋白を摂るために若い葉を選んで食べます。たくさん口に入れてむしゃむしゃ食べます。ところが葉を噛まずに1枚ずつゆっくり呑みこむことがあります。呑みこまれる植物は１０種類程度です。消化されないので、糞の中に葉がそのまま出てきます。実際、今のところ、まだはっきりしていないんですけれども、少なくとも栄養のために食べているわけではない。これと共に腸内寄生虫が一緒に出てきたりしますので、そのために、物理的に寄生虫を追い出すために使っているんじゃないかという仮説があります。

求愛誇示の文化

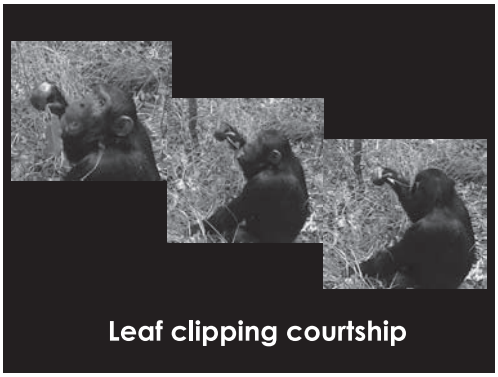
集団によって求愛の習慣が異なるのはおもしろいです。求愛文化があるのです。マハレのチンパンジーは、他所のチンパンジーが示さない求愛誇示をやります。求愛というのは、オスがメス、メスがオスを交尾に誘う為の方法です。これは、通常は非常に本能的な行動であろうと考えられるわけですね。

灌木曲げ誇示（Shrub-bend courtship）では、チンパンジーは、潅木の枝や笹を折り曲げて地面に敷き、その上をトントンと踏み鳴らす。そうやってここにいるメスを呼んでいるわけですね。葉の咬みちぎりによる求愛誇示（Leaf clipping courtship）もあります。



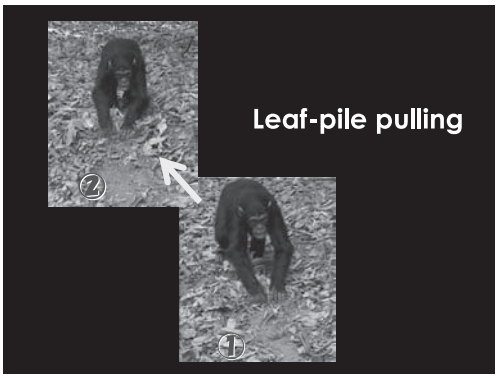
片手で葉っぱの葉柄をもち、上下の歯に挟みつつ引っ張って葉身の部分を噛みちぎります。ビリビリッと音がします。それを何回かやっていきますと中肋だけが残ります。すると新しい葉と取り替えて何回か繰り返します。雄が発情したメスに対しておこなうし、発情雌が雄に対しておこなうこともあります。チンパンジーにはほとんどレイプというものがありません。他の所でもリーフ・クリッピングに似た行動は見られていますが、突撃ディスプレーの前や緊張したときなどに見られるだけで、求愛誇示として儀式化を遂げたのはマハレだけです。ですから、これはひとつの

文化であると言えるんですね。



遊びの文化

次は、「遊び」の文化です。私の研究しているタンザニアのマハレのチンパンジーだけやる遊びを紹介します。3－4歳から10歳くらいまでのチンパンジーがやり、稀に大人のチンパンジーもやります。一年は雨期と乾期に分かれていて、5月中旬くらいから乾期になり10月の中旬くらいまで雨がまったく降りません。半落葉樹林というタイプの森林で、枯葉が積もります。子ども達は、わざわざ進行方向とは逆になって四足で進み、両手でズルズルズル枯葉を引きずっていきます。大きな音を立てて遊ぶわけですね。この遊びを「落ち葉かき」（Leaf-pile pulling）と名づけました。



他の地域の大勢の研究者にビデオ映像を見せましたが、誰もこんなの見たことがない、と言っていました。こういう遊びを発明した子どものチンパンジーがいて、それが他の子ども達へ伝わったのだと思います。

10歳のお兄さんが3歳の弟を背中に乗せて、落ち葉かきをしたことがあります。すると、お兄さんは弟を背中から降ろすと、その直後、弟が落ち葉かきをしました。この場合は、お兄さんから弟へとこのように遊びの行動が伝わっていたんじゃないかと思います。必ずしもお兄さんから弟へということはないんですけれども、遊び友達がいますから、そういう先輩から後輩へと行動が伝わっていっているんではないかと思うんですね。

チンパンジーには教育はない

ただし、チンパンジーとヒトと、ひとつ、非常に大きな違いがあります。チンパンジーには「ティーチング」というものがほとんどありません。ティーチングというものはヒト以外の霊長類にはほとんどありません。ここでティーチングいうのは、「ある個体が、他の個体に積極的にしかも自分に直接的利益無

（歩行訓練）

しに情報を与えること」をいいます。アメリカのヤーキーズ研究所で、チンパンジーの母親が、赤ん坊に歩行の訓練をしたという報告がなされています。これは非常に珍しい、チンパンジーのティーチングの例です。野生ではこういうことはしないのですね、その必要がないのです。ところが、飼育下ではチンパンジーは非常に退屈するわけです。飼育場の狭いところに入れられて、退屈して仕方ないんです。赤ちゃんがいる場合は、その自分の赤ん坊相手に何かする、これはですね、励ましの声を出しまして、そして自分は後ずさりしましてね、自分から歩きなさいと、催促するんですね。野生ではそんなところは僕は見たことがありません。ですから、こういうことは、潜在能力としてはあるのですね。

ティーチングの他の例は、禁止の教育です。たとえば、チンパンジーが私に慣れていない調査当初の頃、といっても10メートルくらいなら逃げない頃のことです。例えば、私がリュックとか双眼鏡とかを置いて離れてしまうことがある。そこへチンパンジーが急にやって来た。すると、赤ん坊は非常に好奇心が強いので、そういったもの、環境の中でこれまで見たことのないもの、を見に行くわけです。赤ん坊はそれに触っては、臭いをかいだりします。ですが、大人のチンパンジーは初めて見るものには警戒して全然近寄らないんですね。そうすると、お母さんはハラハラして、私がここにいるものですから、私の方に来たくないんですけれども、赤ん坊のほうが双眼鏡か何かに近寄っている。そういう時にばっと走ってきて、捕まえて、そこから離しますけれども、そういった事は見たことあります。つまり「禁止」の教育ですね。

しかし、人間のお母さんのように「これを食べなさい」とか、「こうすれば食べられるよ」とか役立つ情報を積極的に与えることはありません。もちろん、言葉がないことはハンディキャップですが、身振りで示すことは可能です。しかし、そういうことはまずないですね。ただ、お母さんが食べているものを子どもが口移し、赤ちゃんなんか口移しでこうやって口をもっていきますと、分配します。食べ物を教えていることになりますけれども、積極的にお母さんの方から口を持っていって、与えることはしません。チンパンジーのお母さんは子どもが要求することなしに口移しで与えることはないんです。そういう意味では、教育、ティーチングというのは人間に非常に発達した行動だとおもいます。ただし、これはヒト以外の霊長類と比較したときのことです。ヒトだけが教育するのかというとかというとそうでもありません。チーターとかトラのような肉食獣では、お母さんが獲物を捕まえますね、その時、完全に殺さないで、半殺しにすることがあります。まだある程度逃げられるけど、びっこを引いて逃げられる程度にしておくんですね。それで、放してやる。そうすると子ども達は、それをわーっと追い

かけていってそれで、子ども達2－3人で一緒になって噛みついて、それで食べる。これはもうティーチングですね、意図的にやっている。しかもこれはお母さんにとってコストがあるんですね、コストとはどういうことかといいますと、噛みすぎると死体と同然になりますから、あまり教育の材料にならないわけですね。しかし、ちょっといい加減な噛み方だと獲物に逃げられてしまいます。チーターは非常な苦労をして捕まえたトムソンガゼルを逃がしてしまうことがあるのです。いい加減な噛み方だと、子どもに教育の為に与えたのに逃げてしまうことがあるわけですね。ですからそういう意味ではチーターは、限られたものですが、教育をするということが言えます。

でも、チンパンジーは教育というものが本当にありません。すべて観察学習といいいますか、見習っているようです。子どものチンパンジーは、母親や年長のチンパンジーがすることをじっと見ています、あるいは覗き込んでいます。のぞきこんでなにをしているのかは、観察だけではわかりません。しかし、意味もなく見ているというのはありえないことでしょう。そういった行動は進化するはずがありません。だから、おそらく、なにかを学習しているんだろうと思います。

欺瞞とポーカーフェイス

「欺瞞」というようなこともございます。ある母親の赤ん坊が死んでしまいました。私が見た時はまだ死んでいず、ヒイヒイ泣いていました。チンパンジーも他の個体も死にかけた赤ん坊というのは関心があって、見ていたわけです。ところが、その後、お母さんは

欺瞞　例１　ポーカーフェイス

大人の雄NSは、死んだばかりの赤ん坊を抱く母親GMの背を4分間毛づくろいした後、突然手を伸ばして、死体を奪い、逃走した
翌朝NSの糞を洗ったら、チンパンジーの毛が出てきた

▼

NSは、赤ん坊を食べるために、毛づくろいして母親を安心させ、油断したところを狙って奪取した

死んだ赤ん坊を連れて、ブッシュの中に１人で入っていった。すると大人のオス１頭がついていって、しばらくは近寄らないでじっと見ていたんですね。それからしばらくした後、お母さんに近づいて毛づくろいを始めた。で、私はこれは本当に優しいオスだな、と思った。赤ちゃんが死んだそのお母さんを、毛づくろいをして慰めているんだ、と思ったんですね。ところが、驚いたことに、毛づくろいをしてしばらくしたら、ぱっと手を伸ばしてですね、死体を取り、そして逃走してしまったんですね。

毛づくろいをして慰めているように見せていただけで、実は、死体を肉として食べてしまいたい、というのがその雄の企みだった。そう考えて、翌日、アシスタントにその雄の便を採集するよう依頼しました。すると、便の中からチンパンジーの毛や皮膚が出てきました。自分の意図を隠すということは、欺瞞という概念に含まれますね。すると、人間だけが欺瞞をおこなうと思われていたんですが、チンパンジーにもそういう例が実際に見つかったわけです。

もう一つ例を挙げます。10歳の雌トゥラは若者です。10歳というと、いわば、高校生くらいでしょう。トゥラはサルの毛皮を持って

いたんですね。長い尾っぽです。5歳の子どもであるオスのリンタにとっては非常に欲しいおもちゃなんですね。欲しいのでリンタはトゥラの後をついていきます。10歳のメス・トゥラは、この5歳のオスが欲しがっているのが分かっている。トゥラは木の上に登りまして、そこから毛を垂らします。そうすると下のリンタの方は掴もうとして飛び上がりま

欺瞞　例3　いじめ

10歳の雌トゥラは、サルの尾の毛皮をもっていた。5歳の子供雄リンタがつきまとった。トゥラは、木に登って、上から毛皮を垂らし、地面のリンタが掴もうとすると引き上げる、ということを繰り返した。しかし、ついに、リンタが端をつかむと、トゥラは悲鳴をあげた

▼

リンタが尻尾を欲しがっているのに気づいて、トゥラは、リンタをもてあそんだ。
与える気のなかったことは、悲鳴をあげたことから明らか

す、するとトゥラはパッと挙げる。また飛び上がるとまた挙げる。そういうことを繰り返しました。「いじめ」というか、「からかっている」わけですね。それで、ついにリンタが端を掴みますと、トゥラは悲鳴をあげた。悲鳴をあげたということは、もともとやりたくなかった、ことを示しています。与えたくはない、遊ぶために、リンタをもて遊ぶためにやっていただけだったんですね。こういうようなことからも、他の個体の心を読み取る、という人間に似た能力をチンパンジーがもっていることが示されます。

チンパンジーの政治

ドゥ・ヴァールは飼育下の研究で、『チンパンジーの政治』という本を書きました。野生のチンパンジーも政治的能力をもつことは、

雄の連合

マハレのチンパンジーが示しています。チンパンジーは一対一で勝てないときは、連合して二対一で戦うということもします。それだけなら、たいした知能はいらないとおもいますが、チンパンジーはそれ以上のことをする。3頭の雄がいて、上位の雄、1位と2位が喧嘩しているときは、3位の雄がどちらに味方するかで勝負が決まってしまいます。3位の雄はこれを利用します。交尾をしてどちらかが攻撃したら、もう一方の雄の味方をする。上位の2頭は3位の雄を味方につけるために、3位の雄の交尾を邪魔することができなくなります。それどころか、ライバルに味方しないように上位の雄が3位の雄の腰を抱きながらついていき、「私の方に味方してくれ」懇願

分離のための介入１

します。こうして、3位の雄は漁夫の利を得て一番多く交尾したというエピソードを私は

分離のための介入２

観察しました。

第一位のオスは、挑戦を受けないよう、他の雄が毛づくろいして仲良くするのを妨害します。とくに、第二位と第三位のオスが最大のライバルですから、彼らが他の雄と毛づくろいしているときはよく妨害します。とくに、2位と3位が毛づくろいしているときは、最も危険な連合ですので、必ずといってよいほど妨害します。自分に対する連合軍ができないようにということですね。これを「分離のための介入」と言っています。

安心付与の行動

それから一方では、第一位の雄のところへは、すべてのチンパンジーが挨拶に来るわけです。挨拶というのは身を屈めるようにして、おじぎをして、＜アッアッアッ＞というような声を出します。そういう挨拶の時、安心しなさいというように1位の雄は劣位の個体の肩をたたいたり、頭を掴んだり、背中を叩いたりします。そういった気遣いも必要のようです。

第一位雄の肉分配

それから「食物分配」ですね。肉の分配ということがあります。第一位の雄のところへ、雌や雄が順番にやって来ます。オスは肉を分配します。分配と言ってもたいては食べるのを許すだけで、所有者の方から積極的に肉を渡すことはほとんどありません。通常は赤ん坊がお母さんにいろんな食物を要求するように、大人の雌や大人の雄が、大人の雄に対して要求する。それに対して与える。しかし、

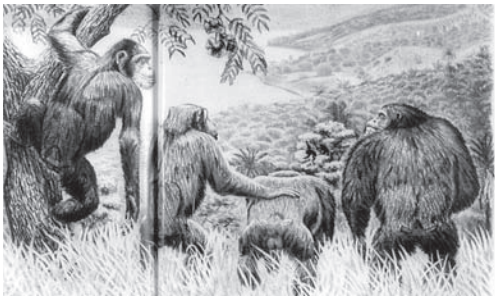
第一位雄の肉分配

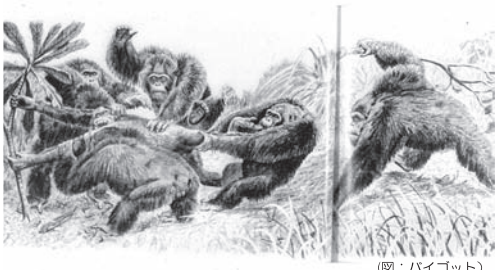
（第一位雄の肉分配）

誰が誰に与えるかというと、でたらめに与えているわけではありません。かつて交尾して出産した雌、発情雌、血縁者、「連合」の相手、年寄り、そういった者に分配します。

集団間の争い

チンパンジーの「集団間関係」は、他の霊長類と比べるとヒトのそれと似ているとはい


ゴンベの戦争１　（図：バイゴット）



（図：バイゴット）

ゴンベの戦争 2

（ゴンベの戦争1・2）

うものの、かなり違っています。人間は非常に大きな社会を作る能力があります。これはヒトのユニークな能力です。しかし、それでも大きな社会が分裂して、どんどん小さなグループになってしまい、そしてお互いにいがみ合うというそういう傾向を今でも持っています。

チンパンジーは、自分の集団と他の集団とを峻別していて、そこで戦いが生まれます。一つの集団は縄張りをもっていて、縄張りの境界を越えることはめったにありません。縄張りと縄張りは重複していません。ゴンベ公園で30年前に観察されたことですが、一方の集団の雄たちが縄張りの境界線で遠くに隣の集団の雄の数頭がいるのを見つけると、境界線を超えて、一頭の雄をめざしてまったく声を出さずにストーキングして集団攻撃を加えました。そして殺してしまったのです。

こういう時に、非常に見事な協力が見られます。一つの集団の雄たちが、ある者は敵の頭を押さえ、ある者は足を引っ張り、ある者は腕を噛むという形で協力しまして、次々と殺してしまったんですね。ですからこの「協力」という関係もですね、人間のひとつの非常に大きな特徴でありますけれども、その起源としてはこういった「集団間の争い」といったところで一番大きな要因となってそれが進化を促したというようなことが考えられます。

チンパンジーの複雑な社会関係

集団内での高順位獲得だけではダメ

隣接集団は敵　→　ライバルとの協力が必要

他のメンバーを傷つけないで、協力を得る（利他行動が必要）

→　知性の進化

チンパンジーの複雑な社会関係

チンパンジーは高い知能を持っていますが、そこには社会的知能が大きく働いているということです。集団内で第一位の地位をどうして望むのかというと、それは交尾権－交尾の優先権－を得るためです。多くのメスと交尾できて、多くの子どもを残せるということです。しかし、そのために、地位をめぐって徹底的に戦えばいいのかというとそうではありません。集団の他の雄をすべて殺してしまえばいいのかといいますと、それではダメです。それでは、自分の集団が小さくなってしまいますから。隣接集団はもっと恐ろしい敵です。そうすると自分が一位であっても他の雄との協力が必要だし、二位以下の者もライバル集団に対しては一致協力して戦わねばなりません。ですから、先程のような殺しというのは、同じ集団のオスが殺されるのは一度しか見たことがありません。同集団の仲間は実際には殺してしまってはまずいわけです。

これは、人間社会と似ています。同じ会社の中の課長さん同士は、部長のポストをめぐってライバルとして争っています。しかし、商品の販売をめぐって、他の会社とも競争しているんですから課長はライバル課長との競争ばかり考えていたらダメですね。他の会社にやられてしまったのでは部長になっても意味がないわけですから。ですから同じ会社の中で、職場の中では争いますけれどもそれは適当にやっていてですね、非常に大きな敵との間では協力をするというようなそういう関係が必要なわけで、ある意味ではむずかしいことでもありますよね。そういったことがヒトやチンパンジーの社会的な知能というものを進化させた理由の一つではないかと考えます。

ヒトの進化的適応環境（EEA）

サヘラントロプス、オロリン	**600万年前**	**森林？**
アルディピテクス	**500万年前**	**森林？**
アウストラロピテクス	**400万年前**	**サバンナ**
初期 *ホモ*	**250万年前**	**サバンナ**
ホモ・エレクトス	**200万年前**	**サバンナ**
ホモ・サピエンス	**20万年前**	**サバンナ**

（ヒトの進化的適応環境）

５．ヒトの進化

ヒトの進化的適応環境

チンパンジーの研究は、ヒトだけにしかない特徴がどのようにして進化したかということを説明することはできません。たとえば火の使用の起源といったことは、チンパンジーが火を使わない以上、チンパンジーを研究してもわかりません。それにはヒトの化石やら先史人類の遺跡や道具とか、あるいは狩猟採集民の研究、そういったヒト自体の研究も必要なわけです。とくにヒトがどういった環境で進化したのかという情報が必要ですが、人類の先祖が生まれた環境はあまりはっきりしていないんです。常習的二足歩行というのがヒトの生物学的定義となっていますが、どれが二足歩行を開始した類人猿なのかは、はっきり分かっていません。ただし、アウストラロピテクスの頃になりますともうはっきりと歩いていたことが分かっています。

チンパンジーとヒトの共通先祖は森林にいたらしいです。でもホモ属になってから後、ヒトの祖先がいたところはサバンナたったということは間違いないです。

現代人は狩猟採集民

現代人は狩猟採集民

ヒト（*Homo sapiens*）が生まれたのは、
２０万年前頃といわれている．
ヒトは、当時、サバンナ環境で狩猟採集生活を
送っていた．
それゆえ、ヒトの形態、生理、心理、行動は、
当時の環境と生活様式に適応している．

ヒトは、現代の文明社会の環境に、
適応しているといえるのだろうか？

ホモ・サピエンス・サピエンスと呼ばれる現代人は、20万年前頃誕生したと言われています。ヒトの形態、生理、心理、行動というのはサバンナ環境で狩猟採集生活を送っていたそのときに生まれたものと考えられます。チンパンジーも少しはサバンナを利用しますが、基本的には森林の動物ですから、ここで、ヒトとチンパンジーは違ってきたんじゃないかということですね。現在の文明社会の環境

は、ヒトが適応した環境とは違っているので、いろんな社会問題が起こっていると考えられます。

狩猟採集社会と文明社会

狩猟採集生活と文明社会の違いは、いろいろあります。「自然環境」対「都市環境」という対比がまずあります。後者では植生や捕食者を取り除いてしまいました。それから寄生虫さえも除去してしまいました。私が子どもの頃は、畳を上げればノミはいましたし、蚊が多くて蚊帳を吊って寝ていました。今はほとんどなにもいなくなってしまいました。遊動をやめて定住し、人口密度が何百倍かになりました。社会も顔見知りばかりの小集団から、匿名の大きな都市社会に変わりました。血縁社会は比較的最近、失われました。わたしの子ども時代、まだ血縁者の拡大家族は普通に見られました。今は１人世帯が多い。夫婦だけで子どもがいない家族も多い。だいたい1960年頃を境にして、急に世帯のサイズが小さくなりました。昔は父母だけでなく、叔父や叔母と一緒に孫も一緒にいたわけですね。お互い助け合っていたわけです。その代わり社会保障も必要じゃなかった。近親者が

狩猟採集社会と文明社会

1. 自然環境　vs　都市環境
   （植生、捕食者、体外寄生虫の除去）
2. 遊動生活　vs　定住生活
3. 人口密度　小さい　vs　大きい
4. 小グループ　vs　都市社会
5. 血縁者の拡大家族　vs
   個人や核家族と非血縁者
6. 戸外活動　vs　オフィス労働
7. 野生食物　vs　栽培植物、家畜
8. 万能人　vs　特殊人

が責任を持っていたということです。狩猟採集時代にはヒトは万能人でした。今は各人は特殊な能力しかありません。私がチンパンジーを研究している地域の村では、人々は自給自足でほとんどすべてのものを自分達で作ります。家はもちろん、ござ、容器、壷、ロープ、ベッド、魚網も作っていました。衣類は、今は確かに作ってはいないですけれども、1950年頃まではイチジクの樹皮をはいで木槌で叩いて軟らかくして作っていました。そういうなんでも作れる万能人ですね。しかし、現代人一人一人ができることは本当に限られています。

人類進化の特殊性を説明する理論

人類進化の特殊性を説明する理論

1. 文化淘汰説
   - 道具・進化相互作用仮説
   - 自己家畜化仮説
2. 種内競合説
   - 性淘汰説
   - 社会淘汰説

ヒトという、こんなへんな動物がどうして生まれたのかを説明する理論というのはいくつかあります。「文化淘汰説」と「種内競合説」とがあります。今は「種内競合説」という動物の個体の我々人間の社会の競争によっていろんな、特に社会的な知能、社会的な知能が生まれて、その中で人間の脳が大きくなったという説が有力になっています。

文化淘汰説

ヒトが作り出した習慣、制度、環境がヒト

の自然淘汰に影響を及ぼしたというのが「文化淘汰説」です。

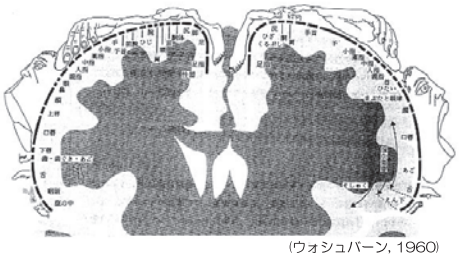
生物人類学」のひとつの大きな課題として、「犬歯の縮小」があります。類人猿の中でヒトだけは犬歯が短いです。これは、武器の発明によって犬歯が不要になったから、というのが仮説の1つです。どうして、ヒトだけ

文化淘汰説

学習と行動変容による自然淘汰の増幅

牧畜 → 乳糖耐性の獲得
農耕 → マラリアの拡大 → 鎌形ヘモグロビン
堀棒と堅い食べ物 → 犬歯の縮小
槍の使用 → 右利きの発達
火の使用 → 料理 → 歯と顎の退化

が右利きかという疑問に対しては、ヒトが槍を発明し、それを右手で使うようになったから、というのがやはり有力な仮説です。火のは百何十万年前に始まりました。ホモ・エレクトス時代に発明されたといわれています。料理が始まり、それが歯や顎の退化を引き起こした可能性は高いでしょう。そうしますと、ホモ・サピエンスだけじゃなくて、もっと古い種の時代から文化淘汰が起こっていたのかもしれません。

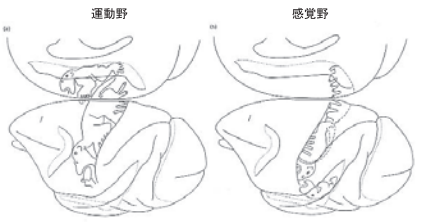


(ウォシュバーン, 1960)

ヒトにおける脳のホモンキュラス

しかし、人間が大きく環境を改変したのは1万年前以降です。農耕・遊牧が始まってからです。基本的には、人間性というものはこの一万年の間に大きく変わったとは思えません。しかし、小さな進化は起こっているようです。たとえば、私たちは赤ん坊のときはミルクをちゃんと消化できますが、大人になってミルクを飲みますと下痢をします。しかし白人やアフリカ人の遊牧民は大人でもミルクを飲んで下痢をしないんですね。それは乳糖耐性という遺伝子のひとつの変化によるのです。大人になってもミルクを消化できる、そういう能力を獲得したんですね。遊牧生活を経なかった民族は乳糖耐性をもっていません。

もう一つ例をあげましょう。農耕（という文化行動）の結果、水溜りがたくさんできます。水溜りが多いと蚊がたくさん発生します。そういう所に住んでいる人々は鎌形ヘモグロビン（S遺伝子）をもっていることが多いのです。これも遺伝子の塩基が一つ入れ替わっただけの小さい変化です。S遺伝子を一つもっている人はマラリヤに対して強いのです。これもおそらく文化、人間が作り出した環境に対する適応と説明できます。こういった例があるので、太古の昔の文化行動が淘汰の大



(ウォシュバーン, 1960)

サルにおける脳のホモンキュラス

枠を作ったという可能性は捨てきれません。

種内淘汰説

ヒトの脳が大きくなったのは、人間社会の個体間の競争によるものである、という仮説が今、有力になっています。霊長類の集団サイズと脳の新皮質サイズは相関します。つまり、社会関係が複雑になればなるほど、脳は大きくなるらしいのです。

人類の特徴の進化を説明する仮説として２つだけ挙げましたが、他にもいろいろな仮説があります。しかし、時間がなくなりましたので、私の話はこれくらいで終わりたいと思います。後はちょっと質問をお受けしたいと思います。

謝辞　本稿のもとになる野外研究は、おもに学術振興会科学研究費補助金（12375003,16255007,19255008）によっておこなわれました。関係各位に謝意を評します。

渡邉主任研究員：西田先生どうもありがとうございました。ちょうど6時半になりましたので、最後に締めでセンター長から閉会の挨拶を頂きます。

椙山孝金センター長：西田先生、今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。今日は本年度の第一回人間講座ということで、その点からいいまして大変いいお話を伺うことができたと思います。大変勉強させて頂きました、ありがとうございました。一ヶ月おきくらいにこのような催しを私どもも開催したいと思っておりますので、これをご縁に今後とも是非足を、お運びいただけたらと思っております。今日は本当に貴重なお時間をありがとうございました。

参考文献

Brown, DE 1991. Human Universals. McGraw-Hill, New York.
ドゥヴァール、フランス2006.『チンパンジーの政治』産経出版
de Waal F & Lanting F 1997, Bonobo Uuiversity of California Press, Berkeley
西田利貞1981.『野生チンパンジー観察記』中央公論社
西田利貞2007.『人間性はどこから来たか』京都大学学術出版会

*平成19年度第1回人間講座『人間性はどこから来たか』の講演要旨

江戸時代のやきもの流通 ー江戸と名古屋・大坂の比較ー

Ceramics Distribution in the Edo Period
- Comparison of Edo,Nagoya,and Osaka

椙山女学園大学文化情報学部准教授
森本　伊知郎
Ichiro　Morimoto

1　はじめに

考古学というと、縄文や古墳時代など、古い時代が対象と思われるかもしれない。しかし、近年は、江戸時代など新しい時代の発掘調査も増えている。江戸の遺跡では陶磁器類が大量に出土する。その大半は生産地で量産され、流通過程をへて消費地にもたらされた日用品である。ふだん使いの器のため伝世することは少なく、破損や火災に伴って廃棄された遺物が多い。消費地で出土する陶磁器からは、当時の日常生活に関する様々なことが分かるが、ここでは、出土遺物から近世陶磁器の流通について考えたい。以前は出土陶磁器の一部を図示する程度の報告書が多かったが、最近は、何らかの形で陶磁器の量的なデータを示す報告書が増えてきた。そうした量的な資料に基づいて、江戸、名古屋、京都など、東海道の消費地遺跡における陶磁器の産地組成を分析し、地域間の様相を比較してみたい。

2　遺物としての陶磁器の特徴

ひとくちに「陶磁器」と言っても、原材料や焼成温度の違いからいくつか種類がある。近世陶磁器は、土器と陶器、磁器の３種類に大きく分けられることが多い。「土器」は粘土が原料で、約700～1000℃で焼成する。焚火で焼くことができる。素地は多孔質で吸水性が大きい。また、どんなに薄く作っても光は通らない。「陶器」も粘土が原料で、窯を用いて約900～1200℃で焼成する。素地には釉を施すことが多い。吸水性は土器よりも少ないが有り、透光性はない。「磁器」は、日本では陶石（石英粗面岩）などといわれる鉱物が原料で、1250℃以上の高温で焼成し、長石や石英がガラス化したやきものである。吸水性は微量か無く、ガラス化すれば透光性がある。磁器はChinaともいわれるように、中国の唐代の末（９～10世紀）にはじまったといわれている。朝鮮半島では10世紀頃、ベトナムでも14世紀頃にはじまったが、日本での磁器生産は遅れ、17世紀初頭に肥前の有田で初めて成功した。有田以外の国内産地で量産されるのはさらに後で、「せともの」で知られる瀬戸では19世紀初頭である。民俗学者の柳田國男は、白くて汚れの染みない磁器が食卓に出現したことは、食生活の上で大きな変化であった、と述べている（柳田1970）。

図1　近世陶磁器の主な器種

陶磁器には用途に応じて様々な形態があり、これを器種とよんでいる。図１に近世陶磁器の主な器種、表１に器種と用途を示した。

遺跡から出土する陶磁器の特徴をあげると、第一に、飲食、調理、貯蔵などに用いられた日用雑器が大半なので、その組み合わせから、当時の日常生活を知ることができる。第二に、陶磁器は土中で割れることはあっても腐ることがない。木製品は腐ったり、燃料として燃やされる。金属器はさびたり、リサイクルされるが、陶磁器は不朽性があるので数千年でも残る。第三に、陶磁器は可塑性があるので、産地や時代の違いによって様々な器形・文様がある。その特色から生産地と製作年代が特定しやすい遺物である。第四に、陶磁器は、どの遺跡でもほぼ普遍的に出土する。これも離れた地域間で比較を行う場合には重要な特徴である。

3. 問題点の所在

江戸の遺跡では、肥前系、瀬戸・美濃系、京・信楽系、常滑系、備前系、志戸呂系など国内の陶磁器、また、中国、朝鮮、東南アジア、ヨーロッパなど海外からの舶載陶磁器も少数ながら出土する。地下室やごみ穴などの

用　途	器　　種
食膳	碗・猪口・向付・小碗・坏・鉢・皿・盤・蓋物・段重・水注・散蓮華・散蓮華置・箸置・箸立・醤油注・器台
飲酒	盃・盃洗・盃台・馬上盃・徳利・燗徳利・銚子・瓶子・酒注・ちろり・燗鍋
喫茶	茶碗・茶壷・茶入・振出・建水・水指・托・茶釜・風炉・涼炉・灰器・香合・茶杓立・急須・土瓶
煮炊	鍋・土鍋・行平・釜・焙烙・焜炉（七厘）・甑・蒸器
調理	擂鉢・片口鉢・捏鉢・練鉢・乳鉢・卸皿・柄杓・漏斗
貯蔵	壷・甕・瓶・桶・蓋物・合子・箱・栓・穀物貯蔵箱
信仰	香炉・線香立・仏飯器・仏花瓶・御神酒徳利・仏供鉢・仏像（各種）・神像・狛犬・厨子・祠・位牌・墓碑・絵馬・護符・扁額・輪宝
灯明	灯明皿・灯明受皿・脚付灯明皿・秉燭・燭台・瓦燈・カンテラ・燈篭・油壷・油徳利
暖火	火鉢・手焙・火入・瓶掛・五徳・十能・火消壷・温石・懐炉・湯たんぽ
文房	陶硯・硯屏・硯箱・水滴・筆筒・筆洗・印章
化粧	紅皿・合子・鬢盥・髪油壷・鉄漿坏・鉄漿壷・嗽碗・鏡台
喫煙	煙管・火入・灰吹・灰落・煙草入・煙管台
遊戯	人形・ミニチュア（各種）・笛・鈴・碁石・碁笥・将棋駒・賽・泥面子・芥子面・面型・模鋳銭
保健・衛生	手水鉢・尿瓶・蚊遣り・薬研・蘭引
植栽	植木鉢
花瓶・花入	花入・花生・花瓶・掛花入・水盤・花器
飼育	餌猪口・餌皿・餌入・金魚鉢
建具	瓦・敷瓦・戸車・欄間飾り・井戸枠・井戸車・井楼・滑車・土管
生産用具	土型・色見・匣鉢・乳棒・乳鉢・棚板・印・陶棒・エブタ・シッタ・トチオサエ・ハマ・エンゴロ
その他	置物（各種）・面（各種）・扇掛・枕・分銅・楽名刺・土錘・露盤・水盂・暦板・瓦証文

表1　陶磁器の器種と用途

遺構ごとに、出土した陶磁器の産地や器種別の数量をカウントし、地域間で比較することによって、考古学資料から近世陶磁器の流通について考察することができる。

しかし、出土陶磁器を数量的に把握して、その様相を地域間で比較する研究はあまり進展していない。その理由は、第一に、出土陶磁器の数量をカウントした調査がまだ少ないことがあげられる。第二には、陶磁器のカウント方法が不統一であることである。陶磁器はばらばらに割れて出土するが、その数量をどのように把握するかはなかなか難しい問題である。総破片数、総重量、接合復元した個体数、口径の残存部を合算した推定個体数など様々なカウント方法があって、それぞれ一長一短がある。筆者は総破片数と接合復元個体数を併記して、産地組成には接合復元個体数を用いるのが望ましいと考えているが、簡便で共用可能なカウント方法を構築することは今後の重要な課題である（森本2003）。しかし、現状においても、それぞれの算定方法の特性に留意した上で、大掴みながら比較を行うことは可能と思われる。ここでは、その遺跡において、ある生産地の製品が有るか、無いか。また、割合にして10%を超えるような大きな違いに注目して、産地組成を比較し

てみたい。

４．東海道の消費地遺跡における事例

江戸から大坂にいたる東海道の消費地遺跡から、陶磁器の出土量と廃絶年代を把握できる遺構を選び、遺構の一括遺物を単位として、陶磁器の産地別組成を集計した。図２に対象とした主な消費地遺跡の位置を示した。図３～５は各遺構の産地組成を示した横棒グラフである。左側に遺構名と出土量（N）を記した。年代は16世紀末葉から19世紀中頃までとした。年代は、上が古く、下が新しい遺構である。様々な生産地があるが、主要な産地である肥前系（磁器：黒ベタ・陶器：黒地に横線）瀬戸・美濃系（磁器：白地に縦線・陶器白ヌキ）、京・信楽系（右上り斜線）の3産地にご注目頂きたい。

（１）江戸の遺跡（図３）

東京都港区の郵政省飯倉分館構内遺跡は、米沢藩上杉家、臼杵藩稲葉家などの大名屋敷跡である。筆者も調査した遺跡で、数値は接合復元した個体数である。17世紀中葉から後葉までは遺物量が少ないが、肥前系の磁器と陶器が60～80%を占めている。しかし、18世紀後半以降になると、肥前系は20～40%に減少する。18世紀後半以降は遺物量が増加する時期でもあるので、必ずしも肥前系の絶対量が減少したわけではないが、遺跡における肥前系のシェアは確実に減少している。かわって、瀬戸・美濃系を中心に、京・信楽系などの生産地が増えている。瀬戸・美濃系の陶器は、18世紀中葉以降になると器種の種類が増加する。土瓶や植木鉢、高田徳利、鳥餌入など、用途が限定的な器種が増えるのが特徴的である。また、瀬戸・美濃系の磁器は19世紀初頭に出現すると、短期間のうちにシェアを

遺跡分布図（●は消費地遺跡、▲は陶磁器生産地）

図2

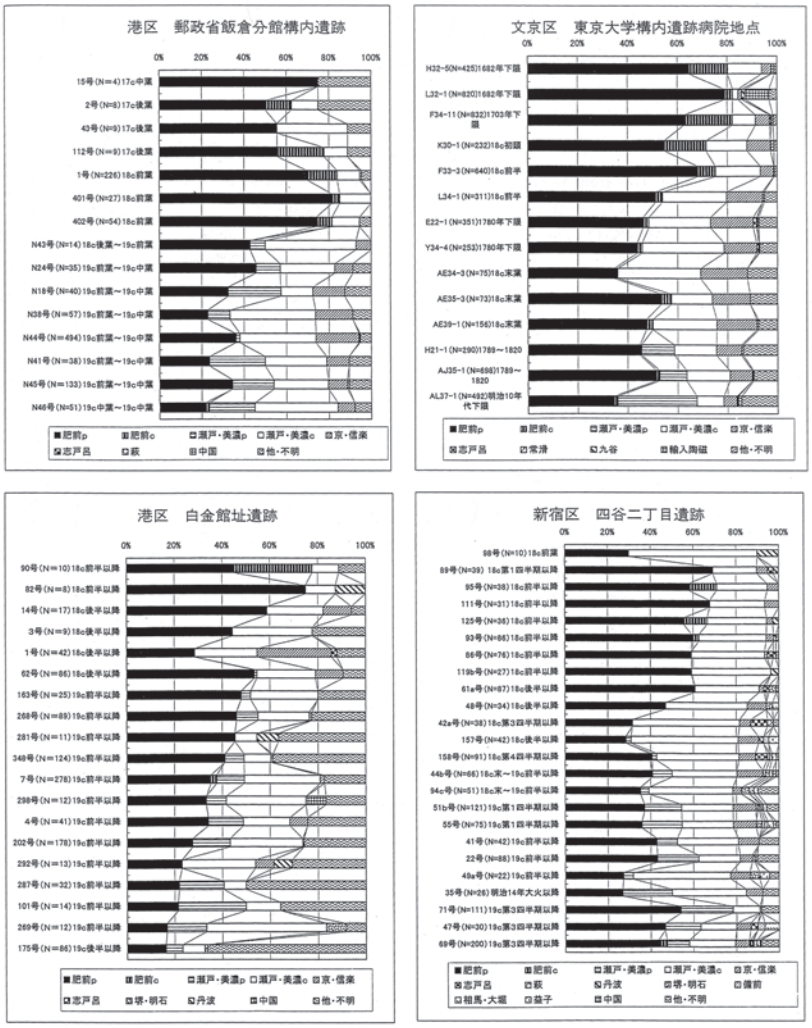


図3　江戸の遺跡

拡大し、瀬戸・美濃系磁器だけで全体の26%を占める遺構も存在する。

東京大学本郷構内遺跡医学部附属病院地点は、加賀藩前田家、大聖寺藩などの屋敷跡である。底部の中心部分をカウントした数値という。肥前系は17世紀後半から18世紀初頭に70～80%の高い割合を占めるが、その後18世紀後半に減少し、瀬戸・美濃系と京・信楽系が増えている。ただし、他の江戸市中の武家地に比べると、東大病院地点は瀬戸・美濃系陶器の割合が低い。これはこの時期に大量に出土する高田徳利が算定から除外されていることも影響していると思われる。

港区の白金館址遺跡は、家禄200俵程度の御家人屋敷である。筆者らが調査し、数値は接合復元の個体数である。18世紀後半以降の遺構が主であるが、18世紀後半に肥前系が減少し、それに代わるように瀬戸・美濃系とその他の産地の割合が増加していることが分かる。

新宿区の四谷二丁目遺跡も下級武家屋敷である。個体資料と底部換算値を合わせた推定個体数で、算定方法はやや異なるが、産地組成の変動は飯倉分館構内遺跡と類似している。ただし、18世紀初頭までの肥前系は70%程度に留まるが、これは算定方法の違いによるものか、居住者の違いが影響したものか判断できない。

このように、江戸の武家地における陶磁器の産地組成とその変化は共通点が多いといえる。ただし、全く同じというわけではない。数量データがないため呈示できないが、例えば、新宿区の尾張藩上屋敷跡では、瀬戸・美濃系の割合が他の大名屋敷よりも多いという。陶磁器生産地を擁する藩では、国元との関係にも注意する必要がある。また、江戸の町人地の発掘調査は少ないが、中央区の日本橋一丁目遺跡などでは、瀬戸・美濃系の陶器が磁器よりも多いようである。

（２）相模・駿河・遠江の遺跡（図４）

平塚市の宮の脇遺跡は東海道の平塚宿にあたる。溝状遺構の富士山宝永火山灰（宝永４（1707）年）よりも上層から出土した陶磁器

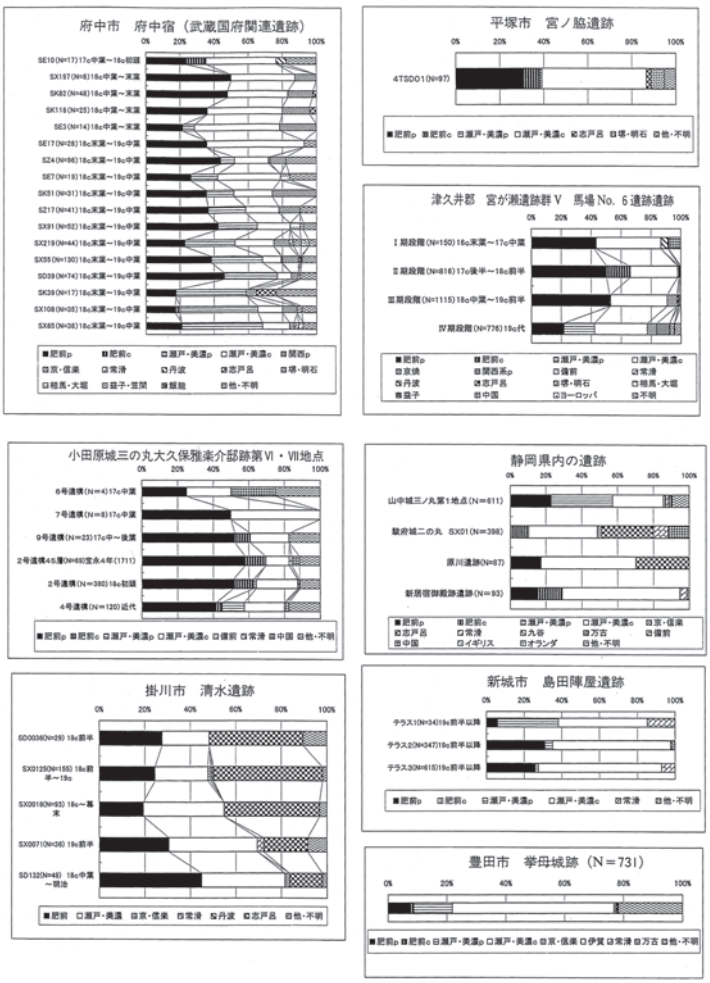


図4　武蔵・相模・駿河・伊豆・遠江・三河の遺跡

の接合個体数を筆者らがカウントした。肥前系38%、瀬戸・美濃系49%である。小田原城下では多くの近世遺跡が調査されている。そのうち小田原城三の丸大久保雅楽介邸跡の組成を示した。瀬戸・美濃がやや多いが、おおよそは江戸と似た傾向と思われる。

駿府城二の丸跡SX01は寛永12（1635）年とみられる火災層に覆われている。仲野泰裕氏の調査によると、肥前系7.9%、瀬戸・美濃系30%、志戸呂系22%という。掛川市清水遺跡は、東海道の日阪宿の一部で遠江にあたる。灯明皿、小皿、擂鉢は地元静岡の志戸呂系陶器である。肥前系は19～45%である。遠江と三河の国境で、新居関所がおかれた新居宿御殿跡では、遺跡全体の集計で肥前系29%、瀬戸・美濃系66%である。駿河・遠江では、三河や尾張に比べると、肥前系の割合が高く、瀬戸・美濃系が少ないようである。

（３）尾張・三河の遺跡（図４・図５）

三河にあたる新城市の島田陣屋跡では、残存する口縁部を計測するカウント法で、それぞれ瀬戸・美濃系が65%以上である。壷・甕はほぼ常滑系に限られる。肥前系も30%前後

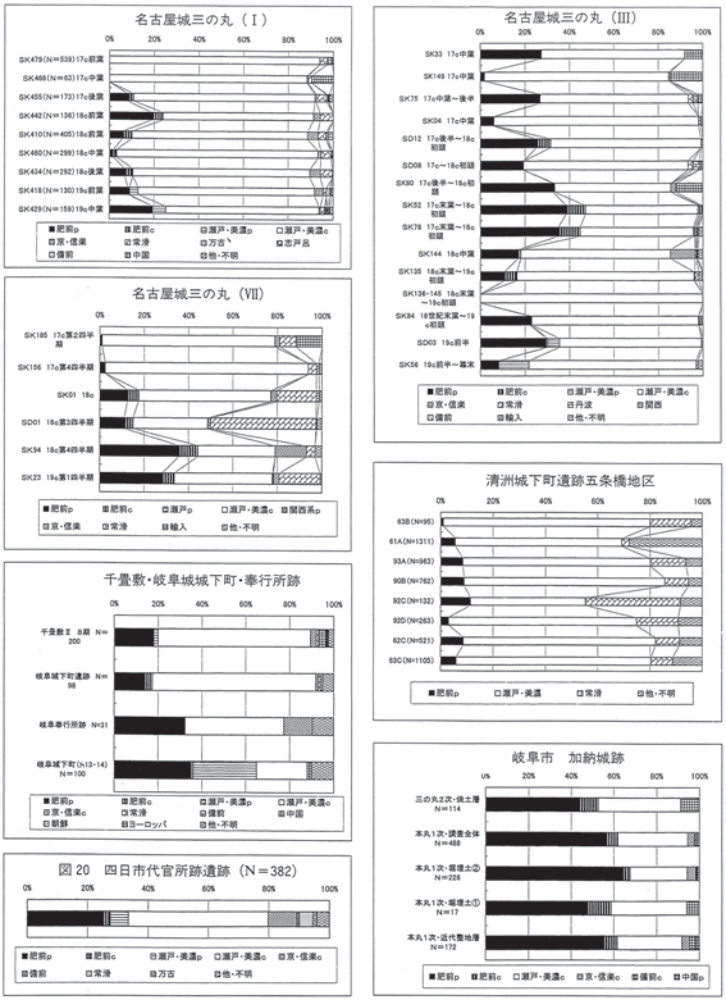


図5　尾張・美濃・伊勢・の遺跡

含まれる遺構があり、尾張よりは多いようである。豊田市の挙母城跡では、観察表に示された731点の合計で、肥前系8.8%、瀬戸・美濃系68%である。瀬戸・美濃系が独占的な尾張・三河の特色が現れている。

名古屋城三の丸跡は主に尾張藩の上級家臣の屋敷跡で、いくつかの地点で発掘調査が行われている。ここでは陶磁器の産地が判明する図書館地点（Ⅰ）（接合後の口縁部数）、名古屋家庭・簡易裁判所跡（Ⅲ）（口縁部残存率の合計）、旧国立名古屋病院地点（Ⅶ）（接合前破片数）の３地点を示した（図５）。算定方法はそれぞれ異なるが、江戸時代を通じて瀬戸・美濃系陶器の割合が極めて高いことがわかる。肥前系は18世紀初頭に一時的に増加するが、すぐに減少してしまい、20%以下と少ないのが特徴的である。近世を通じて肥前系がこれだけ少ない消費地は全国的に見ると珍しい。これは、大産地である瀬戸と美濃が近くにあるからと説明されることが多い。しかし、今回検討したところ、それだけでは説明できないと考えている。器種は碗・皿類が主で、他の都市遺跡と変わらないが、磁器が少ない。地元にも係らず、瀬戸・美濃系の磁器の割合は江戸遺跡よりもむしろ少ない。図書館地点（Ⅰ）のSK429で6.1%、裁判所地点のSK56で13.6%に留まる。江戸では25%を超える遺構も存在した。この理由を推測すると、19世紀初頭に開発された瀬戸の磁器、「新製焼」の主な目的は、尾張の領外で販売

図6　近江・平安京・大阪城の遺跡

して正貨を獲得することにあったのではないかと考えられる。とすると、尾張領内で使用するのは二の次であったのではないかと思われる。例えば、発展途上国のプランテーションで栽培されるコーヒーやバナナでは、高級品は先進国に輸出して外貨稼ぎにあてられるというが、それと似たようなあり方が考えられるのではなかろうか。瀬戸・美濃系磁器の主な市場は、江戸とその周辺だったのではないか。

清州城下町五条橋地区は、口縁部の残存率で、瀬戸・美濃系が70%以上、肥前系は10%以下である。また、常滑の製品で浅鉢や火鉢が多いが、これらは尾張の領外ではあまり見かけない製品である。

（４）美濃・伊勢・近江の遺跡（図５・図６）

美濃の岐阜では、関が原の戦後の慶長６（1601）年に徳川家康によって岐阜城は廃城となり、新たに加納城が平野部に築かれた。岐阜市の調査によると、岐阜城の千畳敷と岐阜城下町では瀬戸・美濃系が70%以上、肥前系が20%以下で、ほぼ尾張に類似するようである。しかし、同じ岐阜市内にありながら、加納城本丸跡では肥前系が60%前後を占めており、様相が異なる。加納城主は、最初に上野城主奥平家（10万石）、宝暦年間から永井家（3.2万石）が入る。本丸のみが特殊なのか、今後の調査を待つ必要があるが、尾張藩の直接の支配下にはなかったことが、使用された陶磁器の産地にも影響した可能性が考えられる。加納城は大きな城ではないが、城下に長良川が流れて木曽川につながっており、水運には便利な立地である。

伊勢の四日市代官所では、観察表全点382点の集計で、瀬戸・美濃系52%、肥前系28%、京・信楽系が9.4%である。尾張に類似するが、京・信楽系が10%近く存在する点が異なる。

近江、滋賀県の遺跡は観察表からの集計であるが、近江八幡市辻野遺跡では、肥前系44%、瀬戸・美濃系14%、京・信楽系41%、大津市の上田上牧遺跡では、肥前系12%、瀬戸・美濃系4%、京・信楽系62%である（図６）。瀬戸・美濃系は15%以下で急減している。カウントされたデータではないので、今後の資料の増加を待つ必要があるが、近江の産地組成は尾張とは大きく異なる可能性が強い。この近江の２遺跡の組成は、むしろ次の平安京に類似するようである。

（５）平安京・大坂の遺跡（図６）

平安京左京北辺四坊は柳原家などの公家屋敷跡である。日用品から高級品まで数十万点の陶磁器が出土した大遺跡である。接合前の破片数が示されている。それによると、肥前系が17世紀末葉から18世紀初頭にかけて急増し、18世紀後半に減少している。この動向は、実は江戸とよく似ている。しかし、江戸と異なるのは、肥前の減少に代わって増加したのが、瀬戸・美濃系ではなく、京・信楽系ということである。平安京では16世紀末葉から17世紀初頭の志野、織部などの桃山陶器、茶陶は多いが、日用雑器が主体になった17世紀後葉以降には瀬戸・美濃系は0.2%から6%と極めて少ない。瀬戸・美濃の器種は、碗・皿類はほとんどなく、水甕、瓶掛、植木鉢など、京焼にはほとんど見られないやや特殊な器種が目立つ。平安京における17世紀後葉以降の瀬戸・美濃製品の少なさは、消費者の選択だ

けでは説明できないと思われる。むしろ、瀬戸・美濃の生産者や流通に携わる商人が、京焼との競合をさけて、京坂では積極的に販売をしなかったのではないか、と考えている。京都は当時の流行の発信地であったが、陶磁器生産についても薄作りや洗練された上絵付などで、他の生産地に大きく影響をあたえていた。

大坂城もいくつかの調査主体による発掘がある。大阪城６の府庁地点では、18世紀前葉まで肥前系が70～80％を占めている。江戸に比べると肥前の陶器、唐津焼の多いことは西日本の特徴である。肥前は18世紀末葉から19世紀初頭に減少するが、その減少分は京・信楽系が増加する点で、おおよそは平安京と類似するようである。ただし、京都と大坂の違いも存在するようで、より詳しく検討する必要がある。

５．陶磁器流通の背景

以上、東海道の消費地における陶磁器の産地組成を作成し、その様相を比較した。個々の遺跡の事例は、すでに周知の事柄であるが、地域間の比較によって顕在化した問題もある。資料の偏りや算定方法の不統一があるので、今後の調査がさらに必要なことは言うまでも無いが、算定方法の違いばかりではなく、近世陶磁器の産地組成とその時代的な変化には地域差が存在するといえる。

瀬戸・美濃系は、16世紀末葉から17世紀初頭の志野、織部などの桃山陶器は、ほぼ全国的に城館などで出土することが知られている。しかし、17世紀中葉以降に碗、皿、擂鉢などの日用陶器の生産が主体になると、分布は尾張から東の地域に偏ることが、今回の検討からも明らかである。平安京や大坂では、志野や織部は多いが、17世紀後半になると瀬戸・美濃系は１割以下に減少している。それにかわって増加したのは京・信楽系である。

瀬戸・美濃系が主になる地域と、京・信楽系が主になる地域は、比較的明瞭に区分できると思われる。岐阜県西部と滋賀県東部の資料がさらに必要であるが、その境界は、木曽・揖斐・長良の木曽三川あたりに存在するのではないか、と考えられる。方言や食文化では木曽三川や鈴鹿山地が近畿圏と東海圏の境界になる例が指摘されており、それらに類似した分布を示すかもしれない。

尾張では、瀬戸・美濃系が江戸時代を通じて圧倒的に多く、肥前系が少ない。その理由は、従来は、大産地である瀬戸が領内に美濃が隣国に存在するため、と説明されることが多かった。しかし、今回検討したところ、生産地との地理的な近さだけが、尾張で瀬戸・美濃系が独占的になる理由にはならないと考えられる。というのは、例えば、平安京と大坂においても地理的に近い京・信楽系の割合は確かに高い。しかし、京坂では肥前系の割合も高いのである。つまり、名古屋などの尾張領内では、瀬戸・美濃系が多いというよりも、肥前系陶磁器の流入が人為的、政策的に制限されていた、と考えるほうが実態にあうのではないか、と考えられる。

愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏は、2001年の研究のなかで『一宮市資料編』の史料の中で、尾張藩が村方で、唐津焼物の販売を禁止した「触書」のあることを指摘されている。「唐津焼物之儀‥」といった書き出しで始まり、名古屋にいたる筑前（福岡）の水主

が「専小売人相廻し（唐津窯物）直売致候付、商ひ方みだりに相成り‥」「直売致し候儀差し止め」「吟味の上急度咎可申付候」などの文言が共通するという。この触書は文化４（1807）年が最も古く、18世紀のものは未見である。また、名古屋城下などでも類似の触書が存在したのか、今のところ明らかではない。しかし、このような触書の存在からみると、尾張藩は、領内における肥前陶磁器の販売を制限ないし禁止していた可能性は十分に考えられる。それによって国産の瀬戸焼と美濃焼を保護したのではなかろうか。他藩の製品を入れないことで自国の焼物を保護する、という一種の保護主義的な窯業政策は、東北の相馬焼の相馬藩が行った例がある。仙台城などでは18世紀中葉に大堀相馬焼が過半数を占めて、それ以前には存在した肥前系や瀬戸・美濃系製品が急減することが知られている。近世史の山形万理子氏は、大堀相馬焼は相馬藩の在郷給人の副業という性格があり、相馬藩はそれを保護するために「下り瀬戸物」の販売を禁止したとされている（山形1987）。この法令は享保18（1733）年が最も古いという。尾張藩領内における陶磁器流通に関する文献史料はさらに探索する必要があるが、尾張における肥前系の少なさは、消費者の選択というよりも尾張藩の政策による可能性が高いと思われる。

６．おわりに

以上、消費地から出土した陶磁器の産地組成から、東海道における近世陶磁器の流通を検討した。18世紀中葉以降に肥前系が減少すると、その分瀬戸・美濃系が増加する江戸、18世紀中葉以降に肥前系が減少すると、その分京・信楽系が増加する平安京と大坂、江戸時代を通じて瀬戸・美濃系陶器が卓越する名古屋、と江戸時代に用いられた日用陶磁器には地域差が存在したといえよう。今後は、各地の様相をより詳しく見る必要があり、文献史料についてもさらに調査しなければならない。ただし、歴史を復元する資料は文献史料ばかりではなく、考古学資料も有用であることは示せたのではないかと思う。

〈参考文献〉

大橋康二 1988 『有田町史』古窯編栓全有田町

仲野泰裕 2001 「肥前陶磁器の流通－東海地方を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』東日本の流通をさぐる　九州近世考古学会

藤澤良祐 1998 『瀬戸市史陶磁史篇』六瀬戸市

森本伊知郎 2003 「近世陶磁器の数量把握について」『椙山女学園大学研究論集』第34号人文科学篇

森本伊知郎 2005 「東海道における近世陶磁器の流通－産地組成からみた地域差－」『文化情報学部紀要』第５巻

柳田國男 1970 「明治大正史世相篇」『定本柳田國男集』24　筑摩書房

山形万理子 1987 「奥州相馬藩における陶業生産の展開」『日本歴史』第468号

《発掘調査報告書は省略した》

『子どものことばを育てる・心を育てる』

― heart which raises a child's words is raised.

椙山女学園大学教育学部
石橋　尚子
Naoko　Ishibashi

渡邉主任研究員：それでは定刻が参りました。本日は椙山人間学研究センターの平成19年度第二回人間講座を開かせて頂きます。司会・進行の人間学研究センターの渡邉でございます。では最初に、理事長から一言、ご挨拶があります。

椙山正弘理事長：こんにちは。本日は椙山人間学研究センターの第二回人間講座に大変大勢の皆様にお集まり頂きまして誠にありがとうございます。本日は、椙山女学園の人間学研究センターというのは椙山女学園が「人間になろう」という教育理念を掲げて、教育に励んでおりますが、その人間になる一番の基礎や基本になるところは、石橋先生にお話いただけると思います。石橋先生は子どもの現場のご経験もおありですし、それから、ご家庭でも優れた女性であり、母親でありまして、特にこういう所では独特のご挨拶といいましょうか、素晴らしいお話をされて、今日は大変いいお話を聞けるものと楽しみにしております。今日は幅広い方々にお集まり頂き、本当にありがとうございます。

渡邉主任研究員：それでは、本日の演者である石橋尚子先生の簡単なプロフィールをご紹介させて頂きます。石橋先生は佐賀のご出身で、佐賀大学の教育学部の小学校教員の養成課程を卒業されています。石橋先生は非常によい心と言うのでしょうか、現場で、中学校・小学校の教員経験もおありです。その後、広島大学の大学院で修士課程ならびに博士課程を出ていらっしゃいまして、このエリアには最初、名古屋短期大学の方の専任講師として勤められました。その後、兵庫教育大学に移られて、平成15年に人間関係学部の助教授として来られまして、今年の4月より新学部の教育学部の教授、新学部の中心メンバーでご活躍されています。それでは、石橋先生、よろしくお願いします。

石橋尚子先生：　今、ご紹介いただきました石橋尚子と申します。存じ上げているお顔がたくさん見えて、とても恥かしいです。また今日は、子育て講座やボランティア講座のように、対象を絞ってお話をさせていただくのではなくて、幅広い皆様にお集まりいただいておりますこと。特に乳幼児に関心がおありとも限らない、という中でどのようなお話をしようか、ご満足いただける話ができるだろうかと悩みつつ登壇しております。そして、もう既に大失敗をしてしまいました。幼児の

つぶやきを集めた本の中から、子ども達の素敵なことばをご紹介しようと思っていたのですが、それを忘れてきました。もう、どうしましょう。何だかすごくショックで、既に足がガクガク状態になっています。不安な幕開けですが、どうぞよろしくお願いいたします。

今日も来ていただいています同じ教育学部の清さんと今日の講演の話をしていましたら、3歳になる坊やとのこんなかわいい会話を教えて下さいました。彼女が子ども達に「台風来るよ」と言っていたら、息子さんが「お母さん、その人、優しい？」と聞いたそうで、「そうね、台風、優しいといいね」と話していたというのを聞いて、子ども達はそんな素敵な反応をするんだね、と思いました。先程お話がありましたように私は実際に子ども達に触れてきて、子ども達から色々教わったりしたこと、それからやっぱり子どもって素敵だね、という話をさせていただこうと思っています。今時、いろいろ子ども達の問題があるけれど、コンビニあたりでしゃがんでいる子達はちょっと怖いけれど、やっぱり子どもの本質は変わっていなくて、「かわいいな」「素敵だな」と、未来を託す子ども達の良さを味わっていただけたら幸いかなと思います。

レジュメをここに作ってきました。今日はあまり欲張らずに、子ども達の話を中心にしながら進めていこうと思います。大きくは3つのお話をしていこうと思います。

1 はじめに……私のことをちょっと自己開示。

はじめに私のことをちょっと自己開示、と書きましたが、自己開示というのは心理学用語で、自分の事を特定の人に話すことをいいます。少しだけ私の事をお話しますと、先程、ご紹介ありましたように、学部を出てから中学校と小学校の教員をしました。それから大学院に行ったのですが、「どうして中学校や小学校の先生をしていたのに、大学の先生になったんですか？」とよく尋ねられます。

私の父は、小学校の教員でした。すごく面白い人で、よく芝居がかったことをやっていました。私がまだ小学生だった夏休みのある日、おへそに水を入れて一日中寝転んでいるので、「どうしたの？」と聞いたら、「茶を沸かす実験をしていた。でも、沸かないなぁ･･･」と言って笑っているような、非常に愉快な父でした。私は長女で、出生順位と性格に関する心理学の研究結果では、第一子長女というのはかなり神経質で、人目や人の評価が気になるもののようです。今日もこの会が終わった後、皆さんがどう思ってくださるのかな、失敗しちゃったかな、などと気にしては、自分で自分に暗くなったりするんですれども。一見そういう風に見えないのは、父の遺伝子のなせる業かと思います。そんな愉快な父は、どこへ行っても「先生、先生」といろいろな人から話しかけられていました。お盆やお正月にはさまざまな年齢の卒業生が集まって来て、夜中まで飲んでいるような家でしたので、小学校の教員という仕事に子どもの頃から憧れていました。そして、二十四の瞳にも憧れていました。離島の先生になって、毎日自転車を漕いで小さな小学校へ通う夢。漁をしているおじちゃんやおばちゃんから「先生」と声をかけてもらって、手を振るような。夕日が落ちる海に向かって、子ども達と走り続けるような。学生時代にはそんな夢を描いて過ごしていました。

ところが、採用されたのは中学校でした。

それも苦手な音楽の教員として。学生時代、小学校の教員になるにあたって音楽が全くできないことに気づいた私は、音楽に関係する授業をひたすら取りまくりました。そうしましたら、バイエル程度のピアノしか弾けない音楽レベルなのに、中学校と高校の音楽の免許がついてきてしまいました。そして何と、中学校の音楽教師として採用されてしまいました。ゾッとして、これは辞めようと思っていましたが、その当時就職難でもありましたので、父に背中を押された形で、とにかくその中学校へ行ってみることにしました。

行ってビックリしました。一面田畑の一本道を、中学校を目指して運転していた私の目前に現れた中学校は、朝日をあびてキラキラ光っていて、遠目にはお城のように見えました。ところが実際は、割れた窓ガラスの破片が光っていたのでした。とんでもない中学校に来てしまったようでした。そして、さっそく赴任式の日のことです。「赴任式の前に一度、音楽室に行ってらっしゃい」と言われて、北校舎への渡り廊下を歩いていましたら、いきなり上から「ブス」という声が降ってきました。でも、私は自分をブスだと思っていなかったので振り向かないで歩いていましたら、今度は「死ね」と言われました。「死ね」と言われたのでびっくりして顔を上げると、3階のベランダに20くらいの顔がズラーっと並んでいて、それが全部眉がないんですね。一度、バンドエイドを貼っていただくとおわかりになると思いますが、眉がない顔というのはとっても怖くて、その20人の眉なしの子たちが全員斜め45度の角度で私を見下ろしていて、「出ていけ」とか「おまえも追い出してやる」と叫ぶんです。テレビの『ごくせん』さながらの中学校教員生活が始まりました。

懐にナイフとチェーンを持っているような男子生徒が、廊下の両側にしゃがみ込んでいる中を、歩いていかなければ音楽室に辿り着けない毎日。一度は、腰まであった髪を引っ張られて、切られそうにもなりました。怖くて、どうしたらいいのかわからなくて、心労で胃に３つも穴が空きました。子ども達の荒れ方は尋常ではありませんでした。例えば、掃除後のトイレで「飛べ」と言うんですね。言われた男の子はひたすら上を向いて飛ぶんです。トイレの床は濡れていて、何度も飛ばされているうちにバランスを崩して、滑って頭を打って救急車で運ばれていきました。手を何も下さないいじめですね。ある女の子は、背中を家庭科の一時限中針で刺されていて、「笑え」と言われていて、その子は刺されている間中ずっと笑っていて、授業が終わって職員室に助けを求めてきました。針で刺していた子は、同じクラスの学級委員の女子生徒でした。どうして、こんな酷いことができるのか。何故ここまで子どもたちの心が荒れてしまうのだろうと、すごく悩みました。ところがそういう中でも、キラキラ光る生徒達はやはりいました。そういう中でも心が荒れない子ども達がいて、やっぱり優しく、怪我をしている子を背負って歩いたりだとか、障害を持ったお子さんを毎日迎えにいってくれる子であるとか、そういう子はやっぱりいるんですね。だから、何故、同じ中学で同じように教育を受けていて、こんなに心が荒れてしまう子とそうではない子がいるんだろうと、すごく思いました。学部時代、いい加減な学生でしたので、そのあたりのことが全くわかりません。これはちゃんと勉強しなくてはい

けないし、いかに自分がダメな教師かと突きつけられているようでした。偉そうなことを言っているけど、大したことないじゃないか、と毎日言われているような気がして。そして、念願の小学校に移って、もう少し子ども達を見たいと思いました。

2 子ども心を楽しむために……素敵な子ども達(そして大人達)の話

おもらしを繰り返す５歳の男の子を叱りつけた保育士に、「先生、怒らないで」「おしっこ出しちゃうオチンチンが悪いんだよ」と３歳の女の子。そのことばに、男の子も保育士も、救われ、教えられ、励まされました。それから、男の子はおもらしをしなくなったそうです。

私達は、ことばによって、考え、思い、悩み、想像します。自己を表現したり、感情や行動をコントロールしたり、他者とコミュニケーションしたりもします。ことばが育つということは、心の育ちであり、人として生きる力の育ちだと言えましょう。子ども達のつぶやきに耳を傾けながら、ことばと心の育ちについて考えます。

☆幼児のつぶやきに耳を傾けて
☆オチンチンが悪いんだよ
☆この子は私の天使です
☆くわえてきて
☆ゴミ箱の中の学級便り

（当日配布レジュメより）

ここに『**ゴミ箱の中の学級便り**』と書いてありますが、これが中学校教員時代、いくつもいくつも素敵な話があるんですけれども、私の中でナンバーワンの金メダルの話なんです。先にそちらをお話します。私が中学2年生を担任した時のことです。ツッパリグループをどのようにばらすか、3日間ぐらいかけてバトルを繰り広げながら学級編成をしました。その結果、私のクラスにも5人のツッパリグループメンバーがいて、いつも一番後ろの席に固まって座っている5人でした。その子達は授業に飽きると、サッサと教室を抜け出して行きます。私が追いかけると、一定の距離を開けて待っているんですね。追いつきそうになるまで待っていて、それからまた逃げるというのを繰り返すんです。「もういい、君たちバイバイ」と帰ると、すでに座って待っている。そういうような事を繰り返していました。授業も学級経営もメチャクチャで、でも何とか、私も全然だめな教師なんですけれども、自分の気持ちだとか願いだとか、こんな事で困っている、悩んでいるという事を親の方々にも知っていただきたくて、毎日毎日学級便りを書いていました。それこそ、昔は手書きですので、お昼休みだとか空き時間を使っては書いて、自分で印刷して配っていました。けれど、その5人の子たちは必ずクチャクチャにして、ポイと捨てます。最初は悲しいなぁと思いましたが、そのうちに仕方ないと諦めていました。ところが、ある日のこと、いつも抜け出す5人のうちの１人が何と、全然授業を受けていないのに数学のテストで86点を取りました。びっくりしました。思わず号外を出しました。「K君が86点取った」と書いて、あれだけ授業に出なくて86点取れたということは、毎回ちゃんと受けたら100点かもしれないなどと余計なことまで書いたので、彼はものすごく怒って、丸めた用紙を踏みつけてまで帰っていきました。調子に乗りすぎたことを反省しつつ、その夜もいつもの如く事件が起きて12時を過ぎて家に帰りましたら、K君の母親からの電話がかかってきていました。暗い気持ちで電話をかけま

すと、「ありがとうございます」とおっしゃるんですね。中学校の教員になって初めて「ありがとう」と言われました。「どうしたんですか」と尋ねますと、「今日、先生がうちの息子を褒めてくださって。数学が86点取れたと褒めてくださって。中学校に入って初めて褒められたと主人も泣いて喜んで、息子を褒めているところです」と泣かれました。「どちらかのお母さんからお聞きになったんですか？」と聞きましたら、「いえいえ、私は学級便りを毎日見ています」「えっ？学級便りはいつも捨てて帰られますよ」「いえ、とんでもありません。うちの息子は、私の鏡台のそばにあるゴミ箱にいつも入れております」と言われました。他のゴミと一緒に捨てられないように、しかもお母さんに気づいてもらえるように、鏡台のそばのゴミ箱の中に入れていたんですね。それに気づいたお母さんは、毎日見てはシワを伸ばし、大切に取っておいて下さっていた。ところが86点をとった学級便りだけはゴミ箱の上に広げて置いてあった、という話だったんですね。胸がズキンとしました。そうだったんだ、気づかされました。あの子達は私のことを全然わかってくれていないと思っていたけれど、でも本当は学級便りを持って帰ってくれていて、親にも見せてくれていたんだ。口では「クラスの一員として大事に思ってる」なんて言いながら、拒否していたのはむしろ私の方で、彼らは私のことをちゃんと受け止めてくれていたんだ、と思い知らされました。そしてその翌日。彼は相変わらず、斜め45度の角度で私を睨みつけていました。でも、私はすごく変わりました。昨日までは、正直「いなくなれば･･･」と思っていたのが、何とか私の方から食いついていこうと、一歩でも近づいていこうと思い始めました。いつもの「ウザイ」いうことばが全然気にならなくなりました。だから、結局、大人側の受け止め方が変わっただけで、子ども達は心を開いてくれるんだなと。いや、子どもが開いているのに、大人が気付かなかっただけで、私の方が心を閉ざしているんだなと知らされたのが、中学校での教員生活でした。

それから、小学校に赴任してみると、やっぱりたくさん問題がありました。6年生は6年生でちゃんといじめの問題がありましたし。次の1年生担任では、やっと念願の山の分校に赴任して、「やったー、やっと二十四の瞳だ」と思いましたけれど、やっぱりそこでも1年生は1年生でいじめの芽がありました。でも、当たり前なんです。入学前での6年間、子ども達はその地域で生きてきていますから、その中の人間関係が当然あったんです。ところが、教員はそういう事にちっとも気づきません。小学校に入ったら小学校に入った子達しか見ませんので、それまでこの子達が、どれほど幼稚園や保育園で立派に育ってきたか、どれほど家庭で愛されて育ってきたかということを全く知らないまま、1年生を赤ちゃん扱いしてしまいがちです。同じように、中学校に入ったら中学校に入った子しか見ませんので、それまでの12年間の尊い育ちを全く知らないままに、3学年の中でまた一番下として扱ってしまうんですね。そのことに気づかせてくださったのが、幼稚園の園長をされているお父さんでした。「先生、偉そうに言う前にうちの幼稚園を見に来い」と言われて、夏休みのお泊り保育に参加しました。もう、ビックリしました。年長さんがちゃんと小さい子達のお世話をする。晩御飯の

手伝いもする。寝る時にグズってる子の側で背中を撫でながらお話をしながら寝かしつける･･･。幼児って何て立派なんだろうと、敬服させられました。

それで今回、教育学部を作る準備委員会のメンバーにしていただい時も、一番大事にしたかったのは、子ども達の成長をトータルに展望できる先生。幼児から高校生になるまでに、子ども達がどれほど発達していくのか、どれほど素晴らしい人間になっていくのかということをちゃんと理解して、イメージできて、その中で、今、幼児期に一番大事にしたいことは何か、小学校の2年生で育てたい力は何か、中学校ではどんなことを子ども達と語るべきなのか、といったような事をきちんと考えることのできる先生を育てたいと思いました。それは私の大いなる反省が基になっていました。中学校の教員は、小学生までの子どものことをちっとも知らない。小学校の教員も、幼児期のことをほとんど知らない。それを何とも思っていない教員がとても多いこと。私自身がそうであったこと。でもそれでは、目の前の子どもを真に理解することができないこと。このことを深く反省して、この学部を作ることにしました。

それから、やっぱりこれはいくら何でも勉強していないと「恥かしいゾ」というのを子ども達に突きつけられてしまい、大学院に進学しました。もう一度、ちゃんとした小学校教員になるために。でも、大学院生生活を送っている間に、教員採用試験の年齢をオーバーしてしまいました。私の中では、あの時の1年生18名が、分校からの坂道を「行かないでー」「また帰ってきてー」と言いながら追いかけてきてくれたのが、今も目に鮮やかに残っています。そして私は今、これまで出会ってきた子ども達に恩返しをしなくては、と思いながら。何らかの形で、子ども達がちょっとでも幸せになれたりだとか、いい気持ちになったりだとか、そういう気持ちになれるようなものに参加できればと思い、日々学生と過ごしています。ですが、本当は今でも小学校の教員になりたいんです。今小学校の先生になれたら、結構いい先生になるんじゃないかと思っています。精一杯、子ども達の良さを認めていけるんじゃないかなと思います。なかなか大学の教員としては失格ですけれども、そのように感じています。

先程登場したＫ君は、大工さんになりました。私が大学院に行ってから、広島の下宿先に電話をしてきました。夜中に突然かかってきた電話に、いたずら電話かと怪しんでいますと、「オレ、オレ、Ｋ。教え子だった」と言われ、はた、と気付きました。「どうしたの？」「オレさ、大工になったワケよ。それでさ、今、博多ドームのとなりにホテルを建ててるワケ。ちょっとオレの名前を言ってもらうと、泊り賃が割引になるワケ」「すごいじゃない、ありがとう。じゃあ、機会を見つけて電話するね」「じゃ、そういうワケで」と、Ｋ君は電話番号を告げないまま電話を切ってしまいました。残念ながら、それから彼からの電話は二度とかかってこなくて、私もかけることができませんでした。Ｋ君は、電話をかけてこない私に怒っているかもしれませんね。でも、彼がこのように自信や誇りを持てる仕事を持っていて、本当によかったな、とつくづく思う出来事でした。

いろいろな問題があったんですけれども、やっぱり子ども達は生きる力だとか、素晴ら

しい力を持っていて、「子どもに学ぶ」という言葉がありますけれども、それは決してスローガンでもなんでもなくて、子どもと過ごしていると「教えられた」と思うことがいっぱいあります。レジュメに紹介しています『**オチンチンが悪いんだよ**』は、その最もよい例かもしれません。

おもらしを繰り返す5歳の男の子のお話です。これは学部生の頃、卒論調査で長崎の保育園に行った時に出会った話なんですが、しょっちゅうおもらしをする5歳の男の子がいて、若い女性の先生(保育士さん)が、一生懸命根気よく「おしっこはいいの？」「大丈夫？」と声をかけてきました。ですが、その子はついつい遊びに夢中になってしまって、慌ててトイレに行こうと思っては途中でもらしてしまう、ということを繰り返していました。そして、先生がとうとう思い余って「もう！どうして！」と大きい声を上げたところに、偶然私が居合わせることになりました。先生は怖い顔で男の子を見下ろして、「どうして何回言ってもわからないの！」と詰め寄っています。男の子は半べそかきながら、固まってしまっています。2人の間には緊張が走り、どちらも引くに引けないそんな状態でした。そこへちょこちょこと、3歳の女の子が近寄っていきました。そして、「先生、怒らんで。ケンちゃんが悪いんじゃないんよ。おしっこ出しちゃうオチンチンが悪いんよ」と言ったんですね。そうしたらその途端、パーッと緊張感が取れていきました。後でその保育士さんに聞いたのですが、あの瞬間、まるで頭から水を浴びせられたかのように一瞬にして頭が冷えて、冷静になったそうです。そしてすぐさま、先生は「そうか、ケンちゃんじゃないんだ。オチンチンが悪いんだ」と言ってしゃがんで、「オチンチン、いいわね。今度は絶対におしっこ出すんじゃないわよ」「ケンちゃん、オチンチンとちゃんと相談してトイレ行ってよ」と。ケンちゃんも、自分のオチンチンに「オチンチン、しっこが出る前に行こうね」と。そう言い合って、その場は丸く収まりました。その後、ケン君は一度もおもらしをしなくなったそうです。あの時の3歳の女の子の一言で、そこにいたみんなが救われたんですね。男の子はもちろん、先生も周りにいた人たちも、どうしたらいいのかわからない緊張状態を、その子がうまくほぐして、その上、的確なアドバイスもしてくれたんですね。本当に子どもって素晴らしいな、教えられることがたくさんあるんだな、と思いますし、それをそのように受け止めた先生も素晴らしい力を持っていたんだな、とつくづく思いました。これが『オチンチンが悪いんだよ』という話です。

幼児と接していますと、その前向きさに感心させられます。それが裏目に出ることもありますけどね。親をやっていますと、「どうして、この前言ったことがわかってないの」とか、「あの時言ったでしょう」と過去の事をぶり返して叱ったりしますが、無駄ですね。そんな嫌なこと、覚えてなんかいません。幼児は前向きに生きていますので、時間を戻して叱ろうとしても無駄なことで、やっぱりその瞬間その瞬間、いけないことはきちんと叱らなくてはいけません。でも、褒めるのはいつでもいいんですね。「あの時はよかったよ」「嬉しかったよ」という言葉は、いつ聞いても何度聞いても気分がいいものですから。話を戻しましょう。この話もさっきと同じ保

育園でのことです。1人の男の子が降園バスに取り残されて、泣きながら追いかけてきました。気付いた子が運転していた園長先生に知らせて、園長先生は慌ててバスを停めました。こんな時、大人だったら、すごく嫌ですよね。何で自分だけ置いていくわけ、とか、あれだけ停めてと言ったんだからもっと早く停めてくれればいいのに、と思ったり。乗っている人達にも、何となく気まずい雰囲気が漂ったりして。でも、子ども達は全然違うんです。ドアが開いてバスに乗って来た瞬間に、さっきまで泣いていたのに、みんなが歌っていた「すいかの名産地」という歌を大きな声で歌いだしました。周りの子も、何もなかったかのように平然としています。あざやかにパッと気持ちを切り替えて、前向きに、楽しくバスの中で過ごしている子ども達の姿を見ていると、「お見事！」と拍手をしないではいられませんでした。

次に、『**この子は私の天使です**』というのは、障害を持ったお子さん達のお母さんの話です。私の大学教員のスタートは、名古屋短期大学の保育科でした。なのに、保育というものをよく知らなくて、たまたま幼児心理学の講座出身だったのでそのような職に恵まれたんですけれども、施設実習の巡回指導と言われてもまるでピンときません。児童福祉施設が何かということもよくわかりませんし、どういう子ども達が過ごしているのかも知りません。これはいけないと思い、施設実習期間が始まる前の夏休みに、知的障害児施設の親子キャンプのボランティアに、学生達と一緒に参加しました。そこでのお話です。私がお手伝いすることになったのは、重度知的障害児の女の子とお母さんでした。体を支えることもできなくて、バギー(乳母車の一種)に乗っていても、クニャクニャと落ちてしまいそう女の子でした。私はどうしたらいいのかわかりませんし、「大変ですね」などといった言葉を口にするのも違っているようで、ひたすら荷物を持ったりしていました。その荷物の重いこと。こんな荷物を持って、バギーを押して、まだ上に2人の小学生のお姉ちゃんを連れて、それでもお母さんがニコニコしていて、そういうことを1人でやってきたんだな、と思ったら、心底「すごいな」と思いました。そして、その一番のすごさを見せつけられたのが、食事のシーンでした。女の子は、顎を自分で動かせないようです。お母さんは、カレーをひとすくいすると、女の子の口が開いた瞬間を見計らってスプーンをパッと入れるんですね。入れるだけならいいんですけれども入れた後、顎と頭を持ってガクガクしてあげないと噛めないんです。お母さんは片手でスプーンを口にいれて、その次の瞬間、顎をガクガクしてそうしながら、「おいしいね、おいしいね」と言って、自分も一緒にカレーをほおばるんです。それを何度も何度も繰り返すんですが、タイミングを失すると、容赦なく口からカレーが飛び出してきますので、一瞬も油断できません。その格闘ぶりといったら神業と思えるほどのものでした。その上、その「おいしいね」「おいしいね」と言って食べさせる姿が本当においしそうで、楽しそうで、笑顔のお母さんを私はただただあっけに取られて見ているだけでした。夜は夜で、寝むれません。女の子は寝返りができませんので、30分置きくらいに寝返りをさせてあげなくちゃいけないんですね。その役が私たちボランティアに回ってきたので、お母さ

ん達が少しでも寝られるようにと思ってやったわけですけれども、やっぱりきつかったですね。30分置きに起きて寝返りをさせて、ほとんど徹夜状態で朝を迎えた時、とうとう「お母さん、大変ですね」と言ってしまいました。そうしたら、お母さんがニコっと笑われて「いいえ、この子は私の天使ですから」と言われました。その笑顔がまるでお日様のように明るくて。胸をうたれました。女手ひとつでこの子達を育ててきたお母さん。どれほどの苦労があったかは想像もつきませんが、歯を食いしばって生きてきたんだと思います。そのお母さんが、本当に向日葵のような笑顔で「いいえ、この子は私の天使ですから」と言い切って笑っていました。このお母さんにはあの子が天使に見えるんだ。私には到底太刀打ちできないすごい女性がいるんだ、ということを学びました。

それから私も母親になりました。勤めながらの子育てでしたので、大変なこともたくさんありました。うちの子は夜泣きをして、なかなか寝付かれない子でした。ミルクを飲ませても泣く、オムツをかえても泣く、あやしても抱っこしても泣き続ける。もうどうしていいのかわかりません。安いマンションなので、上からうるさい、と言って足を踏み鳴らすんですね。本当に虐待の話は悲惨ですけれども、あの瞬間、口を塞いでこの子が黙ってくれたら、と確かに私の中でもそういう気持ちが起きました。でもその時、私はこの言葉に救われました。あのお母さんのすばらしい笑顔と「この子は私の天使ですから」と言われた言葉がふと甦ってきました。そして、私も口に出して言ってみました。「この子は私の天使です」と。そうしたら、天使になるんですね。さっきまで、泣き叫ばれて、この子さえいなければ、とこの子さえいなければこんな辛い思いをしなくてすむのに、と口を塞ごうと鬼のようになっていたのに。たった一言、「この子は私の天使です」とつぶやいた瞬間、子どもが天使になって、「なあんだ、かわいいじゃないの」という気持ちになって、そうすると子どもも泣き止むんですね。結局、私のイライラだとか、ストレスがこの子に反映して泣いていた。私が「天使だ、天使だ」と思ってみた瞬間に、子どもも本来の天使に戻れたのかもしれません。あの時、私はボランティアに出かけたのですが、本当に救われたのは私だったんですね。あのお母さんの笑顔とあの「この子は私の天使です」という言葉をいただいたことが、これまでの、そしてこれからも私の子育てを支えてくれるんだと思いました。私のボランティアは、私助けでした。ボランティアはそういうものかもしれません。

次は面白い話なんですけれども、**『くわえてきて』**です。これは小学校での子どもの話です。子どもたちの脳は3歳で成人の60%、幼児で80%、そして小学校の頃には成人と変わらないほどに発達します。ですが、言葉の獲得であるとか、さまざまな言葉を的確に使う、ということは学習の賜物なので、日々大人たちから素敵な言葉を聴いたり、いろんな本を読んで学習していかなければなりません。この「くわえてきて」は、言葉の世界を学習中の、小学校1年生のすごくかわいいお話です。私が6年生から1年生の担任に換わるときに、「あなたはとにかく早口だし、6年生や中学生とは違うのよ」と1年生の主任の先生に言われました。そして、「私の失敗談を教えてあげるから、よく聞いて同じ失敗をしな

いように」と教えてもらったのがこの話です。この先生が低学年を受け持った時に、「明日の授業の準備に音楽の教科書を加えてきてね」とおっしゃったそうです。翌日、先生は教室に行ってビックリ。音楽の教科書を口にくわえて、顔を真っ赤にして「んー・・・」と唸っている男の子を発見しました。「くわえてきて」と言われたから、口にくわえてきた。大人が使う“加える”という、そういう言葉の使い方はわからず、口にくわえてきてしまったんですね。お家からずっと口にくわえて、歩いてきたんですね。その真面目さというか。1年生の子が自分の体よりも大きいようなランドセルを背負って、先生が「くわえてきて」と言ったから口に教科書をくわえて一生懸命歩いてきた。その姿を想像したら涙が出てきちゃいました。言葉というものを大人の方がきちんと話す。子ども達の理解状況をしっかり把握して、子ども達がわかるように話す、というのがどれほど大事なのかということを教えていただきました。だとすれば、大学の教員が学生達に話をして、「わからないのはお前達のせいだ」というのは間違いでしょうね。わかるように話すのが教員の仕事ですので、たとえ難しい内容の話であったとしても、それを学生側にわかるように話をするのが教員の仕事で、それができなければ教員の方に問題があると思います。直ぐには理解できなかったとして、ジワジワと沁み込むように理解できる、そんな話し方に憧れています。子ども達の発達段階のそれぞれにおいて、きちんとした言葉で、きちんと気持ちを伝えていくことは、大人の責任だなとつくづく思います。

３．子どものことばを、心を育てよう

ことばの獲得によって得る能力
　☆思考の世界を成立させる
　☆自己を表現する
　☆コミュニケーションをする
　☆自分をコントロールする
子どものことばを、心を育てよう
　☆人との関係の中で育つ「ことば」
　☆話したいこと（経験・発見・感動など）があって、
　　話したい人（大好きな、話を聴いてくれる大人や友達）がいて、
　　話す機能が育ってきた時、子どもはことばを話し始める。
　　⇒「オウムガエシ」の勧め
☆保育者自身の「ことば磨き」を！
（当日配布レジュメより）

今までお話をしてきましたように、ことばを育てるということは、結局は心を育てることに繋がります。言葉で気持ちを伝える、大事なことをちゃんと伝えていくということは、大切にしていかなければならないことだと思います。子ども達は、言葉を獲得することによって自分の世界を広げていきます。最初はまるで泣き声だった言葉が、喃語を経て、1歳半ぐらいには意味ある言葉として獲得されていきます。3歳頃には日常会話には不自由しない程度のことばを獲得しますし、小学生の頃には飛躍的に語彙数が増加します。言葉を獲得することによって、ひとつは思考の世界、頭の中でいろんなことを考えてそれをことばにして伝えることができる、とか、自分の経験を言葉にして、イメージして、蓄えて、またそれを自分の中で再構築していくという思考する、ということを可能にします。それから自己表現ができるとか、コミュニケーシ

ョンするとか、ただ泣くだけだったのが、赤ちゃんが「マンマ」と言うとお腹が減ったのね、「パパ」と言えばパパと遊びたいのね、と意味がわかるようになっていきます。

今回、このお話をお引き受けする時に、オノマトペで科研費をもらっていたりしているので、オノマトペの話をして下さいと提案されました。オノマトペというのは、「雨がザーザーザ降る」とか「ブーブーに乗って行こう」というように、音や様子などを言葉にしたもので、擬態語・擬声語のことです。これは日本でもたくさん使っていますし、韓国では国語の教科書とは別にオノマトペの教科書もあって、豊かな自己表現をさせるための技法の一つとして活用しています。他方、西洋では、幼稚であるだとか幼児語であるだとかで使わない方向で指導されているそうです。日本でも、そうかもしれませんね。ところが、素敵な詩ですとか、表現の中にはたくさんのオノマトペが使われていて、言葉の世界を生き生きとしたものにしてくれています。そういうオノマトペについて私が興味も持っているのは、そこから子ども達の心や脳の中の仕組みへと切り込んでいけないかな、ということです。例えば、子ども達が「ニヤッと笑う」「ニタッ笑う」「ニコニコと笑う」「アハハと笑う」の違いをわかっているとすれば、かなり大人と似た笑い感覚を既に持っているんだということが推察できるのではないかと考えています。これはなかなか面白くて、あるお子さんは「ブーブーして」で、多くのことを代表させていました。ある時は「ブーブーして」というとお買い物に行きたい、またある時は「ブーブーして」というとお菓子が食べたい、また違うときには「ブーブーして」というとパパと遊びたい、の意味を表現していました。お父さんが車を持っているので、お父さんが車に乗せてどこかに連れて行ってくれる、と思っています。「ブーブー来た」というとお父さんが帰ってきた、だから遊べるとか。それから、何か食べたいのを「ブーブーして」というのは、車で買い物に行くことが多いので、何かを食べたい、何かを買いに行きたい、というようにいろんな意味を「ブーブーして」に代表させていて、それがお母さんには的確に伝わっているんですね。同じ「ブーブーして」でも、お母さんが「このブーブーはこういうことね」と言葉にすることによって、その子の中では、言葉の確認と気持ちの確認が行われていくんだな、面白いな、と思いました。

調査をしていて、ちょっと残念だったのは、オノマトペもだんだん発達していくにつれて、心の中を表すオノマトペが表出されてきます。ドキドキとか、ワクワクだとかです。ところが、大人の、親が話したことばを採集してもちっとも出てこないんですね。お父さんやお母さんから出てきた言葉に多かったのは何だと思いますか？「サッサとしないさい」です。とにかく、急げ急げとせかすのです。子どもがお花を見ていて「ママ、たんぽぽだね」と言っても「サッサとしなさい」「いいの、そういうものは」といったような言葉をお母さんは子どもに投げつけていて、せっかく子どもが「きれいだね」「フワフワだね」と言っているのに、どうしてそれが「サッサとしなさい」に断ち切られてしまうのかな、と残念でした。もちろん、そういうものに敏感なお母さんは、雲を眺めている子どもに「雲だね。フンワリ綿菓子みたいね。気持ちもフンワリするね」と、ずっと雲の話をしているお母さんもいる

わけです。やっぱりそういう所から言葉が育っていくんだなと思い、そういうことを研究しています。

コミュニケーションについては、心理学者のマレービアンの研究をご紹介しましょう。今、皆さんは私の話を聞こうと思って来て下さっているので、かなり内容を理解して下さっていると思いますが、いわゆる感情的なコミュニケーション、怒るとか、泣くとか、叱るとか、喜ぶもそうですが、感情に関わるコミュニケーションというのは、私たちが話している言葉の中身というのは7%しか伝わっていません。つまり、怒って、子どもを叱ったとしても、その怒っている言葉の中身というのは7%しか伝わっていないんですね。では、何が93%伝わったのかというと表情や態度、目の動きが伝わるそうです。なので、「鬼のような怖いお母さん」というイメージだけが伝わっていて、肝心の言葉の中身は伝わっていないんですね。なので、「昨日も言ったでしょ」と言っても、子どもには怖いお母さんだけが伝わっていて、言葉の中身は伝わっていないから、同じ事を繰り返してしまう、ということになってしまうようです。そのような時は、まず深呼吸をして、膝に抱いてお子さんの温かさを感じてから話していただくと、クールダウンもしますし、やっぱり子どもってかわいいな、と思いながらだと冷静に言葉の中身を話すことができます。怒りがわいたら、まず深呼吸をしてみましょう。それでも、収まらない怒りもありますけどね。

自分をコントロールするというのは、大人でも難しいことです。今、子ども達が自分の心をうまくコントロールできなくなってきているのは、言葉のせいかもしれません。子ども達を見ていると、特に幼児なんかは怖い所に行くと、自分に「怖くない、怖くない」と言い聞かせながら進んで行きますよね。そういって自分を励ましたり、言い聞かせたり。それは中学生などを見ていてもやっています。そういう時の言葉はとても大切で、自分自身をコントロールしていく手段を学んでいるので、やっぱり言葉はとても大事です。心を育てるには不可欠なものだと思います。

乳幼児の親を対象とした講座では、「テレビに子守をさせないで」とお願いしています。テレビの激しい音や光に、赤ちゃんはとてもよく反応します。ですから、赤ちゃんが泣いているときにテレビをつけると、パッと泣き止みます。注目して泣き止んでくれますので、確かに便利なんですね。その便利さに頼って、テレビをずっと付けっぱなしにしておきますと、問題が生じてきます。1つは人間の柔らかな肉声に反応しなくなります。優しい人間の話す生の声を聞き取りにくくなります。もう1つは、テレビは一方通行ですよね。テレビはどんなにいい内容の番組だとしても、一方的に音が流れるだけで、赤ちゃんがそれに反応して言葉を発したとしても、相手をしてくれません。言葉というのは、話したい内容があって、話したい人がいて、発音するための準備が整って、子どもの口からこぼれ出てくるものです。子どもの一つひとつの反応や表現にちゃんと受け答えをするからこそ、言葉が育っていくものなのです。だから、テレビに子守りをさせるのは辞めてくださいね、といいます。

「人間になろう」という教育理念を本学園は持っています。それは、人と人との間で育まれ、達成されていく理念だと理解しています。

そして、それは言葉の発達にピッタリ当てはまります。一方的に音を聞けばいいのではなく、フラッシュカードを見せてことばを覚えさせればいいのでもなく、人と人との間の受け答えの中で、心を込めた言葉によって、子ども達の心が育って、知能が育って、社会の一員としての人間が育っていくのだと思います。大人はいい話し手であり、聞き手でなければ、言葉は育ちません。ここに**オウムガシの勧め**とありますが、今日はぜひこの手法をお持ち帰り下さい。人と話をする時、特に大人が子ども達と話をする時、何か教えなくてはいけないんじゃないか、何か適切なアドバイスをしてあげなくては、と使命感を感じたちするんですけれども、実は私たちがしなければならないのは、この**オウムガエシ**で充分だということです。子どもが話したことを、同じことばで返してあげる、これがオウムガエシです。その間、子どもは次に話したいことを心の中で考える余裕が持てます。そして、受け止めてもらったという安心感が生まれます。子どもの気持ちを受け止めるというのは、子どもが自分の言いたいことを頭の中で整理して、自分で解決できるようになっていく、そこを支えていくことだと考えます。それを支えるのが大人の役目だと思います。どうぞ、オウムガエシをやってみてください。これは結構、夫婦間でも役に立ちます。どうぞ今日お帰りになりましたら、優しい素敵なコミュニケーションをもって接してあげてください。

最後に**保育者自身の「ことば磨き」**について。大江健三郎氏が著書の中で「美しいことばを聞かせないと美しいことばは生まれない」と述べられています。私たちが大人の役割として、美しい言葉、自分が好きな言葉を、シャワーのように子どもたちに浴びせるようにして、その中で美しいことばを獲得していってほしいな、と思います。「シャボン玉という歌」をみなさんご存知だと思います。これは野口雨情という人が作った歌で、「シャボン玉消えた　飛ばずに消えた　生まれてすぐにこわれて消えた　風　風　吹くな　シャボン玉飛ばそ」という歌詞があります。何気なく歌っていると、シャボン玉遊びをしている子ども達の歌なんだな、と思いますけれども、この野口雨情さんはお子さんを亡くされたんですね。生まれて間もないお子さんが亡くなった、それをシャボン玉に例えて作ったのがこのシャボン玉という歌だそうです。尊い命が消えてしまった、これから先どんな素敵な人生が待ち受けていたかもしれないのに、どうぞ他の大事な命は壊れないで、世の中の冷たい風が子ども達を傷つけないで、優しく見守ってください、というメッセージが込められていることに気づかされると、それまでとはまったく違った感情がわいてきますよね。ですから、学校の教員が教材研究をするのは、シャボン玉の歌を上手に歌わせるためではなくて、その向こうにある作者の想いや願いを知って、子ども達とシャボン玉の歌を歌うこと。先生自身がまず、そういう気持ちを込めて歌ってみると全然違ってくると思うんです。子ども達にも伝わると思うんですよね。

私たち自身が自分の言葉を磨いたり、言葉の奥にある気持ちだとか、人々の願いだとかそういうものに敏感になって、気づいてあげて、できればそれを次世代に繋いでいく、ということをしていけば、子ども達の心が殺伐となるのを少しは防いでいけるのではないかと思います。子ども達がいじめたり、いじめ

られたり、辛い想いをしていくのはやっぱり私たち大人の責任だと思うので、まずは自分自身の言葉だとか、自分自身の行動だとか、そういうものをもう一度見直していきたいと思っています。言葉を大事にしながら、子ども達と向かい合って、自分を磨き育てて行きたいと願っています。

「**子育ては親育て**」と言われます。自分に今、子どもがいようといなかろうと、私たち大人は目の前にいる子ども達、未来を作る子ども達に何らかの責任がありますので、子どもを育てるということは自身が育てられていることなんだと思って、年齢に関わらず子ども達に関わっていって下さればと思います。私はもし、自分が子どもも産まずに、子どもに関わることもなかったとしたら、イヤな女性になっていただろうな、と思います。だから、今の自分が一番好きです。人生の優先順を、日々、自分の子ども達から教えられています。私はこの椙山の採用面接時に、人間関係学部の田中先生から「あなたは中学校・小学校で教員をしていた時に、一番学んだことは何ですか？」と尋ねられました。その時は緊張していたこともあり、「負けずに戦うことです」と答えたと記憶していますが、今、冷静になって考えましたら、確かに戦うことなんですが、それよりも「子どもから逃げなこと」、今ならそう答えます。逃げないというのは、子ども達ときっちり向かい合うことですね。それは学生にしてもそうなんですけれども、何があったとしてもきっちり向かい合うこと。私ができることで、子ども達の未来に関わっていきたいな、と願っています。

以上で、取り留めのない話でしたが、これで終わりにさせていただたいと思います。ありがとうございました。

渡邉主任研究員：時間が経つのは本当に早いですね。まだまだ続きを聞きたい気持ちではありますがお時間となりました。石橋先生には当センターの6つある研究活動プロジェクトの中の「人間発達論」という研究グループにおいてもプロジェクトリーダーを務めていただいています。また機会をもちまして講演をお願いしたいと思います。最後に閉会のご挨拶が椙山センター長よりあります。

椙山孝金センター長：センター長をしております椙山でございます。今日は石橋先生のお話で、私はお話を聞くのはこれで2度目ですけれども、内容がとにかく具体的ですよね。体験に沿っていらっしゃる上に説得力があり、このようなスピードに乗って楽しく魅力的に、ここまで話が出来る人というのはあまりいらっしゃらないと思います。教育にも熱心でありますので、教育再生会議などにも送り出したい程だと常日頃より思っております。お忙しいなか、皆さま、お集まりいただきましてありがとうございました。次回も講座を予定しておりますので、何卒よろしくお願い致します。

注

1光源氏の、卓越した美質については、最近では、藤田加代氏「光源氏の造型ー「ことば」から照射した人物ー」（『源氏物語の展望第二輯』三弥井書店二〇〇七年一〇月）をはじめ諸家によって論じられている。「なまめく」「なまめかし」美については、拙著『王朝の美的語彙（えん）とその周辺続』（新典社一九九五年六月）において触れた。

2光源氏の抜きんでた「なつかし」美については、侍女達に対するのは勿論のこと、若きライバル柏木にまで、「あまねくなつかしく」振舞うことは、拙稿「光源氏の人間像ーその「なつかし」を中心にー」（椙山女学園大学研究論集三〇号人文科学篇一九九九年三月）において、用例を掲げて触れた。藤田加代氏（注1参照）も、『「なつかしと」と光源氏造型』として論じられている。

3阿部秋生氏『光源氏論ー発心と出家ー』（東京大学出版会一九八九年）による。

4原岡文子氏『源氏物語の人物と表現（その両義的展開）』（翰林書房二〇〇三年）「光源氏像への視角」による。

5上田英代氏等。『源氏物語（語彙用例）総索引自立語篇全五巻』（勉誠社一九九四年）による。

6山崎良幸氏著『源氏物語の語義の研究』（風間書房一九七八年）。

7国文学解釈と鑑賞源氏物語ハンドブック（至文堂一九五九年）。

8山本トシ氏「源氏物語に於ける『うし（憂し）』の用法」（十文字学園女子短大研究紀要一三号一九八二年九月）。

9鈴木日出男氏「『源氏物語』の心情語ー第二部の光源氏に即してー」（成城国文学論集一四号一九八二年三月）。

10中川正美氏『源氏物語文体攷（形容詞語彙から）』（和泉書院一九九九年）二六六頁。

11拙稿「王朝の女流歌仙〝伊勢〟における憂悶ー『憂し』を中心にー」（社会と情報椙山女学園大学生活科学部生活社会科学科二巻一号一九九七年九月）参照。

12拙稿「『紫式部集』『紫式部日記』にみる『身』と『心』ー白楽天に対比してー」（上村悦子編『王朝日記の新研究』笠間書院一九九五年所収）参照。

13秋山虔氏著『王朝の文学空間』（東京大学出版会一九八四年）一六五頁。

14吉田幹生氏「若菜巻の紫の上ー『世』への傾斜と『憂し』の不在ー」（成蹊国文三九号二〇〇六年三月）

＊『源氏物語』本文の引用は『日本古典文学全集』（小学館）本による。

＊平成19年度第４回人間講座開催時
「『源氏物語』の描く人間ー光源氏を中心にー」の講演要旨

しくて、（葵②二〇頁）

以上の人物・事柄が、源氏に「憂し」と思わせた。

まず、「世の中」への憂愁観に次いで、源氏が「憂し」と観る事柄は、A～C（七例）に掲げる柏木事件である。柏木が女三の宮に密通したこと「うき事」（①・④）「うきふし」（②・③・⑤）を、源氏としてはどうしても許せない。のみばかりか、柏木（⑥）や女三の宮（⑦）に対してまで「うし」と思っている。これは、源氏の政治家としての権勢欲とは違い、男性としての支配欲の侵害による「憂し」観である。正室・女三の宮が犯された、そのことに対する憤懣である。女三の宮が源氏の愛人くらいならばそれほどに衝撃はないであろう。女三の宮を源氏が愛しているかどうかにはかかわらない。正室が犯されたから許せないのである。

女三の宮以外の女性に関する「憂し」では、まず、人妻である空蝉（1・2・3）、父の后・藤壺（4・5）への例が挙げられる。1～5のこれらは、女性から交際を拒否されたための、男性としての自尊心を損なわれたことによる「憂し」である。他に、六条御息所が生き霊となって葵の上に憑いたこと（6・7）に対して、また、そもそもの須磨流離に繋がる根源は、朧月夜の君と密会したことにある、その「罪のがれがたう」と思う朧月夜の君（8）に対する「憂し」、葵祭の当日、六条御息所との車争い事件を巻きおこしてしまった、不行き届きな葵の上に対する「憂し」がある。

源氏が「憂し」と観る人物・事柄は以上で、たしかに源氏の一生は、種々「憂愁」の極みであった。けれども、最も源氏の心を苦しめた「憂し」は、頻出する用例数（一九例）にみられる如く、政治家として不遇であった須磨退去にまつわる事件であるといえよう。そして、それに次ぐのが柏木事件（七例）である。その一方、理不尽な恋に猪突猛進する「御癖」（賢木(2)一三六頁）を「御本性」（帚木(1)一二九頁）とする、色好み・光源氏の、恋愛の行き詰まりに立ち往生する例の代表として挙げられ得る、藤壺に対する「憂し」は只二例である。

おわりに

光源氏は、高麗の相人の助言に従い、一旦は臣籍降下によって手放した王権を、最終的には准太政天皇にまで上り詰めることによって獲得した。その人生は、「御癖」に呪縛され、「『癖』[13]」に発動する理不尽な志向行動においてかえって光源氏に固有的というべき人生を生きること」をさせた。そのような光源氏は、藤壺との宿世におののきながらも、その愛執を乗り越えた。そのため、愛欲におのく心情の、藤壺に対する「憂し」よりも、頂点を目指す政治家・光源氏の、抑圧された世の中を「憂し」と観る例の方が頻出している。

色好み像光源氏が喧伝されすぎている昨今である。しかし、本文中に確かに残されている、光源氏の「憂し」からは、平安時代に典型的な、権力闘争に憂き身を費やす、なまなましい男性像が浮かび上がる。権力の中枢から睨まれ、つまずき（須磨謫居）ながらも、頂点にまで辿り着き、そして美しくも、哀しくも、老いに逆らいつつ凋落する主人公・光源氏像である。それは、女性ならではの視点であろう。「『憂し』の不在[14]」が指摘される紫の上は、作者紫式部の理想像として描くにもかかわらず、源氏に対しては、女性作家の目が点在しており、男性貴族の生き様を、少し厳しく揶揄的に描いているようである。

D〈空蟬に対して〉―三例

1　君は、いかにたばかりなさむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、源氏「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり。とばかりもののたまはず、いたくうめきて、うしと思したり。（帚木①一八七頁）

2　源氏「いと深う憎みたまふべかめれば、身もうく思ひはてぬ。などかよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。伊予介に劣りける身こそ」など、心づきなしと思ひてのたまふ。（空蟬①二〇二頁）

3　かの伊予の家の小君参るをりあれど、ことにありしやうなる言づてもしたまはねば、うしと思しはてにけるをいとほしと思ふに、かくわづらひたまふを聞きて、さすがにうち嘆きけり。（夕顔①二六三頁）

E〈藤壺に対して〉―二例

4　男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明けはてにけれど、出でたまはずなりぬ。（賢木②一〇〇頁）

5　紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、古里も忘れぬべく思さる。法師ばらの才あるかぎり召し出でて論議せさせて聞こしめさせたまふ。所からに、いとど世の中の常なさを思しあかしても、なほ「うき人しもぞ」と思し出でらるるおし明け方の月影に、法師ばらの閼伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるもはかなげなれど、（賢木②一〇九頁）

F〈六条御息所に対して〉―二例

6　やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりともと、世人も聞こえあつかひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことにうしと思す事こそありけめと、知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄てて、ひたみちに出で立ちたまふ。（賢木②七五頁）

7　あはれに思ひきこえし人を、一ふしうしと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひうむじて別れたまひにしと思せば、今にいとほしうかたじけなきものに思ひきこえたまふ。（須磨②一八六）

G〈朧月夜の君に対して〉―一例

8　尚侍の御もとに、わりなくして聞こえたまふ。源氏「とはせたまはぬもことわりに思ひたまへながら、今はと世を思ひはつるほどのうさもつらさも、たぐひなきことにこそはべりけれ。

　逢ふ瀬なきなみだの川に沈みしや流るるみをのはじめなりけむ

と思ひたまへ出づるのみなむ、罪のがれがたうはべりける」（須磨②一六九頁）

H〈葵の上に対して〉―一例

9　大将の君、かの御車の所争ひをまねびきこゆる人ありければ、いといとほしう、うしと思して、「なほ、あたら、重りかにおはする人の、ものに情おくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけめども、かかるなからひは情かはすべきものともおぼいたらぬ御掟に従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし。御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん」といとほ

すべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。（幻④五一一頁）

4　大将の君などにだに、御簾隔ててぞ対面したまひける。かく、心変りしたまへるやうに、人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそは、と念じ過ぐしたまひつつ、うき世をもえ背きやりたまはず。（幻④五一四頁）

以上の四例がある。まず、1は、今更後ろめたい思いをする恋愛には気乗りもせず、昔の恋人・二条尚侍・朧月夜の君との交流も「うきもの」と観る例で、これは典型的な、光源氏晩年の鬱屈した心境である。さらに、紫の上死後の幻巻の三例（2～4）は、ひたすら紫の上を追憶し悔恨する源氏に襲いかかる、「世のはかなさ」（3）を思う、厭世観である。政治家としての権勢は獲得したものの、最愛の紫の上を亡くした源氏は、雪が消えるように亡くなりたい（2）と思い、すぐさま出家したい心情なのに、その気持を我慢する（4）日々を送る。いよいよ源氏が出家するのは時間の問題となる。「憂し」の認識は、出家につながるものであった。

次に、「世」「世の中」以外で、光源氏が「憂し」「憂さ」と観る例は、

A〈柏木の密通のこと〉―五例

①　御心の中には、「まことに、さも思しよりてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなんかし。かつ見つつも、事にふれて心おかれたまはんが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすまじう、うき事のうちまじりぬべきを、おのづからおろかに人の見とがむることもあらんが、いといとほしう、院などの聞こしめさんことも、わがおこたりにのみこそはならめ。御悩みにことつけて、さもやなしたてまつりてまし」など思しよれど、（柏木④二九二頁）

②　うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける（横笛④三三九頁）

③　月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし。（横笛④三三九頁）

④　「さても、この人をばいかがもてなしきこゆべき。めづらしきさまの御心地もかかる事の紛れにてなりけり。いで、あな、心うや。かく人づてならずうきことを知る知る、ありしながら見たてまつらむよ」と、わが御心ながらも、え思ひなほすまじくおぼゆるを、（若菜下④二四四頁）

⑤　人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、内にはうきを知りたまふ気色しるく、こよなう変りにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて、多うは思ひなりたまひにし御世の背きなれば、今はもて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえたまふぞ苦しうて、人離れたらむ御住まひにもがなと思しなれど、およすけてえさも強ひ申したまはず。（鈴虫④三六八頁）

B〈柏木に対して〉―一例

⑥　大殿の君、うしと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ、えたへたまはず、内に入りて、（柏木④二九七頁）

C〈女三の宮に対して〉―一例

⑦　宮は、いとらうたげにて悩みわたりたまふさまのなほいと心苦しく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、うきに紛れぬ恋しさの苦しく思さるれば、渡りたまひて見たてまつりたまふにつけても、胸いたくいとほしく思さる。御祈祷などさまざまにせさせたまふ。（若菜下④二四九頁）

の源氏は、人妻である空蝉（①）、名乗りをしない夕顔（②）、不美人な末摘花（③）へと次々に走り、とどのつまりは、五十七・八歳の好色女性・源内侍に誘惑されかけたところを従兄弟の頭中将に見つかり、ばつの悪さを「うしや、世の中よ」（④）と言い合う例。以上四例の「憂し」は、「世の中」といっても、全てが、思うようにいかない恋愛を「憂し」とする例である。

ところが、⑤以降になると、右大臣権勢の朱雀天皇の御世となり、「憂し」と観る「世の中」の意味が、恋愛だけではなく、政治家として、権勢を剥奪された世の中への厭世観に一変する。⑤⑥⑦は、源氏の正妻・葵の上死後のことなので、妻の死を引き金とする厭世観ではあるけれども、それだけではない。藤壺に対する思いは抱き続けており、そうした中で、満たされない源氏は、思いがけずも、六条御息所の生き霊が葵の上に憑いて殺してしまうところを、まざまざと観る。何もかも嫌になり捨てばちになる源氏である。⑧⑨では、長い間の優雅の恋人・六条御息所には、生き霊になる別の顔も見届けているので、恋心も冷めてしまい、野々宮で美しく別れて気持の整理をする。しかし、追い打ちをかけるように、同じく長い間文通してきた女友達・朝顔の姫君も斎院に卜定し、父・桐壺院は崩御され、必死に恋慕の情を訴える藤壺からは拒否され、しかも、とうとう藤壺は出家してしまう。源氏の身辺から、親しい人々は次々と去る。そのような寂しい中、右大臣方全盛の世にあって源氏は、よりによって右大臣方の朧月夜の君に密会を重ねる道へと突入する。その現場を朧月夜の君の父・右大臣に取り押さえられて、源氏の悲運は決定的になる。

⑩から⑲は、源氏の「憂し」の根幹といえる。罪意識はないけれども、追いつめられて、須磨のわび住まいをするようになる源氏に、「世の憂さ」を痛感させる須磨の例（⑩〜⑯）の噴出である。とくに、須磨に謫居中の、七例の「憂し」こそは、最も源氏をして、痛恨の極みを嘗めさせた、憂悶そのものであった。つづく、⑰の「うき世の夢」は、明石の君に対する求婚歌ではあるが、明石でのわび住まいをする、権勢を剥奪された源氏自身に対する認識である。⑱も「藻塩たれつつわびたまひし」（蓬生冒頭）須磨滞在の頃をさし、⑲も、源氏がその頃のことを、「なべての世うく思し乱れし紛れに」と述べる。結局、⑩以降⑲までの全てが、源氏の権勢が剥奪された、須磨に退去していた頃のことばかりの例である。須磨退去事件が、源氏にどれほど衝撃を与え、世の中を「憂し」と観じさせることであったことか計りしれないものがある。

第二部　光源氏の、「世」「世の中」を「憂し」「憂さ」と観る例―四例

第二部は、光源氏が四十歳の大台に突入した老年期の、政治家としての権勢が安定したときで、「世」を「憂し」と観ることがらは何もない。そうした時期であるはずなのに、光源氏が「憂し」と観る、

1　二条の尚侍の君をば、なほ絶えず思ひ出できこえたまへど、かくうしろめたき筋のことうきものに思し知りて、かの御心弱さもすこし軽く思ひなされたまひけり。（若菜下④二五二頁）

2　源氏　うき世にはゆき消えなんと思ひつつおもひの外になほぞほどふる（幻④五一〇頁）

3　源氏　「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなくうきを知ら

六八頁）

⑧　院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ、后の御心いちはやくて、かたがた思しつめたる事どもの報いせむと思すべかめり。事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。（賢木②九四頁）

⑨　もの心細く、なぞや、世に経ればうさこそまされと思し立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを、ふり棄てむこと、いとかたし。（賢木②一〇五頁）

⑩　よろづの事、来し方行く末思ひつづけたまふに、悲しきことといとさまざまなり。うきものと思ひ棄てつる世も、今はと住み離れなんことを思すには、いと棄てがたきこと多かる中にも、姫君の明け暮れにそへては思ひ嘆きたまへるさまの心苦しうあはれなるを、（須磨②一五三頁）

⑪　源氏「…いぎたなき人は、見たまへむにつけても、なかなかうき世のがれ難う思うたまへられぬべければ、心強う思ひたまへなして、急ぎまかではべり」と聞こえたまふ。（須磨②一六一頁）

⑫　さらぬ人は、とぶらひ参るも重き咎めあり、わづらはしきことまされば、所せく集ひし馬車の形もなくさびしきに、世はうきものなりけり、と思し知らる。（須磨②一六二頁）

⑬　源氏別れしに悲しきことは尽きにしをまたぞこの世のうさはまされる（須磨②一七二頁）

⑭　源氏うき世をば今ぞ別るるとどまらむ名をばただすの神にまかせて（須磨②一七三頁）

⑮　年ごろは、ただものの聞こえなどのつつましさに、すこし情ある気色見せば、それにつけて人のとがめ出づることもこそとのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じすぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、かばかりうき世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし。（須磨②一八三頁）

⑯　またうち返し、なぞや、かく、うき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行ひておはす。（須磨②一八五頁）

⑰　源氏むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと（明石②二四六頁）

⑱　藻塩たれつつわびたまひしころほひ、都にも、さまざま思し嘆く人多かりしを、さてもわが御身の拠りどころあるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上などものどやかにて、旅の御住み処をもおぼつかなからず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子の世のうき節を、時々につけてあつかひきこえたまふに、慰めたまひけむ、（蓬生②三一五頁）

⑲　かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世うく思し乱れし紛れに、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにし後、ふりはへてしもえ尋ねきこえたまはず。（蓬生②三一六頁）

以上である。平安時代における「世」「世の中」は、身の回りの狭い範囲の、夫婦・男女関係・家庭を指す場合と、政治・社会・世間一般を指す場合との両面がある。①～④までは、桐壺帝の時代であり、まだ十七～十八歳の源氏の一番の関心事は、父の后・藤壺恋慕に尽きる。だが、当然のことながら、その藤壺からは、不倫を拒絶され、また、冷たくされる正妻・葵の上にも満たされない気持

が大きなテーマになっているということは動かせない事実であろう。実は、この「憂し」と観る世界観こそは、「みやびか」な王朝社会に身を置く、伊勢[1]、紫式部[2]等の、取り憑かれている思念そのものであった。そのことは、伊勢が、「いなせともいひはなたれずうき物は身を心ともせぬ世なりけり」（『伊勢集』一六）と詠む、「身」と「心」の乖離・相克する憂悶の心情に感化され、紫式部は、「身の憂さはこころのうちにしたひきていまここのへぞおもひみだるる」（『紫式部集』五六）「憂きことをおもひみだれてあをやぎのいとひさしくもなりにけるかな」（同六〇）と詠んでいるところから証され得る。光源氏の「憂し」には、この「憂き身」を嘆く紫式部等の心情が投影されているといえるのではなかろうか。

二　光源氏の「憂し」「憂さ」

最も頻出する、光源氏の「憂し」「憂さ」によって、光源氏の憂愁の内容を次に検証する。特記すべきは、源氏の「憂し」「憂さ」の中で、「世」又は「世の中」を憂愁とする例が、第一部に一七例、第二部に四例で、源氏の「憂し」の総計四一例のうち実に二一例（ほぼ半数）となることである。なかでも第一部には、罪障に喘ぎながらも、渾身の心配りによって、准太政天皇にまで上り詰めるまでの源氏が描かれている。その間、源氏は、いったいどのような事柄を「憂し」として苦しんだのであろうか、光源氏の「憂し」と苦悩する心情を、さらに、具体例を揚げて考察しよう。

まず、光源氏が「憂し」「憂さ」と苦悩する筆頭の、「世」「世の中」を「憂し」「憂さ」とする全用例を、第一部と第二部に分けて論証する。

第一部　光源氏の、「世」「世の中」を「憂し」「憂さ」と観る例―一九例

①　源氏「我はかく人に憎まれても習はぬを、今宵なむ初めてうしと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくてながらふまじうこそ思ひなりぬれ」（空蟬①一九一頁）

②　源氏「生けるかひなきや、誰が言はましごとにか、
うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よはかなしや」と、御手もうちわななかるるに、（夕顔①二六四頁）

③　心から、などかかううき世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらで、と思しつつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。（末摘花①三七九頁）

④　「などてかさしもあらむ。立ちながらかへりけむ人こそいとほしけれ。まことは、うしや世の中よ」と言ひ合はせて、（紅葉賀①四一七頁）

⑤　大将殿は、悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば、ただならぬ御あたりのとぶらひどもも心うしとのみぞなべて思さるる。（葵②四〇頁）

⑥　かの御息所は、斎宮は左衛門の司に入りたまひにければ、いとどいつくしき御浄まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かかる絆だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし、と思すには、まづ対の姫君のさうざうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。（葵②四四頁）

⑦　源氏「世の中のいとうくおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみ答へたまひつつ過ぐしたまふ。（葵②

言葉なのではあるまいか」とまとめられた。さらに、鈴木日出男氏[9]は、「『つらし』は、自分のつらいのは相手のせいであるとする、恨みがましい気持」「『うし』は、自分のつらさは自分自身のせいであるとするのが原義であり、したがってしばしば、己が運命のつたなさを嗟嘆する心情を表すことになる」と、原田氏の論と同様に、その辛さの原因に着目して差異を論じ、源氏の「うし」には偏りが見られるとして、「葵の上をとり殺した生霊事件にまつわる道心」「須磨流離の憂愁」「女三の宮事件の憂悶」に集中しているとした上で、光源氏晩年の「うし」には、源氏の現世憂愁の思念を噴き出していると述べる。その後、中川正美[10]氏は、両者の違いを、「『うし』は自らの宿世をつくづくと認識したゆえに、内に閉じこもって鬱屈する感情を表すのだが、『心うし』は信頼し友愛を抱いた相手から、その想いを逆なでされ、裏切られた、と感じたときの瞬間的な反応で、相手に向かって反撥抗議するニュアンスで用いられる」と、やはりその違いに言及される。

以上の如く、「憂し」とその周辺の語との関係性・差異については、諸家それぞれの立場から論じられており、本論では諸家の論を踏まえ、その語義については、はじめに愚考した通りである。したがって、以下においては、『源氏物語』中、最も頻出している光源氏の「憂し」に着目して、源氏の苦悩する内容を掘りさげることにより、光源氏という人間性を鮮明に浮かび上がらせることができればと思う。

まず、「憂し」「憂さ」は、総体として、登場人物のどのようなことがらによる憂いなのかをみるために、その顕著な、憂愁とする対象を採り上げ、その用例数を2頁表二に掲げた。表二から、浮かぶのは、登場人物達の、「世」と「身」に対する憂愁である。

ところで、「憂し」は憂愁と観る思念、苦悩する心情の意である。だが、それは、「苦し」よりも更に深刻な思いである。なぜならば、たとえば、「苦し」ならば、

大殿の君・葵の上と結婚したが、源氏は「心にもつかず」思って、幼少からの憧れの藤壺のことが心にかかり、「苦しきまで」である（桐壺①一二五頁）。

の如く、源氏の幼少時から抱いていた、藤壺への恋慕の「苦し」があげられる。この「苦し」は、源氏自身の問題で、源氏が諦めるように考えを変えれば、その苦悩からは解放されるはずのものである。対する「うし」は、たとえば、既に罪を犯してしまった、そういう運命になってしまった身の苦しみのように、それから逃れようとしても逃れられないというような、心痛極まりない心情である。

表一に示す如く、「憂し」と苦悩する人物の筆頭は、男性では、光源氏四一例で、次に、薫一三例が目立つ。しかるに、匂宮・頭中将は〇、夕霧は四例である。女性では、筆頭は浮舟一九例で、落葉の宮一二例、六条御息所・空蟬は一〇例、明石の君・藤壺は九例、玉鬘は八例とつづくのに対して、紫の上が二例であり、紫の上は、少ないという点が注目される。

表に掲げる人物達の中で、総合的に最も憂愁に閉ざされる人物は、正編では光源氏、続編では浮舟と薫が突出している。光源氏は、「心憂し」「もの憂し」「つらさ」においても、用例数は常に筆頭である。これによって、主人公としての光源氏が、如何に不幸観を抱き（憂し・憂さ41例）、嫌だ嫌だと思い（心憂し・もの憂し45例）、思い通りにならないことを辛がって（つらし43例）いることかが見て取れよう。正編の主人公は光源氏、続編の主人公は薫ということを考慮するならば、『源氏物語』の主題として憂愁の思念

表一　　★主要人物の感情を示す語・「う（憂）し」「うさ」「心憂し」「もの憂し」の用例数

	○ 光源氏	○ 頭中将（内大臣）	葵上	夕顔	紫上	藤壺	六条御息所	明石君	明石中宮	花散里	空蝉	軒端荻	末摘花
う（憂）し・うさ（第一部）	30・祖母２	0	0	4	1・母１	9	10	9		1	10	0	1
同上　（第二部・繋巻三帖）	11	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
同上（第三部・宇治十帖）													
心う（憂）し・心う（第一部）	21	3	0		3・祖母１	7	2	0		0	1	1	1・大輔命婦１・侍従叔母１
同上　（第二部・繋巻三帖）	11	0	0		2	0	0	0		0	0	0	0
同上（第三部・宇治十帖）									2				
もの憂し（第一部）	11	2	1	0	1	0	1	2		0	0	0	0
同上　（第二部・繋巻三帖）	2	0	0	0	1	0	0	0		0	0	0	0
同上（第三部・宇治十帖）									0				
つらし・つらさ	43・乳母１	5	2	5	3	1	4・物の怪4	2	0	2	2	0	4

○は、男性を示す。　無期号は女性．　　・

★　「う（憂）し」・「うさ」の『源氏物語』に用いられる総合計は 21 7例

★　「心う（憂）し」・「ものうし」の『源氏物語』に用いられる総合計は２３５例

★「つらし」「つらさ」について、表に提示した以外の人物とその用例数を以下に掲げる。

左大臣３　弁君３　桐壺更衣母２　源内侍２　指食女２　近江君２　八宮２　手習中將２　左馬守１　空蝉弟小君１　明石君両親１　河内守１　朧月夜の君１

まり、「心憂し」「もの憂し」は、避けようと努力すれば避けられないことではない程度の憂愁の意と解されるので、本稿においては、表一に用例数を掲げるのみにとどめた。

以下に述べようとする、「憂し」「憂さ」は、「心憂し」「もの憂し」よりもさらに深刻な、主体がどうもがいてもそこからは解放され得ない心情で、苦しくて苦しくてたまらない対象を、一種の運命として受け止める以外に解決策は見いだせないほどの憂愁と解される。山崎良幸氏[6]は、「憂し」について、「現実の我の生き様の不幸を、いわば運命的に観じとる、そういう観相の表現」とされ、対する『物憂し』『心憂し』は、「情緒の表現にあずかる」とされた。即ち、「憂し」がわれわれの不幸観ないしは不運観とでもいうような、いわば観相として定着したものであるのに対して、「心憂し」は現実の事柄に即しておこる、または誘発される情緒の表現なのであるとする区別である。「憂し」と観るのと、「心憂し」と感じるとする、この論点の違いは、論理的でよく解るのであるが、前記した如く、両者には憂愁の思念、その深刻さの度合いが大きく異なることを付記したい。次いで、「憂し」と「つらし」については、原田芳起[7]氏の、「わが身のつたなさを情なく厭わしくつらく思うのが『うし』の本義であり、他者としての『人』をわれに対して無常だ、冷淡だむごいと恨むのが『つらし』の本義である」とする論を踏まえつつ、山本トシ氏[8]は、全用例を提示し、「『うし』の本義が、自分のつらく悲しい嘆きの気持を表すところにあり、しかも『うし』という感情の原因は自分、他者いずれにあるかに関わらない」ことを前提にし、もしそうならば「『うし』とは、自己に生じたつらく悲しい感情を、感情の生じた原因に結びつけることなく、自分自身に集中しようとするものの考え方、感じ方を象徴する

		○					○		○	○				
雲居雁	落葉宮	夕霧	落葉宮母	玉鬘	鬚黒	鬚黒北方	柏木	女三宮	薫	匂宮	浮舟	弁尼	大君	中君
3・母1	0	3	0	8・乳母1			0	0						
1	12	1	5	0			3	5						
									13	0	19	0	10	11
0	0	3		6		2	0	0						
2	5	7	3	0			1	5						
									17	7	14・母北方10	4	4	16
0	0	4	0	0			0	0		0				
0	0	0	0	0			0	0	1	2				
									8		1・母中将君1		0	1
2・乳母1	9	16・宰相乳母1	1	乳母2	2	1	4・両親1	4	16	3	母北方4・乳母子右近1	3	6	15・女房1

朱雀院１　冷泉院３　秋好中宮１　大宮１　鬚黒召人１　式部卿宮北方１　竹河蔵人少将３　東屋左近少将１　律師１　妹尼１　紀伊守弟右近将監１　浮舟乳母子右近１

表二　　★　憂愁の対象

	身	世（世の中）	宿世	こと・もの	全用例数
うし・うさ（用例数）	46	61	4	30	217

たとえば、「心憂し」の例、

　無心に寝ている紫の上を源氏が抱き起こして、自邸に連れ出そうとしたとき、紫の上が父の出迎えかと勘違いしていて、近づいた源氏が父ではないと気付くや、恐ろしがっているところで、源氏が「あな心う。まろも同じ人ぞ」と言い含める場面（若紫①三二八頁）。

は、源氏の抱く「心憂」（「心憂し」の語幹）である。「心憂」の気持ちを抱かせないための解決策としては、幼い姫君（紫の上）が源氏の心情を理解して、素直に源氏に連れ出されるように応じるならば、源氏は「心憂」とは思わない程度の憂愁である。素直に応じない紫の上なので、源氏が「不本意なこと」、「情けないよ」と思っているだけである。

　また、「ものうし」の例、

源氏「…十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを、かく御男などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらせたまはめ。御髪まゐるほどをだに、ものうくせさせたまふ」（紅葉賀①三九四頁）。

は、雛遊びに夢中になって、髪を美しくするよりも遊びの方を面白がり、髪を整える間もそれを嫌がる紫の上の幼さを表す場面である。いじらしく可憐な紫の上が印象的であり、そのような紫の上を「ものうく」させないための解決策としては、雛遊びを好きなだけさせてあげれば済むことである。

　このように「心」「もの」を上接する「憂し」は、憂愁の心情としてはその場限りのもので、さほど深刻ではない。「何となく」、「それとなく」「少し」辛い、嫌だ、情けないという程度の意で、そのようにならないための解決策は常に用意出来ることである。つ

*『源氏物語』の描く人間

―光源氏の憂愁を中心に―

椙山女学園大学　文化情報学部　梅野きみ子

はじめに

「光る」「かかやく」「きよら」としばしば称えられる光源氏は、輝くばかりに卓越した美質[1]と才能と、さらには精神的な見識とやさしさ[2]、そして幸運をも具備していた。この数え切れないほどの資質を挙げ連ねるならば、たしかに光源氏は、「先天的身体的資質と幸運に恵まれていた」理想的人物ということになる。だがしかし、それでも、「人間的に超越的な存在であったというのではなかった[3]」。

ただし、『源氏物語』の男主人公として、美しさの観点から見た場合には、光源氏は、超越的存在として貫かれている。その一方で、阿部秋生氏をして、「最も平凡な貴族的心情以上のものはみられなかった」とまで言わせるごとく、光源氏といえども、全ての点で理想的な男性として描かれてはいない。否、「憂し」の観点からすると、光源氏は並の貴族以上に、凡庸で苦渋に充ちた内面に翻弄されているとさえ思われる。なぜならば、光源氏は、原罪と宿世に縛られ、身動き出来ないほどの苦悩の人生を生き抜く姿として描かれているからである。そのような『源氏物語』なので、むしろ光源氏の内面の苦悩が深く掘りさげられれば掘りさげられるほど、読む者をして面白いという捉え方がなされることになる。作り物語なのに、光源氏が、今のこの世のどこかに存在しているような錯覚を覚えてしまうからである。そして、むしろ光源氏が理想的ではない、超越的ではないところに、「あるがままの人間の悲哀[4]」を感じさせ、物語としていかにも真に迫るものがあるともいえる。

一　「う（憂）し」「憂さ」とその周辺の語について

憂愁と苦悶に閉ざされる光源氏の内面は、「憂し」の頻用によって示すことができる。『源氏物語』には、「憂し」「憂さ」の総計二一七例、「心憂し」「もの憂し」の総計二三五例がみられる[5]。それらがどのような人物に用いられているものなのかを、主要人物中心に、その用例数を次頁表に掲げ、以下において、光源氏が、その周辺の人物に比べて、如何に苦悩する人であったかを、光源氏の内面に踏み込んで検討してみたい。

表一には、「心憂し」「もの憂し」「つらし」「つらさ」も、「憂し」「憂さ」の近似語として用例数を掲げた。そのうち、「心憂し」「もの憂し」は、主体の受ける心痛の度合いが、単純なその時限りの、「憂し」よりも軽い調子の辛さを表す心情を表現した語であり、「憂し」「憂さ」のように絶体的に、どうしても避けられないことがらに対する、一種の運命的な憂愁というほどの、深刻な心情は感じられない例がほとんどである。

目　次　2

※これより人間講座報告となりますが、縦書き表記となりますので、下記の目次をご参照下さい。

人間講座報告

『『源氏物語』の描く人間―光源氏の憂愁を中心に―』

梅野　きみ子 …… （166～176）

椙山人間学研究センター　活動概要

（平成19年4月から平成20年3月まで）

○椙山人間学研究センター構成員（敬称略）

センター長　椙山孝金

主任研究員　渡邉毅（プロジェクト統括）

客員研究員　杉浦昌弘

客員研究員　江原昭善

客員研究員　梶田正巳（平成19年9月まで）

事務局（センター事務室長）

八木茂徳（平成19年8月まで）

事務局（企画広報部企画課長）

竹田浩康（平成19年9月から）

事務局（センター事務室職員）

藤田修（平成19年8月まで）

事務局（企画広報部企画課職員）

山田千恵子（平成19年9月から）

事務局（センター事務室職員）

大浦詔子

○プロジェクト構成員

①『総合人間論』

プロジェクトリーダー　渡邉毅主任研究員

（人間関係学部教授）

研究員：三井悦子（人間関係学部教授）

山根一郎（人間関係学部准教授）

②『女 性 論』

プロジェクトリーダー　東珠実（現代マネジメント学部教授）

研究員：塚田文子（現代マネジメント学部准教授）

影山穂波（国際コミュニケーション学部准教授）

藤原直子（人間関係学部准教授）

太田ふみ子（中・高等学校教頭）

③『人間発達論』

プロジェクトリーダー　石橋尚子（教育学部教授）

研究員：山口雅史（人間関係学部准教授）

椙山美恵子（大学附属幼稚園長）

佐久間治子（中・高図書館長）

中村太貴生（大学附属小学校長）

④『ゲノム人間論』

プロジェクトリーダー　杉浦昌弘

（椙山人間学研究センター客員研究員）

研究員：音喜多信博（人間関係学部准教授）

⑤『日本・アジア文化と人間』

プロジェクトリーダー　荻野恭茂（文化情報学部教授）

研究員：二宮俊博（文化情報学部教授）

季増民（文化情報学部教授）

鄭麗芸（文化情報学部准教授）

大浦誠士（国際コミュニケーション学部准教授）

梅野きみ子（文化情報学部教授）

武山隆昭（教育学部教授）

飯塚恵理人（文化情報学部准教授）

加藤益幹（国際コミュニケーション学部教授）

冨田和子（現代マネジメント学部助手）

樋口謙一郎（文化情報学部講師）

森本伊知郎（文化情報学部准教授）

⑥『環境と人間』

プロジェクトリーダー

野崎健太郎(教育学部准教授)

研究員：原暁子(高等学校教諭)

村上聡(中学校教諭)

小田奈緒美(椙山人間学研究センター「環境と人間」プロジェクト研究員)

○平成 19 年 4 月 23 日(月)

・プロジェクト活動報告会議開催

○平成 19 年 5 月 23 日(水)17:00 ～ 18:30

「椙山人間学研究センター平成 19 年度第 1 回人間講座」開催

テーマ：『人間性の生物学的背景』

講　師：西田利貞 財団法人日本モンキーセンター所長

場　所：椙山人間交流会館 1 階会議室

参加者：46 名

○平成 19 年 7 月 19 日(木)17:00 ～ 18:30

「椙山人間学研究センター平成 19 年度第 2 回人間講座」開催

テーマ：『こどものことばを育てる・心を育てる』

講　師：石橋尚子 椙山女学園大学教育学部教授

場　所：椙山人間交流会館 1 階会議室

参加者：38 名

○平成 19 年 9 月 25 日(月)17:00 ～ 18:30

「椙山人間学研究センター平成 19 年度第 3 回人間講座」開催

テーマ：『江戸時代のやきもの流通 －江戸と名古屋・大坂の比較』

講　師：森本伊知郎 椙山女学園大学文化情報学部准教授

場　所：椙山人間交流会館 1 階会議室

参加者：28 名

○平成 19 年 11 月 9 日(金)

・椙山人間学研究センター第 4 回運営委員会持ち回り会議にて開催

メンバー：委員長(センター長)　椙山孝金

大学(主任研究員)　渡邉毅

大学(学長)　泉有亮

高校・中学(高校・中学校長)　水谷丈市

附属小学校(小学校長)　中村太貴生

附属幼稚園(幼稚園長)　椙山美恵子

学園(事務局長)　高木吉郎

事務局(企画広報部企画課長)　竹田浩康

事務局(企画広報部企画課職員)　山田千恵子

事務局(企画広報部企画課職員)　大浦詔子

○平成 19 年 11 月 10 日(土)

「椙山人間学研究センター第三回シンポジウム」開催

テーマ：『身体と心の人間学―自分を再発見するために―』

講　師：大澤真幸 京都大学大学院教授

「身体の現在(身体の比較社会学)」

菅原和孝 京都大学大学院教授

「感情の人間学－感情と行為空間－」

時　間：14:00 ～ 17:00

場　所：椙山女学園大学文化情報学部棟 319 室

構　成：第一部　基調講演、第二部　全体

討論導入、第三部　全体討論

参加者：151 名

（告知・広報）

①中日・日本経済新聞折込　20 万部　（10・21）

②新聞「催事告知欄」（無料）への原稿送付（中、毎、読、朝）

③マスコミへの取材依頼（名古屋教育記者会 16 社）

④教職員への告知　（10・19）

⑤学園ホームページでの告知（10・19）

⑥朝日新聞「インフォマーシャル」（11・3 掲載）

⑦名古屋市社教センターへのチラシ掲載依頼（郵送　チラシ 5 枚）

⑧名古屋市立図書館（各 5 枚）

⑨日本福祉大学コミュニティーカレッジ事務局、中部大学（各 5 枚）

⑩その他、近隣他大学関連機関（各 5 枚）南山大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学

○平成 19 年 12 月 10 日（月）17:00 ～ 18:30

「椙山人間学研究センター平成 19 年度第 4 回人間講座」開催

テーマ：『『源氏物語』の描く人々－光源氏の憂愁を中心に－』

講　師：梅野きみ子 椙山女学園大学文化情報学部教授

場　所：椙山人間交流会館 1 階会議室

参加者：50 名

○平成 20 年 1 月 21 日（月）

・プロジェクト活動報告会議開催

○平成 20 年 3 月

・椙山人間学研究センター第 5 回運営委員会開催

・『椙山人間学研究』（第 3 号）発行

■「椙山人間学研究センター打合せ会」開催日

（参加：センター長、主任研究員、センター事務室職員　陪席：江原客員研究員）

平成 19 年 4 月 11日、4 月 25日、5 月 9 日
6 月 13日、6 月 27日、7 月11日
7 月 25日、9 月 12日、9 月26日
10 月 10日、10月 24日、11月28日

平成 20 年 1 月 9 日、1 月 23日、2 月27日
3 月 12日、3 月 26日

（毎回議事録作成）

椙山人間学研究センター規程

平成16年規程第13号
平成16年7月30日制定

（趣旨）

第1条　この規程は、学校法人椙山女学園（以下「学園」という。）が、建学の精神に基づく伝統に立って、その教育理念「人間になろう」そのものを、より広くより深く研究し、新たな人間についての知の開発を通して、学園の教育研究、学術の振興に寄与するとともに、研究の成果を広く学界、一般社会及び地域に向けて発信する拠点として設置する、椙山人間学研究センター（以下「センター」という。）について必要な事項を定める。

（センターの事業）

第2条　センターは、次の各号に定める事業を行う。

(1) 学園の教育理念「人間になろう」の調査研究及びその教育実践の支援に関する事業
(2) 新しい世紀に求められる「人間観」（人文科学、社会科学及び自然科学等における人間観の研究並びに学際的領域の研究）についての調査研究事業
(3) 学園の一貫教育及び連携教育についての調査研究事業
(4) 「人間学(観・論)」を主題としたフォーラム、公開講座及び自主講座等の事業
(5) 大学等学校、研究機関及び企業等学園外の機関との交流並びにネットワークに関する事業
(6) 年報の刊行に関する事業
(7) 人間論及び人間関係論等に関するコンサルテーション、研修会並びに講演会への講師の派遣等に関する事業
(8) その他センター長が必要と認める事業

（センター長）

第3条　センターにセンター長を置き、センター長 は、理事長の命を受け、センターの事業を統括し、 所属職員を統督する。

2　センター長の任期は2年間とする。ただし、再任を妨げない。

（主任研究員）

第4条　センターに主任研究員を置く。

2　主任研究員は、各調査研究領域を統括し、研究ネットワークを主宰する。

（研究員）

第5条　センターの事業遂行に必要な研究調査を行うため、研究員を置くことができる。

（客員研究員）

第6条　センターの研究調査に関して、学園外に 広く知識又は経験を求める必要があるときは、客員研究員を置くことができる。

2　客員研究員について必要な事項は、理事長が 定める。

（事務室）

第7条　センターに事務室を置く。

2　事務室に室長を置き、室長は、センター長の命を受け、その室の事務を掌理する。

3　事務室に係員を置き、係員は、上司の命を受け、 その担当事務に従事する。

（運営委員会）

第8条　センターの的確かつ円滑な運営を図るため､センターに運営委員会を置く。

2　運営委員会は、センターの事業に関する次の事項を審議する。

(1) 調査研究、委託研究、プロジェクト、研究会及び年報等の事業計画に関すること。
(2) 予算に関すること。
(3) 前各号のほかセンター長が諮問すること。

3 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で構成する。
(1) センター長
(2) 大学長
(3) 高等学校長及び中学校長
(4) 小学校長
(5) 幼稚園長
(6) 主任研究員
(7) 学園事務局長

（附　則）

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

編集後記

『椙山人間学研究』第三号をお届けいたします。ご執筆いただきました先生方には、大変お忙しいところをご協力くださり、本当にありがたく心よりお礼申し上げます。

さて、シンポジウムや人間講座の開催をはじめ、椙山人間学研究センター（以下「センター」という。）の活動に事務局として参加して思うことを述べさせていただきます。椙山女学園は幼稚園から大学まですべての学校が備わった女子の総合学園ということが、一つの特徴です。女子教育の一貫教育ができる学園であるとの視点で捉えたときに、センターはこれを具現化できる貴重な機関になると思われます。椙山女学園の教育理念「人間になろう」と女子一貫教育をつなぐ存在としてのセンターの役割がこれから重要になると考えられるのです。実際にセンターが主催している研究活動には大学関係者以外に様々な先生方が参加されており、人間探求を基底にして、違う学校現場を体験している先生方が同じ土俵で研究することは、他の学園では不可能なことです。現在、６つのプロジェクトが進行しておりますが、これらの研究がもたらす効果は人間社会の理解に留まらず、その発達段階での人間行動や人間感情など多岐にわたっての指針になるものと思われます。

また、人間研究は終わりがなく、その時代で人間の捉え方が違ってきます。しかし、それらを俯瞰してみたときに、「ああ、こういう考え方があるな。」とか「なるほど、そう考えればいいのか。」などと人生の節目に立ったときの道標となり得ます。実際、１年を通じてシンポジウムや人間講座に参加してみて、様々な講師の方に、それぞれの知識を披露していただき、１年を通して俯瞰した今、確実に１年前とは違う自分を感じることができます。人間学という学問はありませんが、人間学を強いて言うならば、すべての知識・経験を通じて学ぶ学問なのではないでしょうか。そのためにプロジェクトで研究活動をし、シンポジウムや人間講座で講師との知識交流をして、自分を少しでも成長させることが人間探求としての人間学に通じるものと思われます。

椙山人間学研究センターが発刊するこの『椙山人間学研究』は、人生を豊かに過ごすための指針がたくさん詰まった書籍になると思われますので、是非ともご一読いただき、ご自分なりの人間理解を深めていただきたいと願います。

センター事務室　竹田　浩康

執筆者紹介

椙山　正弘　（椙山女学園理事長）
椙山　孝金　（椙山人間学研究センター長　学園長）

西田　利貞　（財団法人日本モンキーセンター所長）
石橋　尚子　（椙山女学園大学教育学部教授）
森本　伊知郎（椙山女学園大学文化情報学部准教授）
梅野　きみ子（椙山女学園大学文化情報学部教授）

（総合人間論）
渡邉　毅　（椙山人間学研究センター主任研究員
　椙山女学園大学人間関係学部教授）
三井　悦子　（椙山女学園大学人間関係学部教授）
山根　一郎　（椙山女学園大学人間関係学部教授）

（女性論）
東　珠実　（椙山女学園大学現代マネジメント学部教授）
太田　ふみ子（椙山女学園高等学校・中学校教頭）
影山　穂波　（椙山女学園大学国際コミュニケーション学部准教授）
塚田　文子　（椙山女学園大学現代マネジメント学部准教授）
藤原　直子　（椙山女学園大学人間関係学部准教授）

（人間発達論）
石橋　尚子　（椙山女学園大学教育学部教授）
山口　雅史　（椙山女学園大学人間関係学部准教授）
椙山　美恵子（椙山女学園附属幼稚園長）
中村　太貴生（椙山女学園附属小学校長）
佐久間　治子（椙山女学園高・中学校図書館長）

（ゲノム人間論）
杉浦　昌弘　（椙山人間学研究センター客員研究員）
音喜多　信博（椙山女学園大学人間関係学部准教授）

（日本・アジア文化と人間）
荻野　恭茂　（椙山女学園大学文化情報学部教授）

（環境と人間）
野崎　健太郎（椙山女学園大学教育学部准教授）
原　暁子　（椙山女学園高等学校教諭）
村上　聡　（椙山女学園中学校教諭）
小田　奈緒美（椙山人間学研究センター「環境と人間」
　プロジェクト研究員）

江原　昭善　（椙山人間学研究センター客員研究員）

竹田　浩康　（企画広報部企画課長）
大浦　詔子　（企画広報部企画課職員）

「椙山人間学研究」 第3号
Journal of Sugiyama Human Research Vol.3

発　行：平成20年3月31日
発行者：椙山人間学研究センター
〒464-8662　名古屋市千種区星が丘元町17番3号
電　　話　052-781-1186（代）052-781-7146（直）
http://www.sugiyama-u.ac.jp/shrc/
印　刷：長屋印刷株式会社

Sugiyama

人間になろう